

独立行政法人国立病院機構

大阪医療センター 臨床研究センター

研究業績年報

2017年

Institute for Clinical Research

Osaka National Hospital

独立行政法人
国立病院機構

大阪医療センター 臨床研究センター

臨床研究センター研究業績 ＜目 次＞

「各研究室の概要と業績・報告」

臨床研究センター	1
幹細胞医療研究室	11
再生医療研究室	15
分子医療研究室	30
エイズ先端医療開発室	31
HIV感染制御研究室	82
臨床疫学研究室	91
がん療法研究開発室	97
高度医療技術開発室	140
医療情報研究室	146
災害医療研究室	148
臨床研究推進室	150
レギュラトリーサイエンス研究室	154

「平成 29 年度 研究助成一覧」	161
-------------------	-----

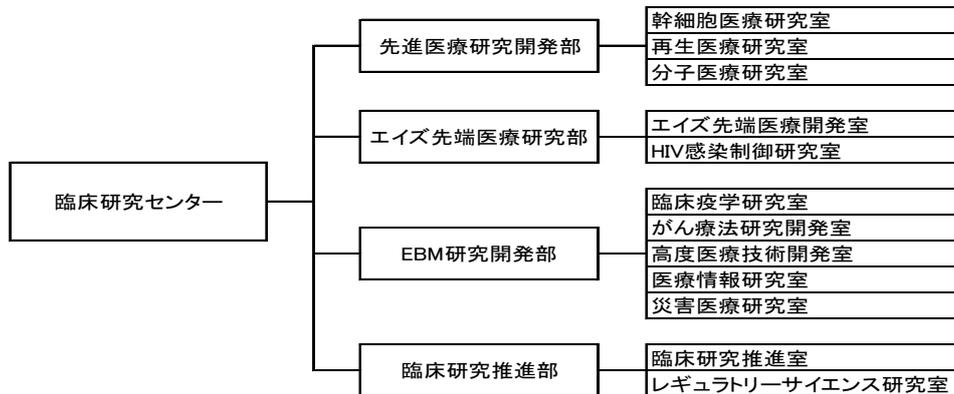
「臨床研究センターの研究業績の区分分類と業績件数の総括表」	164
-------------------------------	-----

—各研究室の概要と業績・報告—

臨床研究センター

センター長 上松正朗

当臨床研究センターはセンターとなって10年目の節目を迎えた。国立病院機構では平成17年度より新たな研究業績評価が開始されたが、当院は常に1-2位の座を獲得している。この業績評価は、治験、臨床研究プロトコル作成、特許の取得、競争的研究費の獲得、論文著書、国内外の学会発表などの総合力で分析される。日常臨床が多忙を極める中で、大阪医療センターの治験を含めた臨床研究への積極的な取り組みが評価されたものとする。平成20年度臨床研究部から臨床研究センターへランクアップとなったが、それにともない、1部5室体制から2部9室体制へと改編され、従来病院内の組織であった治験管理部門を新たに臨床研究も含めた支援室、臨床研究推進室として研究センターの元におくこととなった。平成23年度からは、新たに高度医療技術開発室、レギュラトリーサイエンス研究室を開設し、3部11室となった。これまでと同様、文部科研に応募を希望する医師については、併任発令を行い、これに対応した。また、院内の多くの医師が臨床研究に携わっていること、本部からの研究助成金を研究業績に応じて一部分配することにより研究推進を図る目的で、平成18年度より医長以上の併任、英文論文筆頭著者併任をおこなうこととした。平成25年度DMAT西日本拠点に指定されたのに伴い、平成26年度から災害医療研究室を加え4部12室となった。平成29年度の構成は以下のとおりである。



先進医療研究開発部

幹細胞医療研究室

幹細胞医療研究室では、ヒトiPS細胞（人工多能性幹細胞）の作製と、iPS細胞から神経幹細胞（神経系細胞を供給する能力を持つ幹細胞）への分化誘導を行い、再生医療や、神経毒性評価系の構築に向けた技術開発、及び疾患の発症メカニズムの研究を行っている。また、当センター脳神経外科及び再生医療研究室と共同で、各種脳腫瘍の遺伝子変異解析と、新規腫瘍マーカーの探索を実施している。

再生医療研究室

再生医療研究室では、各種ヒト細胞を応用した「細胞治療」を新しい先進的な医療として確立させることを目標に、治療に使用する各種ヒト細胞の培養・加工プロセスの開発、治療用ヒト細胞の品質管理並びに安全性評価に関する技術開発などの研究を行なっている。また、

ヒト幹細胞を応用した薬剤毒性評価系の開発と新規治療薬候補化合物の探索を目指した基礎的研究を実施している。

分子医療研究室

分子医療研究室では多施設共同研究として難治性脳形成障害症の診断基準作成及び新規治療法開発に向けた病態解析研究を支援する臨床病態、画像情報、遺伝子情報、患者由来生体試料（組織・細胞・DNA）などのデータバンク構築を実施中である。幹細胞研究室と共同で、患者由来試料から分離した線維芽細胞、神経幹細胞、間葉系細胞（臍帯由来）、血液細胞の特性解析を行い、並行してそれら細胞から疾患 iPS 細胞の樹立を実施し、その特性解析を実施している。

エイズ先端医療研究部

エイズ先端医療開発室

大阪医療センターでは、HIV 感染症の専門的診療は感染症内科が担い、他の機能はエイズ先端医療研究部がコーディネートしている。臨床研究の主なテーマとして HIV 感染症の病態解析や治療に関する研究と患者中心の医療の提供に関する研究取り組んでいる。教育・研修では院外向けと共に、院内での研修については、看護部、医療相談室、臨床心理室等と共に職員研究部と協働で実施し、多くの参加者を得ている。

HIV 感染制御研究室

エイズ先端医療開発室と共同で、HIV 感染症の診療における多く問題に対して研究を行っている。厚生労働省エイズ対策研究事業を中心に、HIV 感染症の病態における種々の問題点の解明に取り組み、多施設共同臨床調査や臨床的課題について取り組んでいる。

EBM 研究開発部

臨床疫学研究室

臨床疫学研究室は主に消化器疾患の病態を分子疫学面から検証し、最適な治療方法や安全性を検討している。C 型肝炎に関する種々の研究、B 型肝炎に関する種々の研究を積極的に推進している。さらに HIV 感染が B 型急性肝炎の重症度に与える影響についても検討している。

がん療法研究開発室

現在のがん医療は、オーダーメイド医療という語に代表される各個人のがんの種類や特徴に応じた診断や治療が行われている。病気や病態の違いの多くは分子異常の違いによって生じるものと考えられており、本研究室では、外科手術時などに得られたがん組織を利用してがんにおける分子異常を探り、新たながんの診断や治療戦略の開発をめざしている。またこれらの成果を利用した全国規模の多施設共同臨床試験への参加および自主的臨床研究の企画もおこなっている。

高度医療技術開発室

病院における医療現場のニーズを企業が保有している技術開発力や大学の基礎医学研究能力に結び付けながら、常に新しい高度医療技術の開発に取り組んでゆくことが、病院に付属する本研究室の役割である。近年はビッグデータの分析など統計解析手法の進歩も著しく、医療分野においてはクラスター分析などによって疾患の新たな表現型（Phenotype）に関する研究も進んでいる。平成30年度は、心不全特に収縮の保たれた心不全症例における表現型分析を新たに進める予定である。

医療情報研究室

医療情報研究室では、医療へのIT応用に関するソフト、ハードの両側面の研究を行っている。病院において実稼働している病続情報統合システムを用いた研究、病院情報システム本体の機能拡張に関する独自の研究を実施する一方、治験・臨床研究や医療安全に関するシステムの検討、シミュレーションや統計などの情報科学の医療応用に関する研究を行っている。また、ネットワーク技術や画像処理技術の応用・改良など、情報処理の基盤技術に関連した研究も行っている。早急に実用化することを求められている災害時の国内標準電子カルテについて、あるいはSS-MIX、SS-MIX2、MML、openEHRといった標準規格を通して異なる電子カルテシステム間のスムーズな連携についても研究を行なっている。

災害医療研究室

研究テーマは三次救急の代表的な病態である多発外傷、院外心停止、中毒、熱傷、多臓器不全が中心であるが、さらに今後の発生が想定されている大災害時のDMATの戦略的対応に関する研究を行ってきた。南海トラフ巨大地震へのDMATの戦略的対応については、厚生科研の小井土研究班の分担研究で継続している。救急医学関連では、学会主導型で行われる、外傷、敗血症、ARDS、市中劇症型感染症（以上、日本救急医学会多施設共同研究;JAAM FORECAST）に参画した。

臨床研究推進部

臨床研究推進室

臨床研究推進室は、CRCおよび治験事務局として治験の全体的なコーディネーションを担うことにより、契約前から終了まで迅速かつ質の高い治験実施を支援している他、受託研究審査委員会（IRB）事務局機能も併せ持っている。受託研究と各種臨床研究関連指針が適応される自主研究は、それぞれ独立した2つのIRB（第1委員会・第2委員会）により審議を行っている。この2つのIRBは、厚生労働省より「質の高い倫理審査が行える委員会（認定倫理審査委員会）」として認定を受けている。平成29年度は、臨床研究法公布にともない厚生労働大臣が認定する臨床研究審査委員会取得をめざし、準備を行い、厚生労働省に申請した。

レギュラトリーサイエンス研究室

レギュラトリーサイエンスの考えに基づき、臨床現場での薬剤・医療機器や技術等の使用を評価するための手法の構築を目的として平成23年4月に設立され、7年が経過した。平成29

年度においては、直接経口抗凝固薬が実際に患者の QOL 改善に関与しているかをワルファリンからの切り替え例において検討した。また、心房細動患者治療の国際共同レジストリーが進行中であり、日本の National Coordinator として参加。2018 年 8 月には研究が終了しその後解析が進む予定である。

【2017年度 研究業績発表】

A-0

Horiuchi Y, Aoki J, Tanabe K, Nakao K, Ozaki Y, Kimura K, Ako J, Yasuda S, Noguchi T, Suwa S, Fujimoto K, Nakama Y, Morita T, Shimizu W, Saito Y, Hirohata A, Morita Y, Inoue T, Okamura A, Uematsu M, Hirata K, Shibata Y, Nakai M, Nishimura K, Miyamoto Y, Ishihara M; J-MINUET investigators. : A High Level of Blood Urea Nitrogen Is a Significant Predictor for In-hospital Mortality in Patients with Acute Myocardial Infarction. *Int Heart J*. 2018 Mar 30;59(2):263-271. doi: 10.1536/ihj.17-009. Epub 2018 Feb 20.

Ishihara T, Awata M, Iida O, Fujita M, Masuda M, Okamoto S, Nanto K, Kanda T, Tsujimura T, Uematsu M, Mano T. : Satisfactory arterial repair 1 year after ultrathin strut biodegradable polymer sirolimus-eluting stent implantation: an angioscopic observation. *Cardiovasc Interv Ther*. 2018 Jan 15. doi: 10.1007/s12928-018-0510-4. [Epub ahead of print]

Masuda M, Fujita M, Iida O, Okamoto S, Ishihara T, Nanto K, Kanda T, Sunaga A, Tsujimura T, Matsuda Y, Ohashi T, Uematsu M : Pace-capture-guided ablation after contact-force-guided pulmonary vein isolation: results of the randomized controlled DRAGON trial. *Europace*. 2017 Nov 17. doi: 10.1093/europace/eux319. [Epub ahead of print]

Hashimoto T, Ako J, Nakao K, Ozaki Y, Kimura K, Noguchi T, Yasuda S, Suwa S, Fujimoto K, Nakama Y, Morita T, Shimizu W, Saito Y, Hirohata A, Morita Y, Inoue T, Okamura A, Uematsu M, Hirata K, Tanabe K, Shibata Y, Owa M, Tsujita K, Funayama H, Kokubu N, Kozuma K, Uemura S, Toubaru T, Saku K, Ohshima S, Nakai M, Nishimura K, Miyamoto Y, Ogawa H, Ishihara M; J-MINUET investigators : A lower eicosapentaenoic acid/arachidonic acid ratio is associated with in-hospital fatal arrhythmic events in patients with acute myocardial infarction: a J-MINUET substudy. *Heart Vessels*. 2017 Nov 16. doi: 10.1007/s00380-017-1084-2. [Epub ahead of print]

Tanabe K, Popma JJ, Kozuma K, Saito S, Muramatsu T, Nakamura S, Namiki A, Morino Y, Hagiwara N, Uematsu M, Kawasaki T, Fujii K, Serruys PW, Onuma Y, Ying S, Kusano H, Stone GW, Kimura T : Multi-slice Computed Tomography Assessment of Everolimus-Eluting Absorb Bioresorbable Scaffold in Comparison with Metallic Drug-Eluting Stents from the ABSORB Japan randomized Trial. *EuroIntervention*. 2017 Nov 14. pii: EIJ-D-17-00716. doi: 10.4244/EIJ-D-17-00716. [Epub ahead of print]

Tsujimura T, Iida O, Ishihara T, Fujita M, Masuda M, Okamoto S, Nanto K, Kanda T, Sunaga A, Takahara M, Uematsu M : The impact of coronary artery disease and left ventricular ejection fraction on the prognosis of patients with peripheral artery disease. *Intern Med J*. 2017 Nov;47(11):1313-1316. doi:

10.1111/imj.13600.

Inoue K, Suna S, Iwakura K, Oka T, Masuda M, Furukawa Y, Egami Y, Kashiwase K, Hirata A, Watanabe T, Takeda T, Mizuno H, Minamiguchi H, Kitamura T, Dohi T, Nakatani D, Hikoso S, Okuyama Y, Sakata Y; OCVC Investigators (内に Uematsu Mあり) : Outcomes for Atrial Fibrillation Patients with Silent Left Atrial Thrombi Detected by Transesophageal Echocardiography. *Am J Cardiol*. 2017 Sep 15;120(6):940-946. doi: 10.1016/j.amjcard.2017.06.022. Epub 2017 Jun 29.

Kanda T, Masuda M, Fujita M, Iida O, Okamoto S, Ishihara T, Nanto K, Sunaga A, Tsujimura T, Matsuda Y, Ohashi T, Uematsu M : Comparison of the origin and coupling interval between ectopy with and without atrial fibrillation initiation. *J Cardiol*. 2018 Jan;71(1):59-64. doi: 10.1016/j.jjcc.2017.06.002. Epub 2017 Jul 13.

Ishihara T, Iida O, Inoue K, Fujita M, Masuda M, Okamoto S, Nanto K, Kanda T, Tsujimura T, Sunaga A, Mano T, Uematsu M : Histological Evaluation of a Self-Expanding Stent-Graft 23 Months After Implantation in the Superficial Femoral Artery. *J Endovasc Ther*. 2017 Oct;24(5):746-750. doi: 10.1177/1526602817719881. Epub 2017 Jul 10.

Ogita M, Suwa S, Ebina H, Nakao K, Ozaki Y, Kimura K, Ako J, Noguchi T, Yasuda S, Fujimoto K, Nakama Y, Morita T, Shimizu W, Saito Y, Hirohata A, Morita Y, Inoue T, Okamura A, Uematsu M, Hirata K, Tanabe K, Shibata Y, Owa M, Hokimoto S, Funayama H, Kokubu N, Kozuma K, Uemura S, Toubaru T, Saku K, Oshima S, Nishimura K, Miyamoto Y, Ishihara M; J-MINUET investigators : Off-hours presentation does not affect in-hospital mortality of Japanese patients with acute myocardial infarction: J-MINUET substudy. *J Cardiol*. 2017 Dec;70(6):553-558. doi: 10.1016/j.jjcc.2017.05.006. Epub 2017 Jul 3.

Masuda M, Fujita M, Iida O, Okamoto S, Ishihara T, Nanto K, Kanda T, Sunaga A, Tsujimura T, Matsuda Y, Ohashi T, Uematsu M : An E/e' ratio on echocardiography predicts the existence of left atrial low-voltage areas and poor outcomes after catheter ablation for atrial fibrillation. *Europace*. 2017 Jun 22. doi: 10.1093/europace/eux119. [Epub ahead of print]

Iida O, Takahara M, Soga Y, Azuma N, Nanto S, Uematsu M; PRIORITY Investigators : Prognostic Impact of Revascularization in Poor-Risk Patients With Critical Limb Ischemia: The PRIORITY Registry (Poor-Risk Patients With and Without Revascularization Therapy for Critical Limb Ischemia). *JACC Cardiovasc Interv*. 2017 Jun 12;10(11):1147-1157.

Ohki T, Kichikawa K, Yokoi H, Uematsu M, Yamaoka T, Maeda K, Kanaoka Y : Outcomes of the Japanese multicenter Viabahn trial of endovascular stent grafting for superficial femoral artery lesions. *J Vasc Surg*. 2017 Jul;66(1):130-142.e1. doi: 10.1016/j.jvs.2017.01.065. Epub 2017 Apr 8.

Sunaga A, Masuda M, Fujita M, Iida O, Kanda T, Matsuda Y, Morozumi T, Mano T, Uematsu M : Cardiac iodine-123-metaiodobenzylguanidine scintigraphy may be useful to identify pathologic from physiologic sinus bradycardia. *Pacing Clin Electrophysiol*. 2017 Jun;40(6):632-637. doi: 10.1111/pace.13078. Epub

2017 May 16.

Ishihara M, Nakao K, Ozaki Y, Kimura K, Ako J, Noguchi T, Fujino M, Yasuda S, Suwa S, Fujimoto K, Nakama Y, Morita T, Shimizu W, Saito Y, Hirohata A, Morita Y, Inoue T, Okamura A, Uematsu M, Hirata K, Tanabe K, Shibata Y, Owa M, Tsujita K, Funayama H, Kokubu N, Kozuma K, Tobaru T, Oshima S, Nakai M, Nishimura K, Miyamoto Y, Ogawa H; J-MINUET Investigators : Long-Term Outcomes of Non-ST-Elevation Myocardial Infarction Without Creatine Kinase Elevation - The J-MINUET Study. *Circ J*. 2017 Jun 23;81(7):958-965.

Ishihara T, Iida O, Fujita M, Masuda M, Okamoto S, Nanto K, Kanda T, Tsujimura T, Sunaga A, Awata M, Nanto S, Uematsu M : Comparison of early-phase arterial repair following cobalt-chrome everolimus-eluting stent and slow-release zotarolimus-eluting stent: an angioscopic study. *Cardiovasc Interv Ther*. 2018 Apr;33(2):163-168.

Masuda M, Fujita M, Iida O, Okamoto S, Ishihara T, Nanto K, Kanda T, Sunaga A, Tsujimura T, Matsuda Y, Ohashi T, Uematsu M : Comparison of Left Atrial Voltage between Sinus Rhythm and Atrial Fibrillation in Association with Electrogram Waveform. *Pacing Clin Electrophysiol*. 2017 May;40(5):559-567.

Fujino M, Ishihara M, Ogawa H, Nakao K, Yasuda S, Noguchi T, Ozaki Y, Kimura K, Suwa S, Fujimoto K, Nakama Y, Morita T, Shimizu W, Saito Y, Hirohata A, Morita Y, Inoue T, Okamura A, Uematsu M, Ako J, Nakai M, Nishimura K, Miyamoto Y; J-MINUET Investigators : Impact of symptom presentation on in-hospital outcomes in patients with acute myocardial infarction. *J Cardiol*. 2017 Jul;70(1):29-34.

Shiraki T, Iida O, Takahara M, Soga Y, Mii S, Okazaki J, Kuma S, Yamaoka T, Kamoi D, Shintani Y, Ishikawa T, Kitano I, Uematsu M : Comparison of Clinical Outcomes after Surgical and Endovascular Revascularization in Hemodialysis Patients with Critical Limb Ischemia. *J Atheroscler Thromb*. 2017 Jun 1;24(6):621-629.

Ishihara T, Iida O, Okamoto S, Fujita M, Masuda M, Nanto K, Shiraki T, Kanda T, Tsujimura T, Okuno S, Yanaka K, Uematsu M : Potential mechanisms of in-stent occlusion in the femoropopliteal artery: an angioscopic assessment. *Cardiovasc Interv Ther*. 2017 Oct;32(4):313-317.

Abe N, Miura T, Miyashita Y, Hashizume N, Ebisawa S, Motoki H, Tsujimura T, Ishihara T, Uematsu M, Katagiri T, Ishihara R, Tosaka A, Ikeda U : Long-Term Prognostic Implications of the Admission Shock Index in Patients With Acute Myocardial Infarction Who Received Percutaneous Coronary Intervention. *Angiology*. 2017 Apr;68(4):339-345.

B-2

Shinouchi K, Iida Y, Toriyama C, Nishida H, Yasumura K, Yorifuji H, Kato T, Idemoto A, Mishima T, Yokoi K, Abe H, Date M, Ueda Y, Uematsu M, Koretsune Y: Impact of preexisting chronic total occlusions of the coronary artery on the outcome of out-of-hospital sudden cardiac arrest patients with acute coronary syndrome, ESC Congress 2017 - European Society of Cardiology, Barcelona, Spain, 2017

年 8 月 27 日

Idemoto A, Abe H, Nakamura M, Iida Y, Toriyama C, Ozaki T, Yasumura K, Nishida H, Kato T, Shinouchi K, Mishima T, Awata M, Date M, Ueda Y, Uematsu M, Koretsune Y: Incremental Value of Systemic Extracellular Water Volume Assessment by Bioelectrical Impedance Analysis and Echocardiography in Patients with Acute Decompensated Heart Failure. ACC2018, Orlando, America, 2018 年 3 月 10 日

B-4

篠内和也, 飯田吉則, 鳥山智恵子, 尾崎立尚, 西田博毅, 安村かおり, 加藤大志, 井手本明子, 三嶋 剛, 横井研介, 安部晴彦, 伊達基郎, 上田恭敬, 上松正朗, 是恒之宏: 慢性完全閉塞病変が急性冠症候群による心停止患者の予後に与える影響。第 65 回日本心臓病学会、大阪、2017 年 9 月 29 日

加藤大志, 三嶋 剛, 飯田吉則, 鳥山智恵子, 依藤弘紀, 西田博毅, 安村かおり, 井手本明子, 篠内和也, 横井研介, 安部晴彦, 伊達基郎, 上松正朗, 是恒之宏, 上田恭敬: 生体弁による三尖弁置換術後患者に経静脈的に右室リード挿入し両心室ペーシングを行った一例。第 65 回日本心臓病学会、大阪、2017 年 9 月 29 日

西田博毅, 安部晴彦, 横井研介, 飯田吉則, 鳥山智恵子, 尾崎立尚, 安村かおり, 加藤大志, 井手本明子, 篠内和也, 三嶋 剛, 伊達基郎, 上田恭敬, 上松正朗, 是恒之宏: 冠動脈石灰化の予測における僧帽弁輪および大動脈弁石灰化評価の有用性。第 65 回日本心臓病学会、大阪、2017 年 9 月 30 日

Yasumura K, Abe H, Nakamura M, Nishida H, Kato T, Idemoto A, Shinouchi K, Awata M, Date M, Ueda Y, Uematsu M, Koretsune Y: Prognostic Impact of Mitral Annular Plane Systolic Excursion and Systolic Blood Pressure Ratio in Heart Failure with Preserved Ejection Fraction. 第 82 回日本循環器学会学術集会、大阪、2018 年 3 月 24 日

Abe H, Idemoto A, Nishida H, Yasumura K, Kato T, Nakamura M, Toriyama C, Iida Y, Ozaki T, Shinouchi K, Mishima T, Awata M, Date M, Ueda Y, Uematsu M, Koretsune Y: Caveat of Echocardiographic Assessment of Moderate to Severe Aortic Stenosis: Comparison with Cardiac Catheterization. 第 82 回日本循環器学会学術集会、大阪、2018 年 3 月 24 日

Kato T, Mishima T, Iida Y, Toriyama C, Nishida H, Yorifuji H, Yasumura K, Idemoto A, Shinouchi K, Yokoi K, Abe H, Date M, Uematsu M, Koretsune H, Ueda Y: Right Ventricular Endocardial Lead Implantation through Bioprosthetic Tricuspid Valve for Cardiac Resynchronization Therapy. 第 64 回日本不整脈心電学会、横浜、2017 年 9 月 16 日

飯田吉則, 安部晴彦, 鳥山智恵子, 尾崎立尚, 西田博毅, 安村かおり, 加藤大志, 井手本明子, 篠内和也, 三嶋 剛, 横井研介, 伊達基郎, 上田恭敬, 上松正朗, 是恒之宏: 繰り返す心嚢液貯留にアスピリンが著効した 1 例。第 65 回日本心臓病学会、大阪、2017 年 10 月 1 日

Idemoto A, Abe H, Yasumura K, Nishida H, Kato T, Shinouchi K, Date M, Ueda Y, Uematsu M, Koretsune Y: Good Predictor of Right Atrial Pressure in the Inferior Vena Cava Parameters by 2-Dimensional Echocardiography. 第 21 回日本心不全学会学術集会、秋田、2017 年 10 月 13 日

Iida Y, Abe H, Yasumura K, Shinouchi K, Mishima T, Yokoi K, Date M, Ueda Y, Uematsu M, Koretsune Y: Improvement of diuretic resistance by correction of anemia by blood transfusion in a patient with congestive heart failure. 第 21 回日本心不全学会学術集会、秋田、2017 年 10 月 13 日

Yasumura K, Abe H, Kato T, Iida Y, Mishima T, Yokoi K, Date M, Ueda Y, Uematsu M, Koretsune Y: Nutritional Assessment Indices in Heart Failure with and without Reduced Exercise Tolerance. 第 21 回日本心不全学会学術集会、秋田、2017 年 10 月 13 日

Kato T, Abe H, Yasumura K, Iida Y, Mishima T, Yokoi K, Date M, Ueda Y, Uematsu M, Koretsune Y: Addition of a Thiazide Diuretic May Have Beneficial Effects on Exercise Capacity in a Case of Hypertension. 第 21 回日本心不全学会学術集会、秋田、2017 年 10 月 14 日

彦惣俊吾、砂真一郎、小島貴行、中谷大作、土肥智晴、世良英子、中本 敬、山田貴久、安村良男、上松正朗、樋口義治、藤 久和、坂田泰史：A Large Scale Multicenter Prospective Observational Study to Clarify Complexity of Heart Failure with Preserved Ejection Fraction (HFpEF) -PURSUIT-HFpEF Study-. 第 82 回日本循環器学会学術集会、大阪、2018 年 3 月 24 日

石原隆行、飯田 修、藤田雅史、増田正晴、岡本 慎、南都清範、神田貴史、辻村卓也、須永晃弘、奥野翔太、松田祥宏、谷仲厚治、大橋拓也、河合弘幸、辻 朱紀、畑 陽介、上松正朗、真野敏昭：急性心筋梗塞に対するプラチナクロムエベロリムス溶出性ステント留置後亜急性期の血栓性の検討。第 37 回心筋梗塞研究会、東京、2017 年 7 月 1 日

B-5

上松正朗：人を対象とする医学系研究に関する倫理指針の改正について。大阪府医師会 治験セミナー、大阪、2017 年 11 月 30 日

B-6

安村かおり、安部晴彦、飯田吉則、鳥山智恵子、依藤弘紀、西田博毅、加藤大志、井手本明子、篠内和也、三嶋 剛、横井研介、伊達基朗、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏：腹部大動脈壁在血栓から下肢動脈塞栓をきたした担癌患者の一例。第 123 回日本循環器学会近畿地方会、大阪、2017 年 6 月 24 日

西田博毅、安部晴彦、飯田吉則、鳥山智恵子、依藤弘樹、安村かおり、加藤大志、井出本明子、篠内和也、三嶋 剛、横井研介、伊達基郎、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏：比較的速い狭窄の進行を認めた重症大動脈弁狭窄症の一例。第 123 回日本循環器学会近畿地方会、大阪、2017 年 6 月 24 日

安部晴彦、安村かおり、加藤大志、井手本明子、西田博毅、飯田吉則、鳥山智恵子、依藤弘紀、篠内和也、三嶋 剛、横井研介、伊達基郎、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏：大動脈弁

狭窄症における心肺運動負荷試験の有用性。第 123 回日本循環器学会近畿地方会、大阪、2017 年 6 月 24 日

篠内和也、飯田吉則、鳥山智恵子、西田博毅、安村かおり、依藤弘紀、加藤大志、井手本明子、三嶋 剛、横井研介、安部晴彦、伊達基郎、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏：急性冠症候群による心停止患者の動脈血 pH と予後との関連。第 123 回日本循環器学会近畿地方会、大阪、2017 年 6 月 24 日

三嶋 剛、鳥山智恵子、飯田吉則、依藤弘紀、西田博毅、安村かおり、加藤大志、井手本明子、篠内和也、横井研介、安部晴彦、伊達基郎、上松正朗、是恒之宏、上田恭敬：心房細動アブレーション中に左房天蓋静脈損傷による縦隔血腫を生じた一例。第 123 回日本循環器学会近畿地方会、大阪、2017 年 6 月 24 日

加藤大志、三嶋 剛、鳥山智恵子、飯田吉則、西田博毅、安村かおり、依藤弘紀、井手本明子、篠内和也、横井研介、安部晴彦、伊達基郎、上松正朗、是恒之宏、上田恭敬：生体弁による三尖弁置換術後患者に経静脈的に右室リード挿入し両心室ペーシングを行った一例。第 123 回日本循環器学会近畿地方会、大阪、2017 年 6 月 24 日

飯田吉則、三嶋 剛、鳥山智恵子、西田博毅、安村かおり、依藤弘紀、加藤大志、井手本明子、篠内和也、横井研介、安部晴彦、伊達基郎、上松正朗、是恒之宏、上田恭敬：心室性期外収縮 2 段脈による失神を認める β 遮断薬が著効した一例。第 123 回日本循環器学会近畿地方会、大阪、2017 年 6 月 24 日

井手本明子、安部晴彦、飯田吉則、鳥山智恵子、依藤弘紀、安村かおり、西田博毅、加藤大志、篠内和也、三嶋 剛、横井研介、伊達基郎、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏：救急外来受診時に D ダイマー上昇を認めなかった急性大動脈解離の一例。第 123 回日本循環器学会近畿地方会、大阪、2017 年 6 月 24 日

尾崎立尚、三嶋 剛、中村雅之、飯田吉則、鳥山智恵子、安村かおり、西田博毅、加藤大志、井手本明子、篠内和也、横井研介、安部晴彦、伊達基郎、上松正朗、是恒之宏、上田恭敬：長期の心不全管理にてポリファーマシーに陥った一例。第 217 回日本内科学会近畿地方会、大阪、2017 年 9 月 16 日

井手本明子、安部晴彦、西田博毅、篠内和也、三嶋 剛、横井研介、伊達基郎、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏：D ダイマー上昇の原因精査に下肢血管エコーが有用であった一例。第 44 回日本超音波医学会関西地方会、大阪、2017 年 9 月 23 日

西田博毅、安部晴彦、井手本明子、安村かおり、中村雅之、飯田吉則、鳥山智恵子、尾崎立尚、加藤大志、篠内和也、三嶋 剛、栗田政樹、伊達基郎、上田恭敬、上松正明、是恒之宏：経胸壁心エコーは心臓 CT より鋭敏に僧帽弁石灰化を検出し冠動脈石灰化の重症度を予測する。関西心エコーリサーチクラブ、神戸、2017 年 12 月 16 日

篠内和也、中村雅之、飯田吉則、鳥山智恵子、尾崎立尚、西田博毅、安村かおり、加藤大志、

井出本明子、三嶋 剛、安部晴彦、栗田政樹、伊達基郎、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏：
慢性完全閉塞病変が急性冠症候群による心停止患者の予後に与える影響。第30回日本心血管
インターベンション治療学会 近畿地方会、豊中、2018年2月10日

B-8

上松正朗：海外学会で採択される抄録の作り方。Next generation スキルアップセミナー、大阪、
2017年11月27日

上松正朗：人を対象とする医学系研究に関する倫理指針と臨床研究法。大阪労災病院 臨床研
究セミナー、堺、2018年3月8日

幹細胞医療研究室

室長 正札智子

【概要】

幹細胞医療研究室では、ヒト iPS 細胞（人工多能性幹細胞）の作製と、iPS 細胞から神経幹細胞（神経系細胞を供給する能力を持つ幹細胞）への分化誘導を行い、再生医療や、神経毒性評価系の構築に向けた技術開発、及び疾患の発症メカニズムの研究を行っています。また、当センター脳神経外科及び再生医療研究室と共同で、各種脳腫瘍の遺伝子変異解析と、新規腫瘍マーカーの探索を実施しています。

【研究テーマ】

1. 神経疾患原因遺伝子の遺伝子変異解析

難治性脳形成障害症などの神経疾患をお持ちの患者様より、ゲノム DNA をご提供頂き、疾患を起因する原因遺伝子の変異解析を行っています。また、これらの変異による疾患発症メカニズムの分子的解析を進めています。

2. ヒト iPS 細胞由来神経幹細胞の作製と培養法の検討

神経幹細胞は、自己増殖能と神経系細胞に特化した分化能を保持しながら、長期に維持・培養することができるため、再生医療研究や創薬研究での有用性が高い細胞です。そこで、iPS細胞から神経幹細胞を誘導し、再生医療への応用や、神経毒性評価系の構築を目指した研究を行っています。iPS細胞、及びiPS細胞由来神経幹細胞は、詳細に特性解析を行い、より良い分化誘導法の開発を進めるとともに、安全性や品質の評価方法について検討を行っています。

3. 脳腫瘍患者摘出手術検体の遺伝子解析と新規腫瘍マーカーの探索

大阪医療センター及び近隣施設の神経膠腫の患者様より、摘出腫瘍組織をご提供いただき、発症原因や予後との関連が示唆されている遺伝子の分子診断を行っています。検出された遺伝子変異や異常分子の結果は、診断や治療方針の参考にして戴くために迅速なフィードバックを行っています。また腫瘍組織から樹立し、長期培養に成功した神経膠腫由来細胞の生物学的特性解析を行い、iPS細胞由来神経幹細胞の腫瘍化リスクの指標となるマーカーの探索を実施しています。また、小児に発症例の多い脳腫瘍である髄芽腫と上衣種については、検体を全国より収集して分子診断を行っています。

【2017年度 研究業績発表】

A-0

Tateno H, Hiemori K, Hirayasu K, Sougawa N, Fukuda M, Warashina M, Amano M, Funakoshi T, Sadamura Y, Miyagawa S, Saito A, Sawa Y, Shofuda T, Sumida M, Kanemura Y, Nakamura M, Okano H, Onuma Y, Ito Y, Asashima M, Hirabayashi J: Development of a practical sandwich assay to detect human pluripotent stem cells using cell culture media. 「Regenerative Therapy」 6:1-8, 2017年6月

Cavalli FMG, Remke M, Rampasek L, Peacock J, Shih DJH, Luu B, Garzia L, Torchia J, Nor C, Morrissy AS, Agnihotri S, Thompson YY, Kuzan-Fischer CM, Farooq H, Isaev K, Daniels C, Cho BK, Kim SK, Wang KC, Lee JY, Grajkowska WA, Perek-Polnik M, Vasiljevic A, Faure-Contier C, Jouvett A, Giannini C, Nageswara Rao AA, Li KKW, Ng HK, Eberhart CG, Pollack IF, Hamilton RL, Gillespie GY, Olson JM, Leary S, Weiss WA, Lach B, Chambless LB, Thompson RC, Cooper MK, Vibhakar R, Hauser P, van Veelen MC, Kros JM, French PJ, Ra YS, Kumabe T, López-Aguilar E, Zitterbart K, Sterba J, Finocchiaro G, Massimino M, Van Meir EG, Osuka S, Shofuda T, Klekner A, Zollo M, Leonard JR, Rubin JB, Jabado N, Albrecht S, Mora J, Van Meter TE, Jung S, Moore AS, Hallahan AR, Chan JA, Tirapelli DPC, Carlotti CG, Fouladi M, Pimentel J, Faria CC, Saad AG, Massimi L, Liao LM, Wheeler H, Nakamura H, Elbabaa SK, Perezpeña-Diazconti M, Chico Ponce de León F, Robinson S, Zapotocky M, Lassaletta A, Huang A, Hawkins CE, Tabori U, Bouffét E, Bartels U, Dirks PB, Rutka JT, Bader GD, Reimand J, Goldenberg A, Ramaswamy V, Taylor MD: Intertumoral Heterogeneity within Medulloblastoma Subgroups. 「Cancer Cell」 31(6):737-754, 2017年6月

Kanemura Y, Sumida M, Okita Y, Yoshioka E, Yamamoto A, Kanematsu D, Handa Y, Fukusumi H, Inazawa Y, Takada A, Nonaka M, Nakajima S, Mori K, Goto S, Kamigaki T, Shofuda T, Moriuchi S, Yamasaki M: Systemic Intravenous Adoptive Transfer of Autologous Lymphokine-activated $\alpha\beta$ T-Cells Improves Temozolomide-induced Lymphopenia in Patients with Glioma. 「Anticancer Res」 37(7):3921-3932, 2017年7月

Bamba Y, Nonaka M, Sasaki N, Shofuda T, Kanematsu D, Suemizu H, Higuchi Y, Pooh RK, Kanemura Y, Okano H, Yamasaki M: Generation of induced pluripotent stem cells and neural stem progenitor cells from newborn with spina bifida aperta. 「Asian Spine J」 11(6):870-879, 2017年12月

Fukusumi H, Handa Y, Shofuda T, Kanemura Y: Small-scale screening of anticancer drugs acting specifically on neural stem/progenitor cells derived from human induced pluripotent stem cells using a time-course cytotoxicity test. 「Peer J」 6:e4187, 2018年1月

B-2

Fukusumi H, Handa Y, Shofuda T, Kanemura Y: IDENTIFICATION OF DRUGS ACTING SPECIFICALLY ON NEURAL STEM/PROGENITOR CELLS DERIVED FROM HUMAN INDUCED PLURIPOTENT STEM CELLS BY USING A TIME-COURSE CYTOTOXICITY TEST. ISSCR 2017 Annual Meeting, Boston, MA, USA, 2017年6月16日

Mori K, Shofuda T, Okita Y, Arita H, Kinoshita M, Terakawa Y, Tsuyuguchi N, Tomogane Y, Fukai J, Ishibashi K, Nishida N, Taki T, Nonaka M, Izumoto S, Moriuchi S, Nakajima Y, Hashimoto N, Kodama Y, Hirose T, Kanemura Y: Glioblastoma treatment of Bevacizumab era in Kansai region, Japan. 22nd Annual Scientific Meeting and Education Day of the Society for Neuro-Oncology, San Francisco, California, USA, 2017年11月18日

Kijima N, Kanematsu D, Shofuda T, Yoshioka E, Handa Y, Moriuchi S, Nonaka M, Okita Y, Tsuyuguchi N, Fukai J, Higuchi Y, Suemizu H, Kanemura Y: Characterization of patient-derived tumor spheres and

xenografts for glioblastoma. 22nd Annual Scientific Meeting and Education Day of the Society for Neuro-Oncology, San Francisco, California, USA, 2017年11月18日

Kanemura Y, Sumida M, Okita Y, Yoshioka E, Yamamoto A, Kanematsu D, Handa Y, Fukusumi H, Nozaki Y, Takada A, Nonaka M, Nakajima S, Mori K, Goto S, Kamigaki T, Shofuda T, Moriuchi S, Yamasaki M: Adoptive immunotherapy using lymphokine-activated $\alpha\beta$ T-cells improves Temozolomide-induced lymphopenia in patients with glioma. 22nd Annual Scientific Meeting and Education Day of the Society for Neuro-Oncology, San Francisco, California, USA, 2017年11月19日

Kanemura Y, Sumida M, Okita Y, Yoshioka E, Yamamoto A, Kanematsu D, Handa Y, Fukusumi H, Nozaki Y, Takada A, Nonaka M, Nakajima S, Mori K, Goto S, Kamigaki T, Shofuda T, Moriuchi S: Adoptive immunotherapy using lymphokine-activated alpha beta T-cells improves Temozolomide-induced lymphopenia in patients with glioma. AACR Immunobiology of Primary and Metastatic CNS Cancer, San Diego, USA, 2018年2月13日

B-3

Kanemura Y, Shofuda T, Yoshioka E, Ichimura K, Yamasaki M, Shibui S, Arai H, Sasaki A, Sakamoto H, Nishikawa R: Molecular classification and clinical characteristics of medulloblastomas in Japan. 第35回日本脳腫瘍病理学会、宇都宮、2017年5月20日

Kanemura Y, Okita Y, Moriuchi S, Nonaka M, Mori K, Nakajima S, Sumida M, Yoshioka E, Yamamoto A, Handa Y, Kanematsu D, Goto S, Kamigaki T, Shofuda T, Yamasaki M: Adoptive immunotherapy using lymphokine-activated alpha beta T-cells improves Temozolomide-induced lymphopenia in patients with glioma. 一般社団法人日本脳神経外科学会第76回学術総会、名古屋、2017年10月12日

金村米博、正札智子、埜中正博、沖田典子、宇田武弘、露口尚弘、石橋謙一、有田英之、香川尚己、橋本直哉、木下学、深井順也、西田南海子、友金祐介、森鑑二、関西中枢神経腫瘍分子診断ネットワーク：小児脳腫瘍のクリニカルシーケンス。一般社団法人日本脳神経外科学会第76回学術総会、名古屋、2017年10月13日

木下学、福間良平、柳澤琢史、篠崎隆志、貴島晴彦、高橋雅道、成田善孝、有田英之、藤本康倫、寺川雄三、露口尚弘、深井順也、沖田典子、高垣匡寿、石橋謙一、児玉良典、埜中正博、森内秀祐、泉本修一、中島義和、森鑑二、正札智子、市村幸一、金村米博：国内大規模画像コホートをを用いた人工知能による GradeII-III 神経膠種の画像分子診断。第35回日本脳腫瘍学会学術集会、高松、2017年11月26日

B-4

深井順也、佐々木貴浩、金村米博、森鑑二、正札智子、兼松大介、吉岡絵麻、児玉良典、上松右二、中尾直之：高齢者神経膠腫の分子マーカーと予後、治療選択：関西中枢神経腫瘍分子診断ネットワークに登録された142例の解析。日本脳腫瘍病理学会、宇都宮、2017年5月20日

深井順也、佐々木貴浩、金村米博、森鑑二、正札智子、兼松大介、吉岡絵麻、児玉良典、

廣瀬隆則、藤田浩二、上松右二、中尾直之：高齢者神経膠腫の臨床・病理像：関西中枢神経腫瘍分子診断ネットワークに登録された142例の後方視的解析。一般社団法人日本脳神経外科学会第76回学術総会、名古屋、2017年10月14日

福角勇人、正札智子、中村雅也、岡野栄之、金村米博：臨床試験に使用するヒトiPS細胞由来神経前駆細胞作製法の開発。第4回再生医療とリハビリテーション研究会、吹田、2017年11月18日

木嶋教行、兼松大介、正札智子、吉岡絵麻、半田有佳子、森内秀祐、埜中正博、沖田典子、露口尚弘、深井順也、樋口裕一郎、末水洋志、金村米博：グリオーマ初代培養確立株の特徴とそのin vivoでの形態の特徴についての検討。第35回日本脳腫瘍学会学術集会、高松、2017年11月26日

沖田典子、正札智子、兼松大介、吉岡絵麻、児玉良典、眞能正幸、木下 学、埜中正博、中島 伸、金村米博、藤中俊之：神経膠腫の非造影病変での定量的評価によるMET-PETとMGMTメチル化率の相関性。第35回日本脳腫瘍学会学術集会、高松、2017年11月27日

有田英之、木下 学、川口 淳、児玉良典、高橋雅道、寺川雄三、沖田典子、高垣匡寿、深井順也、石橋謙一、露口尚弘、森内秀祐、泉本修一、中島義和、藤田浩二、埜中正博、藤本康倫、森 鑑二、正札智子、成田善孝、市村幸一、金村米博：Lower Grade GliomaのRadiogenomic解析。第35回日本脳腫瘍学会学術集会、高松、2017年11月27日

森 鑑二、正札智子、兼松大介、吉岡絵麻、沖田典子、有田英之、木下 学、宇田武弘、友金祐介、深井順也、石橋謙一、西田南海子、瀧 琢有、埜中正博、泉本修一、中島義和、森内秀祐、露口尚弘、寺川雄三、橋本直哉、児玉良典、廣瀬隆則、金村米博：関西中枢神経系腫瘍分子診断ネットワークにおけるベバシズマブ時代の膠芽腫治療。第35回日本脳腫瘍学会学術集会、高松、2017年11月27日

深井順也、佐々木貴浩、正札智子、兼松大介、吉岡絵麻、児玉良典、廣瀬隆則、沖田典子、友金祐介、木下 学、泉本修一、有田英之、森内秀祐、露口尚弘、寺川雄三、宇田武弘、中島義和、西田南海子、埜中正博、石橋謙一、藤田浩二、上松右二、中尾直之、森 鑑二、金村米博：高齢者神経膠腫の臨床・病理像：関西中枢神経腫瘍分子診断ネットワーク登録症例の解析。第35回日本脳腫瘍学会学術集会、高松、2017年11月27日

福角勇人、正札智子、隅田美穂、野崎佑衣、山本篤世、半田有佳子、兼松大介、吉岡絵麻、高田 愛、中村雅也、岡野栄之、金村米博：ヒトiPS細胞由来神経前駆細胞における残留iPS細胞の高感度検出法の開発。第17回日本再生医療学会総会、横浜、2018年3月21日

再生医療研究室

室長 金村米博

【概要】

再生医療研究室では、各種ヒト細胞を応用した「細胞治療」を新しい先進的な医療として確立させることを目標に、治療に使用する各種ヒト細胞の培養・加工プロセスの開発、治療用ヒト細胞の品質管理並びに安全性評価に関する技術開発などの研究を行なっています。また、ヒト幹細胞を応用した薬剤毒性評価系の開発と新規治療薬候補化合物の探索を目指した基礎的研究を実施しています。

【主な研究テーマ】

1. 治療用ヒト細胞培養プロセスの開発

治療に使用する各種ヒト細胞を培養・加工するヒト細胞培養専用施設（セルプロセッシングセンター）の管理・運用を担当し、セルプロセッシングセンター内でのヒト細胞培養プロトコルの開発を行っています。また、細菌・真菌検査や遺伝子検査などを組み込んだ治療用ヒト細胞の品質検査法の開発などを行なっています。

2. 医療用ヒト幹細胞の品質管理技術の開発

再生医療に使用する細胞として、組織幹細胞であるヒト神経幹細胞および間葉系幹細胞さらにヒトiPS細胞由来神経前駆細胞などを主な研究対象として、細胞増殖能、染色体構造、細胞表面マーカー発現様式、細胞分化能等を詳細に解析してこれら細胞の生物学的特性を明らかにし、医療応用するための細胞の品質管理に必要な項目の策定とその検査方法の開発を行っています。

3. ヒト幹細胞を応用した薬剤毒性評価系の開発と新規治療薬候補化合物の探索

ヒトiPS細胞由来神経前駆細胞を主に使用して、各種薬剤の毒性評価をハイスループットで評価するシステムの開発を行っています。また、ヒト神経前駆細胞やグリオーマ幹細胞を標的とする新規治療薬候補化合物の探索を実施しています。

【2017年度 研究業績発表】

A-0

Tsuyuguchi N, Terakawa Y, Uda T, Nakajo K, Kanemura Y: Diagnosis of Brain Tumors Using Amino Acid Transport PET Imaging with ¹⁸F-fluciclovine: A Comparative Study with L-methyl-¹¹C-methionine PET Imaging. 「Asia Ocean J Nucl Med Biol」 5(2):85-94, 2017年5月

Tateno H, Hiemori K, Hirayasu K, Sougawa N, Fukuda M, Warashina M, Amano M, Funakoshi T, Sadamura Y, Miyagawa S, Saito A, Sawa Y, Shofuda T, Sumida M, Kanemura Y, Nakamura M, Okano H, Onuma Y, Ito Y, Asashima M, Hirabayashi J: Development of a practical sandwich assay to detect human pluripotent stem cells using cell culture media. 「Regenerative Therapy」 6:1-8, 2017年6月

Hori I, Otomo T, Nakashima M, Miya F, Negishi Y, Shiraishi H, Nonoda Y, Magara S, Tohyama J, Okamoto N, Kumagai T, Shimoda K, Yukitake Y, Kajikawa D, Morio T, Hattori A, Nakagawa M, Ando N, Nishino I, Kato M, Tsunoda T, Saito H, Kanemura Y, Yamasaki M, Kosaki K, Matsumoto N, Yoshimori T, Saitoh S: Defects in autophagosome-lysosome fusion underlie Vici syndrome, a neurodevelopmental disorder with multisystem involvement. 「Sci Rep」 7(1):3552, 2017年6月

Okamoto N, Miya F, Tsunoda T, Kato M, Saitoh S, Yamasaki M, Kanemura Y, Kosaki K: Novel MCA/ID syndrome with ASH1L mutation. 「Am J Med Genet A」 173(6):1644-1648, 2017年6月

Kanemura Y, Sumida M, Okita Y, Yoshioka E, Yamamoto A, Kanematsu D, Handa Y, Fukusumi H, Inazawa Y, Takada A, Nonaka M, Nakajima S, Mori K, Goto S, Kamigaki T, Shofuda T, Moriuchi S, Yamasaki M: Systemic Intravenous Adoptive Transfer of Autologous Lymphokine-activated $\alpha\beta$ T-Cells Improves Temozolomide-induced Lymphopenia in Patients with Glioma. 「Anticancer Res」 37(7):3921-3932, 2017年7月

Bamba Y, Kanemura Y, Okano H, Yamasaki M: Visualization of migration of human cortical neurons generated from induced pluripotent stem cells. 「J Neurosci Methods」 289:57-63, 2017年9月

Kato K, Miya F, Hori I, Ieda D, Ohashi K, Negishi Y, Hattori A, Okamoto N, Kato M, Tsunoda T, Yamasaki M, Kanemura Y, Kosaki K, Saitoh S: A novel missense mutation in the HECT domain of NEDD4L identified in a girl with periventricular nodular heterotopia, polymicrogyria and cleft palate. 「J Hum Genet」 62(9):861-863, 2017年9月

Kijima N, Kanemura Y: Mouse Models of Glioblastoma. 「Glioblastoma [Internet]」 Edited by De Vleeschouwer S, Chapter 7:131-139, Codon Publications, Brisbane, AU, 2017年9月

Okamoto N, Miya F, Hatsukawa Y, Suzuki Y, Kawato K, Yamamoto Y, Tsunoda T, Kato M, Saitoh S, Yamasaki M, Kanemura Y, Kosaki K: Siblings with optic neuropathy and RTN4IP1 mutation. 「J Hum Genet」 62(10):927-929, 2017年10月

Okamoto N, Tsuchiya Y, Miya F, Tsunoda T, Yamashita K, Boroevich KA, Kato M, Saitoh S, Yamasaki M, Kanemura Y, Kosaki K, Kitagawa D: A novel genetic syndrome with STARD9 mutation and abnormal spindle morphology. 「Am J Med Genet A」 173(10):2690-2696, 2017年10月

Iwata R, Maruyama M, Ito T, Nakano Y, Kanemura Y, Koike T, Oe S, Yoshimura K, Nonaka M, Nomura S, Sugimoto T, Yamada H, Asai A: Establishment of a tumor sphere cell line from a metastatic brain neuroendocrine tumor. 「Med Mol Morphol」 50(4):211-219, 2017年12月

Bamba Y, Nonaka M, Sasaki N, Shofuda T, Kanematsu D, Suemizu H, Higuchi Y, Pooh RK, Kanemura Y, Okano H, Yamasaki M: Generation of induced pluripotent stem cells and neural stem progenitor cells from newborn with spina bifida aperta. 「Asian Spine J」 11(6):870-879, 2017年12月

Ueki M, Maeda M, Sugiyama T, Kohmoto R, Kojima S, Ikeda T, Harada A, Kanemura Y, Miya F, Tsunoda T, Yamasaki M: A case of Dandy-Walker malformation complicated by Axenfeld-Rieger syndrome. 「Int J OphthalmolEye Res」 S1:02:001:1-3, 2017年12月

Achiha T, Arita H, Kagawa N, Murase T, Ikeda JI, Morii E, Kanemura Y, Fujimoto Y, Kishima H: Enchondromatosis-associated oligodendroglioma: case report and literature review. 「Brain Tumor Pathol」 35(1):36-40, 2018年1月

Fukusumi H, Handa Y, Shofuda T, Kanemura Y: Small-scale screening of anticancer drugs acting specifically on neural stem/progenitor cells derived from human induced pluripotent stem cells using a time-course cytotoxicity test. 「Peer J」 6:e4187, 2018年1月

Abe K, Katsuno H, Toriyama M, Baba K, Mori T, Hakoshima T, Kanemura Y, Watanabe R, Inagaki N: Grip and slip of L1-CAM on adhesive substrates direct growth cone haptotaxis. 「Proc Natl Acad Sci U S A」 115(11):2764-2769, 2018年3月

A-2

福角 勇人、金村米博：ES細胞「再生医療とリハビリテーション」再生医療とリハビリテーション研究会 編、P.7-18、株式会社三輪書店、東京、2018年3月

A-4

木下 学、金村米博、成田善孝：Radiomicsによる大規模臨床データを利用した脳腫瘍の画像分子診断の試み「INNNEVISION」32(9):38-40, 2017年8月

金村米博、岡野栄之：脳梗塞「Clinical Neuroscience」36:299-303, 2018年3月

B-2

Fukusumi H, Handa Y, Shofuda T, Kanemura Y: IDENTIFICATION OF DRUGS ACTING SPECIFICALLY ON NEURAL STEM/PROGENITOR CELLS DERIVED FROM HUMAN INDUCED PLURIPOTENT STEM CELLS BY USING A TIME-COURSE CYTOTOXICITY TEST. ISSCR 2017 Annual Meeting, Boston, MA, USA, 2017年6月16日

Okamoto N, Miya F, Tsunoda T, Kato M, Saitoh S, Yamasaki M, Kanemura Y, Kosaki K: A novel genetic syndrome with RAB11B mutation. ASHG 2017 Annual Meeting, Orlando, FL, USA, 2017年10月20日

Kinoshita M, Arita H, Takahashi M, Narita Y, Terakawa Y, Tsuyuguchi N, Okita Y, Nonaka M, Moriuchi S, Fukai J, Izumoto S, Ishibashi K, Kodama Y, Mori K, Ichimura K, Kanemura Y: Radionomic analysis of WHO grade 2 and 3 gliomas with genetic subgroup prediction. 22nd Annual Scientific Meeting and Education Day of the Society for Neuro-Oncology, San Francisco, California, USA, 2017年11月17日

Mori K, Shofuda T, Okita Y, Arita H, Kinoshita M, Terakawa Y, Tsuyuguchi N, Tomogane Y, Fukai J, Ishibashi K, Nishida N, Taki T, Nonaka M, Izumoto S, Moriuchi S, Nakajima Y, Hashimoto N, Kodama Y, Hirose T, Kanemura Y: Glioblastoma treatment of Bevacizumab era in Kansai region, Japan. 22nd Annual

Scientific Meeting and Education Day of the Society for Neuro-Oncology, San Francisco, California, USA, 2017年11月18日

Kijima N, Kanematsu D, Shofuda T, Yoshioka E, Handa Y, Moriuchi S, Nonaka M, Okita Y, Tsuyuguchi N, Fukai J, Higuchi Y, Suemizu H, Kanemura Y: Characterization of patient-derived tumor spheres and xenografts for glioblastoma. 22nd Annual Scientific Meeting and Education Day of the Society for Neuro-Oncology, San Francisco, California, USA, 2017年11月18日

Kanemura Y, Sumida M, Okita Y, Yoshioka E, Yamamoto A, Kanematsu D, Handa Y, Fukusumi H, Nozaki Y, Takada A, Nonaka M, Nakajima S, Mori K, Goto S, Kamigaki T, Shofuda T, Moriuchi S, Yamasaki M: Adoptive immunotherapy using lymphokine-activated $\alpha\beta$ T-cells improves Temozolomide-induced lymphopenia in patients with glioma. 22nd Annual Scientific Meeting and Education Day of the Society for Neuro-Oncology, San Francisco, California, USA, 2017年11月19日

Kanemura Y, Sumida M, Okita Y, Yoshioka E, Yamamoto A, Kanematsu D, Handa Y, Fukusumi H, Nozaki Y, Takada A, Nonaka M, Nakajima S, Mori K, Goto S, Kamigaki T, Shofuda T, Moriuchi S: Adoptive immunotherapy using lymphokine-activated alpha beta T-cells improves Temozolomide-induced lymphopenia in patients with glioma. AACR Immunobiology of Primary and Metastatic CNS Cancer, San Diego, USA, 2018年2月13日

B-3

Kanemura Y, Shofuda T, Yoshioka E, Ichimura K, Yamasaki M, Shibui S, Arai H, Sasaki A, Sakamoto H, Nishikawa R: Molecular classification and clinical characteristics of medulloblastomas in Japan. 第35回日本脳腫瘍病理学会、宇都宮、2017年5月20日

Arita H, Yamasaki K, Mukasa A, Kanemura Y, Nagane M, Ueki K, Nishikawa R, Komori T, Narita Y, Ichimura K: TERT promoter status refines the prognostication of IDH wt gliomas. 第35回日本脳腫瘍病理学会、宇都宮、2017年5月20日

Ichimura K, Komori T, Nakano Y, Arita H, Yamasaki K, Yoshioka T, Hirato J, Kanemura Y, Sakamoto H, Nishikawa R: Current status of molecular classification for central nervous system tumors in Japan. 第35回日本脳腫瘍病理学会、宇都宮、2017年5月20日

金村米博: 小児脳腫瘍の遺伝子診断と治療法選択への応用。第45回日本小児脳神経外科学会、神戸、2017年6月3日

Kanemura Y, Okita Y, Moriuchi S, Nonaka M, Mori K, Nakajima S, Sumida M, Yoshioka E, Yamamoto A, Handa Y, Kanematsu D, Goto S, Kamigaki T, Shofuda T, Yamasaki M: Adoptive immunotherapy using lymphokine-activated alpha beta T-cells improves Temozolomide-induced lymphopenia in patients with glioma. 一般社団法人日本脳神経外科学会第76回学術総会、名古屋、2017年10月12日

木下 学、有田英之、佐々木貴浩、藤田浩二、高橋雅道、成田善孝、金村米博、貴島晴彦：大規模脳腫瘍画像データの網羅的な解析を目指した Radiomics解析の開発。一般社団法人日本

脳神経外科学会第76回学術総会、名古屋、2017年10月12日

金村米博、正札智子、埜中正博、沖田典子、宇田武弘、露口尚弘、石橋謙一、有田英之、香川尚己、橋本直哉、木下 学、深井順也、西田南海子、友金祐介、森 鑑二、関西中枢神経腫瘍分子診断ネットワーク：小児脳腫瘍のクリニカルシーケンス。一般社団法人日本脳神経外科学会第76回学術総会、名古屋、2017年10月13日

中野嘉子、平戸純子、山崎夏維、福岡講平、北原麻衣、金村米博、信澤純人、坂本博昭、西川 亮、原 純一、義岡孝子、市村幸一：小児グリオーマ、上衣腫、胚細胞腫の遺伝子解析－JCCG中央診断より－。第35回日本脳腫瘍学会学術集会、高松、2017年11月26日

木下 学、福間良平、柳澤琢史、篠崎隆志、貴島晴彦、高橋雅道、成田善孝、有田英之、藤本康倫、寺川雄三、露口尚弘、深井順也、沖田典子、高垣匡寿、石橋謙一、児玉良典、埜中正博、森内秀祐、泉本修一、中島義和、森 鑑二、正札智子、市村幸一、金村米博：国内大規模画像コホートをを用いた人工知能によるGradeII-III神経膠種の画像分子診断。第35回日本脳腫瘍学会学術集会、高松、2017年11月26日

金村米博：in vitro 創薬・毒性試験に使用可能なヒトiPS細胞由来神経系細胞の開発。日本薬理学会第138年会、金沢、2018年3月26日

B-4

香川尚己、阿知波孝宗、横田千里、有田英之、藤本康倫、貴島晴彦、森井英一、金村米博、中里洋一、吉峰俊樹：母と子に発症した神経膠芽腫の病理組織像と分子遺伝学的検討。第35回日本脳腫瘍病理学会、宇都宮、2017年5月19日

阿知波孝宗、有田英之、横田千里、福屋章悟、香川尚己、村瀬 剛、池田純一郎、森井英一、金村米博、藤本康倫：多発性内軟骨腫（Ollier病）に合併した乏突起膠腫の一例。第35回日本脳腫瘍病理学会、宇都宮、2017年5月19日

上松右二、深井順也、金村米博、藤田浩二、中尾直之：分子情報を含め診断した幼児小脳astrocytomaの1例。第35回日本脳腫瘍病理学会、宇都宮、2017年5月20日

深井順也、佐々木貴浩、金村米博、森 鑑二、正札智子、兼松大介、吉岡絵麻、児玉良典、上松右二、中尾直之：高齢者神経膠腫の分子マーカーと予後、治療選択：関西中枢神経腫瘍分子診断ネットワークに登録された142例の解析。日本脳腫瘍病理学会、宇都宮、2017年5月20日

横井摂理、堤真紀子、宮 冬樹、宮田昌史、加藤光広、岡本伸彦、角田達彦、山崎麻美、金村米博、小崎健次郎、齋藤伸治、倉橋浩樹：Novel compound heterozygous variants in PLK4 cause microcephaly and chorioretinopathy. 第59回日本小児脳神経学会学術集会、大阪、2017年6月15日

藤中俊之、木嶋教行、沖田典子、中川智義、三浦慎平、中川僚太、館 哲郎、中村 元、金村米博、中島 伸：大型脳動脈瘤に対するFlow diverterを用いた血管内治療成績。一般社団法人

人日本脳神経外科学会第76回学術総会、名古屋、2017年10月12日

春山裕典、赤木洋二郎、吉本幸司、空閑太亮、秦 暢宏、古賀友紀、大賀 正、金村米博、西川 亮、坂本博昭、市村幸一、飯原弘二：髄芽腫のsubgroup分類とMRI所見、臨床的特徴についての検討。一般社団法人日本脳神経外科学会第76回学術総会、名古屋、2017年10月12日

三浦慎平、木嶋教行、中川智義、中川僚太、館 哲郎、沖田典子、金村米博、中島 伸、藤中俊之：中大脳動脈瘤に対するコイル塞栓術の治療成績。一般社団法人日本脳神経外科学会第76回学術総会、名古屋、2017年10月12日

中川智義、山田修平、藤中俊之、館 哲郎、中川僚太、三浦慎平、木嶋教行、沖田典子、金村米博、中島 伸：血管内治療後に再治療を要した脳動脈瘤18例の検討。一般社団法人日本脳神経外科学会第76回学術総会、名古屋、2017年10月12日

中川僚太、中川智義、木嶋教行、館 哲郎、三浦慎平、沖田典子、金村米博、中島 伸、藤中俊之：脳動脈瘤に対する血管内治療3ヶ月後に脳実質内に多発造影病変を認め、異物性肉芽腫が疑われた1例。一般社団法人日本脳神経外科学会第76回学術総会、名古屋、2017年10月12日

木嶋教行、中川智義、三浦慎平、中川僚太、館 哲郎、沖田典子、金村米博、中島 伸、藤中俊之：重症くも膜下出血患者の治療戦略とその転帰。一般社団法人日本脳神経外科学会第76回学術総会、名古屋、2017年10月12日

館 哲郎、木嶋教行、中川智義、三浦慎平、中川僚太、沖田典子、金村米博、中島 伸、藤中俊之：外傷性中硬膜動静脈瘻の2例。一般社団法人日本脳神経外科学会第76回学術総会、名古屋、2017年10月13日

沖田典子、正札智子、兼松大介、吉岡絵麻、児玉良典、眞能正幸、木下 学、埜中正博、中島 伸、金村米博、藤中俊之：神経膠腫の非造影病変での定量的評価によるmethionine PETとMGMTプロモーターメチル化率の相関性について。一般社団法人日本脳神経外科学会第76回学術総会、名古屋、2017年10月13日

深井順也、佐々木貴浩、金村米博、森 鑑二、正札智子、兼松大介、吉岡絵麻、児玉良典、廣瀬隆則、藤田浩二、上松右二、中尾直之：高齢者神経膠腫の臨床・病理像：関西中枢神経腫瘍分子診断ネットワークに登録された142例の後方視的解析。一般社団法人日本脳神経外科学会第76回学術総会、名古屋、2017年10月14日

上松右二、深井順也、金村米博、西林宏起、藤田浩二、中尾直之：当科におけるグリオーマIntegrated diagnosisの現状。一般社団法人日本脳神経外科学会第76回学術総会、名古屋、2017年10月14日

福角勇人、正札智子、中村雅也、岡野栄之、金村米博：臨床試験に使用するヒトiPS細胞由来神経前駆細胞作製法の開発。第4回再生医療とリハビリテーション研究会、吹田、2017年11月

18日

木嶋教行、兼松大介、正札智子、吉岡絵麻、半田有佳子、森内秀祐、埜中正博、沖田典子、露口尚弘、深井順也、樋口裕一郎、末水洋志、金村米博：グリオーマ初代培養確立株の特徴とそのin vivoでの形態の特徴についての検討。第35回日本脳腫瘍学会学術集会、高松、2017年11月26日

沖田典子、正札智子、兼松大介、吉岡絵麻、児玉良典、眞能正幸、木下 学、埜中正博、中島 伸、金村米博、藤中俊之：神経膠腫の非造影病変での定位的評価によるMET-PETとMGMTメチル化率の相関性。第35回日本脳腫瘍学会学術集会、高松、2017年11月27日

露口尚弘、寺川雄三、宇田武弘、木下 学、有田英之、金村米博：gliomaの遺伝子変異とMethionine-PETの相関性について。第35回日本脳腫瘍学会学術集会、高松、2017年11月27日

佐々木貴浩、木下 学、藤田浩二、有田英之、宇田武弘、露口尚弘、林 宣秀、深井順也、上松右二、森 鑑二、沖田典子、埜中正博、森内秀祐、中尾直之、金村米博：MGMTプロモーター領域のメチル化予測を目指した膠芽腫のRadiomics解析。第35回日本脳腫瘍学会学術集会、高松、2017年11月27日

有田英之、木下 学、川口 淳、児玉良典、高橋雅道、寺川雄三、沖田典子、高垣匡寿、深井順也、石橋謙一、露口尚弘、森内秀祐、泉本修一、中島義和、藤田浩二、埜中正博、藤本康倫、森 鑑二、正札智子、成田善孝、市村幸一、金村米博：Lower Grade GliomaのRadiogenomic解析。第35回日本脳腫瘍学会学術集会、高松、2017年11月27日

森 鑑二、正札智子、兼松大介、吉岡絵麻、沖田典子、有田英之、木下 学、宇田武弘、友金祐介、深井順也、石橋謙一、西田南海子、瀧 琢有、埜中正博、泉本修一、中島義和、森内秀祐、露口尚弘、寺川雄三、橋本直哉、児玉良典、廣瀬隆則、金村米博：関西中枢神経系腫瘍分子診断ネットワークにおけるベバシズマブ時代の膠芽腫治療。第35回日本脳腫瘍学会学術集会、高松、2017年11月27日

梅原 徹、有田英之、金村米博、香川尚己、藤本康倫、貴島晴彦：Grade II-III神経膠腫再発／悪性転化に対するベバシズマブの治療成績の検討。第35回日本脳腫瘍学会学術集会、高松、2017年11月27日

深井順也、佐々木貴浩、正札智子、兼松大介、吉岡絵麻、児玉良典、廣瀬隆則、沖田典子、友金祐介、木下 学、泉本修一、有田英之、森内秀祐、露口尚弘、寺川雄三、宇田武弘、中島義和、西田南海子、埜中正博、石橋謙一、藤田浩二、上松右二、中尾直之、森 鑑二、金村米博：高齢者神経膠腫の臨床・病理像：関西中枢神経腫瘍分子診断ネットワーク登録症例の解析。第35回日本脳腫瘍学会学術集会、高松、2017年11月27日

福角勇人、正札智子、隅田美穂、野崎佑衣、山本篤世、半田有佳子、兼松大介、吉岡絵麻、高田 愛、中村雅也、岡野栄之、金村米博：ヒトiPS細胞由来神経前駆細胞における残留iPS細胞の高感度検出法の開発。第17回日本再生医療学会総会、横浜、2018年3月21日

B-6

森 鑑二、沖田典子、有田英之、木下 学、宇田武弘、友金祐介、深井順也、石橋謙一、西田南海子、瀧 琢有、埜中正博、泉本修一、中島義和、児玉良典、橋本直哉、金村米博：関西中枢神経腫瘍分子診断ネットワークの活動報告。Neurosurgery Kinki 2017 Spring Meeting 第73回日本脳神経外科学会近畿支部学術集会 第75回近畿脊髄外科研究会 合同開催、豊中、2017年4月8日

三浦慎平、木嶋教行、沖田典子、藤森なぎさ、小澤健太郎、中川智義、中川僚太、館 哲郎、金村米博、中島 伸、藤中俊之：頭蓋内へ遠隔転移した乳房外パジェット病の一例。第74回日本脳神経外科学会近畿支部学術集会、豊中、2017年9月2日

藤田祐也、尾崎友彦、金村米博、木下 学：右傍側脳室に発生したpapillary glioneuronal tumor の1例。第74回日本脳神経外科学会近畿支部学術集会、豊中、2017年9月2日

館 哲郎、木嶋教行、中川智義、三浦慎平、中川僚太、沖田典子、金村米博、中島 伸、藤中俊之：外傷性中硬膜動静脈瘻の2例。第74回日本脳神経外科学会近畿支部学術集会、豊中、2017年9月2日

中川僚太、中川智義、木嶋教行、館 哲郎、三浦慎平、沖田典子、金村米博、中島 伸、藤中俊之：脳動脈瘤コイル塞栓術3ヶ月後に脳実質内に多発造影病変を認め、異物性肉芽腫が疑われた1例。第74回日本脳神経外科学会近畿支部学術集会、豊中、2017年9月2日

B-8

金村米博：グリオーマにおける化学療法感受性の遺伝子指標の探索とそれに基づくテーラーメイド治療法の開発。探索医療薬物研究会第5回合同シンポジウム『がんと創薬－基礎研究と臨床応用の接点』、大阪、2017年10月28日

金村米博：脳腫瘍の遺伝子診断と治療法選択への応用。Kyoto Neurosurgery Conference 2017、京都、2017年12月7日

事業名	医薬品等規制調和・評価研究事業
研究開発課題名	ヒト iPS 分化細胞技術を活用した医薬品の次世代毒性・安全性評価試験系の開発と国際標準化に関する研究
研究開発担当者 所属 役職 氏名	臨床研究センター 先進医療研究開発部 再生医療研究室 室長 金村 米博

成果の概要

研究開発項目 4：次世代評価法開発と多施設間検証（中枢神経系/肝臓）

29年度はリプログラミング因子のゲノム挿入フリーヒト iPS 細胞（1210B2 株および 1201C1 株）から新規に dual SMADi 法を用いてヒト iPS 細胞由来神経幹/前駆細胞（iPS-NSPC）を作製して細胞バンクを充実させた。更に WNT 阻害剤を用いた前脳型 iPS-NPC の作製法の有用性の検討を行い、その細胞特性を評価して、細胞バンクを構築した。

また、ヒト iPS-NSPC を用いた細胞毒性評価法として、現在一般的に汎用されている試験薬剤投与後、一定時間後の細胞毒性を生細胞 ATP 量を指標にして評価する endpoint assay と、微細加工形成された直径 300µm の多数のマイクロウェルから成る microsphere array 上に形成された neurosphere の形状を非破壊的に長期間（1 週間）連続観察して細胞毒性を評価する time-course assay の 2 法を併用して各種薬剤の細胞毒性を評価する手法を考案した（Fukusumi et al., Peer J 6:e4187, 2018）。本手法を用いることで、endpoint assay 単独では評価が困難な、作用時間が遅い薬剤の毒性を、少ない細胞で効率的に評価することが可能であることが明らかになった。

これら成果を用いて、ヒト iPS-NSPC を用いた標準的安全性薬理試験法のための試験プロトコル整備を実施することが可能となった。

研究開発項目 5：評価法用標準細胞の開発（中枢神経系/肝臓）

ヒト iPS-NSPC の神経分化誘導時の細胞成熟度を評価するための新規品質評価法として、無血清浮遊培養法で増幅した iPS-NPC を単一細胞に分散後、Matrigel 上に播種して無血清分化培地を用いて 7 日間の培養を行った後、神経細胞（HuC/D 陽性細胞）および残存する未分化 iPS-NSPC（SOX1 陽性細胞）の比率を定量的に評価する免疫染色法およびフローサイトメーターを用いた評価手法プロトコルを開発した。

この新規評価手法を用いて、28年度までに検討を実施してきた分化誘導法（培地 A および培地 B）の終末神経分化誘導効率を定量的に再評価した結果、神経細胞（HuC/D 陽性細胞）の分化比率は誘導開始後 7 日目の時点まで時系列に上昇するが、これら手法では未分化細胞（SOX1 陽性細胞）が一定数、残存することが明らかとなった。一方、改良された新たな分化誘導条件（培地 C）においては、誘導開始後 7 日目の時点で SOX1 陽性細胞はほとんど存在せず、約 90%の細胞が神経細胞（HuC/D 陽性細胞）に分化することが確認された。

これら成果の結果、本評価手法を用いることで各種分化誘導法の特性を定量的に評価することが可能となり、評価法用細胞の分化特性を把握し、その標準化に必要なデータ蓄積が実施された。

事業名	再生医療実用化研究事業
研究開発課題名	亜急性期脊髄損傷に対する iPS 細胞由来神経前駆細胞を用いた再生医療
研究開発担当者 所属 役職 氏名	臨床研究センター 先進医療研究開発部 再生医療研究室 室長 金村 米博

成果の概要

H29年度に iPS 細胞研究中核拠点から新たに供給された末梢血由来 iPS 細胞ストック、および臍帯血由来 iPS 細胞ストックについて、前年度に整備した特定細胞加工物標準書および各種手順書に従って、慶應義塾大学および大阪医療センターの2機関で iPS 細胞由来神経前駆細胞を作製し、品質評価試験を実施して、再生医療用 iPS 細胞ストックを選定した。

末梢血由来 iPS 細胞ストックについては iPS 細胞研究中核拠点より6クローンの iPS 細胞を受領し、このうち受領後に QC 不適合と報告を受けた2クローンを除いた4クローンについて神経前駆細胞に分化誘導した。4クローンの中で最も良好な増殖を示した iPS 細胞株 X は、定められた製造期間内で目標収量を達成し、特定細胞加工物標準書で定める凍結前製品での規格試験において、すべての項目に合格した。同時期に大阪医療センターで実施された分化誘導および規格試験の結果と比較したところ、増殖傾向、品質試験結果ともクローンごとの傾向が相関していた。その結果、末梢血由来 iPS 細胞ストックのうち、この細胞株 X が、神経前駆細胞の原材料として最も適しているとの判断が下され、この細胞株 X から誘導した神経前駆細胞を、脊髄損傷モデルマウスに移植し、有効性および安全性についての検討を開始した。同時に、細胞株 X に関してはモニタリング項目として全ゲノムメチル化解析、遺伝子発現解析を実施することとした。

再製造された臍帯血由来 iPS 細胞ストックについても、iPS 細胞研究中核拠点より7クローンの iPS 細胞を受領し、このうち受領後に QC 不適合と報告を受けた2クローンを除いた5クローンについて同様に神経前駆細胞に分化誘導し、iPS 細胞株 Y を臨床研究に使用可能な候補として選定した。

樹立に用いた細胞種の違い（末梢血、臍帯血）について規格試験の結果では明らかな違いを認めなかった。そのため、臨床研究に用いる再生医療用 iPS 細胞ストックとしては非臨床データの集積状況から、現時点では末梢血由来の X 株を第一候補としており、臍帯血由来の Y 株に関してはバックアップとしての位置づけとなっている。

加えて、臨床研究の実施準備としては、先進医療 B での臨床研究とすることを念頭に、厚生労働省医政局への事前相談（2回）、PMDA への事前相談（1回）をふまえて実験計画を修正した。修正後の計画について、慶應義塾大学医学部倫理委員会および慶應義塾特定認定再生医療等委員会において審議中である。

事業名	再生医療実現拠点ネットワークプログラム 疾患・組織別実用化研究拠点（拠点A）
研究開発課題名	iPS 細胞由来神経前駆細胞を用いた脊髄損傷・脳梗塞の再生医療
研究開発担当者 所属 役職 氏名	臨床研究センター 先進医療研究開発部 再生医療研究室 室長 金村 米博

成果の概要

研究開発項目3：亜急性期脳梗塞に対する臨床研究を開始

3-1. 再生医療用 iPS 細胞由来神経前駆細胞ストックを用いた亜急性期脳梗塞患者に対する臨床研究の開始

3-1-1 げっ歯類脳梗塞モデルにおける iPS 細胞由来神経前駆細胞移植療法手技の最適化

平成28年度に継続してラット中大脳動脈閉塞（MCAO）脳梗塞モデルを引き続き使用して、脳梗塞作成後亜急性期（梗塞後7日目）を主たる移植時期と設定し、次項で並行開発を実施した脳梗塞治療用ヒト iPS 細胞由来神経前駆細胞ストックと同等の規格を有する細胞の移植手法を検討した。具体的には、使用する脳梗塞モデルの妥当性を再検証するための脳虚血時間の再検討を行った後、移植手技、併用薬剤、併用材料に関して、複数の異なる条件を組み合わせた移植手法を複数デザインし、それら異なる移植手法を用いた細胞移植を実施し、移植後28日までの神経行動学解析を行い、移植細胞の定着性を病理組織学的に解析した。

3-1-2 脳梗塞治療用ヒト iPS 細胞由来神経前駆細胞ストックの試験製造の実施

平成28年度までに整備した脊髄損傷治療用ヒト iPS 細胞由来神経前駆細胞ストックの製造方法（特定細胞加工物標準書および各工程で使用する手順書）を用いて、脳梗塞治療用ヒト iPS 細胞由来神経前駆細胞ストック作製の候補となる HLA ホモ iPS 細胞の細胞特性を確認し、神経分化誘導実施後、作製されたヒト iPS 細胞由来神経前駆細胞の詳細な細胞特性を検証し、脳梗塞治療用細胞としての妥当性を検証した。また、脳梗塞治療用細胞として、ヒト iPS 細胞由来神経前駆細胞から分化誘導した神経細胞の凍結融解安定性と神経分化能評価を実施した。また、ヒト iPS 細胞由来神経前駆細胞の低酸素状態での神経分化能評価を行った。これら成果を用いて、脳梗塞治療用ヒト iPS 細胞由来神経前駆細胞ストックの製品標準書および各工程の手順書の作成を実施した。

事業名	革新的がん医療実用化研究事業
研究開発課題名	小児脳腫瘍に対する多施設共同研究による治療開発
分担研究開発課題名 (実施内容)	遺伝子解析
研究開発担当者 所属 役職 氏名	臨床研究センター 先進医療研究開発部 再生医療研究室 室長 金村 米博

研究開発の目的及び内容

観察研究を含む臨床試験への症例登録に際し、分子分類に必要な遺伝子解析を行い、予後などの臨床的特徴との関連を検討する。特に、髄芽腫における包括的な分子分類に基づく前方視的予後分類は、世界に類を見ないものである。

当該年度における研究開発項目、マイルストーン及び研究開発方法

前研究で行ってきた分子分類を継続実施する。また、当該年度に開始される髄芽腫を対象とした臨床試験に必要な分子分類がプロトコール治療開始までに実施可能か、検証する。

成果の概要

髄芽腫の中央分子診断としては、平成 29 年度は新たに 41 検体を受け入れ、現在までの総計検体数は 108 検体に到達した。これら検体の分子診断としては 4 分子亜群診断を 36 検体に対して確定することができ（総計 99 検体）、DNA シークエンスは CTNNB1 解析を 41 検体（総計 108 検体）、TP53 解析を 40 検体（総計 107 検体）、TERT プロモータ解析を 41 検体（総計 108 検体）に対して実施し、37 検体の分子診断情報を確定して報告書作成を実施した（総計 104 検体）。

事業名	革新的先端研究開発支援事業
研究開発課題名	細胞-基質間の力を基盤とした細胞移動と神経回路形成機構の解明およびその破綻による病態の解析
分担研究開発課題名	L1 症候群発症および悪性グリオーマ浸潤に関与するメカノバイオロジーの分子病態解明
研究開発担当者 所属 役職 氏名	臨床研究センター 先進医療研究開発部 再生医療研究室 室長 金村 米博

成果の概要

(1) L1-CAM 変異を有する L1 症候群患者由来初代細胞の樹立とその特性解析

国立病院機構大阪医療センター倫理委員会承認の下、L1-CAM 遺伝子異常を有する L1 症候群 (X連鎖性遺伝性水頭症) 患者 3 名の脳外科手術時に摘出された残余皮膚組織から、ウシ胎児血清 (FBS) 含有培地を使用した単層培養法を用いて線維芽細胞を樹立した。樹立細胞の特性解析として、線維芽細胞を 2×10^4 cells/well の密度で 2 種類 (matrigel コーティング有、無) の 96well plate に播種し、約 4 時間後に scratch wound を作製し、3 種類の培地 (10%FBS 含有培地、EGF/FGF2/LIF 含有無血清培地、無血清基本培地) に切り替えて 2 時間ごとに計 40 時間 time lapse 撮影を行い、細胞運動能を評価した。

(2) 脳腫瘍患者由来初代培養細胞樹立

国立病院機構大阪医療センター倫理委員会承認の下、脳外科手術により摘出した悪性グリオーマの残余組織を細切・酵素処理にて単一細胞に分散し、増殖因子(EGF/FGF2/LIF)を含む神経幹/前駆細胞培養用無血清培地を用いて浮遊培養を実施した。培養中に接着形態へ移行する症例や細胞増殖が見られない症例は培養を停止し、数継代後も浮遊性細胞凝集塊を形成しながら増殖性を維持する細胞のみを選別し、培養を継続し、細胞増殖曲線を作製した。

細胞特性解析として、長期維持培養が可能であった細胞に関して、初回継代前 (P0) と数継代後 (late phase) の 2 時点で、それぞれ有血清培地を用いた単層接着培養法で分化誘導を行い、抗 β -III tubulin 抗体、抗 GFAP 抗体および ToPRO-3 を用いた 3 重蛍光細胞免疫染色を行って分化誘導後の細胞特性を解析した。また、late phase の細胞に関しては、RNA シークエンス法を用いて L1-CAM および Shootin-1(SHTN1)、FACS 法を用いて L1-CAM の発現解析を各々実施した。

事業名	再生医療実用化研究事業
研究開発課題名	創薬のためのインビトロ脳機能評価法の確立と標準化ヒト神経細胞の開発
分担研究開発課題名	ヒト iPS 細胞由来神経細胞の分化プロトコールの開発
研究開発担当者 所属 役職 氏名	臨床研究センター 先進医療研究開発部 再生医療研究室 室長 金村 米博

研究開発の目的及び内容

ヒト iPS 細胞から高品質ヒト神経細胞を安定的にかつ大量に作製する技術体系の確立を目的として、*in vitro* で増幅可能なヒト神経前駆細胞を樹立してセルバンク化して凍結保管し、試験用標準細胞として多施設へ安定的に供給できるシステムを構築し、樹立ヒト神経前駆細胞およびその分化神経細胞の細胞特性を明らかにして細胞品質に影響を及ぼす因子を同定し、i-NC 作製のための分化誘導プロトコールを標準化させる。

当該年度における研究開発項目、マイルストーン及び研究開発方法

(1) 創薬研究のための標準化ヒト神経細胞の開発

研究開発項目：種々の分化誘導法により各研究施設で作製されたヒト神経細胞の品質変動とその要因の検証

マイルストーン：複数の分化誘導法を用いてニューロスフェアを介して作製したヒト神経前駆細胞の研究者への提供を 30%完了。

研究開発方法：SMAD 阻害剤等処理の後にニューロスフェアを介して *in vitro* 増幅・製造されたヒト iPS 細胞由来神経前駆細胞を、試験用標準細胞として各研究者に安定的に提供する体制を構築する。また、使用したヒト iPS 細胞のトレイサビリティや分化誘導プロトコール、ロット間の品質変動等の基盤的情報を取得し、各研究者に提供する。

成果の概要

ヒト iPS 細胞由来神経前駆細胞の分化誘導時に市販添加因子 (Culture One Supplement, Thermo Fisher Scientific 社製) を使用することで、遺伝子導入等の特別な操作を行わずに、神経細胞分化誘導効率を約 90%程度までに有意に上昇させることが可能であることが確認された。別途検討を行った完全合成神経分化誘導培地を用いて Culture One Supplement と同程度の神経分化誘導効率を達成することに成功した。また、本完全合成神経分化誘導培地と組み合わせて使用する最適な培養基材コーティング法を見出し、これら成果を合わせて、高効率神経分化誘導法を開発することに成功し、その神経分化誘導プロトコールを研究班内で共通使用する体制を整備した。また、高効率神経分化誘導法を用いてヒト iPS 細胞由来神経前駆細胞から作製した凍結ヒト神経分化細胞の供給体制の整備を行った。

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）実績報告書（研究実績報告書）

所属研究機関名称		独立行政法人国立病院機構大阪医療センター（臨床研究センター）	機関番号	8 4 4 1 4
研究 代表者	部局	先進医療研究開発部 再生医療研究室		
	職	室長		
	氏名	金村 米博		

1. 研究種目名 挑戦的萌芽研究 2. 課題番号 15K15534

3. 研究課題名 成人低悪性度グリオーマ関連ドライバー遺伝子変異とグリオーマ幹細胞発生の関連性検証

4. 補助事業期間 平成27年度～平成29年度

5. 研究実績の概要

28年度までに作製したTet-On 3G transactivator protein (Tet3G) 発現vector導入ヒトiPS細胞（409B2株）に加え、新たにTet3G導入ヒトiPS細胞（1210B2株）を樹立し、gene of interest (GOI) として新たにグリオーマ関連ドライバー遺伝子変異（BRAF-V600E変異、histone H3F3A-K27変異）を導入したベクターを作製し、これらリソースを使用した結果、BRAF-V600E変異遺伝子を導入したヒトiPS細胞（BRAF-V600E_1210B2）の樹立に成功した。BRAF-V600E_1210B2からdual SMAD阻害剤を用いた神経分化誘導とその後のneurosphere法を用いた拡大培養にて神経前駆細胞を樹立し、DOX添加にてBRAF-V600Eを発現させて細胞増殖および遺伝子発現に及ぼす影響を検討した。3年間の研究成果から、ヒトiPS細胞とその神経分化誘導過程においてグリオーマ関連ドライバー遺伝子変異の機能を探索的に解析するプラットフォーム構築に成功した。

前年度にマイクロアレイ（illumina社製）を用いてDNAメチル化データを取得した遺伝子導入前段階のヒトiPS細胞由来神経前駆細胞と神経組織由来正常ヒト神経幹/前駆細胞に関して、さら詳細なデータの解析を行い、両細胞のDNAメチル化レベルで検討した。また、これら正常細胞と、グリオーマ幹細胞とのDNAメチル化データの比較検討を行い、正常神経幹/前駆細胞とグリオーマ幹細胞とのDNAメチル化レベルでの相違点を解析し、エピジェネティクスの観点からグリオーマ発生に関わる遺伝子群を解析した。

6. キーワード

低悪性度グリオーマ 神経前駆細胞 Tet-onシステム ドライバー遺伝子変異

分子医療研究室

室長 上松正朗

分子医療研究室では多施設共同研究として難治性脳形成障害症の診断基準作成及び新規治療法開発に向けた病態解析研究を支援する臨床病態、画像情報、遺伝子情報、患者由来生体試料（組織・細胞・DNA）などのデータバンク構築を実施中である。研究組織で独自に構築したデータサーバー難治性脳形成障害症（fetal brain malformation 以下 FBM）（<http://fms.fetal-brain-malformation.jp>）を使用して、2009年12月～2018年6月までの期間で、症例登録協力施設47施設から450件が登録された。45施設から提供されたDNA試料591検体、培養細胞試料216検体を分離・樹立し保管した。エキスパートによる画像診断、病理診断、そして標的遺伝子のみならず次世代シーケンサーを駆使した遺伝子解析を施行した。その結果、約260例で確定診断が得られた。幹細胞研究室と共同で、患者由来試料から分離した線維芽細胞、神経幹細胞、間葉系細胞（臍帯由来）、血液細胞の特性解析を行い、並行してそれら細胞から疾患iPS細胞の樹立を実施し、その特性解析を実施している。

これら研究成果は、FBMの遺伝子診断のみならず分子病態解析、予防法の確立、新規治療法開発の研究に大きく貢献するものである。

エイズ先端医療開発室

エイズ先端医療研究部長 白阪琢磨

エイズ先端医療研究部はエイズ先端医療開発室と HIV 感染制御室から構成されている。

当院は薬害 HIV 裁判の和解に基づく恒久対策の一環として、平成 9 年にエイズ診療における近畿ブロックのブロック拠点病院に選定され、診療（全科対応体制）、臨床研究、教育・研修、情報発信の 4 機能を担っている。院内設置の HIV/AIDS 先端医療開発センターが関連部署と緊密な連携を取り任務を遂行している。HIV 感染症の専門的診療は感染症内科が担い、他の機能はエイズ先端医療研究部がコーディネートしている。臨床研究では厚生労働行政推進調査事業補助金によるエイズ対策政策研究事業（平成 29 年度は指定研究「HIV 感染症及びその合併症の課題を克服する研究」（研究代表者 白阪琢磨、研究分担者 下司有加、安尾利彦）、指定研究「HIV 感染症の医療体制の整備に関する研究」（研究分担者 渡邊大））などを実施し、臨床研究の主なテーマとして HIV 感染症の病態解析や治療に関する研究と患者中心の医療の提供に関する研究取り組んでいる。平成 29 年度の独立行政法人国立病院機構の NHO ネットワーク共同研究課題として、感染早期患者に対する MVC による強化療法の効果に関する研究（H29-NHO（エイズ）-01、研究代表者 白阪琢磨）の 1 課題で研究代表者として研究を遂行した。抗 HIV 療法重要な服薬アドヒアランスの向上・維持のための研究は、日本医療研究開発機構エイズ対策実用化研究事業〔アドヒアランス向上に関する研究（9 研究代表者白阪琢磨）〕を実施した。血液製剤による感染者の多くは加齢に伴う長期療養が重大な課題となっており、厚生労働行政推進調査事業補助金によるエイズ対策政策研究事業「非加熱血液凝固因子製剤による HIV 感染血友病等患者の長期療養体制の構築に関する患者参加型研究（研究代表者 木村哲）」班の研究分担（消化器内科 三田英治）を担当し研究協力も行っている。重複感染の C 型肝炎に対しては厚生労働行政推進調査事業補助金によるエイズ対策政策研究事業指定研究班（江口班（研究分担者 上平朝子））の研究分担を担当している。教育・研修では院外向けと共に、院内での研修については、看護部、医療相談室、臨床心理室等と共に職員研究部と協働で実施し、多くの参加者を得ている。これらの研究成果は学会あるいは論文として発表した。情報発信については当院のホームページ内に HIV/AIDS 先端医療開発センター（<http://www.onh.go.jp/khac/>）を設け、厚労科研の成果の一部（HAART Support）や HIV 感染症/AIDS に関する情報を発信しており、ホームページを 1999 年に開設以来アクセス数は 71 万件を超え、多くの方の利用を得ている。

平成 25 年 4 月には大阪大学大学院医学系研究科の連携大学院（エイズ先端医療学）が併設され、平成 26 年度から 1 名の大学院生を受け入れている。

今後も、HIV/AIDS 先端医療開発センターの研究部門として HIV 感染症/AIDS に関する臨床研究、教育・研修、情報発信を進め、特に急性感染期の HIV 感染症の診断と治療を新たなテーマとして研究を推進して行きたい。

【2017 年度 研究発表業績】

A-0

Miyazaki N, Sugiura W, Gatanaga H, Watanabe D, Yamamoto Y, Yokomaku Y, Yoshimura K, Matsushita

S, the Japanese HIV-MDR Study Group: High antiretroviral coverage and viral suppression prevalence in Japan: an excellent profile for downstream HIV care spectrum. 「Jpn J Infect Dis.」 70(2):P.158-160、2017年3月24日

Watanabe D, Yamamoto Y, Suzuki S, Ashida M, Matsumoto E, Yukawa S, Hirota K, Ikuma M, Ueji T, Kasai D, Nishida Y, Uehira T, Shirasaka T: Cross-sectional and longitudinal investigation of human herpesvirus 8 seroprevalence in HIV-1-infected individuals in Osaka, Japan. 「J Infect Chemother.」 23(4):P.201-205、2017年4月

Kawado M, Hashimoto S, Oka S, Fukutake K, Higasa S, Yatsunami H, Ogane M, Okamoto M, Shirasaka T: Clinical Improvement by Switching to an Integrase Strand Transfer Inhibitor in Hemophiliac Patients with HIV: The Japan Cohort Study of HIV Patients Infected through Blood Products. 「The Open Aids Journal」 11:18-23、2017年4月26日

Itoi-Ochi S, Hayashi M, Yamaoka T, Kobayashi Y, Isei T, Shirasaka T, Katayama I: Occult HIV infection in Japanese rupioid psoriasis. 「J Dermatol.」 44(7):e172-e173、Epub 2017年4月28日

Yagura H, Watanabe D, Kushida H, Tomishima K, Togami H, Hirano A, Takahashi M, Hirota K, Ikuma M, Kasai D, Nishida Y, Yoshino M, Yamazaki K, Uehira T, Shirasaka T : Impact of UGT1A1 gene polymorphisms on plasma dolutegravir trough concentrations and neuropsychiatric adverse events in Japanese individuals infected with HIV-1. 「BMC Infect Dis.」 7(1) : P.622、2017年9月16日

Nakakura I, Ogawa Y, Sakakura K, Imanishi K, Hirota K, Shimatani Y, Uehira T, Nakamori S, Sako R, Doi T, Yamazaki K: IMP-6 Carbapenemase-Producing Enterobacteriaceae Bacteremia Successfully Treated with Amikacin-Meropenem in Two Patients. 「Pharmacotherapy」 37(10):e96-e102、Epub 2017年7月12日

Yonemura T, Okada N, Sagane K, Okamiya K, Ozaki H, Iida T, Yamada H, Yagura H : Effects of Milk or Apple Juice Ingestion on the Pharmacokinetics of Elvitegravir and Cobicistat in Healthy Japanese Male Volunteers: A Randomized, Single-Dose, Three-Way Crossover Study. 「Clin Pharmacol Drug Dev.」、[Epub ahead of print] 2018年1月24日

Yukawa S, Watanabe D, Uehira T, Shirasaka T: Clinical benefits of using inulin clearance and cystatin C for determining glomerular filtration rate in HIV-1-infected individuals treated with dolutegravir. 「J Infect Chemother.」 24(3):P.199-205、2018年3月

A-2

西田恭治 : 保因者ケア「血友病の診療マニュアル」宮川義隆、天野景裕編集、P.227-233、株式会社医薬ジャーナル社、大阪、2017年10月31日

白阪琢磨 : 抗 HIV 薬「治療薬ハンドブック 2018」高久史磨監修、P.1378-1402、じほう、東京、2018年1月

A-3

光井絵理、加藤 研、安部倉竹紗、種田灯子、廣田和之、矢嶋敬史郎、渡邊 大、上平朝子、白阪琢磨、瀧 秀樹：HIV 感染症治療中に 1 型糖尿病とバセドウ病を発症し免疫再構築症候群と考えられた 1 例「糖尿病」60(4):P.295-300、日本糖尿病学会、2017 年 4 月 30 日。

池田 超、藤原弘明、桑田聖平、矢野眞紀、田中堅司、細野 晃、辻 亨、森本 実、瀧原義宏、安原武志、首藤加奈子、吉村 誠、谷 慶彦、白阪琢磨、大川聡子：0-095 全国初新たな献血推進の啓発拠点 献血サポート薬局について「血液事業」40(2):P.426-426、日本血液事業学会、2017 年 11 月 21 日

西田恭治：血友病診療における消炎鎮痛解熱剤の使い方について教えてください「Frontiers in Haemophilia」5(1)P.27-28、天野景裕、酒井道生、野上恵嗣、日笠聡、藤井輝久、松下正 編集、メディカルレビュー社、東京、2018 年 3 月 9 日

A-4

白阪琢磨：Question HIV serodiscordant couple で挙児希望の相談があった場合にどうすればよいですか「HIV 感染症と AIDS の治療」8(1):P.32-42、メディカルレビュー社、2017 年 6 月

上平朝子：10.感染 ②侵襲性カンジダ症・ニューモシスチス肺炎-陰性化するまで、適切な量・期間で抗菌薬を継続する-「乳がん薬物療法副作用マネジメントプロのコツ」 P.295-299、メディカルレビュー社、2017 年 9 月 14 日

白阪琢磨：2（生涯・専門）職業暴露後対策について～HIV を中心に～「日本臨床内科医会会誌」32(3):P.436-436、日本臨床内科医会、2017 年 10 月

白阪琢磨：Q&A 形式 Case Study “CD4 の上昇を認めない症例に対して日和見感染症予防をどうしたらよいですか”「HIV 感染症と AIDS の治療」8(2):P.24-28、株式会社メディカルレビュー社、2017 年 11 月

白阪琢磨：HIV 感染症/エイズ診療の現在～エイズ・ウイルス感染拡大の終焉を視野に入れた治療と予防～「診療と新薬」54(12):P.1139-1172、医事出版社、2017 年 12 月 28 日

廣田和之：フォトクイズ「HIV 感染症と AIDS の治療」8(2):P.42-45、メディカルレビュー社、2017 年 12 月

上平朝子：CRE アウトブレイク CRE、1 例の背後には複数の保菌例が隠れている「INFECTION CONTROL」27(1):P.37-42、メディカ出版、2018 年 1 月

A-5

渡邊 大：ゲンボイヤ®配合錠の使用経験「第 91 回日本感染症学会総会・学術講演会（ランチョンセミナー8）記録集」、2017 年 7 月発行

白阪琢磨：効果的な献血推進および献血教育方策に関する研究。厚生労働科学研究費補助金

(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業) 「効果的な献血推進および献血教育方策に関する研究」平成 29 年度研究報告書、2018 年 3 月 31 日

白阪琢磨：効果的な献血推進および献血教育方策に関する研究。厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業) 「効果的な献血推進および献血教育方策に関する研究」総合研究報告書、2018 年 3 月 31 日

白阪琢磨：HIV 感染症及びその合併症の課題を克服する研究。厚生労働行政推進調査事業費補助金(エイズ対策政策研究事業) 「HIV 感染症及びその合併症の課題を克服する研究」平成 29 年度研究報告書、2018 年 3 月 31 日

白阪琢磨：HIV 感染症及びその合併症の課題を克服する研究。厚生労働行政推進調査事業費補助金(エイズ対策政策研究事業) 「HIV 感染症及びその合併症の課題を克服する研究」総合研究報告書、2018 年 3 月 31 日

安尾利彦：HIV 陽性者の心理学的問題と援助に関する研究。厚生労働行政推進調査事業費補助金(エイズ対策政策研究事業) 「HIV 感染症及びその合併症の課題を克服する研究」平成 29 年度研究報告書、P.68-73、2018 年 3 月 31 日

安尾利彦：HIV 陽性者の心理学的問題と援助に関する研究。厚生労働行政推進調査事業費補助金(エイズ対策政策研究事業) 「HIV 感染症及びその合併症の課題を克服する研究」総合研究報告書、P.82-87、2018 年 3 月 31 日

下司有加：エイズ診療拠点病院と在宅あるいは福祉施設の連携に関する研究。厚生労働行政推進調査事業費補助金(エイズ対策政策研究事業) 「HIV 感染症及びその合併症の課題を克服する研究」平成 29 年度研究報告書、P.86-88、2018 年 3 月 31 日

下司有加：エイズ診療拠点病院と在宅あるいは福祉施設の連携に関する研究。厚生労働行政推進調査事業費補助金(エイズ対策政策研究事業) 「HIV 感染症及びその合併症の課題を克服する研究」総合研究報告書、P.102-105、2018 年 3 月 31 日

渡邊 大：近畿ブロックの HIV 医療体制整備。厚生労働行政推進調査事業費補助金(エイズ対策政策研究事業) 「HIV 感染症の医療体制の整備に関する研究」平成 29 年度研究報告書、P.48-51、2018 年 3 月 31 日

白阪琢磨：ホームページやスマホを利用した検査施設受検向上に関する研究。厚生労働科学研究費補助金(エイズ対策政策研究事業) 「HIV 検査受検勧奨に関する研究」平成 28 年度研究報告書、P.97-100、2018 年 3 月 31 日

上平朝子：大阪における検査システムの構築に関する研究。厚生労働科学研究費補助金(エイズ対策政策研究事業) 「HIV 検査受検勧奨に関する研究」平成 29 年度研究報告書、P.60-63、2018 年 3 月 31 日

上平朝子：大阪医療センターにおける HIV/HCV 重複感染凝固異常患者の検討。厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業）「血液製剤による HIV/HCV 重複感染患者の肝移植に関する研究」平成 29 年度研究報告書、P.11-14、2018 年 3 月 31 日

白阪琢磨：服薬アドヒアランス向上に関する研究。日本医療研究開発機構感染症実用化研究事業エイズ対策実用化研究事業「服薬アドヒアランス向上に関する研究」総合研究報告書、2018 年 3 月 31 日

下司有加：HIV 陽性者の受診行動に影響を与える要素に関する研究。日本医療研究開発機構感染症実用化研究事業エイズ対策実用化研究事業「服薬アドヒアランス向上に関する研究」総合研究報告書、2018 年 3 月 31 日

A-6

白阪琢磨：HIV 治療「1 日 1 錠」に「朝日新聞」平成 29 年 5 月 17 日号

西田恭治：知っておきたい血友病保因者のこと「ファイン VOL.12」P.2-5、バクスアルタ株式会社、2017 年 9 月

矢倉裕輝：エキスパートが教える薬物動態「月刊薬事 10 月臨時増刊号」P.254-261、じほう、東京、2017 年 10 月 25 日

白阪琢磨：2 内科“内科で遭遇しやすい性感染症の診療のポイント”「性の健康 平成 29 年秋号」16(3):18-23、公益財団法人性の健康医学財団、2017 年 10 月 31 日

西田恭治：血友病および関連の出血性疾患について「Novo Nordisk Haemophilia Foundation アニュアルレポート」P.1-15、Novo Nordisk Haemophilia Foundation、2017 年 11 月

西田恭治：産婦人科：血友病「Textbook of Hemophilia 3rd edition」P.29-31、瀧正志 編集、ワイリー・パブリッシング・ジャパン株式会社、東京、2017 年 12 月

西田恭治：女性と von Willebrand 病「Textbook of Hemophilia 3rd edition」P.32-34、瀧正志 編集、ワイリー・パブリッシング・ジャパン株式会社、東京、2017 年 12 月

矢倉裕輝：Evidence Update 2017 最新の薬物治療のエビデンスを付加的に利用する 抗ウイルス薬「薬局」69 (1) P.117-120、南山堂、東京、2018 年 1 月 5 日

西田恭治：保因者検診とは「血友病保因者支援マニュアル」P.15-16、瀧正志、西田恭治 編集、バイオベラティブ・ジャパン株式会社、2018 年 2 月

西田恭治：保因者へのアドバイス「血友病保因者支援マニュアル」P.21-23、瀧正志、西田恭治 編集、バイオベラティブ・ジャパン株式会社、2018 年 2 月

B-2

Togami H, Yagura H, Hirano A, Takahashi M, Yoshino M, Abe K, Oishi Y, Takematsu S, Kakigoshi S, Yamamoto Y, Ito T, Yamamoto M, Mizumori Y, Kanei O, Utsumi M, Watanabe D, Yokomaku Y, Shirasaka T: Correlation between UGT1A1*6 and *28 genotype, and plasma dolutegravir concentrations in Japanese HIV-1 infected patients. 9th IAS Conference on HIV Science (MOPEB0328), Paris, France, 2017年7月24日

B-3

渡邊 大: Tenofovir Alafenamide based regimen の臨床的有用性 (ランチョンセミナー) ゲンボイヤ®配合錠の使用経験。第91回日本感染症学会総会・学術講演会、東京、2017年4月6日

安尾利彦: 病院臨床 (シンポジウム)。甲南心理臨床学会、神戸、2017年8月6日

白阪琢磨: 産業医学研修会2 (生涯・専門) 「職業暴露後対策について～HIVを中心に～」。第31回日本臨床内科医学会、大阪、2017年10月8日

矢倉裕輝: ART と医療経済～高い治療成功率の維持に向けて～。第31回日本エイズ学会学術集会 (ランチョンセミナー)。東京、2017年11月24日

渡邊 大: プロテアーゼ阻害剤による抗 HIV 治療戦略 (ランチョンセミナー)。プレジコビックス®配合錠の臨床的役割と使用経験。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月25日

白阪琢磨: 『手引き version21』の What's New? (シンポジウム「治療の手引き」)。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月26日

照屋勝治、上平朝子、田中 勝、横幕能行: ART era の悪性腫瘍と対応 (シンポジウム「治療の手引き」)。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月26日

安尾利彦: 服薬アドヒアランスへの心理士による関わり (シンポジウム8「STR時代の服薬アドヒアランスを再考する」)。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月26日

B-4

上平朝子、坪倉美由紀、中蔵伊知郎、廣田和之、上地隆史、田栗貴博、眞能正幸、中森正二: 大阪医療センターにおける CRE アウトブレイクの伝播要因の解析。第91回日本感染症学会総会・学術集会、東京、2017年4月7日

中内崇夫、富島公介、矢倉裕輝、山本雄大、湯川理己、新井 剛、廣田和之、伊熊素子、上地隆史、笠井大介、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、佐光留美、土井敏行、山崎邦夫、白阪琢磨: 当院におけるエルビテグラビル/コビススタット/エムトリシタビン/テノホビルアラフェナミド配合錠の初回導入例の使用状況。第27回抗ウイルス療法学会学術集会・総会、熊本、2017年5月20日

廣田和之、西田恭治、矢口愛弓、山本雄大、新井 剛、湯川理己、上地隆史、伊熊素子、笠井大介、渡邊 大、上平朝子、巽 啓司、白阪琢磨：血栓止血子宮全摘術の止血管理に半減期延長型VIII因子製剤を使用した血友病A保因者の一例。第39回血栓止血学会学術集会、名古屋、2017年6月10日

杉山 文、坂宗和明、田中純子、白阪琢磨：HIV感染症患者の服薬アドヒアランス関連因子に関する解析。第76回日本公衆衛生学会総会、鹿児島、2017年11月1日

白阪琢磨、渡邊 大、山本政弘、金井 修、上平朝子：感染早期患者に対するMVCによる強化療法の効果に関する研究。第71回国立病院総合医学会、香川、2017年11月10日

渡邊 大、上平朝子、鈴木佐知子、松本絵梨奈、笠井大介、廣田和之、南 留美、高濱宗一郎、林 公一、澤村守夫、山本政弘、白阪琢磨：高IFN- γ 血症と高IL-6血症を呈するHIV-1感染者の臨床的特徴に関する検討。第71回国立病院総合医学会、香川、2017年11月10日

冨島公介、中内崇夫、矢倉裕輝、福田利明、佐光留美、廣田和之、上地隆史、上平朝子、白阪琢磨、山崎邦夫：フェニトイン併用時のドルテグラビルナトリウム血中濃度について検討した一例。第71回国立病院総合医学会、香川、2017年11月11日

須磨知美、磯崎聖子、今村 隆、小杉孝子、小辻希世子、松向寺真彩子、田中美知代、西本幸代、溝口由里子、森田眞子、和田野飛鳥：総合病院心理職における“働き方”の多様性について(4) —入院患者への面接枠を設定する際のアセスメント要因を検討する—。日本心理臨床学会第36回大会、横浜、2017年11月19日

白阪琢磨、渡邊 大、山本政弘、南 留美、金井 修、上平朝子：HIV感染早期患者に対するMVCを加えた強化療法の効果と安全性に関する研究。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月24日

白阪琢磨、大金美和、岡 慎一、岡本 学、川戸美由紀、橋本修二、日笠 聡、福武勝幸、八橋 弘：血液製剤によるHIV感染者の調査成績第1報CD4値、HIV-RNA量と治療の現状と推移。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月24日

川戸美由紀、橋本修二、大金美和、岡 慎一、岡本 学、福武勝幸、日笠 聡、八橋 弘、白阪琢磨：血液製剤によるHIV感染者の調査成績第2報生活状況の概要。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月24日

中内崇夫、冨島公介、矢倉裕輝、上平朝子、白阪琢磨：当院におけるART施行中の高齢者を対象とした処方調査。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月24日

下司有加：終末期を迎えるHIV陽性者の支援のあり方。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月24日

水木 薫、安尾利彦、西川歩美、白阪琢磨：HIV 陽性者の行動面の障害を伴う問題の心理的背景に関する研究。第 31 回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017 年 11 月 24 日

西川歩美、安尾利彦、水木 薫、白阪琢磨：薬害 HIV 遺族健診事業に関する研究－利用動機、利用上の困難、利用者による事業への評価、健診後の地元医療機関受診状況に関する検討－。第 31 回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017 年 11 月 24 日

新井 剛、渡邊 大、上地隆史、山本雄大、湯川理己、廣田和之、伊熊素子、笠井大介、西田恭治、永井崇之、宮田順之、吉村幸浩、立川夏夫、上平朝子、白阪琢磨：アドヒアランス良好かつ耐性変異が無いウイルスへの抗 HIV 療法でも、長期間血中 HIV-1-RNA 量低下を認めなかった 2 例。第 31 回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017 年 11 月 24 日

横幕能行、伊藤俊広、山本政広、岡 慎一、豊嶋崇徳、田邊嘉也、渡邊珠代、白阪琢磨、藤井輝久、宇佐美雄司、池田和子、吉野宗宏、本田美和子、葛田衣重、小島賢一、内藤俊夫、安藤 稔：拠点病院定期通院者の抗 HIV 療法による HIV 複製制御の達成度評価－我が国の HIV 感染症/エイズ診療体制整備の成果－。第 31 回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017 年 11 月 24 日

藤原良次、橋本 謙、山田富秋、種田博之、入江恵子、小川良子、早坂典生、藤原 都、白阪琢磨：血友病由来 HIV 感染者の心理的支援方法の検討。第 31 回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017 年 11 月 24 日

齊藤誠司、村上由佳、飯塚暁子、松井綾香、野村直幸、木梨貴博、坂田達朗、草川 茂、木内 英、前島雅美、渡邊 大：妊婦 HIV スクリーニング検査から HIV-2 の診断に到った日本人妊婦例。第 31 回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017 年 11 月 24 日

治田匡平、市田裕之、石樋康浩、宇高 歩、日笠真一、尾崎淳子、大槻真央、矢倉裕輝、吉野宗宏、古西 満、杉山幸正：当院における ART 施行中の高齢者を対象とした処方調査。第 31 回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017 年 11 月 24 日

渡部恵子、大野稔子、藤田和華子、佐々木晃子、伊藤ひとみ、須藤美絵子、川口 玲、高山次代、羽柴知恵子、東 政美、丸山栄子、長與由紀子、杉野祐子、大金美和、池田和子：全国エイズ診療拠点病院の HIV/AIDS 看護体制に関する調査（1）～患者ケア実施の現状と課題に対する検討～。第 31 回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017 年 11 月 24 日

佐々木晃子、須藤美絵子、伊藤ひとみ、渡部恵子、大野稔子、藤田和華子、川口 玲、高山次代、羽柴知恵子、東 政美、丸山栄子、長與由紀子、杉野祐子、大金美和、池田和子：全国エイズ診療拠点病院の HIV/AIDS 看護体制に関する調査（2）～患者相談内容とその課題からみる HIV 担当看護師への支援に関する検討～。第 31 回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017 年 11 月 24 日

渡邊 大、矢倉裕輝、榎田宏幸、富島公介、戸上博昭、平野 淳、高橋昌明、廣田和之、伊熊素子、笠井大介、西田恭治、吉野宗宏、上平朝子、白阪琢磨：ドルテグラビルの血中濃度

とUGT1A1遺伝子多型が、ドルテグラビル投与後の神経精神系有害事象の発生に与える影響についての検討。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月25日

山本雄大、渡邊 大、湯川理己、来住知美、廣田和之、伊熊素子、上地隆史、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨：当院におけるヒトヘルペスウイルス8型関連疾患の現状。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月25日

矢倉裕輝、中内崇夫、富島公介、山本雄大、湯川理己、廣田和之、伊熊素子、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨：日本人 HIV-1 感染症症例におけるテノホビルアラフェナミドを含む1日1回1錠製剤投与時のテノホビル血漿トラフ濃度に関する検討。第31回日本エイズ学会学術集会、東京、2017年11月25日

富島公介、中内崇夫、矢倉裕輝、山本雄大、湯川理己、廣田和之、伊熊素子、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨：リトナビル併用ダルナビルからダルナビル・コピシスタット配合剤へ変更した症例の臨床検査値および自覚症状の変化。第31回日本エイズ学会学術集会、東京、2017年11月25日

泉 抽岐、佐保美奈子、西口初江、豊島裕子、井田真由美、井内公仁子、熊谷祐子、岡本友子、白阪琢磨：介護保険施設における感染症予防研修：全職員への出前講座企画。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月25日

岡崎玲子、蜂谷敦子、鴻永博之、渡邊 大、長島真美、貞升健志、近藤真規子、南 留美、吉田 繁、小島洋子、森 治代、内田和江、椎野禎一郎、加藤真吾、豊嶋崇徳、佐々木悟、伊藤俊広、猪狩英俊、寒川 整、石ヶ坪良明、太田康男、山元泰之、福武勝幸、古賀道子、林田庸総、岡 慎一、松田昌和、重見 麗、濱野章子、横幕能行、渡邊珠代、藤井輝久、高田清式、山本政弘、松下修三、藤田次郎、健山正男、岩谷靖雅、吉村和久：国内新規HIV/AIDS診断症例における薬剤耐性HIV-1の動向。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月25日

東 政美、中本弘香、増田雅子、伊藤文代：HIV/AIDSに関する知識習得に向けた情報発信の効果。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月26日

岩橋恒太、生島 嗣、藤田彩子、市川誠一、白阪琢磨：MSMを対象とした献血に関する情報伝達方法および意識調査。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月26日

佐保美奈子、安井典子、三澤朋洋、泉 抽岐、西口初江、堀有優美、田中彩水、岸本品愛、白阪琢磨、古山美穂、山田加奈子、高 知恵：大阪市A地区における介護職のHIV研修の検討。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月26日

近藤真規子、佐野貴子、長島真美、貞升健志、蜂谷敦子、横幕能行、林田庸総、鴻永博之、渡邊 大、吉村幸浩、立川夏夫、岩室紳也、井戸田一朗、今井光信、加藤真吾、椎野禎一郎、吉村和久：日本で流行するHIV-1 CRF01_AEと周辺アジア諸国における流行株との関連。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月26日

中蔵伊知郎、坂倉広大、廣田 和之、上地隆史、上平朝子、坪倉美由紀、山崎邦夫：IMP-6型カルバペネマーゼ産生腸内細菌科細菌の菌種別薬剤感受性の検討。第33回日本環境感染学会総会・学術集会、東京、2018年2月24日

B-5

矢倉裕輝：抗HIV薬に対する治療薬物モニタリングパネルディスカッション1：感染症領域における治療薬物モニタリング。第65回日本化学療法学会西日本支部総会、長崎、2017年10月26日

中山久仁子、守屋章成、千葉 大、菅長麗依、来住知美：あなたの患者さんの旅行は安全ですか～Basic course 1, プライマリ・ケアにおける渡航に伴うリスクマネジメント～。日本プライマリ・ケア連合学会第15回秋季セミナー、大阪、2017年11月12日

B-6

渡邊 大、上平朝子、鈴木佐知子、松本絵梨奈、笠井大介、廣田和之、南 留美、高濱宗一郎、林 公一、澤村守夫、山本政弘、白阪琢磨：高IFN- γ 血症を呈するHIV-1感染者の臨床的特徴に関する検討。第31回近畿エイズ研究会・学術集会、大阪、2017年6月3日

矢倉裕輝、中内崇夫、富島公介、渡邊 大、福田利明、佐光留美、上平朝子、山崎邦夫、白阪琢磨：UGT1A1遺伝子多型とドルテグラビル投与時の中枢神経系副作用症状発現の関連。第2回日本臨床薬理学会近畿地方会、大阪、2017年6月10日

B-7

渡邊 大：HIV感染症、併発症の最新治療について。北陸ブロック医療等相談会、福井、2017年9月30日。

中内崇夫：トキソプラズマ脳症を発症した一症例。関西HIV臨床カンファレンス2017年度薬剤師部会主催症例検討会、大阪、2018年2月17日

B-8

矢倉裕輝：血友病と個別化治療～薬剤師の立場から～。第7回ヘモフィリアケアセミナー兵庫、兵庫、2017年4月1日

西田恭治：血友病のトータルケアと薬剤師のかかわり。血友病トータルケアセミナー、大阪、2017年4月12日

矢倉裕輝：当院における抗HIV薬の処方トレンド。第5回抗HIV療法ブラッシュアップセミナー、大阪、2017年5月13日

白阪琢磨：概論。平成29年度大阪大学医学部環境医学・公衆衛生学実習、大阪、2017年5月18日

西田恭治：ノボノルディスク血友病財団の紹介。第17回 Haemostasis 研究会、福岡、2017年5月27日

西田恭治：血友病と薬害エイズ。平成29年度大阪大学医学部環境医学・公衆衛生学実習、大阪、2017年6月1日

白阪琢磨：HIV/AIDS 基礎知識～医療と最新の治療について。大阪府エイズ対策事業 平成29年度 HIV/AIDS 基礎研修、大阪、2017年6月2日

白阪琢磨：HIV の最近の話題と最新治療について。大阪中央病院教育研修、大阪、2017年6月8日

渡邊 大：HIV 感染症の診断。平成29年度大阪大学医学部環境医学・公衆衛生実習、大阪、2017年6月8日

岡本 学：HIV とソーシャルワーク。平成29年度大阪大学医学部環境医学・公衆衛生学実習、大阪、2017年6月8日

白阪琢磨：HIV の最新治療。厚生科研エイズ対策研究事業 第14回 HIV サポートリーダー養成研修、大阪、2017年6月9日

上地隆史：PCP。平成29年度大阪大学医学部環境医学・公衆衛生学実習、大阪、2017年6月15日

伊熊素子：抗酸菌症。平成29年度大阪大学医学部環境医学・公衆衛生学実習、大阪、2017年6月15日

廣田和之：CMV 感染症。平成29年度大阪大学医学部環境医学・公衆衛生学実習、大阪、2017年6月22日

中濱智子：陽性妊婦の看護支援。平成29年度大阪大学医学部環境医学・公衆衛生学実習、大阪、2017年6月22日

西田恭治：保因者のケア妊娠・出産。第2回血友病トータルケアウェブセミナー、大阪、2017年6月22日

西田恭治：患者さんから学ぶ血友病診療の盲点。関西血友病シンポジウム、大阪、2017年6月24日

西田恭治：日本と世界の血友病治療の現状と課題～日本の「輸出貿易管理令」と「国際貢献」～。血友病に関するメディア勉強会、東京、2017年6月28日

下司有加：HIV/AIDS の基礎知識（疾患・治療・職務感染時の対応）。厚生労働行政推進調査

事業費補助金エイズ対策政策研究事業主催訪問看護師研修会、静岡、2017年7月1日

東 政美：HIV陽性者の療養支援。厚生労働行政推進調査事業費補助金エイズ対策政策研究事業主催訪問看護師研修会、静岡、2017年7月1日

西川歩美：ファシリテーション。平成29年度遺族交流会、宮城、2017年7月1-2日

西田恭治：成人の再教育。第14回血友病看護フォーラム、東京、2017年7月2日

白阪琢磨：HIV陽性者の人権課題～HIV、AIDS等の現状と課題～。大阪府人権総合講座 人権相談員養成コース、大阪、2017年7月6日

白阪琢磨：HIV/AIDSの最新医療状況や一般的な症例について、及び梅毒の基礎知識について。特定非営利活動法人 HIV と人権・情報センター平成29年度総会・講演会、大阪、2017年7月8日

矢倉裕輝：薬剤師の視点からみた CROI2017。関西 HIV 臨床カンファレンス 2017 年度薬剤師部会主催講演会、大阪、2017年7月8日

大山好弘：ファシリテーション。平成29年度患者家族担当相談員研修会、大阪、2017年7月15日

白阪琢磨：HIV医療の現状について。高槻病院 院内感染対策研修会、高槻、2017年7月24日

西田恭治：血友病をとりまく世界の潮流と日本の動き。コバールトリイ webカンファレンス、大阪、2017年8月7日

白阪琢磨、下司有加、岡本 学：HIV感染症と看護・介護上の標準予防策の実際。浜寺中央病院職員向け HIV感染症研修、堺、2017年8月9日

西田恭治：取り残された血友病保因者問題ー血友病 A と B 保因者の違いー。第3回西日本血友病 B 研究会、福岡、2017年8月19日

大山好弘：ファシリテーション。平成29年度遺族担当相談員研修会、大阪、2017年8月27日

西川歩美：ファシリテーション。平成29年度遺族相談員研修、大阪、2017年8月27日

下司有加：HIV/AIDSの基礎知識（疾患・治療・職務感染時の対応）。厚生労働行政推進調査事業費補助金エイズ対策政策研究事業主催訪問看護師研修会、京都、2017年9月2日

東 政美：HIV陽性者の療養支援。厚生労働行政推進調査事業費補助金エイズ対策政策研究

事業主催訪問看護師研修会、京都、2017年9月2日

渡邊 大：HIV/AIDSの基礎知識（HIV感染症・抗体検査・日和見疾患・治療）。平成29年度HIV/AIDS看護師研修初心者コース、大阪、2017年9月4日

矢倉裕輝：抗HIV療法について～服薬支援の重要性～。平成29年度HIV/AIDS看護師研修初心者コース、大阪、2017年9月4日

西田恭治：HIV/AIDS患者の背景（薬害エイズについて）。平成29年度HIV/AIDS看護師研修初心者コース、大阪、2017年9月4日

岡本学：社会資源の活用について。平成29年度HIV/AIDS看護師研修初心者コース、大阪、2017年9月4日

中濱智子：HIV/AIDSの概要（歴史・動向）。平成29年度HIV/AIDS看護師研修初心者コース、大阪、2017年9月5日

森田眞子：HIV陽性者の心理的支援。およびHIV陽性者の看護③チーム医療：チーム診療の実際。HIV/AIDS看護師研修会初心者コース、大阪、2017年9月5日

東 政美：HIV陽性者の看護①療養支援（外来受診者の動向・外来療養支援の実際）。平成29年度HIV/AIDS看護師研修初心者コース、大阪、2017年9月5日

下司有加：HIV陽性者の看護②HIV陽性者の療養支援における課題。平成29年度HIV/AIDS看護師研修初心者コース、大阪、2017年9月5日

辻 宏幸：NGOのとりくみ。平成29年度大阪大学医学部環境医学・公衆衛生学実習、大阪、2017年9月7日

白阪琢磨：HIV/エイズの基礎知識と施設での受け入れについて。高齢者等介護施設のためのHIV/エイズ研修会、大阪、2017年9月8日

西田恭治：検査・診断、止血管理の実際、インヒビター出現症例への対応、保因者ケア、ライフステージ・活動性を考慮した治療マネジメント。THE NEXT 2017、大阪、2017年9月9日・10日

上平朝子：HIV感染症の基礎知識。平成29年度奈良県立医科大学健康政策医学実習、大阪、2016年9月12日

渡邊 大：HIV感染症の診断。平成29年度奈良県立医科大学健康政策医学実習、大阪、2017年9月12日

白阪琢磨：HIV感染症の疫学。平成29年度奈良県立医科大学健康政策医学実習、大阪、2017

年 9 月 13 日

山本雄大 : KS、症例提示。平成 29 年度奈良県立医科大学健康政策医学実習、大阪、2017 年 9 月 13 日

伊熊素子 : 女性と HIV。平成 29 年度奈良県立医科大学健康政策医学実習、大阪、2017 年 9 月 13 日

富島公介 : 薬剤師の役割と服薬指導。平成 29 年度奈良県立医科大学健康政策医学実習、大阪、2017 年 9 月 14 日

上地隆史 : HIV 脳症、PML、呼吸器疾患。平成 29 年度奈良県立医科大学健康政策医学実習、大阪、2017 年 9 月 14 日

森田眞子 : HIV とカウンセリング。平成 29 年度奈良県立医科大学健康政策医学実習、大阪、2017 年 9 月 14 日

中濱智子 : 陽性妊婦の看護支援。平成 29 年度奈良県立医科大学健康政策医学実習、大阪、2017 年 9 月 15 日

廣田和之 : STD（性行為感染症）の診断。平成 29 年度奈良県立医科大学健康政策医学実習、大阪、2017 年 9 月 15 日

森田眞子 : HIV 心理臨床について～HIV に関わる心理士として、気になる事柄～。第 141 回岡山 HIV 診療ネットワーク研究会、岡山、2017 年 9 月 16 日

安尾利彦 : 症例提供。大阪精神分析セミナー、大阪、2017 年 9 月 17 日

矢倉裕輝 : 高齢者の ART で考慮すべきポイント～高齢化に伴う薬物動態の変化と留意すべき相互作用～。第 2 回 HIV ファーマシストフォーラム、東京、2017 年 9 月 23 日

水木薫 : 事例提供。近畿ブロック HIV 医療におけるカウンセリング研修会、大阪、2017 年 9 月 29 日

西田恭治 : オーバービュー保因者問題とはー日本の現状と課題ー。バイエルヘモフィリアセミナー2017ー保因者を考えるー、広島、2017 年 9 月 30 日

白阪琢磨 : 疫学と抗 HIV 治療ガイドライン。平成 29 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2017 年 10 月 2 日

渡邊 大 : HIV 感染症の診断。平成 29 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2017 年 10 月 2 日

矢倉裕輝 : 抗 HIV 薬の特徴と薬剤師の役割。平成 29 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2017 年

10月2日

渡邊 大、矢倉裕輝：初回抗 HIV 療法の実際。平成 29 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2017 年 10 月 2 日

西田恭治：血友病診療・凝固因子製剤の使い方。平成 29 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2017 年 10 月 2 日

岡本 学：HIV 感染者に対するソーシャルワーク。平成 29 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2017 年 10 月 2 日

上地隆史：日和見感染症（PCP）。平成 29 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2017 年 10 月 3 日

廣田和之：日和見感染症（CMV）。平成 29 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2017 年 10 月 3 日

伊熊素子：日和見感染症（抗酸菌症）。平成 29 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2017 年 10 月 3 日

廣田和之、伊熊素子、上地隆史：症例検討（医師・薬剤師向け）。平成 29 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2017 年 10 月 3 日

下司有加、矢倉裕輝、富田朋子：チーム医療の実際～多職種との協働～。平成 29 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2017 年 10 月 3 日

上平朝子：針刺し暴露後対策。平成 29 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2017 年 10 月 3 日

東 政美：外来・病棟看護と療養支援。平成 29 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2017 年 10 月 3 日

安尾利彦：HIV とカウンセリング。平成 29 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2017 年 10 月 3 日

岡本 学：HIV 感染症と物質依存。平成 29 年度 HIV 感染症医師実地研修会（1 ヶ月コース）、大阪、2017 年 10 月 5 日

東 政美：在宅療養支援の実際。平成 29 年 HIV 感染症医師実地研修会（1 ヶ月コース）、大阪、2017 年 10 月 10 日

山本雄大：日和見感染症診療（カンジダ症・KS 他）。平成 29 年 HIV 感染症医師実地研修会（1 ヶ月コース）、大阪、2017 年 10 月 11 日

渡邊 大：HIV 急性感染。平成 29 年 HIV 感染症医師実地研修会（1 ヶ月コース）、大阪、2017 年 10 月 11 日

西田恭治：血友病診療の実際。平成 29 年 HIV 感染症医師実地研修会（1 ヶ月コース）、大阪、2017 年 10 月 11 日

上平朝子：免疫再構築症候群（IRIS）。平成 29 年 HIV 感染症医師実地研修会（1 ヶ月コース）、大阪、2017 年 10 月 12 日

来住知美：女性と性感染症。HIV 検査に関わるスタッフ研修会 ChotCAST なんば、大阪、2017 年 10 月 14 日

中濱智子：陽性妊婦の看護支援。平成 29 年 HIV 感染症医師実地研修会（1 ヶ月コース）、大阪、2017 年 10 月 17 日

渡邊 大：抗 HIV 療法の副作用と薬剤耐性。平成 29 年 HIV 感染症医師実地研修会（1 ヶ月コース）、大阪、2017 年 10 月 19 日

上地隆史：結核の診断・治療・感染対策。院内定期講演会、大阪、2017 年 10 月 19 日

白阪琢磨：基調講演。大阪中之島ロータリークラブ創立 25 周年記念式典、大阪、2017 年 10 月 21 日

安尾利彦：神経心理検査と事例検討。平成 29 年 HIV 感染症医師実地研修会（1 ヶ月コース）、大阪、2017 年 10 月 23 日

上地隆史：日和見感染症診療（HIV 脳症、PML、クリプトコッカス症）。平成 29 年 HIV 感染症医師実地研修会（1 ヶ月コース）、大阪、2017 年 10 月 24 日

廣田和之：STD（性行為感染症）の診療。平成 29 年 HIV 感染症医師実地研修会（1 ヶ月コース）、大阪、2017 年 10 月 25 日

富島公介：HIV と服薬指導。平成 29 年度大阪大学医学部環境医学・公衆衛生学実習、大阪、2017 年 10 月 26 日

東 政美：HIV 陽性者の外来支援。平成 29 年度大阪大学医学部環境医学・公衆衛生学実習、大阪、2017 年 10 月 26 日

森田眞子：グループワークファシリテーション。エイズ予防財団平成 29 年度 HIV 検査相談研修会、大阪、2017 年 10 月 26・27 日

白阪琢磨：HIV の最新治療。厚生科研エイズ対策研究事業 第 15 回 HIV サポートリーダー養成研修、大阪、2017 年 10 月 27 日

西田恭治：取り残された血友病保因者問題～明日からの取り組みにむけて～。第 12 回北陸へモフィリアセミナー、金沢、2017 年 10 月 28 日

白阪琢磨：HIV/AIDSの基礎知識（疾患・治療・職務感染時の対応）。厚生労働行政推進調査事業費補助金エイズ対策政策研究事業主催訪問看護師研修会、大分、2017年10月28日

下司有加：事例検討・グループワーク。厚生労働行政推進調査事業費補助金エイズ対策政策研究事業主催訪問看護師研修会、大分、2017年10月28日

東 政美：HIV陽性者の療養支援。厚生労働行政推進調査事業費補助金エイズ対策政策研究事業主催訪問看護師研修会、大分、2017年10月28日

上平朝子：HIV針刺し暴露後予防。平成29年度大阪大学医学部環境医学・公衆衛生学実習、大阪、2017年11月2日

森田眞子：HIVとカウンセリング。平成29年度大阪大学医学部環境医学・公衆衛生学実習、大阪、2017年11月2日

渡邊 大：HIV/AIDSの基礎知識（HIV感染症・抗体検査・日和見疾患・治療）。平成29年度HIV/AIDS看護師研修初心者コース、大阪、2017年11月6日

森田眞子：HIV陽性者の心理的支援。HIV/AIDS看護師研修会初心者コース、大阪、2017年11月6日

森田眞子：HIV陽性者の看護③チーム医療：チーム診療の実際。HIV/AIDS看護師研修会初心者コース、大阪、2017年11月7日

白阪琢磨：現代的健康課題について－HIV/エイズや性感染症について－。大阪府平成29年度新規採用養護教諭研修（第10回）、大阪、2017年11月16日

富田朋子：ファシリテーション。平成29年度薬害HIV遺族交流会、京都、2017年11月19日

安尾利彦：ファシリテーション。平成29年度薬害HIV遺族交流会、京都、2017年11月19日

宮本哲雄：ファシリテーション。平成29年度薬害HIV遺族交流会、京都、2017年11月19日

西川歩美：ファシリテーション。平成29年度薬害HIV遺族交流会、京都、2017年11月19日

森田眞子：ファシリテーション。平成29年度薬害HIV遺族交流会、京都、2017年11月19日

大山好弘：ファシリテーション。平成 29 年度薬害 HIV 遺族交流会、京都、2017 年 11 月 19 日

白阪琢磨：HIV/AIDS の現状と支援。大阪府立大学 公衆衛生看護学 I、大阪、2017 年 11 月 28 日

白阪琢磨：HIV 感染症・治療。大阪赤十字看護専門学校 講義、大阪、2017 年 12 月 6 日

矢倉裕輝：頻用されている薬剤の現状と課題。第 6 回抗 HIV 療法ブラッシュアップセミナー、大阪、2017 年 12 月 9 日

速見佳子：HIV 感染の記憶のない HIV 陽性男性との面接。日本ユング派分析家協会グループ スーパーヴィジョン（川戸圓先生）、大阪、2017 年 12 月 9 日

来住知美：ココロとカラダの健康教室。性感染症予防のための出前授業、和泉、2017 年 12 月 15 日

矢倉裕輝：研究データを HIV 患者の服薬支援・薬物治療マネジメントに活かす。抗 HIV 療法アドバンスセミナー、福岡、2018 年 1 月 13 日

矢倉裕輝：外来受診 HIV 患者の服薬支援における薬剤師の役割。抗 HIV 療法ステップアップセミナー、福岡、2018 年 1 月 13 日

上地隆史：日和見疾患の病態と治療（ニューモシスチス肺炎 サイトメガロウイルス網膜炎 HIV 脳症）。平成 29 年度 HIV/AIDS 看護師研修応用コース、大阪、2018 年 1 月 15 日

矢倉裕輝：服薬支援の実際～服薬スケジュールの組み方・服薬継続への関わり～。平成 29 年度 HIV/AIDS 看護師研修応用コース、大阪、2018 年 1 月 15 日

廣田和之：性感染症の基礎知識。平成 29 年度 HIV/AIDS 看護師研修応用コース、大阪、2018 年 1 月 15 日

伊熊素子：HIV 陽性妊婦の治療と支援。平成 29 年度 HIV/AIDS 看護師研修応用コース、大阪、2018 年 1 月 15 日

中濱智子：周産期看護の実際。平成 29 年度 HIV/AIDS 看護師研修応用コース、大阪、2018 年 1 月 15 日

中濱智子：困難症例の実際（外来）。平成 29 年度 HIV/AIDS 看護師研修応用コース、大阪、2018 年 1 月 15 日

東 政美：初診時の問診について。平成 29 年度 HIV/AIDS 看護師研修応用コース、大阪、2018 年 1 月 16 日

白阪琢磨：HIV感染症で期待される病診連携と課題～一般診療所における対応～。大阪府医師会「平成29年度HIV地域医療連携研修会」、大阪、2018年1月31日

上平朝子：大阪医療センターでのCREアウトブレイクの経験。大阪市立総合医療センター、大阪、2018年2月2日

廣田和之：ニューモシスティス肺炎の治療中に治療困難となった症例集。関西HIV臨床カンファレンス 若手医師のための診療スキルアップセミナー、大阪、2018年2月3日

安尾利彦：HIV医療におけるカウンセリング。島根県臨床心理士会 HIV/AIDS カウンセラー研修会、島根、2018年2月10日

西川歩美：ファシリテーション。平成29年度遺族等相談事業相談員研修、大阪、2018年2月11日

大山好弘：ファシリテーション。平成29年度遺族等相談事業相談員研修会、大阪、2018年2月11日

白阪琢磨：日本におけるエイズ患者の実態。滋慶医療経営管理研究センター平成29年度新入職者導入教育プログラム、大阪、2018年2月21日

下司有加：HIV/AIDSの基礎知識。厚生労働行政推進調査事業費補助金エイズ対策政策研究事業主催訪問看護師研修会、山口、2018年3月3日

東 政美：HIV陽性者の療養支援。厚生労働行政推進調査事業費補助金エイズ対策政策研究事業主催訪問看護師研修会、山口、2018年3月3日

白阪琢磨：日本におけるエイズ患者の実態。大阪保健福祉専門学校 講義、大阪、2018年3月12日

西田恭治、変わるか？保因者を含めた軽・中等症血友病患者の止血管理。近畿 Hemophilia Seminar、大阪、2018年3月17日

廣田和之：現在の血友病治療。関西HIV臨床カンファレンス 看護部会主催講演会、大阪、2018年3月24日

下司有加：血友病患者の看護。関西HIV臨床カンファレンス 看護部会主催講演会、大阪、2018年3月24日

B-9

白阪琢磨：性感染症について。FM大阪ラジオ「HIV/AIDS啓発プロジェクト LOVE+RED」、大阪、2017年4月29日放送

矢倉裕輝：感染症 today 「HIV 感染症の服薬指導」、ラジオ NIKKEI、大阪、2017 年 6 月 14 日

白阪琢磨：HIV 検査促進の啓発活動について。NHK ラジオ第 1 「ごごラジ」、東京、2017 年 9 月 21 日、(再放送) 12 月 2 日

白阪琢磨：明日へのことば「エイズ治療最前線の 30 年」。NHK 関西発ラジオ深夜便)、NHK ラジオ第 1、2017 年 11 月 11 日

白阪琢磨：性感染症について①。FM 大阪ラジオ「HIV/AIDS 啓発プロジェクト LOVE+RED」、大阪、2017 年 11 月 11 日

白阪琢磨：性感染症について②。FM 大阪ラジオ「HIV/AIDS 啓発プロジェクト LOVE+RED」、大阪、2017 年 11 月 18 日

白阪琢磨：性感染症について③。FM 大阪ラジオ「HIV/AIDS 啓発プロジェクト LOVE+RED」、大阪、2017 年 11 月 25 日

スマホ等での検査予約システムの開発

研究分担者 白阪 琢磨 国立大阪医療センター HIV/AIDS 先端医療開発センター
研究協力者 幸田 進 有限会社ビッツシステム

研究要旨

先行研究「HIV 感染症及びその合併症の課題を克服する研究」で開発した HIV 検査予約システム（スマートフォンまたは携帯電話（以降、「スマートフォン」とする）のインターネット接続機能を用いた HIV 検査の予約するシステム）に、本研究で保健所等へ実施したヒアリング結果に基づいて、機能改善や機能追加等を実施した。本研究では引き続き本システムの保健所等への周知を図る。

A.研究目的

先行研究で開発し、特定の HIV 検査機関にて効果につき実証済みの HIV 検査予約システムに、保健所等での運用に合わせて改良を加える。同システムの全国保健所等への周知を行う。

B.研究方法

HIV 検査予約システムの紹介資料の HIV 検査を実施している保健所等や都道府県市区町村の該当部署宛に送付し、さらに電話フォローや訪問を実施し、同システムに対する紹介を行い、それぞれの HIV 検査についての考え方や検査体制の現状と課題などをヒアリングし、HIV 検査予約システムを保健所等で実施する上で必要と思われる機能の改善や追加につき検討を行い、HIV 検査予約システムを改良する。

機能の改善や追加を実施した上で、再度、改良点を含め保健所等や都道府県市区町村の該当部署宛に紹介する。

(倫理面への配慮)

ヒアリングでは HIV 感染症患者の個人情報を取り扱わない。情報の取り扱いには十分注意する。

C.研究結果

1) 周知の状況 平成 29 年度研究では、関東

圏を除く全国の保健所を中心に昨年度研究で作成した案内パンフレット（“図 1 案内パンフレット”）を送付したが問い合わせ件数は 0 件であった（平成 30 年 2 月 15 日現在）。

電話によるフォローの実施と保健所における HIV 検査の現状の聞き取りや HIV 検査予約システムに対する意見や要望などをヒアリングした（平成 30 年 2 月 15 日現在、継続中）。

本年度は関東圏を除く 131 箇所の保健所に送付した。

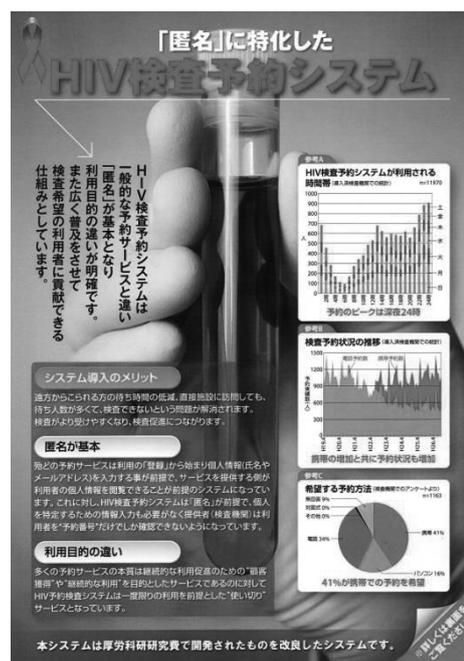


図 1 案内パンフレット

2) HIV 検査予約システムの改良 本システムを既に利用中の施設から、利用者がスマートフォンで利用時に画面レイアウトが壊れるとの指摘があり、調査の結果、画面解像度の高いスマートフォン機種では、“図2 構文修正前（セレクトボックスが小さい）”に示すようにボタンやセレクトボックス等のコンポーネントが小さく表示されてしまうため、操作性を損なっている事が確認された。スマートフォン対応のHTML5 準拠の構文に書き換える事で対応した（図3）。

図2 構文修正前（セレクトボックスが小さい）

図3 構文修正後

3) ヒアリングによる主な意見と要望

保健所等で既に実施されている HIV 検査に HIV 検査予約システムを導入する事についてのヒアリングで得られた主な意見と要望を表1に示した。

表1 保健所等でのヒアリングでの主な意見等

- ・実施人数が多くないから現状で十分。
- ・検査人数が減っているのに予算投入する意味が無い。
- ・先着順の方が手軽で良い。
- ・既に体制が出来上がってしまっている。
- ・導入したいと思うが権限が無い（実務者）。
- ・予算確保が難しい。
- ・電話予約だけで十分。
- ・電話予約分も管理できるようにならないか？
- ・婦人科検診や集団検診で使ってみたい。
- ・県内全保健所をまとめて検討してみたい。
- ・夜間に利用が多いのは驚いた。
- ・多言語対応出来ないか。また、外国人の予約時は「通訳希望」オプションを付けられないか。
- ・電子アンケートシステムを付けられないか。

4) HIV 検査予約システムの運用状況

①東京都豊島区池袋保健所 平成29年度研究では新規に HIV 検査予約システムの新規導入（試行および正規を含む）の希望施設は無かったが、平成28年度研究より試験準備を行っていた東京都豊島区池袋保健所で年3回（H29.6.12, 8.7, 12.2）の即日検査にて HIV 検査予約システムを試験的に稼働させた（表2）。

実施日	予約枠	予約者数
6月12日	35人	18人
8月7日	35人	19人
12月2日	35人	29人

表2 池袋保健所での HIV 検査予約実績

平成30年度は今年度同様に年3回の即日検査の実施に加えて、年6回の通常検査の計9回の HIV 検査で HIV 検査予約システム (Ver.3.00) を稼働させる予定である。

②東京都南新宿検査相談室との取り組み 当研究班と東京都によるデータ収集支援として、

HIV 検査予約システムが稼動している東京都南新宿検査相談室のホームページ上に特設ページ（図4 南新宿検査・相談室の特設ページ）を作成し、ゲイ向け出会いサイト上に期間限定（H30.1/29～2/11の2週間）でバナー広告を掲載し、バナー広告からの誘導データ収集の支援作業を実施した。



図4 南新宿検査・相談室の特設ページ

同サイトからの誘導による HIV 検査予約者数は2週間で59名が確認された。

5) HIV 検査予約システムと連動したアンケート

今年度、HIV 検査予約システムと連動して稼動可能な WEB アンケートシステムに実装するアンケート項目の検討を行なった。

6) 不正アクセスの監視

これまで HIV 検査予約システムに対する不正アクセスは、基本的にアクセスログデータを目視による確認を実施してきたが、IPA（情報処理推進機構）が提供する「ウェブサイトの攻撃兆候検出ツール iLogScanner」を活用し、監視負担の軽減を図ることとした。

D.考察

平成29年度は、関東圏を除く全国の保健所に HIV 検査予約システムの紹介資料を送付したが保健所からの問合せはゼロ件という結果であった。

HIV 検査予約システム導入施設での本システムの利用率は、およそ90%であった（図5）。ある施設では、本システムの導入後、電話での検査予約受付を取りやめて、検査予約は HIV 検査予約システムのみとし、電話予約のための窓口スタッフを“相談”窓口スタッフとして有効活用する事で、電話による相談受入のための時間を多く確保できたとの報告もあった。

検査機関 A	東京	通常35人/Day	予約者数7,578人	(予約率:96%)
検査機関 B	愛知	40～43人/Day	予約者数: 675人	(予約率:95%)
		第2,4日曜日	男:72.0% 女:26.5% 不明:1.5%	
検査機関 C	愛知	通常62人/Day	予約者数: 803人	(予約率:90%)
		第1,3土曜日	男:76.8% 女:20.8% 不明:2.4%	
検査機関 D	東京	44～48人/Day	予約者数: 384人	(予約率:86%)
		第3土曜日	男:70.3% 女:28.9% 不明:0.8%	
検査機関 E	大阪	40～50人/Day	予約者数: 1,940人	(予約率:100%)
		毎週日曜日	男:67.2% 女:30.4% 不明:2.4%	
他	イベント時の一時/定期使用: 東京×5施設 名古屋×1施設 集計期間:H29.4/1～H29.12/31			

図5 HIV 検査予約システム実績

しかし、現在導入されている HIV 検査施設は、行政機関が HIV 検査のために立ち上げた専門の検査施設であったり、NPO 法人が運営している検査施設であったりと確保された“予算”で運用している機関がほとんどであった。ヒアリングの中には、現場の意見として、導入によって検査件数の向上、ハイリスク層に絞った検査誘導の効果を得ることができると期待する意見もあったが、“権限がない”、“予算が確保できない”等の理由で、試験導入には至らなかった（表1）。今後は、本システム導入について多方面から検討を行い、導入で効果が期待できる保健所等を洗い出し、積極的に周知を続ける必要があると考える。

今年度研究では、HIV 検査予約システムと連動して稼動可能な WEB アンケートシステムに実装するアンケート項目の検討を行なったが、今後、

各研究者の意見やアンケート項目の追加要望等を募集し、様々な研究にフィードバックできるアンケートシステムの改良についても検討する。

E.結論

HIV 検査予約システムは、東京都豊島区池袋保健所のように、短期使用であっても導入で一定の利用が確認され、その導入効果を期待して新たな利用が計画・予定された施設もあった。また、ヒアリングから現場では導入を望む声も確認できても、“予算”確保等の面から導入が困難との声もあった。

これらの現状を踏まえ、今後は、平成 28 年度に収集した関東圏の保健所の HIV 検査に対する考えや要望と、現在収集している全国の保健所の HIV 検査に対する考えや要望を纏めて分析し、また、既に導入している検査施設に対しても導入した事による効果や改善要望等をヒアリングし、分析結果から導入により効果が期待できる保健所を洗い出しながら、対象を絞って具体的に導入の提案を行なっていく事とする。

F.健康危険情報

なし

G.研究発表

1. 論文発表

なし

2.学会発表

なし

H.知的所有権の出願・登録状況（予定を含む）

①特許取得

なし

②実用新案登録

なし

③その他

なし

HIV 郵送検査の実態調査 (2017)

研究分担者 今村顕史 (都立駒込病院 感染症科)

研究協力者 加藤真吾 (慶應義塾大学医学部 微生物学・免疫学教室)

須藤弘二 (慶應義塾大学医学部 微生物学・免疫学教室)

研究要旨

現在インターネット上では、検査希望者が検査機関に行くことなしに HIV 検査を受検することができる“HIV 郵送検査”を取り扱う Web サイトが存在し、その検査数は増加しつつある。この HIV 郵送検査について現状を把握するため、郵送検査会社に対してアンケート調査を行い、取扱状況や検査実施状況に関する実態調査を行った。

アンケートを依頼した 14 社の内、13 社から回答が得られた。郵送検査会社全体の HIV 年間検査数は 99838 件であり、昨年と比較して 9.0%増加していた。団体検査の推定受検者率は 40%であった。HIV スクリーニング検査陽性数は 116 例であり、昨年と比較して 23%減少していた。梅毒検査数と陽性数は、2016 年から 2017 年にかけてそれぞれ 44%と 77%増加しており、陽性率も 0.55%から 0.68%と増加していた。HIV 検査の受検費用は平均 4126 円、検査日数は平均 4 日であった。検査検体は全血を濾紙や採血管で保存したものをを用いており、PA 法、イムノクロマト法、CLEIA 法、EIA 法の臨床検査キットで検査を行っていた。検査結果は郵送での通知に加えて専用 web サイト E-mail での通知が選択できる会社が多く、検査結果が陽性だった場合、すべての検査会社で病院での検査をすすめていた。

今後、検査精度管理、団体検査、受検者に対する検査相談、フォローアップ等の改善のため、「HIV 郵送検査のあり方について」等を活用し、各郵送検査会社の協力を得て、郵送検査をより安心して受けられ、信頼できる検査とする必要がある。

A.研究目的

現在 HIV 検査は、土曜・日曜・夜間検査、即日検査や NAT 検査等の検査希望者のニーズに合わせた検査が、保健所・病院・民間クリニック等の検査・医療機関で行われている。それらに加えて、インターネット上では、検査希望者が検査機関に行くことなしに HIV 検査を受検することができる“HIV 郵送検査”を取り扱う Web サイトが存在し、その検査数は増加しつつある。この HIV 郵送検査について現状を把握するため、郵送検査会社に対してアンケート調査を行うことにより、取扱状況や検査実施状況に関する実態調査を行った。

B.研究方法

検索サイト「Google」を用いて、「エイズ+郵送」、「HIV+郵送」、「郵送検査」、「郵送検診」、「郵送健診」で検索を行い、HIV 郵送検査を取り扱う Web サイトを上位 100 位まで検索した。検索した Web サイトで販売されているキット、または Web サイト自体を運営している会社を調べた結果、自社で検査結果の報告を取り扱う HIV 郵送検査会社が現在 14 社あることがわかった。これら 14 社の郵送検査会社に対し、2018 年 2 月 1 日から 2 月 20 日にかけて手紙、FAX、メールにてアンケート調査の依頼を行った。

アンケート調査は以下の 15 項目について行っ

た。14社の内13社は前年の研究に引き続き参加した郵送検査会社であったため、最初の4項目と前年より変更があった項目について返答を依頼した(資料1)。

- ① 年間スクリーニング検査数と検査陽性数(団体での定期健診検査受付の有無、返却方法、医療機関への紹介と受診確認件数)
- ② 梅毒スクリーニング検査数と検査陽性数
- ③ HIV郵送検査に関する今後の課題と展望
- ④ HIV郵送検査の開始年月
- ⑤ 検査申込方法
- ⑥ 検査費用
- ⑦ 検査検体と保存方法、検体が血液の場合の採血器具
- ⑧ 受検者から会社への検体輸送方法
- ⑨ スクリーニング検査の方法と使用キット
- ⑩ スクリーニング検査の実施施設
- ⑪ 検査結果の通知方法と通知までの日数
- ⑫ スクリーニング検査陽性時の対応
- ⑬ 2015年以前の年間検査数と陽性数
- ⑭ 他に取っているSTD検査の種類
- ⑮ 郵送検査を行うための届出、申請等

C.研究結果

依頼した14社の内、13社から回答が得られた。

- ① 年間スクリーニング検査数と検査陽性数(図2)
2017年のHIV郵送検査全体のスクリーニング検査数は99838件であった。13社の内、団体検査の受け付けがあったのは5社であった。郵送検査の内、団体受付の推定検査率は40%、推定団体検査数は40145件であった。返送方法(複数回答)として、個人と依頼人両方に返送が2社、依頼人にまとめて返送が2社、依頼人に個人ごとの封書をまとめて返送が2社、団体によって異なるが1社であった。

郵送検査によるHIVスクリーニング検査陽性数は116例であった。その内、電話やメールによる相談で、受検者を医療機関へ紹介した件数は27例、医療機関での受診が確認できた件数は2例で

あった。

- ② 梅毒スクリーニング検査数と検査陽性数(図3)

2017年の梅毒郵送検査のスクリーニング検査数は102278件であった。梅毒検査陽性数は698例であった。

- ③ HIV郵送検査に関する今後の課題と展望

2017年に関しては特筆すべき回答はなかった。

- ④ HIV郵送検査の開始年月

郵送検査を開始した時期は、2000年5月、2000年8月、2002年、2003年4月、2003年10月、2005年4月、2006年4月、2006年12月、2007年3月、2008年9月、2013年8月、2015年12月、2016年6月であった。

- ⑤ 検査申込方法(複数回答)(図4)

インターネットでの申込は13社すべてで行われていた。電話での申込は10社、FAXでの申込は6社、店頭、診療所での販売は3社、郵便での申込は2社、定期検査は2社で行われていた。

- ⑥ 検査費用(図4)

検査費用は2389~6000円(税抜)であり、平均検査費用は4126円であった(回答12社)。

- ⑦ 検査検体と保存方法、検体が血液の場合の採血器具(図4)

検査検体は13社すべて血液であり、採血はランセットによる指先穿刺であった。検体の保存は濾紙での保存が10社、専用容器での保存が3社であった。専用容器で保存している3社のうち、1社が遠心分離による血球成分の除去を行っていた。

- ⑧ 受検者から会社への検体輸送方法(図4)

受検者から会社への検体輸送は、13社とも郵便を用いていた。温度設定は、12社が室温、1社が冷蔵であった。

- ⑨ スクリーニング検査の方法と使用キット(図4)

郵送検査会社で使用されているスクリーニング検査法はPA法が4社、イムノクロマト法が3社、CLEIA法が2社、CLIA法が1社、EIA法が1社であった。

- ⑩ スクリーニング検査の実施施設

スクリーニング検査は 13 社中 7 社が自社のラボで行っていた。6 社は他の検査機関に検査を依頼していた。

⑪ 検査結果の通知方法と通知までの日数（複数回答）（図 4）

検査結果の通知は、郵便が 12 社（希望者への通知を含む）、e-mail が 6 社、専用 web サイト（ID、パスワードあり）が 5 社であった。結果通知までの日数は、検体受領後 1～14 日であり、平均 4 日であった。

⑫ スクリーニング検査陽性時の対応（複数回答）（図 5）

スクリーニング検査結果が陽性だった場合、13 社すべて病院で確認検査を受けるか、もしくは提携している医療機関に行く様に勧めていた。

対応の内訳は、病院で確認検査を受けるように勧めているのが 11 社、提携している医療機関に行くように勧めているのが 7 社、HIV に関する相談窓口を紹介しているのが 3 社、追加検査・確認検査を実施しているのが 3 社、保健所で確認検査を受けるように勧めているのが 2 社、自社で設けた専用の相談連絡先を知らせているのが 2 社、確認検査の必要性を伝えエイズ予防財団のカウンセリングを受けるよう勧めているのが 1 社、自社診療所へ来院を促しているのが 1 社、スクリーニング検査の結果を知らせて対応は個人の判断に任せているのが 1 社であった。

⑬ 2015 年以前の年間検査数とスクリーニング検査陽性数（図 2）

HIV 郵送検査全体の検査数と陽性数を図 2 に示した。検査数は 2001 年から 2016 年まで 2012 年を除き毎年増加していた。陽性数は 2001 年から 2006 年まで増加し、2013 年まではほぼ横ばいであったが、2014 年と 2015 年は減少していた。

⑭ 他に取り扱いしている STD 検査の種類（複数回答）

郵送検査で他に取り扱いしている検査を調査した結果、HBV、HCV、クラミジア、淋病は 12 社が取り扱っており、梅毒は 11 社、ヒトパピローマ

ウイルスとトリコモナスは 4 社、カンジダは 3 社、ヘルペスウイルスとマイコプラズマとウレアプラズマは 2 社、成人 T 細胞白血病と細菌性膣炎は 1 社が取り扱っていた。

⑮ 郵送検査を行うための届出、申請等

検査に関して、9 社が登録衛生検査所申請を行っていた。キット製造に関して、1 社が組み合わせ医療機器に関わる製造販売の申請を行っており、1 社が医療機器申請を行っていた。販売に関して、3 社が高度管理医療機器販売業の申請を行っていた。

D. 考察

2017 年における郵送検査会社全体の年間検査数は 99838 件であった。昨年の郵送検査の検査数と比較すると 9.0%増加しており、ほぼ毎年増加していることが示された。また郵送検査数の内、およそ 40%が団体受付による検査と推定され、郵送検査の中で大きな割合を占めていることがわかった。2017 年における郵送検査会社全体の検査陽性数は 116 例であり、昨年と比較すると 23%減少していた。

梅毒検査数と陽性数は、昨年から今年にかけてそれぞれ 44%と 77%増加しており、陽性率も 0.55%から 0.68%と増加していた。感染症法による梅毒報告数は近年増加しており、郵送検査でも同様に増加傾向にあることが示された。この郵送検査の年間検査数とスクリーニング検査陽性数についてはさらに継続して調査を行いたい。

HIV 検査を取り扱う郵送検査は、主にインターネットによって検査申込が行われ、検査費用は平均 4126 円、検査日数は平均 4 日であった。検査検体は全ての会社で血液が用いられており、郵送されてきたキットに添付されているランセットで採血し、濾紙や採血管で保存する形式をとっていた。郵送検査会社で行われる検査は、返答があったすべての会社で、PA 法、イムノクロマト法、EIA 法等、販売の認可を受けた臨床検査キットが用いられていた。

検査結果の通知方法は郵送が中心であったが、web 専用サイトや PC・携帯での e-mail で通知している会社も多く見られた。スクリーニング検査結果が陽性だった場合、すべての検査会社で医療機関での検査をすすめていた。2017 年に陽性となった 116 例の内、電話やメール相談で受検者を医療機関へ紹介した件数は 27 例、23%であり、医療機関での受診が確認できた件数は 2 例、2%であった。郵送検査は匿名であるため、受検者が医療機関へ受診したかの確認は難しく、検査後フォローアップの重要性が示された。

郵送検査は、受検者の都合の良い時間と場所で対面することなく検査を受けることができる利点がある一方、郵送や Web サイトを用いた検査の特性上、受検者への検査説明、検査相談、検査後フォローアップ等が対面で行われないため、HIV 検査に関する十分な情報が伝えにくいという欠点がある。また、濾紙血を用いた場合の検査精度に関するデータが乏しく、団体受付において検査結果が本人以外の検査依頼者に返されている場合が多いという問題点もある。

2017 年 3 月、厚生労働科学研究費補助金エイズ対策政策研究事業「男性同性間の HIV 感染予防対策とその介入効果の評価に関する研究」（研究代

表者 市川誠一）の分担研究、「HIV 郵送検査の在り方とその有効活用に関する研究」（研究分担者 木村 哲）の成果として、郵送検査「HIV 郵送検査のあり方について」が発行された。今後、検査精度管理、団体検査、受検者に対する検査相談、フォローアップ等の改善のため、「HIV 郵送検査のあり方について」等を活用し、各郵送検査会社の協力を得て、郵送検査をより安心して受けられ、信頼できる検査とする必要がある。

G.研究発表

研究代表者の報告に記載

H.知的所有権の出願・登録状況（予定を含む）

- ① 特許取得
なし
- ② 実用新案登録
なし
- ③ その他
なし

厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策研究事業）
分担研究報告書
—大阪医療センターにおける HIV/HCV 重複感染凝固異常患者の検討—

研究分担者 上平 朝子 国立病院機構大阪医療センター感染症内科 科長

研究要旨 HCV の抗ウイルス療法は、DAA (Direct Acting Antivirals)の登場により、重複感染の難治例においても高率にウイルス排除がはかれるようになった。しかし、重複感染例では発癌リスクが高く、発症年齢も非 HIV 感染者より若年である。DAA 治療後の発癌症例が報告されているが、当院でも HIV/HCV 重複感染凝固異常患者でウイルス排除直後の発癌例を認めている。HIV/HCV 重複感染凝固異常患者での HCV の治療は、肝移植も念頭においた厳重な経過観察が必要と考えられる。本研究では大阪医療センターに通院中の HIV/HCV 重複感染凝固異常患者の現況に関して検討を行った。

A. 研究目的

HIV/HCV 重複感染患者（以下、重複感染患者）においては HCV による肝機能障害が重要な予後規定因子となっている。HCV の治療は複数の DAA の登場により、SVR 率も大きく向上し、これまでの治療で不応であった Genotype 3a の難治症例もウイルス排除に成功した。しかし、重複感染例では、肝線維化が進行しており、HIV 感染、Genotype 3a など発癌リスクの高い症例が多い。本研究においては当院通院中の重複感染患者の治療成績、解析を行うことにより、今後の HCV 治療に関する問題点を検討した。

B. 研究方法

HCV の治療経過は、2017 年 12 月の時点で当院に定期通院中の重複感染凝固異常患者を抽出して、解析した。

肝細胞癌の予後解析は、これまで当院に通院歴のあった重複感染凝固異常患者を含めて行った。

（倫理面への配慮）

個人が同定されないように診療情報の取り扱いに関しては注意を払った。参照した診療録からは氏名・住所・カルテ番号等の個人情報の特定に結びつき得る情報は削除してデータを収集した。

C. 研究結果

1 患者背景

2017 年 12 月の時点で当院に通院中の重複感染凝固異常患者は 36 名で全員が男性、年齢中央値は 44 歳であった。

2 HIV 感染症の治療成績

当院通院中の 36 名全例に対して抗 HIV 療法が導入されており、HIV-RNA 量は全例で検出感度未満を達成していた。

3 HCV 治療の現状

通院患者の HCV の治療成績は以下のとおりである。26 名で HCV の陰性化が確認されている。現在、未治療および治療中の 5 例はいずれも Genotype 3a である。未治療の 2 例も今後、治療予定となっている。

SVR を達成している 26 例の肝炎進行度は、16 例が慢性肝炎、肝硬変は 6 例のうち移植待機が 1 例、肝細胞癌は 4 例であった。

自然治癒例のうち 1 例は、HCVAb 陽性、HBcAb 陽性であるが、いずれも未治療でウイルスは検出されていない。門脈圧亢進症を合併しており、肝硬変、慢性腎障害は非常に進行している。Child-Pugh は 6 点 A であるが、MELD スコア 20 であり、移植登録の候補となっている。

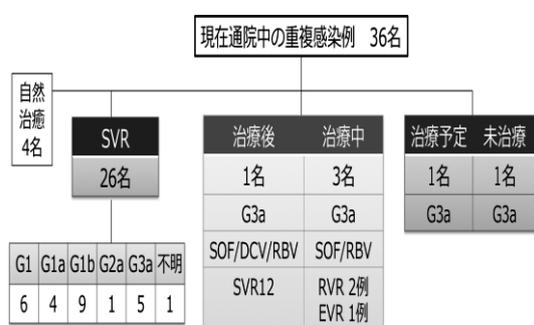


図 1. 通院中の凝固異常患者の HIV/HCV 重複感染例の経過

表 1. SVR 症例の肝炎進行度 (n=26)

慢性肝炎	16 例
肝硬変	6 例 (移植待機 1 例)
肝細胞癌	4 例

4 肝細胞癌の発生状況

通院患者での肝細胞癌例は 4 名であった。1 例は再発、3 例が 2017 年に診断された。いずれも HIV の治療状況は良好、HCV はウイルス排除 (以下 sustained virologic response : SVR) を達成している例であった。

今年度、DAA の治療後に肝細胞癌を発症

し、急速に病状が進行した症例を経験した。患者は 40 歳代男性、HIV は ART によりウイルス量は検出未満、CD4 値 400 台と経過は良好であった。HCV は、DAA (SOF/LDV 配合剤) の治療により SVR を達成したが、その半年後に肝細胞癌が判明した。すぐに肝臓部分切除術を実施したが、3 ヶ月後に再発、多発転移を認めていた。その後、病状は急速に進行し、診断後 7 ヶ月の経過で亡くなられた。

これまで当院に通院していた重複感染患者で、診療録より転帰を確認できた肝細胞癌の症例は 6 例であった。発症年齢の中央値は 43 歳と若年であった (表 2)。

治療は、手術、TACE、RFA、放射線治療などが実施されていた。生存期間は、1 年生存率 79.8%、3 年生存率は 26.2%であった (図 2)。

表 2. 肝細胞癌症例の患者背景

症例数	6
年齢 median(IQR)	43 (39 - 51) 歳
性別	男性 6
CD4 median(IQR)	394 (243 - 538) /mm ³
VL median(IQR)	1.3 (1.3 - 3.2) logcp/ml
ART 有り	5 (83.3%)
HCV genotype	
1	1
1 b	1
3 a	1
不明	3
転帰	
死亡	3 (SVR 2、未治療 1)
再発	2 (SVR 2)
治療中	1 (SVR 1)

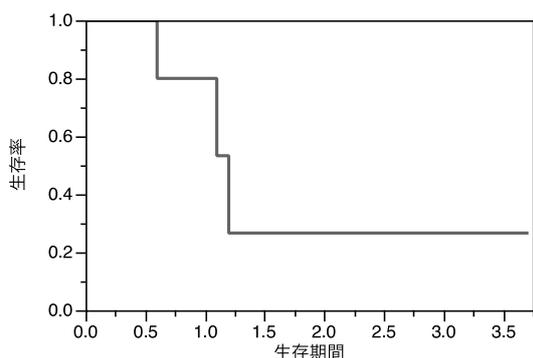


図 2. 肝細胞癌 生存率の推移 (n=6)

D. 考察

HIV 感染患者の予後が大きく改善しているが、HIV/HCV 重複感染患者においては肝炎の進行度が重要な予後規定因子となっている。特に血液凝固異常患者において肝疾患は大きな課題である。

肝疾患の大きな原因である HCV の治療に関しては、DAA を使用することにより高い SVR 率を達成できるようになった。今年度の研究でも当院に通院する HIV/HCV 重複感染患者では、長年の治療抵抗性であった Genotype 3a の症例においても SVR を達成した。

その一方で 2017 年は 3 例で肝細胞癌が発症した。いずれも HCV が陰性化した症例からの発症であった。肝臓癌は、高齢者、男性、飲酒者、脂肪肝合併例、肝線維化進展例、血小板数低下、AFP 高値例でリスクが高いことが報告されている。また最近、DAA 治療後の発癌リスクについても報告されているが、当院の症例でも急速に進行した症例を経験した。重複感染凝固異常患者では G3a の占める割合が多く、SVR が達成できた時期が遅く、肝線維化が非常に進展している。さらに、高齢化、HIV との重複感染、薬剤性肝障害など複数の要因が関連してお

り発癌のリスクが非常に高いと推測される。また、重複感染血液凝固異常の肝臓癌は、非 HIV 感染者よりも発症年齢も若く、生存率も低い。

HCV のウイルスの陰性化が得られるようになった今日においても、肝臓の嚴重な肝臓のフォローと、必要に応じた肝移植の検討が必要と考えられる。

E. 結論

HIV/HCV 共に治療が進歩し、殆どの症例でウイルスの陰性化が得られるようになった。重複感染患者においても安定した長期予後が期待できる。しかし、罹患歴の長い血液凝固異常患者はウイルスコントロールが良好となった後にも肝障害や肝臓癌の発症により予後が悪化する可能性を有している。今後は肝臓専門医と HIV 感染症の専門医による内科的治療を中心としながらも治療の重要な選択肢として肝移植を位置付けるべきである。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

Yagura H, Watanabe D, Kushida H, Tomishima K, Togami H, Hirano A, Takahashi M, Hirota K, Ikuma M, Kasai D, Nishida Y, Yoshino M, Yamazaki K, Uehira T, Shirasaka T. Impact of UGT1A1 gene polymorphisms on plasma dolutegravir trough concentrations and neuropsychiatric adverse events in Japanese individuals infected with

HIV-1. BMC Infect Dis. 2017 Sep 16;
17(1):622.

上平朝子. 10.感染 ②侵襲性カンジダ
症・ニューモシスチス肺炎-陰性化する
まで、適切な量・期間で抗菌薬を継続す
る。乳がん薬物療法副作用マネジメン
ト プロのコツ. 2017年9月14日

光井絵理, 加藤研, 安部倉竹紗, 種田
灯子, 廣田和之, 矢嶋敬史郎, 渡邊大,
上平朝子, 白阪琢磨, 瀧秀樹:HIV感染
症治療中に1型糖尿病とバセドウ病を
発症し免疫再構築症候群と考えられた
1例. 糖尿病 60(4): 295-300, 2017年4
月30日

2. 学会発表

上平朝子. ART era の悪性腫瘍と対応.
第31回日本エイズ学会学術集会・総会
シンポジウム「治療の手引き」、東京、
2017年11月26日

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

エイズ診療拠点病院と在宅あるいは福祉施設の連携に関する研究

研究分担者： 下司 有加（国立病院機構大阪医療センター看護部）

研究協力者： 東 政美（国立病院機構大阪医療センター看護部）

矢倉 裕輝（国立病院機構大阪医療センター薬剤部）

安尾 利彦（国立病院機構大阪医療センター臨床審理室）

岡本 学（国立病院機構大阪医療センター医療相談室）

研究要旨

HIV 感染症は抗ウイルス療法の継続によって医学的にコントロール可能な疾患となり、患者の生命予後も極めて改善した。一方で、長期生存者における慢性期の合併症が課題となっている。それは、骨代謝性疾患や生活習慣病、悪性疾患、CKD など HIV や ART に関連して併発する疾患や HIV 感染症に関連しない疾患への罹患、それらに伴うケアの必要性である。いずれの場合も、エイズ診療拠点病院のみで完結する医療・看護では不十分であり、他疾患と同様の連携、看護の提供が必要となっている。そこで、平成 21 年度から実施している訪問看護師を対象とした研修会を継続的に開催することで、知識の習得の機会を設け、HIV 陽性者の受け入れのための準備性を向上させたい。研修会については、平成 27 年度に実施した全国調査結果から、HIV 陽性者の受け入れが困難とされる地域で開催した。

また、今年度は、「在宅医療を支えるみんなに知ってほしいこと」という訪問看護師向けのパンフレットを改訂に向けた準備を開始した。

研究目的

訪問看護を主とする在宅支援提供者が HIV 感染症患者を受け入れる上で直面する課題である職員の知識不足、不安に対して直接的な介入を行い、その評価を行う。

研究方法

- 1) 平成 27 年度の全国調査で HIV 陽性者の受け入れが困難という回答が多かった、もしくは、受け入れが可能という回答のなかった地域で研修会を開催。
- 2) 訪問看護師を対象としたパンフレット「在宅医療を支えるみんなに知ってほしいこと」の改訂に向けた準備。

研究結果

1) 訪問看護師研修会

(1) 研修の実施および参加状況

【静岡】開催場所：JR 静岡駅前パルシェ会議室、開催日：7月1日（土）、受講者 16 名【京都】開催場所：京都駅前会議室 K-office、開催日：9月2日（土）、受講者 17 名。【大分】開催場所：JR おおいたシティ、開催日：10月28日（土）、受講者 5 名【山口】開催場所：YIC 研修センター、開催日：3月3日（土）、申し込み者 4 名。

(2) 研修プログラム

HIV/AIDS の基礎知識、HIV 陽性者の看護支援の講義と事例をもとにしたグループワークを実施した。グループワークでは、5人1グループとし、そのグループが架空の訪問看護ステーションと設定。HIV 陽性者の訪問依頼があった際、受け入れまでに起こりうる問題点の抽出と、解決策について話し合った。全

体で約3時間の研修であった。また、いずれの研修会も参加者は訪問看護師、保健師などであった。

(3) 研修終了後のアンケート結果

アンケートの回収は38名。参加者の背景については、図1.2を参照。

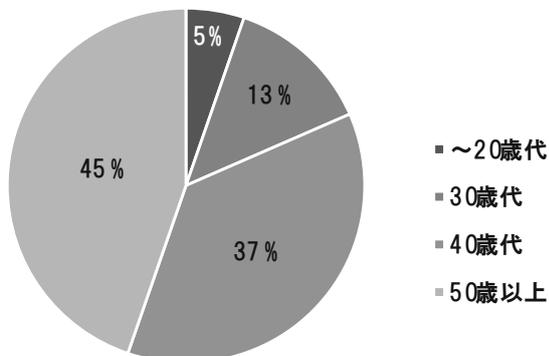


図1 参加者の年齢 (n = 38)

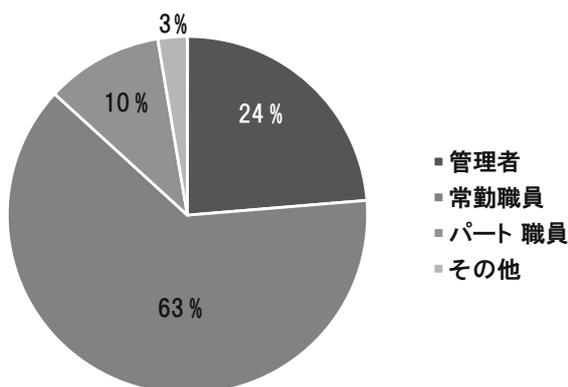


図2 参加者の勤務形態 (n = 38)

24%の人がHIV陽性者の訪問看護経験があり、35%の人が研修会の受講経験があると回答。また、HIV陽性者の受け入れについては、56%が受け入れ可能、44%は準備が必要、受け入れ不可能の回答はなかった(図3)。準備が必要と回答された人の準備内容としては、スタッフの教育・育成が最も多く、

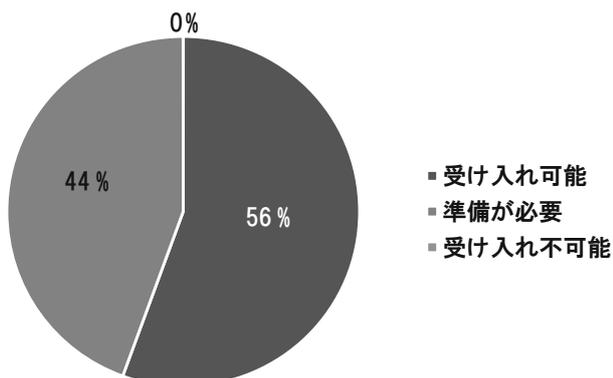


図3 HIV陽性者の受け入れについて (n = 38)

次いでスタッフ間での受け入れに関する同意、HIV拠点病院とのネットワーク作り、感染対策マニュアルの整備などがあげられた。研修会受講後の受け入れ意識の変化については、68%が変化したと回答。以前から支援可能と考えているため変化していないが24%、研修後も支援は難しいと回答した人はいなかった(図4)。

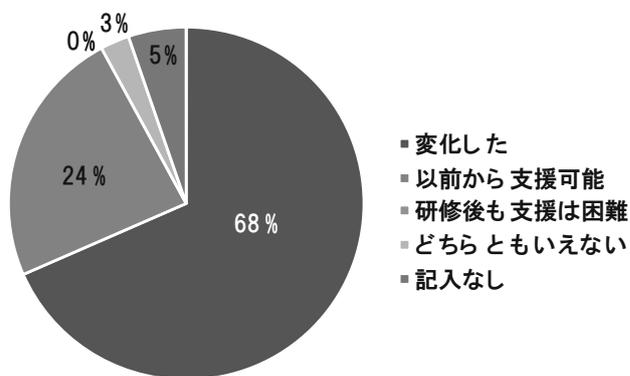


図4 研修後の意識変化 (n = 38)

(4) 研修全体を通しての意見

- ・私たちが自身が知識不足を解消しなければいけない。
- ・今回のような基礎的な研修会の対象者を広げてほしい。県のステーション協議会の研修項目に入れてほしい。
- ・自分が住んでいる都道府県の受け入れ可能な施設の少なさに驚いた。実際に退院支援で何か所かの訪看や施設に断られてしまったことがあった。もっともっと医療者への周知が必要だが、組織レベル、行政レベルで取り組みが必要と感じた。
- ・行政としてできる事について考えた。一度、市の保健師にも研修指導に来てもらいたい。

2) 「在宅医療を支えるみんなに知ってほしいこと」の改訂。

薬剤情報や社会制度に関することについてアップデートし、全般的な改訂を予定。次年度には完成し、全国の訪問看護ステーションへ配布予定。

考察

1) 訪問看護師研修会

2014年度までに実施した研修会では、開催地域が異なるものの、例年HIV陽性者の訪問看護経験は10%前後で推移していた。また、2014年の全国調査では8%、2016年は9%であった。しかし、今回、研修会に参加された事業所における過去のHIV陽性者

の訪問看護経験は20%を超えており、高い割合であった。このことより、過去の受け入れ経験が研修参加への動機付けとなっている可能性がある。そして、今回、研修会を開催した地域は、2014年の調査で受け入れが困難と回答している事業所が多い、もしくは、受け入れ可能と回答している事業所がない地域であったため、参加者が極端に少ない地域があった。そのため、過去にも受け入れ経験はなく、受け入れは難しいと考えている事業所に対し、意識を変化させるためにも参加を促す工夫が今後必要である。

研修会全体を通じた意見の中にあるように、保健師に対する知識の普及についても再考が必要である。

結論

- ・研修会への参加によって、受け入れに向けた準備性の向上につながった。
- ・在宅支援に関わるより多くの医療者に HIV 感染症に関する知識を得てもらうためには研修会の開催や案内に関する工夫が必要である。

健康危険状況

該当なし

知的財産権の出願・取得状況

該当なし

研究発表

1. 論文発表

該当なし

2. 学会発表

該当なし

エイズ診療拠点病院と在宅あるいは福祉施設の連携に関する研究

研究分担者： 下司 有加（国立病院機構大阪医療センター看護部）

研究協力者： 東 政美（国立病院機構大阪医療センター看護部）

矢倉 裕輝（国立病院機構大阪医療センター薬剤部）

安尾 利彦（国立病院機構大阪医療センター臨床審理室）

岡本 学（国立病院機構大阪医療センター医療相談室）

研究要旨

HIV 感染症は抗ウイルス療法の継続によって医学的にコントロール可能な疾患となり、患者の生命予後も極めて改善した。一方で、長期生存者における慢性期の合併症が課題となっている。それは、骨代謝性疾患や生活習慣病、悪性疾患、CKD など HIV や ART に関連して併発する疾患や HIV 感染症に関連しない疾患への罹患、それらに伴うケアの必要性である。いずれの場合も、エイズ診療拠点病院のみで完結する医療・看護では不十分であり、他疾患と同様の連携、看護の提供が必要となっている。

そこで、平成 21 年度から実施している訪問看護師への介入を継続する。今までの当研究班の結果より、訪問看護師が自立困難となった HIV 陽性者を受け入れるにあたり直面する課題は、「職員の知識不足とそれによる不安」が主であり、研修会という知識の習得の機会は、準備性の向上につながり、受け入れを促進するうえでの直接的介入として効果を得ていた。また、自立困難となった HIV 陽性者を在宅で支援するためには、訪問看護師のみの協力では成り立たず、在宅で支援する多職種に対して包括的な取り組みの必要性が示唆された。さらに、研修会に参加した訪問看護ステーション側からは、研修会の継続的な実施に対するニーズが高く、研修会そのものが受け入れの準備性を高めるだけでなく、訪問看護ステーションと医療機関との情報交換、顔合わせの場ともなっているため、今後も研修会を継続し、介入の効果を評価していく。

研究目的

訪問看護を主とする在宅支援提供者が HIV 感染症患者を受け入れる上で直面する課題である職員の知識不足、不安に対して直接的な介入を行い、その評価を行う。

者の受け入れに関する調査。

（倫理面への配慮）

本研究は施設内の倫理委員会に相当する受託研究審査委員会で倫理審査を行い、承認を取得した後に実施した。

研究方法

1) 訪問看護師研修会

訪問看護師を中心とした在宅療養支援に関わる職種を対象とした研修会の実施。研修会の開催希望があった地域で実施。2017 年度は、2014 年の全国調査で HIV 陽性者の受け入れが困難という回答が多かった、もしくは、受け入れが可能という回答のなかった地域で研修会を開催。

2) 全国の訪問看護ステーションにおける HIV 陽性

研究結果

1) 訪問看護師研修会

（1）年度別研修の実施および参加状況

表 1 参照

（2）研修プログラム

HIV/AIDS の基礎知識、HIV 陽性者の看護支援の講義と事例をもとにしたグループワークを実施した。

グループワークでは、5人1グループとし、そのグループが架空の訪問看護ステーションと設定。HIV陽性者の訪問依頼があった際、受け入れまでに起こりうる問題点の抽出と、解決策について話し合った。全体で約3時間の研修であった。また、いずれの研修会も訪問看護師のみならず、保健師、ケアマネージャー、介護ヘルパー、地域包括支援センター職員などの参加があった。

(3) 研修終了後のアンケート結果

① 2015年度

アンケートの回収は24名（回収率100%）。20.8%の人がHIV陽性者の訪問看護経験があり、45%の人が研修会の受講経験があると回答。また、HIV陽性者の受け入れについては、62%が受け入れ可能、38%は準備が必要、受け入れ不可能の回答はなかった（図1）。準備が必要と回答された人の準備内容としては、スタッフへの教育があげられた。今回、参加された人は管理者が54%を占めていた。参加者全員が研修会の継続開催を希望された。

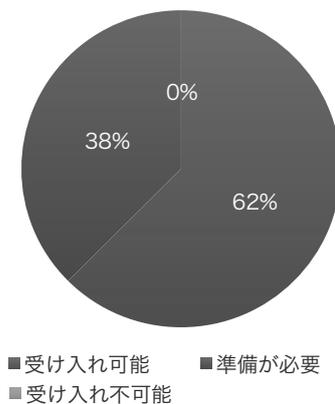


図1 HIV陽性者の受け入れについて（n=24）

② 2016年度

アンケートの回収は79名（回収率100%）。10%の人がHIV陽性者の訪問看護経験があり、23%の人が研修会の受講経験があると回答。また、HIV陽性者の受け入れについては、48%が受け入れ可能、49%は準備が必要、受け入れ不可能の回答はなかった（図2）。準備が必要と回答された人の準備内容としては、スタッフへの教育があげられた。今回、参加された人は管理者が54%を占めていた。参加者全員が研修会の継続開催を希望された。

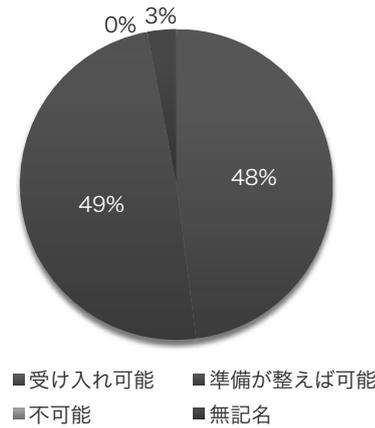


図2 HIV陽性者の受け入れについて（n=79）

③ 2017年度

アンケートの回収は38名。24%の人がHIV陽性者の訪問看護経験があり、35%の人が研修会の受講経験があると回答。また、HIV陽性者の受け入れについては、56%が受け入れ可能、44%は準備が必要、受け入れ不可能の回答はなかった（図3）。準備が必要と回答された人の準備内容としては、スタッフの教育・育成が最も多く、次いでスタッフ間での受け入れに関する同意、HIV拠点病院とのネットワーク作り、感染対策マニュアルの整備などがあげられた。研修会受講後の受け入れ意識の変化については、68%が変化したと回答。以前から支援可能と考えているため変化していないが24%、研修後も支援は難しいと回答した人はいなかった。

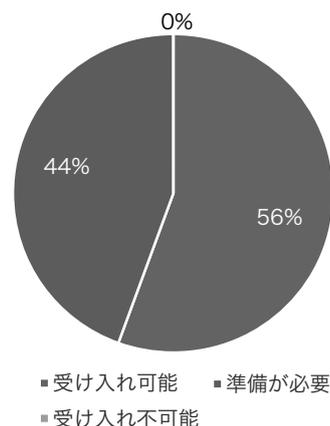


図3 HIV陽性者の受け入れについて（n=38）

(4) 研修全体を通しての意見

- ・ 在宅のかかりつけ医がいると心強い。
- ・ 地域によって陽性者の訪問依頼にも差があるため、まだ依頼がない時点から受け入れ可能な体制を整えておきたい。
- ・ HIV陽性者も高齢化することを考えれば、感染症

の問題ではなく別の疾患の生活上の問題で、訪問
依頼がくるようになると思う。

- ・ 実際、受け入れるとなったらスタッフ向けに勉強
会をしてほしい。
- ・ 今回のような基礎的な研修会の対象者を広げてほ
しい。県のステーション協議会の研修項目に入れ
てほしい。

2) 2016年訪問看護ステーションにおける HIV 陽性者の受け入れに関する全国調査

訪問看護ステーションに対する全国調査の結果
は、4724 事業所（郵便不着 86 件、閉鎖連絡 2 件）
に配布し、回答数 2001 件（回収率 43.1%）であ
った。

過去に HIV 陽性者の受け入れを経験した事業所は
9%。現在、HIV 陽性者の訪問看護を実践してい
る事業所は 5%であった。

受け入れについては、受け入れ可能 19%、準備が
整えば可能 60%、不可能 19%、無回答 2%であ
った（図 4）。

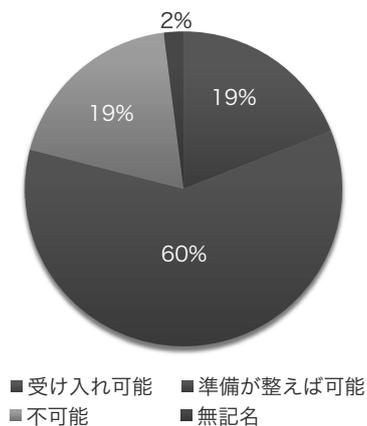


図 4 HIV 陽性者の受け入れについて (n = 2001)

本調査は 2009 年度より定期的実施しており、
年度別に見た受け入れ可能な割合は微増してい
る（図 5）。

受け入れ促進の課題として、訪問医の確保や地
域内で患者を支える医師の存在、職員の理解、教
育が必要、職務感染時の補償などがあつた。ま
た、感染対策に関する物品購入に対する国の補助
という意見もあり、HIV 感染症に関する正しい
知識の普及が重要である。また、受け入れ不可
能な理由では、前述の促進課題以外に、疾患に
対する知識を得ても職員の不安が残る、性感
染症を対象とすることへの抵抗感などがあつた。

知識の習得が受け入れの準備性を高めてい
るかを知るために、過去に当研究班主催の研
修会を受講したことがあると回答した 225 事
業所の受け入れに関する意識を抽出した。結
果、47%が受け入れ可能、46%が準備が整
えば可能と回答しており、受け入れ不可能は
わずか 7%であった（図 6）。

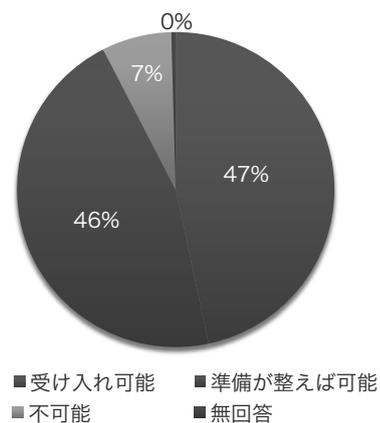


図 6 研修受講経験のある事業所の HIV 陽性者の
受け入れについて (n = 225)

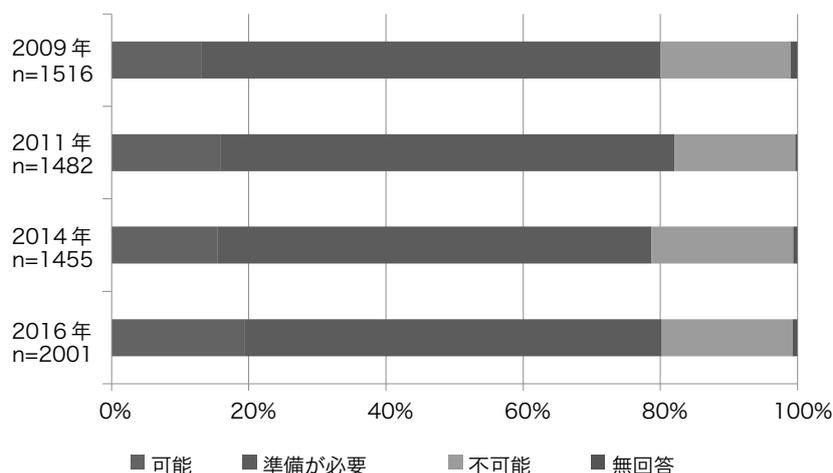


図 5 HIV 陽性者の受け入れについて

反対に、受講経験のない1609事業所の受け入れ意識は、受け入れ可能15.3%、準備が整えば可能63.5%、不可能21%、無回答0.2%であった。

研修会については、61%の事業所が今後も機会があれば参加を希望しており、37%がどちらともいえない、2%が希望しないという回答であった。

考察

1) 訪問看護師研修会

今年度より研修会の内容を、座学中心の講義ではなく、実際に訪問依頼があった場合にどのように対応するかというグループワークを実施した。それにより、身近にせまった問題として捉え、受け入れるにあたり具体的にはどのような準備が必要か、必要ではないのかを考える機会となった。大阪では、HIV陽性者訪問看護経験のあるステーションが増加しているため、講義のみではない方法を取り入れたことが参加者からは好評であった。

例年、どの地域で研修を開催するかについては、公募制やエイズ動向委員会の報告にあるAIDS発症者の多い都道府県、2014年の同研究の全国調査から受け入れ可能という回答が少ない地域などを選択し、決定しているが、参加者が極端に少ない地域があり、効率的な開催について検討が必要である。広範囲な案内の郵送、中核拠点病院と連携した案内の方法などを工夫していく。

2) 2016年訪問看護ステーションにおけるHIV陽性者の受け入れに関する全国調査

訪問看護ステーションがHIV陽性者を受け入れていくことに対する関心度はアンケートの回収率から見ると高いと考える。実施に受け入れを経験したステーションは少ないものの、今後増加するであろう事態に備えて準備を整えていけるよう研修会などの機会を希望していた。

また、受け入れについては、受け入れ可能の割合が経年別にみて微増していた。さらに、研修会を受講したことのある事業所では受け入れの割合が高く、受け入れ不可能が低いことから知識の習得は準備性を高めていると考える。

結論

・研修会への参加によって、受け入れに向けた準備性の向上につながった。

・在宅支援に関わるより多くの医療者にHIV感染症に関する知識を得てもらうためには研修会の開催方法の検討が必要である。

健康危険状況

該当なし

知的財産権の出願・取得状況

該当なし

研究発表

1. 論文発表

該当なし

2. 学会発表

下司有加、関矢早苗、富成伸次郎他、全国の訪問看護ステーションにおけるHIV陽性者の受け入れに関する研究。近畿エイズ研究会、神戸、2016年6月

HIV 陽性者の心理学的問題と援助に関する研究

研究分担者：安尾 利彦（独立行政法人国立病院機構 大阪医療センター 臨床心理室）

研究協力者：手塚千恵子（心理室森ノ宮）

森田 眞子（独立行政法人国立病院機構 大阪医療センター 臨床心理室）

富田 朋子（独立行政法人国立病院機構 大阪医療センター 臨床心理室）

宮本 哲雄（独立行政法人国立病院機構 大阪医療センター 臨床心理室）

速見 佳子（独立行政法人国立病院機構 大阪医療センター 臨床心理室）

西川 歩美（独立行政法人国立病院機構 大阪医療センター 臨床心理室）

水木 薫（独立行政法人国立病院機構 大阪医療センター 臨床心理室）

研究要旨

本研究では以下2つの研究を行った。研究1（行動面の障害の心理的背景に関する研究）：大阪医療センターを受診する陽性者のうち無作為抽出した300名を対象に、行動面の障害を伴う問題とその心理的背景に関する質問紙調査を行った。回収数は203（67.7%）、性別は男性が199名（98.0%）、性的指向は同性愛が138名（68.0%）であった。重回帰分析の結果、以下の行動に自尊感情による負の影響が認められた。無就労（ $R^2=.05^{**}$, $\beta =-.21^{**}$ ）、引きこもり（ $R^2=.05^{**}$, $\beta =-.23^{**}$ ）、自傷の「過食した」（ $R^2=.08^{***}$, $\beta =-.23^{**}$ ）など、自殺の「消えてしまいたい」念慮（ $R^2=.22^{***}$, $\beta =-.47^{***}$ ）・計画（ $R^2=.06^{**}$, $\beta =-.24^{**}$ ）・試み（ $R^2=.08^{***}$, $\beta =-.27^{***}$ ）。また以下の行動には自意識尺度の私的自意識による負の影響が認められた。抗HIV薬を医師の指示通りに内服しない（ $R^2=.03^*$, $\beta =-.18^*$ ）、コンドーム不使用（ $R^2=.05^*$, $\beta =-.25^{***}$ ）、自傷の「過食した」（ R^2 前出, $\beta =-.15^*$ ）など、自殺の「本気で死にたい」念慮（ R^2 前出, $\beta =-.25^*$ ）。受診中断、飲酒には心理尺度との関連は認められなかった。引きこもり等の社会的活動の低下や、自傷・自殺、性行為時のリスク行動、服薬アドヒアランス不良等の故意に自分を傷つける行動が、自尊感情の低さや自身の内面に向ける注意の弱さと関連することが明らかとなった。これらの行動特性を有する陽性者には、自己拒否や自己軽蔑、自らの情緒の自覚の困難さと自己破壊的行動への置き換えといった心理的問題があることが推測される。また、内面に注意を向け、行動に置き換えられた情緒に気づくよう促進する積極的介入が求められると考えられる。研究2（HIV陽性者の集団心理療法に関する研究）：孤立しやすい背景を持つHIV陽性者にとって、集団心理療法が有効な介入であることが指摘されてきており（Hoffman, 1996）、わが国においてもHIV陽性者の集団心理療法の実践報告がなされている（野島ら, 2001）ものの、個人心理療法に比べて集団心理療法という治療モダリティの実践の報告は少ない。そこで本研究は、3名から6名のHIV陽性者で構成される、定期的・継続的な集団心理療法を実施し、そのプロセスの分析をもとに、HIV陽性者の心理学的問題および臨床心理学的援助方法について明らかにすることを目的とする。集団心理療法は、現在何らかの心理的問題で個人心理療法を受けている陽性者で、隔週1回80分間、少なくとも6か月間以上参加すると決めた者を対象とした。これまでに7名の陽性者をリクルートし、集団心理療法を64セッション開催した。この集団心理療法の経過において、参加者には共通して、発達早期の傷つきが要因と思われる対人-自己愛に関する問題が観察された。個人および集団の心理療法において、この対人-自己愛の問題を取り扱う技法の習熟が求められることが示唆された。

研究目的

周知のとおり、HIV感染症に対しては根強い社会的偏見が存在する。背景には感染経路についての偏見、犠牲者非難、同性愛嫌悪、HIV感染症に関する

誤解などが考えられるが、これらに基づくステイグマによって、HIV陽性者は恥を体験し、抑うつや不安の程度を悪化させることが指摘されている（Khalifeら, 2010）。

中西ら（2011）によると、陽性者は適応障害やうつ病などを発症することが多く、適応障害の中心は不安あるいは抑うつ気分であるが、対応が困難となるのは行動面の障害を伴う場合であり、具体的には外来通院の中断、内服の自己中断、職場放棄、引きこもり、大量飲酒、薬物乱用が挙げられる。HIV陽性者における自殺・自傷に関しては、HIV陽性者の検死のうち9.4%が自殺をしており、また故意に自己を傷つける行動（Deliberate Self Harm）が20%、自殺念慮が26.9%、自暴自棄・自傷は19.7%、それぞれ認められるという（Catalanら、2011）。

このようにHIV陽性者の心理学的問題については、精神症状のほかにも行動面の障害を伴う問題が数多く指摘されており、またそれらの発生状況を明らかにする研究は盛んになされている。ただし、これらの問題の背景にどのような心理的特性があるのかについて理解するための研究は、十分になされているとは言い難い。

筆者ら（2012）は、意欲低下、自殺念慮、対人恐怖、アルコール多飲といった心理的、行動的問題を有するHIV陽性者との心理療法において、それらの問題を恥や他者との交流遮断という対人関係上の問題から考察している。また、HIV陽性者の抑うつや不安などの症状と、スティグマによる恥の体験、他者からの評価への過敏さ、見捨てられ不安などが関連することを明らかにした（2015）。HIV陽性者の精神症状だけでなく、行動面の障害を伴う問題の心理的背景については、今後さらに検討が必要であり、その両方の面に効果的な心理療法を実践していくためには、上記の問題を有するHIV陽性者の心理的、行動的問題と心理療法におけるその取り扱いについて明確化することが不可欠であると考ええる。

また、孤立しやすい背景を持つHIV陽性者にとって、集団心理療法が有効な介入であることが指摘されてきており（Hoffman、1996）、わが国においてもHIV陽性者の集団心理療法の実践報告がなされている（野島ら、2001）。その一方で、わが国の各HIV診療施設やNPO等においては、個人（治療者1名、クライアント1名）のカウンセリングや心理療法が主に実施されており、集団心理療法の実践の報告は少ない。また心理的援助を目的に集団を対象とする介入についての実践や報告はされているが、多くが単回あるいは短期間の介入であり、定期的で長期にわたる構造化された集団心理療法の実践は、わが国

においてはほとんどなされていない。

よって、本研究においてHIV陽性者を対象とした定期的かつ一定期間にわたる集団心理療法を実施し、そのプロセスを分析することを通して、集団心理療法の体験がHIV陽性者に及ぼす心理的影響について検討することは、HIV陽性者を対象とした心理的援助の充実に資する上で、十分社会的意義を有すると考える。このような集団心理療法の研究は、HIV陽性者を対象とした集団心理療法および個人心理療法の両方について示唆が期待できると考える。

そこで本研究は、研究1：HIV陽性者の心理学的問題、特に行動面の障害を伴う問題（自傷行為、物質使用、引きこもり・職場放棄、保健行動の不適切さ等）について、その心理的背景および臨床心理学的援助方法について明確化すること、および、研究2：3名から6名のHIV陽性者で構成される、定期的・継続的で、精神分析的に方向づけられた集団心理療法を実施し、そのプロセスの事例検討をもとに、HIV陽性者の心理的問題および臨床心理学的援助方法を明らかにすることを目的とする。

研究方法

研究1：2015年9月末までに当院感染症内科に初診で受診したHIV陽性者のうち、死亡・転院・2016年10月現在で中断中の患者、日本語以外を母国語とする患者を除き、無作為抽出した300名を対象とした。無記名・自記式の質問紙を配布した。

質問紙は、基本属性、行動面の障害を伴う問題の有無を問う項目、パーソナリティ特性を捉えるための心理尺度で構成された。行動面の障害を伴う問題については、受診中断（当院感染症内科への6か月以上の受診なしの有無）、服薬アドヒアランス不良（指示通りに内服しなかった経験の有無、自己判断による中断の有無）、感染リスクのある性行動（過去6ヶ月における挿入行為時のコンドーム不使用の有無）、無就労・引きこもり（内閣府調査（2009）の一部を用いる）、物質使用（アルコール依存についてはWHO/AUDIT、薬物乱用についてはDAST-10日本語訳を一部改変して用いる）、自殺（松本（2011）を参考に、自殺の念慮・計画・試みの有無を問う）、自傷（松本（2011）を参考に、切る・刺す等の自傷行為、喫煙、食行動異常の有無を問う）を取り上げる。パーソナリティ特性を捉えるための心理尺度としては、次の3つを用いた。自尊感情尺度：ローゼンバー

グにより作成された自尊感情尺度を日本語訳した尺度で、10項目から成る（山本ら、1982）。自意識尺度：自分自身に対してどの程度注意を向けやすいかの個人差を測定する尺度で、公的自意識（外見や他者に対する行動など、外から見える自己の側面に注意を向ける程度）11項目、および、私的自意識（自分の内面・気分などに注意を向ける程度）10項目の、合計21項目から成る（菅原、1984）。対象関係尺度：対人場面での行動・態度を規定する、内的な自己と他者の関係性に関する表象を測定する尺度で、29項目から成る（井梅ら、2006）。

分析はSPSS Ver.23.0を使用し、単純集計、および、各心理尺度の行動面の障害を伴う問題への影響について重回帰分析を行った。なお、対象関係尺度および自意識尺度の公的自意識については、他の心理尺度との間に相関が見られたため、今回の結果からは除外した。

研究2：大阪医療センターに通院するHIV陽性者3名～6名から構成される、定期的・継続的な集団心理療法を構造化して実施する。集団心理療法の枠組みは、隔週で1回80分間、リクルートの対象は何らかの心理的問題のために個人心理療法を受けており、最短でも6ヶ月間参加できる見込みのあるHIV陽性者とする。集団心理療法のプロセスを分析する。

（倫理面への配慮）

研究1・研究2ともに臨床研究審査委員会に相当する大阪医療センター受託研究審査委員会による承認を得た（研究1：承認番号16060、研究2：承認番号15052）。

研究結果

研究1：配布数300、回収数203、回収率は67.7%であった。基本属性としては男性が199名（98.0%）、平均年齢は49.0歳、性的指向は同性愛が138名（68.0%）、異性愛が29名（14.3%）、両性愛が25名（12.7%）であった。203名（100%）が抗HIV薬を処方されていた。122名（60.1%）に過去6ヶ月間に挿入を伴う性行為の経験があった。

行動面の障害を伴う問題の発生状況は次のとおりである。受診中断あり：16名（7.9%）。抗HIV薬を医師の指示通りに服用しない経験あり：123名（61.8%、1ヶ月平均回数は2.5回）。自己判断での抗HIV薬の服用中止：12名（6.1%、平均中止期間は4

か月間）。無就労：39名（19.4%）。引きこもり：41名（20.8%）。アルコール依存症の疑い：11名（5.4%）。薬物使用あり：16名（7.9%）、うち乱用の程度が「重篤」：6名（37.5%）。挿入行為時のコンドーム不使用あり：55名（49.5%）。なんらかの自傷あり：137名（67.5%）、うち過食：57名（28.1%）、太ることへの強い恐怖：48名（23.6%）、こぶしで体や壁を殴る：24名（11.8%）、頭部強打：15名（7.4%）。自殺念慮・計画・試みのいずれかあり：105名（51.7%）、うち「消えてしまいたい」の念慮あり：95名（46.8%）、「本気で死にたい」の念慮あり：79名（38.9%）、計画あり：29名（14.3%）、試みあり：19名（9.4%）。

各心理尺度の行動面の障害を伴う問題への影響に関する重回帰分析の結果、以下の行動に自尊感情による負の影響が認められた。無就労（ $R^2=.05^{**}$, $\beta =-.21^{**}$ ）、引きこもり（ $R^2=.05^{**}$, $\beta =-.23^{**}$ ）、自傷の「過食した」（ $R^2=.08^{***}$, $\beta =-.23^{**}$ ）・「身体を噛んだ」（ $R^2=.06^{**}$, $\beta =-.26^{**}$ ）・「身体を切った」（ $R^2=.04^*$, $\beta =-.15^{**}$ ）・「頭を壁にぶつけた」（ $R^2=.05^{**}$, $\beta =-.18^{**}$ ）、自殺の「消えてしまいたい」念慮（ $R^2=.22^{***}$, $\beta =-.47^{***}$ ）・「本気で死にたい」念慮（ $R^2=.20^{***}$, $\beta =-.42^{***}$ ）・計画（ $R^2=.06^{**}$, $\beta =-.24^{**}$ ）・試み（ $R^2=.08^{***}$, $\beta =-.27^{***}$ ）、物質使用の「近親者から使用を責められた」（ $R^2=.55^{**}$, $\beta =-.74^{***}$ ）。また以下の行動には自意識尺度の私的自意識による負の影響が認められた。抗HIV薬を医師の指示通りに内服しない（ $R^2=.03^*$, $\beta =-.18^*$ ）、コンドーム不使用（ $R^2=.05^*$, $\beta =-.25^{***}$ ）、自傷の「過食した」（ R^2 前出, $\beta =-.15^*$ ）・「壁を殴った」（ $R^2=.04^*$, $\beta =-.15^*$ ）・「強く皮膚をつねった」（ $R^2=.04^*$, $\beta =-.15^*$ ）、自殺の「本気で死にたい」念慮（ R^2 前出, $\beta =-.25^*$ ）。受診中断、飲酒には心理尺度との関連は認められなかった。

研究2：これまでに7名のHIV陽性者をリクルートした。参加を取りやめた1名を除き、6名が集団心理療法に参加した。2016年1月より集団心理療法を開始し、2018年1月末現在で64セッションを実施した。

6名の参加者の感染経路は全員性行為であり、性別は全て男性、年代は30歳代～60歳代である。各メンバーの主訴・問題としては、「HIV差別への怒り」「障害受容困難」などHIV感染と関連するテーマだけでなく、「抑うつ」「イライラ」「意識消失発作」「醜貌恐怖」などの精神症状、「浪費」「性行動への依存」「物質依存」などの行動面の障害を伴う問題、「言い

たいことが言えない」などの対人関係に関する問題が認められた。集団心理療法にはセラピスト2名が加わった。約束事として「集団療法で話し合われた内容を他で話さない」「暴力禁止」「休まない」「集団療法外で付き合わない」「自分についてできるだけ広く深く話す」、オリエンテーションとして「参加者はHIV感染と個人心理療法実施が共通。個人療法の目的を進めるために、コンバインドされた集団心理療法を行う」「他の参加者の気持ちを考えて語ると、自他の役に立つ」を伝え、参加者の了承を得た上で開始した（新規参加者が加わるたびに、同じ内容の約束事とオリエンテーションを行った）。

集団心理療法の経過においては、下記が特徴的に観察された。

- ・複数の参加者が、欠席や遅刻によってそれまでの話題を聞いていなくても「HIV 同士だから聞かなくてもわかる」と主張した。この例のように、参加者同士は表面的には互いに同意・賛同を示すものの、実際には相互の理解にズレが生じていることが頻繁に認められた。ある参加者が「職場で自分の話がズレると注意されるが、自分ではよくわからない」という自身の問題を述べたが、これはこのグループ参加者全員に共通する特徴であった。また、自身の問題を他の参加者が理解できるように伝えることや、他者の問題を適切に理解することに困難があった。
- ・参加者には、自分自身やグループ内に共通する心理的問題について考えることの困難さ、セラピストやグループによって万能的解決方法が提示される期待、他責的な態度が認められた。セラピストによって自身の問題を指摘されたり、セラピストや他の参加者からの承認が得られなかったり、自分の思うようにセラピストや他の参加者から理解されないと、参加者は様々な反応（グループ内交流から引きこもる、話を逸らす、憤怒する、集団心理療法から離脱する、など）を示した。
- ・他の参加者の指摘によってある参加者の自己理解が進んだときに、その自己理解を得た参加者は、他の参加者の援助ではなく自力（あるいは個人療法での作業）による気づきであるとした。別の参加者は、セラピストの介入によって展開した他の参加者に関する話題について、自分の発言が話題を進展させた、あるいは、他の参加者の情緒を誘発したと主張した。
- ・ある参加者の気づきや変化を、別の参加者が価値下げする言動が認められた。また、一人が長々と一

方的に話をする事でグループの場や時間を占有する、他の参加者の情緒や都合を十分認識しない、といった特徴も認められた。

- ・投影の機制（自分の怒りをセラピストの怒りだとする）、言葉で説明しなくても他者が分かってくれるという期待、自分と他者の間にある境界を否認するなど、自他融合状態が頻繁に観察された。
- ・各参加者が持つ問題の無意識的な動機・意志や、グループ内で観察された上記の言動の特徴に関して、セラピストらから直面化・明確化され、またその心理的意味を解釈されることにより、徐々に他責から自責へ変化する参加者が認められた。その一方でセラピストによる介入に憤怒し、集団療法および個人療法の継続が困難となる参加者も認められた。

考察

研究1：当院のHIV陽性者にも受診中断、服薬アドヒアランス不良、引きこもり・無就労、アルコール依存、薬物乱用、感染リスクのある性行為など、行動面の障害を伴う心理的問題を有する者が一定数認められることが明らかとなった。中でも、自傷や自殺は高頻度で認められており、これらは陽性者の心理学的問題として臨床場面における援助の重要な焦点であると考えられる。

引きこもり等の社会的活動の低下や、自傷・自殺、性行為時のリスク行動、服薬アドヒアランス不良等の故意に自分を傷つける行動は、自尊感情の低さや自身の内面に向ける注意の弱さと関連することが明らかとなった。

これらの行動特性を有する陽性者には、自己拒否や自己軽蔑、自らの情緒の自覚の困難さと自己破壊的行動への置き換えといった心理的問題があることが推測される。また、内面に注意を向け、行動に置き換えている情緒に気づくよう促進する積極的介入が求められると考えられる。

なお今回心理尺度との関連が見られなかった行動（受診中断、飲酒）については、その心理的背景について今後さらに検討する必要があると考える。

研究2：64セッションの心理的作業を通して、今回の参加者の心理的問題が明確化されたと考えられる。「(HIV 同士だから) わかる」としつつも相互に理解がズレること、自身の問題を指摘されたり、他者からの承認が得られないと憤怒すること、他者の変化・気づき・関与を価値下げし、自身の成果を強調する

こと、自と他が融合しており、頻繁に投影が生じることといったこのグループの特徴は、適切な自他への評価と共感が不全である対人的 - 自己愛的な問題の現れであり、参加者の発達早期における傷つきがその原因であろうと推察される。他責から自責への変化は、当心理療法における対人 - 自己愛状態の変化を表すと推察される。

今回の集団心理療法の主な機能は、HIV 感染判明に伴う現実的な諸問題を解決する際の心理的なサポートとは異なり、参加者の主訴・問題と関連する無意識的動機・意志を取り扱うことであった。今回は6事例のみによる検討であるが、HIV 陽性者を対象に、それが集団であれ個人であれ、このような問題を心理療法のターゲットとする際には、自己愛の問題の取り扱いが必要であると思われる。しかしながらこの自己愛の問題を取り扱う介入は自己愛憤怒を引き起こしがちで、それは治療上必要かつ不可避の反応である反面、心理療法の中断につながりやすい。この治療中断の危険性を含め、自己愛に関する治療技法の習熟が求められる可能性が示唆されたと考える。

結論

研究1：行動面の障害を伴う問題とその心理的背景に関する調査を行った。社会的活動の低下や自傷的行動が、自尊感情の低さや自身の内面に向ける注意の弱さと関連することが明らかとなり、心理療法においてこれらの心理的問題を取り扱う必要性が示唆された。

研究2：集団心理療法を構造化した上で開始し、これまでに64セッションを行った。集団心理療法の経過において、今回の参加者には共通して対人関係と自己愛に関する問題が観察され、その治療技法の習熟の必要性が示唆された。

健康危険情報

該当なし

研究発表

1. 論文発表

手塚千恵子、安尾利彦：HIV 感染男性患者達のグループ・ワーク—自己愛を巡って—、集団心理療法、2017年、第33巻2号、234-235。

2. 学会発表

手塚千恵子、安尾利彦：HIV 感染男性患者達のグループ・ワーク—自己愛を巡って—、第34回集団心理療法学会、2017年3月、埼玉。

水木薫、安尾利彦、西川歩美、白阪琢磨：HIV 陽性者の行動面の障害を伴う問題の心理学的背景に関する研究。第31回日本エイズ学会学術集会総会、2018年11月、東京。

知的財産権の出願・取得状況（予定を含む）

該当なし

文献

中西幸子、赤穂理恵：HIV/AIDSにおける精神障害。総合病院精神医学 23(1)、35-41、2011。

Catalan J., Harding R., Sibley E., Clucas C., Croome N., Sherr L.: HIV infection and mental health: Suicidal behavior-Systematic review. Psychology, Health & Medicine, 16(5),588-611,2011.

Khalife S., Soffer J. & Cohen M.A.: Stigma of HIV and AIDS-Psychiatric Aspects. Handbook of AIDS Psychiatry. New York, Oxford University Press, 89-103, 2010.

安尾利彦、治川知子、富成伸次郎、廣常秀人、白阪琢磨：意欲低下、自殺念慮、対人恐怖を主訴とした、あるHIV陽性者との心理療法過程。日本エイズ学会誌 14(4)、342。

安尾利彦、仲倉高広、下司有加、中濱智子、東政美、鈴木成子、白阪琢磨：HIV陽性者のメンタルヘルスと心理的特性の関連性に関する研究。日本エイズ学会誌 17(4)、470、2015。

Hoffman MA. Interventions to facilitate adaptation to HIV disease. Counseling Clients with HIV Disease, 69-72,1996.

野島一彦、矢永由里子編：グループアプローチ。HIVと心理臨床、ナカニシヤ出版、73-79、2002。

内閣府政策統括官：若者の意識に関する調査（ひきこもりに関する実態調査）報告書。41-43、2009。

松本俊彦：アディクションとしての自傷。金剛出版、237-236、2011。

鈴木健二、武田綾、村上優、杠岳文、比江島誠人：薬物乱用のハイリスクグループへの介入に関する研究。薬物依存・中毒者の予防、医療およびアフターケアのモデル化に関する研究。平成14年度研究報告

書, 177-189, 2003.

松岡照之, 福居顯二: アルコール・薬物関連障害の病態と診断. 医学のあゆみ 233(12), 1131-1135, 2010.

井梅由美子, 平井洋子, 青木紀久代, 馬場禮子: 日本における青年期用対象関係尺度の開発. パーソナリティ研究 14, 181-193, 2006.

堀洋道, 山本真理子: 自意識尺度. 心理測定尺度集 I, 129-133, サイエンス社, 2001.

堀洋道, 山本真理子: 自尊感情尺度. 心理測定尺度集 I, 129-133, サイエンス社, 2001.

Kernberg OF.: Severe Personality Disorders: Psychotic Strategies. Yale University Press, New York, 1984.

HIV 陽性者の心理学的問題と援助に関する研究

研究分担者：安尾 利彦（独立行政法人国立病院機構 大阪医療センター 臨床心理室）

研究協力者：手塚千恵子（心理室森ノ宮）

森田 眞子（独立行政法人国立病院機構 大阪医療センター 臨床心理室）

富田 朋子（独立行政法人国立病院機構 大阪医療センター 臨床心理室）

宮本 哲雄（独立行政法人国立病院機構 大阪医療センター 臨床心理室）

速見 佳子（独立行政法人国立病院機構 大阪医療センター 臨床心理室）

西川 歩美（独立行政法人国立病院機構 大阪医療センター 臨床心理室）

水木 薫（独立行政法人国立病院機構 大阪医療センター 臨床心理室）

研究要旨

本研究では以下2つの研究を行った。研究1（行動面の障害の心理的背景に関する研究）：大阪医療センターを受診する陽性者のうち無作為抽出した300名を対象に、行動面の障害を伴う問題とその心理的背景に関する質問紙調査を行った。回収数は203（67.7%）、性別は男性が199名（98.0%）、性的指向は同性愛が138名（68.0%）であった。重回帰分析の結果、以下の行動に自尊感情による負の影響が認められた。無就労（ $R^2=.05^{**}$, $\beta =-.21^{**}$ ）、引きこもり（ $R^2=.05^{**}$, $\beta =-.23^{**}$ ）、自傷の「過食した」（ $R^2=.08^{***}$, $\beta =-.23^{**}$ ）など、自殺の「消えてしまいたい」念慮（ $R^2=.22^{***}$, $\beta =-.47^{***}$ ）・計画（ $R^2=.06^{**}$, $\beta =-.24^{**}$ ）・試み（ $R^2=.08^{***}$, $\beta =-.27^{***}$ ）。また以下の行動には自意識尺度の私的自意識による負の影響が認められた。抗HIV薬を医師の指示通りに内服しない（ $R^2=.03^*$, $\beta =-.18^*$ ）、コンドーム不使用（ $R^2=.05^*$, $\beta =-.25^{***}$ ）、自傷の「過食した」（ R^2 前出, $\beta =-.15^*$ ）など、自殺の「本気で死にたい」念慮（ R^2 前出, $\beta =-.25^*$ ）。受診中断、飲酒には心理尺度との関連は認められなかった。引きこもり等の社会的活動の低下や、自傷・自殺、性行為時のリスク行動、服薬アドヒアランス不良等の故意に自分を傷つける行動が、自尊感情の低さや自身の内面に向ける注意の弱さと関連することが明らかとなった。これらの行動特性を有する陽性者には、自己拒否や自己軽蔑、自らの情緒の自覚の困難さと自己破壊的行動への置き換えといった心理的問題があることが推測される。また、内面に注意を向け、行動に置き換えられた情緒に気づくよう促進する積極的介入が求められると考えられる。研究2（HIV陽性者の集団心理療法に関する研究）：孤立しやすい背景を持つHIV陽性者にとって、集団心理療法が有効な介入であることが指摘されてきており（Hoffman, 1996）、わが国においてもHIV陽性者の集団心理療法の実践報告がなされている（野島ら, 2001）ものの、個人心理療法に比べて集団心理療法という治療モダリティの実践の報告は少ない。そこで本研究は、3名から6名のHIV陽性者で構成される、定期的・継続的な集団心理療法を実施し、そのプロセスの分析をもとに、HIV陽性者の心理学的問題および臨床心理学的援助方法について明らかにすることを目的とする。集団心理療法は、現在何らかの心理的問題で個人心理療法を受けている陽性者で、隔週1回80分間、少なくとも6か月間以上参加すると決めた者を対象とした。これまでに7名の陽性者をリクルートし、集団心理療法を64セッション開催した。この集団心理療法の経過において、参加者には共通して、発達早期の傷つきが要因と思われる対人-自己愛に関する問題が観察された。個人および集団の心理療法において、この対人-自己愛の問題を取り扱う技法の習熟が求められることが示唆された。

研究目的

周知のとおり、HIV感染症に対しては根強い社会的偏見が存在する。背景には感染経路についての偏見、犠牲者非難、同性愛嫌悪、HIV感染症に関する

誤解などが考えられるが、これらに基づくステイグマによって、HIV陽性者は恥を体験し、抑うつや不安の程度を悪化させることが指摘されている（Khalifeら, 2010）。

中西ら（2011）によると、陽性者は適応障害やうつ病などを発症することが多く、適応障害の中心は不安あるいは抑うつ気分であるが、対応が困難となるのは行動面の障害を伴う場合であり、具体的には外来通院の中断、内服の自己中断、職場放棄、引きこもり、大量飲酒、薬物乱用が挙げられる。HIV陽性者における自殺・自傷に関しては、HIV陽性者の検死のうち9.4%が自殺をしており、また故意に自己を傷つける行動（Deliberate Self Harm）が20%、自殺念慮が26.9%、自暴自棄・自傷は19.7%、それぞれ認められるという（Catalanら、2011）。

このようにHIV陽性者の心理学的問題については、精神症状のほかにも行動面の障害を伴う問題が数多く指摘されており、またそれらの発生状況を明らかにする研究は盛んになされている。ただし、これらの問題の背景にどのような心理的特性があるのかについて理解するための研究は、十分になされているとは言い難い。

筆者ら（2012）は、意欲低下、自殺念慮、対人恐怖、アルコール多飲といった心理的、行動的問題を有するHIV陽性者との心理療法において、それらの問題を恥や他者との交流遮断という対人関係上の問題から考察している。また、HIV陽性者の抑うつや不安などの症状と、スティグマによる恥の体験、他者からの評価への過敏さ、見捨てられ不安などが関連することを明らかにした（2015）。HIV陽性者の精神症状だけでなく、行動面の障害を伴う問題の心理的背景については、今後さらに検討が必要であり、その両方の面に効果的な心理療法を実践していくためには、上記の問題を有するHIV陽性者の心理的、行動的問題と心理療法におけるその取り扱いについて明確化することが不可欠であると考ええる。

また、孤立しやすい背景を持つHIV陽性者にとって、集団心理療法が有効な介入であることが指摘されてきており（Hoffman、1996）、わが国においてもHIV陽性者の集団心理療法の実践報告がなされている（野島ら、2001）。その一方で、わが国の各HIV診療施設やNPO等においては、個人（治療者1名、クライアント1名）のカウンセリングや心理療法が主に実施されており、集団心理療法の実践の報告は少ない。また心理的援助を目的に集団を対象とする介入についての実践や報告はされているが、多くが単回あるいは短期間の介入であり、定期的で長期にわたる構造化された集団心理療法の実践は、わが国

においてはほとんどなされていない。

よって、本研究においてHIV陽性者を対象とした定期的かつ一定期間にわたる集団心理療法を実施し、そのプロセスを分析することを通して、集団心理療法の体験がHIV陽性者に及ぼす心理的影響について検討することは、HIV陽性者を対象とした心理的援助の充実に資する上で、十分社会的意義を有すると考える。このような集団心理療法の研究は、HIV陽性者を対象とした集団心理療法および個人心理療法の両方について示唆が期待できると考える。

そこで本研究は、研究1：HIV陽性者の心理学的問題、特に行動面の障害を伴う問題（自傷行為、物質使用、引きこもり・職場放棄、保健行動の不適切さ等）について、その心理的背景および臨床心理学的援助方法について明確化すること、および、研究2：3名から6名のHIV陽性者で構成される、定期的・継続的で、精神分析的に方向づけられた集団心理療法を実施し、そのプロセスの事例検討をもとに、HIV陽性者の心理的問題および臨床心理学的援助方法を明らかにすることを目的とする。

研究方法

研究1：2015年9月末までに当院感染症内科に初診で受診したHIV陽性者のうち、死亡・転院・2016年10月現在で中断中の患者、日本語以外を母国語とする患者を除き、無作為抽出した300名を対象とした。無記名・自記式の質問紙を配布した。

質問紙は、基本属性、行動面の障害を伴う問題の有無を問う項目、パーソナリティ特性を捉えるための心理尺度で構成された。行動面の障害を伴う問題については、受診中断（当院感染症内科への6か月以上の受診なしの有無）、服薬アドヒアランス不良（指示通りに内服しなかった経験の有無、自己判断による中断の有無）、感染リスクのある性行動（過去6ヶ月における挿入行為時のコンドーム不使用の有無）、無就労・引きこもり（内閣府調査（2009）の一部を用いる）、物質使用（アルコール依存についてはWHO/AUDIT、薬物乱用についてはDAST-10日本語訳を一部改変して用いる）、自殺（松本（2011）を参考に、自殺の念慮・計画・試みの有無を問う）、自傷（松本（2011）を参考に、切る・刺す等の自傷行為、喫煙、食行動異常の有無を問う）を取り上げる。パーソナリティ特性を捉えるための心理尺度としては、次の3つを用いた。自尊感情尺度：ローゼンバー

グにより作成された自尊感情尺度を日本語訳した尺度で、10項目から成る（山本ら、1982）。自意識尺度：自分自身に対してどの程度注意を向けやすいかの個人差を測定する尺度で、公的自意識（外見や他者に対する行動など、外から見える自己の側面に注意を向ける程度）11項目、および、私的自意識（自分の内面・気分などに注意を向ける程度）10項目の、合計21項目から成る（菅原、1984）。対象関係尺度：対人場面での行動・態度を規定する、内的な自己と他者の関係性に関する表象を測定する尺度で、29項目から成る（井梅ら、2006）。

分析はSPSS Ver.23.0を使用し、単純集計、および、各心理尺度の行動面の障害を伴う問題への影響について重回帰分析を行った。なお、対象関係尺度および自意識尺度の公的自意識については、他の心理尺度との間に相関が見られたため、今回の結果からは除外した。

研究2：大阪医療センターに通院するHIV陽性者3名～6名から構成される、定期的・継続的な集団心理療法を構造化して実施する。集団心理療法の枠組みは、隔週で1回80分間、リクルートの対象は何らかの心理的問題のために個人心理療法を受けており、最短でも6ヶ月間参加できる見込みのあるHIV陽性者とする。集団心理療法のプロセスを分析する。

（倫理面への配慮）

研究1・研究2ともに臨床研究審査委員会に相当する大阪医療センター受託研究審査委員会による承認を得た（研究1：承認番号16060、研究2：承認番号15052）。

研究結果

研究1：配布数300、回収数203、回収率は67.7%であった。基本属性としては男性が199名（98.0%）、平均年齢は49.0歳、性的指向は同性愛が138名（68.0%）、異性愛が29名（14.3%）、両性愛が25名（12.7%）であった。203名（100%）が抗HIV薬を処方されていた。122名（60.1%）に過去6ヶ月間に挿入を伴う性行為の経験があった。

行動面の障害を伴う問題の発生状況は次のとおりである。受診中断あり：16名（7.9%）。抗HIV薬を医師の指示通りに服用しない経験あり：123名（61.8%、1ヶ月平均回数は2.5回）。自己判断での抗HIV薬の服用中止：12名（6.1%、平均中止期間は4

か月間）。無就労：39名（19.4%）。引きこもり：41名（20.8%）。アルコール依存症の疑い：11名（5.4%）。薬物使用あり：16名（7.9%）、うち乱用の程度が「重篤」：6名（37.5%）。挿入行為時のコンドーム不使用あり：55名（49.5%）。なんらかの自傷あり：137名（67.5%）、うち過食：57名（28.1%）、太ることへの強い恐怖：48名（23.6%）、こぶしで体や壁を殴る：24名（11.8%）、頭部強打：15名（7.4%）。自殺念慮・計画・試みのいずれかあり：105名（51.7%）、うち「消えてしまいたい」の念慮あり：95名（46.8%）、「本気で死にたい」の念慮あり：79名（38.9%）、計画あり：29名（14.3%）、試みあり：19名（9.4%）。

各心理尺度の行動面の障害を伴う問題への影響に関する重回帰分析の結果、以下の行動に自尊感情による負の影響が認められた。無就労（ $R^2=.05^{**}$, $\beta =-.21^{**}$ ）、引きこもり（ $R^2=.05^{**}$, $\beta =-.23^{**}$ ）、自傷の「過食した」（ $R^2=.08^{***}$, $\beta =-.23^{**}$ ）・「身体を噛んだ」（ $R^2=.06^{**}$, $\beta =-.26^{**}$ ）・「身体を切った」（ $R^2=.04^*$, $\beta =-.15^{**}$ ）・「頭を壁にぶつけた」（ $R^2=.05^{**}$, $\beta =-.18^{**}$ ）、自殺の「消えてしまいたい」念慮（ $R^2=.22^{***}$, $\beta =-.47^{***}$ ）・「本気で死にたい」念慮（ $R^2=.20^{***}$, $\beta =-.42^{***}$ ）・計画（ $R^2=.06^{**}$, $\beta =-.24^{**}$ ）・試み（ $R^2=.08^{***}$, $\beta =-.27^{***}$ ）、物質使用の「近親者から使用を責められた」（ $R^2=.55^{**}$, $\beta =-.74^{***}$ ）。また以下の行動には自意識尺度の私的自意識による負の影響が認められた。抗HIV薬を医師の指示通りに内服しない（ $R^2=.03^*$, $\beta =-.18^*$ ）、コンドーム不使用（ $R^2=.05^*$, $\beta =-.25^{***}$ ）、自傷の「過食した」（ R^2 前出, $\beta =-.15^*$ ）・「壁を殴った」（ $R^2=.04^*$, $\beta =-.15^*$ ）・「強く皮膚をつねった」（ $R^2=.04^*$, $\beta =-.15^*$ ）、自殺の「本気で死にたい」念慮（ R^2 前出, $\beta =-.25^*$ ）。受診中断、飲酒には心理尺度との関連は認められなかった。

研究2：これまでに7名のHIV陽性者をリクルートした。参加を取りやめた1名を除き、6名が集団心理療法に参加した。2016年1月より集団心理療法を開始し、2018年1月末現在で64セッションを実施した。

6名の参加者の感染経路は全員性行為であり、性別は全て男性、年代は30歳代～60歳代である。各メンバーの主訴・問題としては、「HIV差別への怒り」「障害受容困難」などHIV感染と関連するテーマだけでなく、「抑うつ」「イライラ」「意識消失発作」「醜貌恐怖」などの精神症状、「浪費」「性行動への依存」「物質依存」などの行動面の障害を伴う問題、「言い

たいことが言えない」などの対人関係に関する問題が認められた。集団心理療法にはセラピスト2名が加わった。約束事として「集団療法で話し合われた内容を他で話さない」「暴力禁止」「休まない」「集団療法外で付き合わない」「自分についてできるだけ広く深く話す」、オリエンテーションとして「参加者はHIV感染と個人心理療法実施が共通。個人療法の目的を進めるために、コンバインドされた集団心理療法を行う」「他の参加者の気持ちを考えて語ると、自他の役に立つ」を伝え、参加者の了承を得た上で開始した（新規参加者が加わるたびに、同じ内容の約束事とオリエンテーションを行った）。

集団心理療法の経過においては、下記が特徴的に観察された。

・複数の参加者が、欠席や遅刻によってそれまでの話題を聞いていなくても「HIV同士だから聞かなくてもわかる」と主張した。この例のように、参加者同士は表面的には互いに同意・賛同を示すものの、実際には相互の理解にズレが生じていることが頻繁に認められた。ある参加者が「職場で自分の話がズレると注意されるが、自分ではよくわからない」という自身の問題を述べたが、これはこのグループ参加者全員に共通する特徴であった。また、自身の問題を他の参加者が理解できるように伝えることや、他者の問題を適切に理解することに困難があった。

・参加者には、自分自身やグループ内に共通する心理的問題について考えることの困難さ、セラピストやグループによって万能的解決方法が提示される期待、他責的な態度が認められた。セラピストによって自身の問題を指摘されたり、セラピストや他の参加者からの承認が得られなかったり、自分の思うようにセラピストや他の参加者から理解されないと、参加者は様々な反応（グループ内交流から引きこもる、話を逸らす、憤怒する、集団心理療法から離脱する、など）を示した。

・他の参加者の指摘によってある参加者の自己理解が進んだときに、その自己理解を得た参加者は、他の参加者の援助ではなく自力（あるいは個人療法での作業）による気づきであるとした。別の参加者は、セラピストの介入によって展開した他の参加者に関する話題について、自分の発言が話題を進展させた、あるいは、他の参加者の情緒を誘発したと主張した。

・ある参加者の気づきや変化を、別の参加者が価値下げする言動が認められた。また、一人が長々と一

方的に話をすることでグループの場や時間を占有する、他の参加者の情緒や都合を十分認識しない、といった特徴も認められた。

・投影の機制（自分の怒りをセラピストの怒りだとする）、言葉で説明しなくても他者が分かってくれるという期待、自分と他者の間にある境界を否認するなど、自他融合状態が頻繁に観察された。

・各参加者が持つ問題の無意識的な動機・意志や、グループ内で観察された上記の言動の特徴に関して、セラピストらから直面化・明確化され、またその心理的意味を解釈されることにより、徐々に他責から自責へ変化する参加者が認められた。その一方でセラピストによる介入に憤怒し、集団療法および個人療法の継続が困難となる参加者も認められた。

考察

研究1：当院のHIV陽性者にも受診中断、服薬アドヒアランス不良、引きこもり・無就労、アルコール依存、薬物乱用、感染リスクのある性行為など、行動面の障害を伴う心理的問題を有する者が一定数認められることが明らかとなった。中でも、自傷や自殺は高頻度で認められており、これらは陽性者の心理学的問題として臨床場面における援助の重要な焦点であると考えられる。

引きこもり等の社会的活動の低下や、自傷・自殺、性行為時のリスク行動、服薬アドヒアランス不良等の故意に自分を傷つける行動は、自尊感情の低さや自身の内面に向ける注意の弱さと関連することが明らかとなった。

これらの行動特性を有する陽性者には、自己拒否や自己軽蔑、自らの情緒の自覚の困難さと自己破壊的行動への置き換えといった心理的問題があることが推測される。また、内面に注意を向け、行動に置き換えている情緒に気づくよう促進する積極的介入が求められると考えられる。

なお今回心理尺度との関連が見られなかった行動（受診中断、飲酒）については、その心理的背景について今後さらに検討する必要があると考える。

研究2：64セッションの心理的作業を通して、今回の参加者の心理的問題が明確化されたと考えられる。「(HIV同士だから)わかる」としつつも相互に理解がズレること、自身の問題を指摘されたり、他者からの承認が得られないと憤怒すること、他者の変化・気づき・関与を価値下げし、自身の成果を強調する

こと、自と他が融合しており、頻繁に投影が生じることといったこのグループの特徴は、適切な自他への評価と共感が不全である対人的 - 自己愛的な問題の現れであり、参加者の発達早期における傷つきがその原因であろうと推察される。他責から自責への変化は、当心理療法における対人 - 自己愛状態の変化を表すと推察される。

今回の集団心理療法の主な機能は、HIV 感染判明に伴う現実的な諸問題を解決する際の心理的なサポートとは異なり、参加者の主訴・問題と関連する無意識的動機・意志を取り扱うことであった。今回は6事例のみによる検討であるが、HIV 陽性者を対象に、それが集団であれ個人であれ、このような問題を心理療法のターゲットとする際には、自己愛の問題の取り扱いが必要であると思われる。しかしながらこの自己愛の問題を取り扱う介入は自己愛憤怒を引き起こしがちで、それは治療上必要かつ不可避の反応である反面、心理療法の中断につながりやすい。この治療中断の危険性を含め、自己愛に関する治療技法の習熟が求められる可能性が示唆されたと考える。

結論

研究1：行動面の障害を伴う問題とその心理的背景に関する調査を行った。社会的活動の低下や自傷的行動が、自尊感情の低さや自身の内面に向ける注意の弱さと関連することが明らかとなり、心理療法においてこれらの心理的問題を取り扱う必要性が示唆された。

研究2：集団心理療法を構造化した上で開始し、これまでに64セッションを行った。集団心理療法の経過において、今回の参加者には共通して対人関係と自己愛に関する問題が観察され、その治療技法の習熟の必要性が示唆された。

健康危険情報

該当なし

研究発表

1. 論文発表

手塚千恵子、安尾利彦：HIV 感染男性患者達のグループ・ワーク—自己愛を巡って—、*集団心理療法*、2017年、第33巻2号、234-235。

2. 学会発表

手塚千恵子、安尾利彦：HIV 感染男性患者達のグループ・ワーク—自己愛を巡って—、第34回*集団心理療法学会*、2017年3月、埼玉。

水木薫、安尾利彦、西川歩美、白阪琢磨：HIV 陽性者の行動面の障害を伴う問題の心理学的背景に関する研究。第31回*日本エイズ学会学術集会総会*、2018年11月、東京。

知的財産権の出願・取得状況（予定を含む）

該当なし

文献

中西幸子、赤穂理恵：HIV/AIDSにおける精神障害。*総合病院精神医学* 23(1)、35-41、2011。

Catalan J., Harding R., Sibley E., Clucas C., Croome N., Sherr L.: HIV infection and mental health: Suicidal behavior-Systematic review. *Psychology, Health & Medicine*, 16(5),588-611,2011.

Khalife S., Soffer J. & Cohen M.A.: Stigma of HIV and AIDS-Psychiatric Aspects. *Handbook of AIDS Psychiatry*. New York, Oxford University Press, 89-103, 2010.

安尾利彦、治川知子、富成伸次郎、廣常秀人、白阪琢磨：意欲低下、自殺念慮、対人恐怖を主訴とした、あるHIV陽性者との心理療法過程。*日本エイズ学会誌* 14(4)、342。

安尾利彦、仲倉高広、下司有加、中濱智子、東政美、鈴木成子、白阪琢磨：HIV陽性者のメンタルヘルスと心理的特性の関連性に関する研究。*日本エイズ学会誌* 17(4)、470、2015。

Hoffman MA. Interventions to facilitate adaptation to HIV disease. *Counseling Clients with HIV Disease*, 69-72,1996.

野島一彦、矢永由里子編：グループアプローチ。HIVと心理臨床、ナカニシヤ出版、73-79、2002。

内閣府政策統括官：若者の意識に関する調査（ひきこもりに関する実態調査）報告書。41-43、2009。

松本俊彦：アディクションとしての自傷。金剛出版、237-236、2011。

鈴木健二、武田綾、村上優、杠岳文、比江島誠人：薬物乱用のハイリスクグループへの介入に関する研究。薬物依存・中毒者の予防、医療およびアフターケアのモデル化に関する研究。平成14年度研究報告

書, 177-189, 2003.

松岡照之, 福居顯二: アルコール・薬物関連障害の病態と診断. 医学のあゆみ 233(12), 1131-1135, 2010.

井梅由美子, 平井洋子, 青木紀久代, 馬場禮子: 日本における青年期用対象関係尺度の開発. パーソナリティ研究 14, 181-193, 2006.

堀洋道, 山本真理子: 自意識尺度. 心理測定尺度集 I, 129-133, サイエンス社, 2001.

堀洋道, 山本真理子: 自尊感情尺度. 心理測定尺度集 I, 129-133, サイエンス社, 2001.

Kernberg OF,: Severe Personality Disorders: Psychotic Strategies. Yale University Press, New York, 1984.

HIV 感染制御研究室

室長 渡邊 大

当研究室は、白阪琢磨が室長を兼任しているエイズ先端医療開発室と共同で、HIV 感染症の診療における多く問題に対して研究を行っております。

近年の抗 HIV 療法の進歩により、多くの症例でウイルス抑制が得られるようになりました (Jpn J Infect Dis. 2017)。しかし、長期間生存している潜伏感染細胞を駆逐できないが故に、一生の内服加療を強いられます。細胞中の残存プロウイルス量は、抗 HIV 療法を行っている場合、潜伏感染細胞数を示していると考えられています。我々は残存プロウイルス量の高感度の測定法の開発を行い、早期に治療を開始した症例では残存プロウイルス量が低く抑えられていることを明らかにしました (BMC Infect Dis. 2011)。

抗 HIV 療法によって長期間血中ウイルス量が測定感度未満に押さえられていたとしても、免疫系は改善に回復したわけではありません。その例として、ウイルス量が抑えられていた症例においても血中インターフェロン γ が持続的に高値を示す症例が存在すること (Viral Immunol. 2010)、水痘帯状疱疹ウイルスに対する細胞性免疫の回復は不十分なこと (J Med Virol. 2013) を報告しました。抗 HIV 薬の副作用も完全には解決されていません。テノホビルによって血中ミトコンドリア CK 活性は上昇すること (J Infect Chemother. 2012)、ドルテグラビルの神経精神系有害事象はその血中濃度や UGT1A1 遺伝子多型と関連すること (BMC Infect Dis. 2017)、ドルテグラビル投与例における腎機能評価が困難であること (J Infect Chemother. 2018) ddI の長期内服に伴う非硬性門脈圧亢進症を呈した症例 (J Infect Chemother. 2014) を報告しました。

薬剤耐性検査や薬剤血中濃度は HIV 感染者の治療において欠かすことのできない検査です。当研究室ではこれらに関する研究も行っております (Antiviral Res. 2010, J Infect Chemother. 2015, Inter Med. 2016)。

抗 HIV 療法以外にも、さまざまな課題が残されています。急性 HIV 感染症 (AIDS Res Ther. 2015)、ヒトヘルペス 8 感染症 (J Infect Chemother. 2017, Inter Med. 2014)、ウイルス性肝炎、発がんの問題などがあげられます。当研究室では、厚生労働省エイズ対策研究事業を中心に、この病態における問題点の解明に取り組み、多施設共同臨床調査や臨床的課題について取り組んでおります。

【2017年度 研究業績発表】

A-0

Miyazaki N, Sugiura W, Gatanaga H, Watanabe D, Yamamoto Y, Yokomaku Y, Yoshimura K, Matsushita S, the Japanese HIV-MDR Study Group: High antiretroviral coverage and viral suppression prevalence in Japan: an excellent profile for downstream HIV care spectrum. 「Jpn J Infect Dis.」70(2):P.158-160, 2017 年 3 月 24 日

Watanabe D, Yamamoto Y, Suzuki S, Ashida M, Matsumoto E, Yukawa S, Hirota K, Ikuma M, Ueji T, Kasai D, Nishida Y, Uehira T, Shirasaka T: Cross-sectional and longitudinal investigation of human

herpesvirus 8 seroprevalence in HIV-1-infected individuals in Osaka, Japan. 「J Infect Chemother.」 23(4):P.201-205、2017年4月

Yagura H, Watanabe D, Kushida H, Tomishima K, Togami H, Hirano A, Takahashi M, Hirota K, Ikuma M, Kasai D, Nishida Y, Yoshino M, Yamazaki K, Uehira T, Shirasaka T : Impact of UGT1A1 gene polymorphisms on plasma dolutegravir trough concentrations and neuropsychiatric adverse events in Japanese individuals infected with HIV-1. 「BMC Infect Dis.」 7(1) : P.622、2017年9月16日

Yukawa S, Watanabe D, Uehira T, Shirasaka T: Clinical benefits of using inulin clearance and cystatin C for determining glomerular filtration rate in HIV-1-infected individuals treated with dolutegravir. 「J Infect Chemother.」 24(3):P.199-205、2018年3月

A-3

光井絵理、加藤 研、安部倉竹紗、種田灯子、廣田和之、矢嶋敬史郎、渡邊 大、上平朝子、白阪琢磨、瀧 秀樹 : HIV 感染症治療中に1型糖尿病とバセドウ病を発症し免疫再構築症候群と考えられた1例「糖尿病」60(4):P.295-300、日本糖尿病学会、2017年4月30日。

A-5

渡邊 大 : ゲンボイヤ[®]配合錠の使用経験「第91回日本感染症学会総会・学術講演会（ランチョンセミナー8）記録集」、2017年7月発行

渡邊 大 : 近畿ブロックの HIV 医療体制整備。厚生労働行政推進調査事業費補助金（エイズ対策政策研究事業）「HIV 感染症の医療体制の整備に関する研究」平成29年度研究報告書、P.48-51、2018年3月31日

B-2

Togami H, Yagura H, Hirano A, Takahashi M, Yoshino M, Abe K, Oishi Y, Takematsu S, Kakigoshi S, Yamamoto Y, Ito T, Yamamoto M, Mizumori Y, Kanei O, Utsumi M, Watanabe D, Yokomaku Y, Shirasaka T: Correlation between UGT1A1*6 and *28 genotype, and plasma dolutegravir concentrations in Japanese HIV-1 infected patients. 9th IAS Conference on HIV Science (MOPEB0328), Paris, France, 2017年7月24日

B-3

渡邊 大 : Tenofovir Alafenamide based regimen の臨床的有用性（ランチョンセミナー）ゲンボイヤ[®]配合錠の使用経験。第91回日本感染症学会総会・学術講演会、東京、2017年4月6日

渡邊 大 : プロテアーゼ阻害剤による抗 HIV 治療戦略（ランチョンセミナー）。プレジコビックス[®]配合錠の臨床的役割と使用経験。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月25日

B-4

中内崇夫、富島公介、矢倉裕輝、山本雄大、湯川理己、新井 剛、廣田和之、伊熊素子、上地隆史、笠井大介、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、佐光留美、土井敏行、山崎邦夫、白阪

琢磨：当院におけるエルビテグラビル/コビスタット/エムトリシタビン/テノホビルアラフェナミド配合錠の初回導入例の使用状況。第27回抗ウイルス療法学会学術集会・総会、熊本、2017年5月20日

廣田和之、西田恭治、矢口愛弓、山本雄大、新井 剛、湯川理己、上地隆史、伊熊素子、笠井大介、渡邊 大、上平朝子、巽 啓司、白阪琢磨：血栓止血子宮全摘術の止血管理に半減期延長型VIII因子製剤を使用した血友病A保因者の一例。第39回血栓止血学会学術集会、名古屋、2017年6月10日

白阪琢磨、渡邊 大、山本政弘、金井 修、上平朝子：感染早期患者に対するMVCによる強化療法の効果に関する研究。第71回国立病院総合医学会、香川、2017年11月10日

渡邊 大、上平朝子、鈴木佐知子、松本絵梨奈、笠井大介、廣田和之、南 留美、高濱宗一郎、林 公一、澤村守夫、山本政弘、白阪琢磨：高IFN- γ 血症と高IL-6血症を呈するHIV-1感染者の臨床的特徴に関する検討。第71回国立病院総合医学会、香川、2017年11月10日

白阪琢磨、渡邊 大、山本政弘、南 留美、金井 修、上平朝子：HIV感染早期患者に対するMVCを加えた強化療法の効果と安全性に関する研究。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月24日

新井 剛、渡邊 大、上地隆史、山本雄大、湯川理己、廣田和之、伊熊素子、笠井大介、西田恭治、永井崇之、宮田順之、吉村幸浩、立川夏夫、上平朝子、白阪琢磨：アドヒアランス良好かつ耐性変異が無いウイルスへの抗HIV療法でも、長期間血中HIV-1-RNA量低下を認めなかった2例。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月24日

齊藤誠司、村上由佳、飯塚暁子、松井綾香、野村直幸、木梨貴博、坂田達朗、草川 茂、木内 英、前島雅美、渡邊 大：妊婦HIVスクリーニング検査からHIV-2の診断に到った日本人妊婦例。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月24日

渡邊 大、矢倉裕輝、櫛田宏幸、富島公介、戸上博昭、平野 淳、高橋昌明、廣田和之、伊熊素子、笠井大介、西田恭治、吉野宗宏、上平朝子、白阪琢磨：ドルテグラビルの血中濃度とUGT1A1遺伝子多型が、ドルテグラビル投与後の神経精神系有害事象の発生に与える影響についての検討。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月25日

山本雄大、渡邊 大、湯川理己、来住知美、廣田和之、伊熊素子、上地隆史、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨：当院におけるヒトヘルペスウイルス8型関連疾患の現状。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月25日

矢倉裕輝、中内崇夫、富島公介、山本雄大、湯川理己、廣田和之、伊熊素子、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨：日本人 HIV-1 感染症症例におけるテノホビルアラフェナミドを含む1日1回1錠製剤投与時のテノホビル血漿トラフ濃度に関する検討。第31回日本エイズ学会学術集会、東京、2017年11月25日

富島公介、中内崇夫、矢倉裕輝、山本雄大、湯川理己、廣田和之、伊熊素子、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨：リトナビル併用ダルナビルからダルナビル・コピシスタット配合剤へ変更した症例の臨床検査値および自覚症状の変化。第31回日本エイズ学会学術集会、東京、2017年11月25日

岡崎玲子、蜂谷敦子、瀧永博之、渡邊 大、長島真美、貞升健志、近藤真規子、南 留美、吉田 繁、小島洋子、森 治代、内田和江、椎野禎一郎、加藤真吾、豊嶋崇徳、佐々木悟、伊藤俊広、猪狩英俊、寒川 整、石ヶ坪良明、太田康男、山元泰之、福武勝幸、古賀道子、林田庸総、岡 慎一、松田昌和、重見 麗、濱野章子、横幕能行、渡邊珠代、藤井輝久、高田清式、山本政弘、松下修三、藤田次郎、健山正男、岩谷靖雅、吉村和久：国内新規HIV/AIDS診断症例における薬剤耐性HIV-1の動向。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月25日

近藤真規子、佐野貴子、長島真美、貞升健志、蜂谷敦子、横幕能行、林田庸総、瀧永博之、渡邊 大、吉村幸浩、立川夏夫、岩室紳也、井戸田一朗、今井光信、加藤真吾、椎野禎一郎、吉村和久：日本で流行するHIV-1 CRF01_AEと周辺アジア諸国における流行株との関連。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月26日

B-6

渡邊 大、上平朝子、鈴木佐知子、松本絵梨奈、笠井大介、廣田和之、南 留美、高濱宗一郎、林 公一、澤村守夫、山本政弘、白阪琢磨：高IFN- γ 血症を呈するHIV-1感染者の臨床的特徴に関する検討。第31回近畿エイズ研究会・学術集会、大阪、2017年6月3日

矢倉裕輝、中内崇夫、富島公介、渡邊 大、福田利明、佐光留美、上平朝子、山崎邦夫、白阪琢磨：UGT1A1 遺伝子多型とドルテグラビル投与時の中枢神経系副作用症状発現の関連。第2回日本臨床薬理学会近畿地方会、大阪、2017年6月10日

B-7

渡邊 大：HIV感染症、併発症の最新治療について。北陸ブロック医療等相談会、福井、2017年9月30日。

B-8

渡邊 大：HIV感染症の診断。平成29年度大阪大学医学部環境医学・公衆衛生実習、大阪、2017年6月8日

渡邊 大：HIV/AIDSの基礎知識（HIV感染症・抗体検査・日和見疾患・治療）。平成29年度HIV/AIDS看護師研修初心者コース、大阪、2017年9月4日

渡邊 大：HIV感染症の診断。平成29年度奈良県立医科大学健康政策医学実習、大阪、2017年9月12日

渡邊 大：HIV感染症の診断。平成29年度HIV感染症研修会、大阪、2017年10月2日

渡邊 大、矢倉裕輝：初回抗 HIV 療法の実際。平成 29 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2017 年 10 月 2 日

渡邊 大：HIV 急性感染。平成 29 年 HIV 感染症医師実地研修会（1 ヶ月コース）、大阪、2017 年 10 月 11 日

渡邊 大：抗 HIV 療法の副作用と薬剤耐性。平成 29 年 HIV 感染症医師実地研修会（1 ヶ月コース）、大阪、2017 年 10 月 19 日

渡邊 大：HIV/AIDS の基礎知識（HIV 感染症・抗体検査・日和見疾患・治療）。平成 29 年度 HIV/AIDS 看護師研修初心者コース、大阪、2017 年 11 月 6 日

近畿ブロックのHIV医療体制整備

研究分担者 渡邊 大

(独) 国立病院機構大阪医療センター 臨床研究センター
HIV感染制御研究室 室長

研究要旨

本研究の目的は、近畿ブロックのHIV診療レベルの向上と連携強化、歯科や精神科疾患、救急医療、透析医療、長期療養の診療体制の整備などの課題の解決に資することにある。方法は主に、研修会の企画および実施と近畿ブロックにおける中核拠点病院打ち合わせ会議の開催である。各府県では中核拠点病院が中核となり診療が円滑に行われるようになってきている。その一方で、HIV感染者の一般医療への需要があり、拠点病院に加えて、一般の医療施設の参加が必要な状況であることが明らかになった。今後は、長期療養が必要なHIV感染者が、安心して療養できるような診療体制の整備が必要と考える。

A. 研究目的

近畿ブロックは滋賀・京都・大阪・兵庫・奈良・和歌山の2府4県からなる。全国の都道府県でHIV感染者・AIDS患者の報告数が2番目に多い大阪府が含まれるが、残りの5府県では大阪府ほどの報告件数はないものの、HIV診療における課題は少なくはない。大阪府においては、エイズ診療ブロック拠点病院（以下ブロック拠点病院）と中核拠点病院に、残りの府県においては中核拠点病院を含む特定の拠点病院に患者が集中する傾向にある。患者集中の問題はあるものの、各府県では中核拠点病院が中心となり抗HIV療法は円滑に行われている。その一方で、予後の改善したHIV感染者の長期治療において、HIV感染症以外の一般医療への需要が増加し始めている。例えば感冒や胃腸障害、整形外科的問題で遠方の急性期病院である拠点病院に受診するのではなく、近隣のクリニックや夜診を行っている病院の受診を希望する患者も少なくはない。このように拠点病院以外の医療施設の参加が必要な状況であることが明らかになってきた。長期療養が必要なHIV感染者が安心して療養できるような診療体制の整備、つまり拠点病院と拠点病院以外の病院との病連携や病診連携も踏まえての医療体制を整備する必要がある。このようなHIV感染症診療の質の変化に伴い、透析クリニック、精神疾患や要介護患者の受

け入れ施設などが少ないことは新たな課題となっており、診療上の種々の課題に伴った研修会の実施が必要である。

B. 研究方法

研修・教育に用いた資料は添付の通りであった。本研究班で作成した資料は「あなたに知ってほしいこと」(<http://www.onh.go.jp/khac/data/kanja-panfu12.pdf>)、「カウンセリングのご案内」、「HIVカウンセリング制度のご案内」、「Healthy&Sexy」(<http://www.onh.go.jp/khac/data/healthy-sexy2014.pdf>)の4点である。2点については当センターホームページからダウンロード可能である。

(倫理面への配慮)

研修・教育に用いた症例呈示では、患者個人が特定されない等の配慮を行った。

C. 研究結果

2017年度の研修会実施実績は添付の通りで、11件であった（開催予定を1件含む）。中核拠点病院および各自治体でも研修会が企画、主催された。講義形式のものが6件、ロールプレイも含まれるものが3件、臨床現場（診察等）も含まれるものが2件であり、講義形式のものが最も多かった。対象とな

った職種は医師（1件）・歯科医師（1件）・看護師（4件）・カウンセラー（1件）・MSW（1件）・多職種（3件）であり、多くの職種が対象となっていた。

情報発信においては、ホームページの運営は重要であるが、ホームページでは2つの点において改訂を行った。拠点病院外で発生したHIV感染者による医療従事者の血液・体液曝露（針刺しなど）、いわゆる「外部PEP」に関する情報のアップデートを行った。大阪府

（<http://www.pref.osaka.lg.jp/chikikansen/aids/harisasi.html>）や大阪府医師会（<http://oma-member.do.ai/info.html>）のホームページにも外部PEPの情報は掲載されているものの、最初に当センターのホームページで情報を確認する医療従事者も少なくなかった。この変更を行った以後、数例の外部PEP症例が当院外来を受診したが、全例スムーズに対応できていた。また、HTML/CSS/Javascriptを導入し、ホームページのプログラムの全面的書き換えを行った。これにより、スマートフォンやタブレットでの表示の最適化や、検索エンジン最適化、PCやスマートフォンなどでの表示の高速化が得られる予定である。院内のWEBサーバーのアップデートが終了次第、当センターのホームページのアップデートを行う予定である。

中核拠点病院会議を2017年10月14日に実施した。各中核拠点病院におけるHIV診療の課題において、行政の担当者とともに共通認識を持つ場とした。薬物依存症・高齢者・透析・外国人における医療機関と行政の連携については、次回の検討課題となった。

D. 考察

今年度も11件の研修を行った。注意すべきことは、近畿ブロックではこれらの研修会以外にも、多くの研修会を実施していることである。例えば、本研究班主催では薬剤師を主な対象とした研修会を行っていないが、それらの研修会は関西臨床カンファレンス（<http://www.kansai-hiv.com/index.html>）が主催で行っている。さらに、関西臨床カンファレンスでは薬剤師向けに加え、若手医師向け研修会（スキルアップセミナー等）・NGOやNPO交流会、カウンセリング部会なども行われている。研修・教育効果の評価方法については、今年度は十分なデータがなかったため、次年度の課題とした。昨年度より研修会の一部の講義でクリッカーを使用するようにし

た。アンケート調査では、クリッカーの使用に関しては概ね良好な回答が得られた。

上記のように、近畿ブロックでは中核拠点病院や行政が積極的に研修会を開催し、一般医療機関や施設のほか、各職種に向けた研修会が数多く開催された。大阪府の歯科診療においては、大阪府歯科医師会や行政が中心となりネットワークが形成された。即日で紹介できる歯科医院は減ったものの、受け入れに関して困るような状況はほぼ無くなった。しかし、一般医療機関や長期療養施設の受け入れが進んだとは言えず、HIV感染症が治療による予後の著しい改善に伴う慢性疾患であるという認識の周知と、改善に向けたさらなる取り組みが必要と考える。

受け入れをスムーズに行うためには、HIVの曝露後予防の対応が必要になってくる。この点も行政を中心に体制整備を行い、大阪府では11箇所のHIV感染予防に対する受け入れ病院が配置された。職業曝露後のファーストコンタクトとして、当院を選択する医療従事者が少なくないことを考慮して、今年度はホームページの改訂を行った。いまだに曝露源患者が不明の曝露でのPEPの希望やHIVスクリーニング陽性・確認検査陰性でのPEP継続に関する質問なども少なくなく、今後も継続的な情報発信・教育に努める必要がある。

E. 結論

近畿ブロックでは、中核拠点病院が各府県のHIV診療の中核を担うようになった。今後もブロック全体で質の高い診療を続けるためには、人材の育成、病院間連携の強化が必要と考えた。歯科診療、精神科疾患、長期療養、透析、救急医療の診療体制の整備も重要な課題である。拠点病院間や行政との連携の強化のみならず、地域全体との密な連携を伴ったHIV診療体制の構築が必要である。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

海外

- 1) Togami H, Yagura H, Hirano A, Takahashi M, Yoshino M, Abe K, Oishi Y, Takematsu S,

Kakigoshi S, Yamamoto Y, Ito T, Yamamoto M, Mizumori Y, Kanei O, Utsumi M, Watanabe D, Yokomaku Y, Shirasaka T. Correlation between UGT1A1*6 and *28 genotype, and plasma dolutegravir concentrations in Japanese HIV-1 infected patients. 9th IAS Conference on HIV Science (MOPEB0328), 24 July 2017, Paris, France

国内

- 1) 渡邊 大：Tenofovir Alafenamide based regimenの臨床的有用性（ランチョンセミナー）ゲンボイヤ®配合錠の使用経験。第91回日本感染症学会総会・学術講演会、東京、2017年4月6日
- 2) 中内崇夫、富島公介、矢倉裕輝、山本雄大、湯川理己、新井 剛、廣田和之、伊熊素子、上地隆史、笠井大介、渡邊 大、西田恭治、佐光留美、土井敏行、上平朝子、山崎邦夫、白阪琢磨。当院におけるエルビテグラビル/コビスタット/エムトリシタビン/テノホビルアラフェナミド配合錠の初回導入例の使用状況。第27回抗ウイルス療法学会学術集会・総会、熊本、2017年5月25日
- 3) 渡邊 大、上平朝子、鈴木佐知子、松本絵梨奈、笠井大介、廣田和之、南 留美、高濱宗一郎、林 公一、澤村守夫、山本政弘、白阪琢磨。高IFN- γ 血症を呈するHIV-1感染者の臨床的特徴に関する検討。第31回近畿エイズ研究会・学術集会、大阪、2017年6月3日
- 4) 廣田 和之、西田恭治、矢口愛弓、山本雄大、新井 剛、湯川理己、上地隆史、伊熊素子、笠井大介、渡邊 大、上平朝子、巽 啓司、白阪琢磨。血栓止血子宮全摘術の止血管理に半減期延長型VIII因子製剤を使用した血友病A保因者の一例。第39回血栓止血学会学術集会、名古屋、2017年6月10日
- 5) 渡邊 大。HIV感染症、併発症の最新治療について。北陸ブロック医療等相談会、福井、2017年9月30日。
- 6) 白阪琢磨、渡邊 大、山本政弘、金井 修、上平朝子。感染早期患者に対するMVCによる強化療法の効果に関する研究。第71回国立病院総合医学会、香川、2017年11月10日
- 7) 渡邊 大、上平朝子、鈴木佐知子、松本絵梨奈、笠井大介、廣田和之、南 留美、高濱宗一郎、林 公一、澤村守夫、山本政弘、白阪琢磨。高IFN- γ 血症と高IL-6血症を呈するHIV-1感染者の臨床的特徴に関する検討。第71回国立病院総合医学会、香川、2017年11月10日
- 8) 新井 剛、渡邊 大、上地隆史、山本雄大、湯川理己、廣田和之、伊熊素子、笠井大介、西田恭治、永井崇之、宮田順之、吉村幸浩、立川夏夫、上平朝子、白阪琢磨。アドヒアランス良好

かつ耐性変異が無いウイルスへの抗HIV療法でも、長期間血中HIV-1-RNA量低下を認めなかった2例。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月24日

- 9) 白阪琢磨、渡邊 大、山本政弘、南 留美、金井修、上平朝子。HIV感染早期患者に対するMVCを加えた強化療法の効果と安全性に関する研究。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月24日
- 10) 齊藤誠司、村上由佳、飯塚暁子、松井綾香、野村直幸、木梨貴博、坂田達朗、草川 茂、木内 英、前島雅美、渡邊 大。妊婦HIVスクリーニング検査からHIV-2の診断に到った日本人妊婦例。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月24日
- 11) 富島公介、中内崇夫、矢倉裕輝、山本雄大、湯川理己、廣田和之、伊熊素子、上地隆史、渡邊大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨。リトナビル併用ダルナビルからダルナビル・コビスタット配合剤へ変更した症例の臨床検査値および自覚症状の変化。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月25日
- 12) 矢倉裕輝、中内崇夫、富島公介、山本雄大、湯川理己、廣田和之、伊熊素子、上地隆史、渡邊大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨。日本人HIV-1感染症症例におけるテノホビルアラフェナミドを含む1日1回1錠製剤投与時のテノホビル血漿トラフ濃度に関する検討。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月25日
- 13) 渡邊 大、矢倉裕輝、櫛田宏幸、富島公介、戸上博昭、平野 淳、高橋昌明、廣田和之、伊熊素子、笠井大介、西田恭治、吉野宗宏、上平朝子、白阪琢磨。ドルテグラビルの血中濃度とUGT1A1遺伝子多型が、ドルテグラビル投与後の神経精神系有害事象の発生に与える影響についての検討。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月25日
- 14) 山本雄大、渡邊 大、湯川理己、来住知美、廣田和之、伊熊素子、上地隆史、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨。当院におけるヒトヘルペスウイルス8型関連疾患の検討。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月25日
- 15) 渡邊 大。プロテアーゼ阻害剤による抗HIV治療戦略（ランチョンセミナー）。プレジコビックス®配合錠の臨床的役割と使用経験。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月25日
- 16) 岡崎玲子、蜂谷敦子、湯永博之、渡邊 大、長島真美、貞升健志、近藤真規子、南 留美、吉田繁、小島洋子、森 治代、内田和江、椎野禎一郎、加藤真吾、豊嶋崇徳、佐々木悟、伊藤俊

広、猪狩英俊、寒川 整、石ヶ坪良明、太田康男、山元泰之、福武勝幸、古賀道子、林田庸総、岡 慎一、松田昌和、重見 麗、濱野章子、横幕能行、渡邊珠代、藤井輝久、高田清式、山本政弘、松下修三、藤田次郎、健山正男、岩谷靖雅、吉村和久。国内新規HIV/AIDS診断症例における薬剤耐性HIV-1の動向。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月25日

- 17) 近藤真規子、佐野貴子、長島真美、貞升健志、蜂谷敦子、横幕能行、林田庸総、瀧永博之、渡邊 大、吉村幸浩、立川夏夫、岩室紳也、井戸田一朗、今井光信、加藤真吾、椎野禎一郎、吉村和久。日本で流行するHIV-1 CRF01_AEと周辺アジア諸国における流行株との関連。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2017年11月26日

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

臨床疫学研究室

室長 三田英治

臨床疫学研究室は主に消化器疾患の病態を分子疫学面から検証し、最適な治療方法や安全性を検討しています。代表的な研究内容を示します。

C型肝炎に関しては、ペグインターフェロン・リバビリン併用療法で治療効果を規定した IL-28B の SNP が引き続きインターフェロンフリー治療でも重要な意味を持つかを検討しています。また心機能低下や腎機能低下症例に対する抗 HCV 療法の安全性を調査しています。Genotype 3型は1型や2型に比べても難治例と言えますが、ソホスブビル・リバビリン併用24週治療の有効性と安全性を検証しています。HIV 感染合併例でのインターフェロンフリー治療の成績もまとめており、抗レトロウイルス治療との薬物相互作用も検討しています。

次に B型肝炎では、核酸アナログの長期投与成績から導かれる耐性化の問題点を検討しています。そしてラミブジン・アデホビル併用療法効果不良例に対し、アデホビルを TDF に切り替えることの有効性と安全性を明らかにしました。現在はさらに TDF から TAF への切り替えを検証しています。近年散発的に発生している B型急性肝炎では genotype A が大半を占めますが、その特徴を解析し、慢性化への関与についても検討しています。また HIV 感染が B型急性肝炎の重症度に与える影響についても検討しています。

【2017年度 研究業績発表】

A-0

Sakakibara Y, Nakazuru S, Kodama Y, Mita E : Acute pancreatitis caused by cytomegalovirus-associated duodenal papillitis. Ann Gastroenterol. 31(1) : P122, 2018年1月

Akasaka T, Takeuchi Y, Ishida H, Mita E : A novel gel immersion technique using a bipolar needle-knife in endoscopic submucosal dissection for superficial gastrointestinal neoplasms. Ann Gastroenterol. 31(2) : P247, 2018年3-4月

Yoshio T, Tomida H, Iwasaki R, Horiuchi Y, Omae M, Ishiyama A, Hirasawa T, Yamamoto Y, Tsuchida T, Fujisaki J, Yamada T, Mita E, Ninomiya T, Michitaka K, Igarashi M : Effect of direct oral anticoagulants on the risk of delayed bleeding after gastric endoscopic submucosal dissection. Dig Endosc 29(6):686-694. 2017年9月

Morishita N, Hiramatsu N, Oze T, Urabe A, Tahata Y, Yamada R, Yakushijin T, Hosui A, Iio S, Yamada A, Hagiwara H, Mita E, Yamada Y, Ito T, Inada M, Katayama K, Yabuuchi I, Imai Y, Hikita H, Sakamori R, Yoshida Y, Tatsumi T, Hayashi N, Takehara T : Ultra-deep sequencing analysis of resistance-associated variants during retreatment with simeprevir-based triple therapy after failure of telaprevir-based triple therapy in patients with genotype 1 hepatitis C virus infection. Hepatol Res 47(8):773-782. 2017年7月

Hirao M, Yamada T, Michida T, Nishikawa K, Hamakawa T, Mita E, Mano M, Sekimoto M : Peritoneal Seeding after Gastric Perforation during Endoscopic Submucosal Dissection for Gastric Cancer. Dig Surg

2017年11月8日

A-2

中水流正一、三田英治：肝機能障害・高ビリルビン血症 一起因薬物の早期中止をー「乳がん薬物療法副作用マネジメントプロのコツ」増田慎三 編集、P.178-181、メジカルビュー社、東京、2017年9月14日

B-2

Shoji A, Hasegawa H, Fujii Y, Kato S, Kiyota R, Shinkai K, Tashiro T, Ishihara A, Iwasaki T, Tanaka T, Akasaka T, Sakakibara Y, Nakazuru S, Ishida H, Hirao M, Mita E : Efficacy and prognostic factor analysis in second-line chemotherapy for elderly patients with metastatic gastric cancer. American Society of Clinical Oncology 2018, San Francisco, 2018年1月18日

Nakamuta M, Mita E, Kiso S, Ohe K, Enjoji M : Nicotinamide ameliorates hepatic steatosis via sirtuin activation. European Association for the Study of the Liver, Rome, Italy, 2017年11月

Kato S, Yamada T, Fujii Y, Shoji A, Kiyota R, Shinkai K, Tashiro T, Ishihara A, Iwasaki T, Tanaka S, Hasegawa H, Sakakibara Y, Nakazuru S, Ishida H, Mita E : *Helicobacter pylori* infection status in human immunodeficiency virus-positive patients. United European Gastroenterology 2017, Barcelona, 2017年10月30日

Kiyota R, Yamada T, Kato S, Shoji A, Shinkai K, Tashiro T, Nakagawa K, Ishihara A, Iwasaki T, Nishio K, Hasegawa H, Sakakibara Y, Nakazuru S, Ishida H, Uehira T, Mita E : Utility of Immunostaining in the Diagnosis of Gastrointestinal Kaposi's Sarcoma Related to Acquired Immunodeficiency Syndrome: A Retrospective Study. DDW 2017, Chicago, 2017年5月7日

B-3

石田 永、石原朗雄、三田英治：HIV感染を伴うC型慢性肝炎に対するインターフェロンプリー治療の成績について。第53回日本肝臓学会総会、広島、2017年6月8日

長谷川裕子、平尾素宏、三田英治：Management of chemotherapy in elderly patients with metastatic gastric cancer. 第59回日本消化器病学会大会、福岡、2017年10月12日

榭原祐子、山田拓哉、三田英治：HIV感染者にみられる消化管感染症。第93回日本消化器内視鏡学会総会、大阪、2017年5月11日

榭原祐子、藤井祥史、庄司絢香、加藤聖也、田代 拓、清田良介、新海数馬、岩崎哲也、石原朗雄、田中聡司、長谷川裕子、赤坂智史、中水流正一、石田 永、三田英治：当院における上部消化管出血に対する緊急内視鏡検査の現状。第14回日本消化管学会総会学術集会、東京、2018年2月9日

B-4

新海数馬、榭原祐子、加藤聖也、庄司絢香、清田良介、田代 拓、中川健太郎、石原朗雄、

岩崎哲也、西尾公美子、長谷川裕子、山田拓哉、中水流正一、石田 永、三田英治：当院における大腸ステント留置術の成績。第93回日本消化器内視鏡学会総会、大阪、2017年5月12日

新海数馬、石田 永、藤井祥史、加藤聖也、庄司絢香、清田良介、田代 拓、石原朗雄、岩崎哲也、田中聡司、長谷川裕子、赤坂智史、榊原祐子、中水流正一、三田英治：当院におけるエンテカビル治療中のHBs抗原価の推移。第21回日本肝臓学会大会、福岡、2017年10月13日

庄司絢香、長谷川裕子、加藤聖也、清田良介、新海数馬、田代 拓、中川健太郎、石原朗雄、岩崎哲也、西尾公美子、榊原祐子、山田拓哉、中水流正一、石田 永、平尾素宏、三田英治：当院における高齢者切除不能胃癌に対する化学療法への検討。第59回日本消化器病学会大会、福岡、2017年10月14日

庄司絢香、榊原祐子、中川健太郎、加藤聖也、清田良介、新海数馬、田代 拓、石原朗雄、岩崎哲也、西尾公美子、長谷川裕子、山田拓哉、中水流正一、石田 永、三田英治：虚血性大腸炎の発症部位別にみた背景疾患と臨床経過の検討。第93回日本消化器内視鏡学会総会、大阪、2017年5月13日

長谷川裕子、石原朗雄、岩崎哲也、西尾公美子、榊原祐子、山田拓哉、中水流正一、石田 永、平尾素宏、三田英治：転移を有する切除不能大腸癌の予後とその予後に影響を与える因子についての検討。第15回日本臨床腫瘍学会、神戸、2017年7月29日

田代 拓、山田拓哉、加藤聖也、庄司絢香、新海数馬、清田良介、中川健太郎、岩崎哲也、石原朗雄、長谷川裕子、西尾公美子、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：肝硬変を合併した血友病患者に対する内視鏡的食道胃静脈瘤治療への検討。第93回日本消化器内視鏡学会総会、大阪、2017年5月11日

加藤聖也、山田拓哉、藤井祥史、庄司絢香、清田良介、新海数馬、田代 拓、中川健太郎、石原朗雄、岩崎哲也、田中聡司、赤坂智史、西尾公美子、長谷川裕子、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：当院におけるHIV感染者の*H.pylori*感染に関する検討。第93回日本消化器内視鏡学会総会、大阪、2017年5月12日

清田良介、山田拓哉、庄司絢香、加藤聖也、田代 拓、新海数馬、中川健太郎、岩崎哲也、石原朗雄、西尾公美子、長谷川裕子、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：HIV感染者に発症した消化管カポジ肉腫に対する内視鏡的診断と病理組織診断への検討。第93回日本消化器内視鏡学会総会、大阪、2017年5月12日

中川健太郎、山田拓哉、庄司絢香、加藤聖也、田代 拓、新海数馬、清田良介、岩崎哲也、石原朗雄、西尾公美子、長谷川裕子、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：HIV感染者に認められた食道潰瘍についての検討。第93回日本消化器内視鏡学会総会、大阪、2017年5月12日

榊原祐子、藤井祥史、庄司絢香、加藤聖也、田代 拓、清田良介、新海数馬、岩崎哲也、石原朗雄、田中聡司、長谷川裕子、赤坂智史、中水流正一、石田 永、三田英治：閉塞性大腸癌に対する Bridge to Surgery としての大腸ステントの有用性の検討。第 59 回日本消化器病学会大会、福岡、2017 年 10 月 13 日

B-5

石原朗雄、田中聡司、石田 永、三田英治：HIV/HBV 重複感染者に対する TDF 含有 ART における反応不良例の解析。第 107 回日本消化器病学会近畿支部例会、大阪、2017 年 9 月 23 日

清田良介、石原朗雄、加藤聖也、庄司綾香、田代 拓、新海数馬、中川健太郎、岩崎哲也、長谷川祐子、西尾公美子、山田拓哉、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：胆管障害予防のため ENBD tube から冷却水還流下にラジオ波焼灼術を施行した一例。第 53 回日本肝癌研究会、東京、2017 年 7 月 6 日

藤井祥史、石原朗雄、加藤聖也、庄司綾香、清田良介、田代 拓、新海数馬、岩崎哲也、田中聡司、長谷川祐子、赤坂智史、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：ソラフェニブ投与中に重篤な間質性肺炎をきたし死亡した一例。第 42 回日本肝臓学会西部会、福岡、2017 年 11 月 30 日

庄司絢香、長谷川裕子、石田 永、三田英治：高齢者切除不能胃癌に対するシスプラチン併用療法と予後について。第 107 回日本消化器病学会近畿支部例会、大阪、2017 年 9 月 6 日

岩崎哲也、中水流正一、石田 永、三田英治：胆管炎を合併した悪性腫瘍術後再建腸管症例に対するダブルバルーン内視鏡を用いた ERCP の有用性に関する検討。第 107 回日本消化器病学会近畿支部例会、大阪、2017 年 9 月 23 日

谷田将志、田中聡司、新海数馬、石原朗雄、長谷川裕子、赤坂智史、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：ステロイド投与が奏効した IgA 血管炎に伴う多発十二指腸潰瘍の一例。第 217 回日本内科学会近畿地方会、大阪、2017 年 9 月 16 日

河本泰治、田中聡司、石原朗雄、藤井祥史、加藤聖也、庄司絢香、清田良介、新海数馬、田代 拓、岩崎哲也、長谷川裕子、赤坂智史、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：Gilbert 症候群に遺伝性球状赤血球症が合併し著明な間接型優位の高ビリルビン血症を呈した一例。第 42 回日本肝臓学会西部会、福岡、2017 年 11 月 30 日

三田英治、藤井祥史、庄司絢香、加藤聖也、清田良介、新海数馬、田代 拓、岩崎哲也、石原朗雄、長谷川裕子、赤坂智史、田中聡司、榊原祐子、中水流正一、石田 永：HIV 感染合併 Genotype 3 型 C 型肝炎に対する Sofosbuvir・Ribavirin 併用 24 週治療の成績。第 42 回日本肝臓学会西部会、福岡、2017 年 11 月 30 日

B-6

東 優希、岩崎哲也、加藤聖也、庄司絢香、清田良介、新海数馬、田代 拓、中川健太郎、石原朗雄、西尾公美子、長谷川裕子、榊原祐子、山田拓哉、中水流正一、石田 永、三田英

治：1型 von Willebrand 病（vWD）に合併した上部空腸 angiodysplasia からの出血に対し、止血処置しえた1例。第98回日本消化器内視鏡学会近畿支部例会、神戸、2017年6月17日

岩崎哲也、山田拓哉、加藤聖也、庄司絢香、清田良介、新海数馬、田代 拓、中川健太郎、石原朗雄、西尾公美子、長谷川裕子、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：術後再建腸管症例の肝内結石に対し経口胆道鏡（Spyglass DS）を用いて効率的に採石し得た一例。第98回日本消化器内視鏡学会近畿支部例会、神戸、2017年6月17日

榊原祐子、山田拓哉、清田良介、庄司絢香、加藤聖也、新海数馬、田代 拓、中川健太郎、石原朗雄、岩崎哲也、長谷川裕子、西尾公美子、山田拓哉、中水流正一、石田 永、三田英治：当院における胃 MALT リンパ腫の内視鏡診断と治療。第23回日本ヘリコバクター学会、函館、2017年7月1日

宮崎哲郎、榊原祐子、藤井祥史、庄司絢香、加藤聖也、新海数馬、清田良介、田代 拓、石原朗雄、岩崎哲也、田中聡司、赤坂智史、中水流正一、石田 永、三田英治：クローン病に併発したIgA血管炎の1例。第107回日本消化器病学会近畿支部例会、大阪、2017年9月23日

B-8

三田英治：GT3に対する治療に関して。第5回 Japan HIV and Hepatitis Study Group 研究会、東京、2017年7月2日

庄司絢香、田中聡司、石田 永、三田英治：当院におけるDAA治療の現況。国立病院機構ネットワーク研究〔肝疾患〕班会議、長崎、2017年7月7日

三田英治：B型肝炎～あなたのB型肝炎、わたしたちが制御します～。平成29年度日本肝臓学会近畿地区市民公開講座『肝臓病は治る時代へ—最新の治療をあなたに！—』、吹田、2017年7月30日

三田英治：HIV感染症と肝炎。HIV研修会、大阪、2017年10月4日

三田英治：HIV感染症に合併する肝炎の診断と治療。大阪府医師会平成29年度HIV医療講習会、大阪、2017年11月1日

三田英治：C型肝炎の征圧とB型肝炎の制御。難病医療相談会、神戸、2017年12月17日

三田英治：HIV感染者のウイルス肝炎治療。LUMIPULSE Forum 2018、大阪、2018年2月10日

三田英治：C型肝炎の制圧とB型肝炎の制御。大阪市中央区東医師会・法円坂地域医療フォーラム、大阪、2018年3月17日

三田英治：B型肝炎の最新治療とこれからの展望について。B型肝炎治療に関する医療講演&

訴訟に関する個別相談、大阪、2018年3月18日

がん療法研究開発室

室長 中森正二

統計的資料によれば、日本人の半分はがんに罹患し、全死因の約 1/3 はがんによる死亡となっており、がんに対する有効な治療法の開発は急務であると言える。しかしながら、これまでのがん治療法の多くは、症例ごとの経験の積み重ねによって得られた知識によって行われ、その検証も行われることはほとんどなく、未だにがん治療成績は満足するものとはいえない。そのような状況において、現在、がん治療成績向上を目的として科学的根拠に基づいた効果的ながん治療法の開発が求められてきている。また、がん自体やそれに伴う病態は、他の様々な病気と同じように、遺伝子や蛋白、糖鎖といった分子の異常に基づいて生じている。実際、がんを例に取れば、遺伝子やその産物である蛋白や糖鎖の異常が、発がん、増殖、転移の各ステップにおいて重要な役割を果たしていることは確かなことであり、現在も様々な分子異常が報告されつつある。これらの異常分子の特徴や機能を利用した新しいがんの診断法や、治療への応用が盛んとなっている。このような背景のもと、がん治療において、個別化医療やオーダーメイド医療という語に代表されるような各個人のがんの種類や病態の特徴に応じた医療が進められつつある。本研究室では、このような最新の基礎研究や臨床研究によって得られた成果を利用した科学的根拠に基づいた新しい癌治療法の開発を目的としている。また、科学的根拠を確実にするために全国規模の多施設共同臨床試験や自主的臨床試験研究の企画を行うとともに積極的に参加している。さらに、新たながんの診断や治療戦略の開発をめざして、外科手術時などに得られたがん組織を利用してがんにおける分子異常を探り、それに基づいた臨床において利用できる医療技術や医薬品として確立することを行う目的とした研究（橋渡し研究、トランスレーショナルリサーチ）を行っている。その具体的プロセスとして、1) 基礎研究との有機的な共同研究：臨床材料を用いて得られた研究結果と臨床資料との対応、臨床材料を用いた網羅的遺伝子解析や網羅的ペプチド蛋白解析、糖鎖解析を利用した発がん、増殖、転移に関わる責任分子の抽出、同定し、治療標的分子を明らかにする。2) 分子異常に基づいた新たな腫瘍マーカーの開発。3) 抗がん剤や放射線治療の感受性や耐性に関与する分子の探索と分離、同定、その臨床応用の研究を行っている。

【2017年度 研究業績発表】

A-0

Ikeda M, Shimizu S, Sato T, Morimoto M, Kojima Y, Inaba Y, Hagihara A, Kudo M, Nakamori S, Kaneko S, Sugimoto R, Tahara T, Ohmura T, Yasui K, Sato K, Ishii H, Furuse J, Okusaka T : Reply to the Letter to the editor 'Sorafenib plus hepatic arterial infusion chemotherapy with cisplatin versus Sorafenib for advanced hepatocellular carcinoma: randomized phase II trial' by Fornaro et al. 「Annals of Oncology」 28(4) : P903-904、2017年4月1日

Yamaue H, Shimizu A, Hagiwara Y, Sho M, Yanagimoto H, Nakamori S, Ueno H, Ishii H, Kitano M, Sugimori K, Maguchi H, Ohkawa S, Imaoka H, Hashimoto D, Ueda K, Nebiki H, Nagakawa T, Isayama

H, Yokota I, Ohashi Y, Shirasaka T : Multicenter, randomized, open-label Phase II study comparing S-1 alternate-day oral therapy with the standard daily regimen as a first-line treatment in patients with unresectable advanced pancreatic cancer. 「Cancer Chemotherapy and Pharmacology」 79(4)、P813-823、2017年4月

Hirata Y, Kobayashi T, Nishiumi S, Yamanaka K, Nakagawa T, Fujigaki S, Iemoto T, Kobayashi M, Okusaka T, Nakamori S, Shimahara M, Ueno T, Tsuchida A, Sata N, Ioka T, Yasunami Y, Kosuge T, Kaneda T, Kato T, Yagihara K, Fujita S, Yamada T, Honda K, Azuma T, Yoshida M : Identification of highly sensitive biomarkers that can aid the early detection of pancreatic cancer using GC/MS/MS-based targeted metabolomics. 「Clinica Chimica Acta」 468 : P98-104、2017年5月

Okusaka T, Miyakawa H, Fujii H, Nakamori S, Satoh T, Hamamoto Y, Ito T, Maguchi H, Matsumoto S, Ueno H, Ioka T, Boku N, Egawa S, Hatori T, Furuse J, Mizumoto K, Ohkawa S, Yamaguchi T, Yamao K, Funakoshi A, Chen JS, Cheng AL, Sato A, Ohashi Y, Tanaka M:GEST group; Updated results from GEST study: a randomized, three-arm phase III study for advanced pancreatic cancer. 「Journal of Cancer Research and Clinical Oncology」 143(6) : P1053-1059、2017年6月

Hijioka S, Hosoda W, Matsuo K, Ueno M, Furukawa M, Yoshitomi H, Kobayashi N, Ikeda M, Ito T, Nakamori S, Ishii H, Kodama Y, Morizane C, Okusaka T, Yanagimoto H, Notohara K, Taguchi H, Kitano M, Yane K, Maguchi H, Tsuchiya Y, Komoto I, Tanaka H, Tsuji A, Hashigo S, Kawaguchi Y, Mine T, Kanno A, Murohisa G, Miyabe K, Takagi T, Matayoshi N, Yoshida T, Hara K, Imamura M, Furuse J, Yatabe Y, Mizuno N : Rb Loss and KRAS Mutation Are Predictors of the Response to Platinum-Based Chemotherapy in Pancreatic Neuroendocrine Neoplasm with Grade 3: A Japanese Multicenter Pancreatic NEN-G3 Study. 「Clinical Cancer Research」 23(16) : P4625-4632、2017年8月15日

Nishimukai A, Inoue N, Kira A, Takeda M, Morimoto K, Araki K, Kitajima K, Watanabe T, Hirota S, Katagiri T, Nakamori S, Akazawa K, Miyoshi Y : Tumor size and proliferative marker geminin rather than Ki67 expression levels significantly associated with maximum uptake of 18Fdeoxyglucose levels on positron emission tomography for breast cancers. 「PLOS ONE」 12(9)、2017年9月8日

Nakakura I, Ogawa Y, Sakakura K, Imanishi K, Hirota K, Shimatani Y, Uehira T, Nakamori S, Sako R, Doi T, Yamazaki K : IMP-6 Carbapenemase-Producing Enterobacteriaceae Bacteremia Successfully Treated with Amikacin-Meropenem in Two Patients. 「Pharmacotherapy」 37(10)、P96-102、2017年10月

Hagiwara Y, Ohashi Y, Uesaka K, Boku N, Fukutomi A, Okamura Y, Konishi M, Matsumoto I, Kaneoka Y, Shimizu Y, Nakamori S, Sakamoto H, Morinaga S, Kainuma O, Imai K, Sata N, Hishinuma S, Ojima H, Yamaguchi R, Hirano S, Sudo T; JASPAC 01 Study Group : Health-related quality of life of adjuvant chemotherapy with S-1 versus gemcitabine for resected pancreatic cancer: Results from a randomised phase III trial (JASPAC 01). 「European journal of cancer」 93、P79-88、2018年2月22日

Nakazawa Y, Taniyama Y, Sanada F, Morishita R, Nakamori S, Morimoto K, Yeung KT, Yang J : Periostin blockade overcomes chemoresistance via restricting the expansion of mesenchymal tumor subpopulations

in breast cancer. 「Scientific Reports」 8、P4013、2018年3月5日

Nagai K, Kuriyama K, Inoue A, Yoshida Y, Takami K : Computed tomography-guided preoperative localization of small lung nodules with indocyanine green. 「Acta Radiologica」 2017年10月3日

Hashimura H, Kimura F, Ishibashi-Ueda H, Morita Y, Higashi M, Nakano S, Iguchi A, Uotani K, Sugimura K, Naito H : Radiologic-Pathologic Correlation of Primary and Secondary Cardiomyopathies: MR Imaging and Histopathologic Findings in Hearts from Autopsy and Transplantation. 「Radiographics」 37(3) : P719-736、2017年

Higashi M, Ikeda Y, Miyauchi H, Zaima N, Suzuki A, Li M, Kobayashi K, Naito H, Hirano K: Imaging Modalities for Triglyceride Deposit Cardiomyovascularopathy. 「Ann Nucl Cardiol」 3(1) : P94-102. 2017年8月23日

Nakao YM, Miyamoto Y, Higashi M, Noguchi T, Ohishi M, Kubota I, Tsutsui H, Kawasaki T, Furukawa Y, Yoshimura M, Morita H, Nishimura K, Kada A, Goto Y, Okamura T, Tei C, Tomoike H, Naito H, Yasuda S : Sex differences in impact of coronary artery calcification to predict coronary artery disease. 「Heart」 pii: heartjnl-2017-312151. doi: 10.1136/heartjnl-2017-312151. [Epub ahead of print] 2018年1月13日

Juri H, Tsuboyama T, Koyama M, Yamamoto K, Nakai G, Nakamoto A, Yamamoto K, Azuma H, Narumi Y: Assessment of the ability of CT urography with low-dose multi-phasic excretory phases for opacification of the urinary system. 「PLoS One」 12(4) : e0174800、2017年4月6日

Tsuboyama T, Jost G, Pietsch H, Tomiyama N : Comparison of Power Versus Manual Injection in Bolus Shape and Image Quality on Contrast-Enhanced Magnetic Resonance Angiography: An Experimental Study in a Swine Model. 「Invest Radiol」 52(9) : P547-553、2017年9月

Ota T, Hori M, Onishi H, Sakane M, Tsuboyama T, Tatsumi M, Nakamoto A, Kimura T, Narumi Y, Tomiyama N : Preoperative staging of endometrial cancer using reduced field-of-view diffusion-weighted imaging: a preliminary study. 「Eur Radiol」 27(12) : P5225-5235、2017年12月

Sakane M, Tatsumi M, Hori M, Onishi H, Tsuboyama T, Nakamoto A, Ota T, Eguchi H, Wakasa K, Hatazawa J, Tomiyama N : Volumetric parameters of 2-deoxy-2-[18F]fluoro-d-glucose positron emission tomography/computed tomography can predict histopathologic treatment response after neoadjuvant chemoradiotherapy in pancreatic adenocarcinoma. 「Eur J Radiol」 94 : P64-69、2017年9月

Dia AA, Hori M, Onishi H, Sakane M, Ota T, Tsuboyama T, Tatsumi M, Okuaki T, Tomiyama N : Application of non-Gaussian water diffusional kurtosis imaging in the assessment of uterine tumors: A preliminary study. 「PLoS One」 12(11) : e0188434、2017年11月27日

Konishi E, Nakashima Y, Mano M, Tomita Y, Kubo T, Araki N, Morii E, Yoshikawa H, Haga H, Toguchida J, Ueda T, Osawa M, Hoshi M, Inoue T, Aono M, Yanagisawa A : Chondroblastoma of

extra-craniofacial bones: Clinicopathological analyses of 103 cases. 「Pathology International」 67(10) : P495-502、2017年10月

Yamada S, Imura Y, Nakai T, Nakai S, Yasuda N, Kaneko K, Outani H, Takenaka S, Hamada K, Myoui A, Araki N, Ueda T, Itoh K, Yoshikawa H, Naka N : Therapeutic potential of TAS-115 via c-MET and PDGFR α signal inhibition for synovial sarcoma. 「BMC Cancer」 17(1) : P334(1-14)、2017年5月16日

Tsuda Y, Ogura K, Hakozaiki M, Kikuta K, Ae K, Tsuchiya H, Iwata S, Ueda T, Kawano H, Kawai A : Mesenchymal chondrosarcoma: a Japanese Musculoskeletal Oncology Group (JMOG) study on 57 patients. 「J Surg Oncol」 115(6) : P760-767、2017年5月16日

Takahashi M, Takahashi S, Araki N, Sugiura H, Ueda T, Yonemoto T, Morioka H, Hiraga H, Hiruma T, Kunisada T, Matsumine A, Shimura M, Kawai A : Efficacy of trabectedin in patients with advanced translocation-related sarcomas: Pooled analysis of two phase II studies. 「Oncologist」 22(1) : P1-10、2017年5月18日

Kawai A, Yonemori K, Takahashi S, Araki N, Ueda T : Systemic therapy for soft tissue sarcoma: proposal for the optimal use of pazopanib, trabectedin, and eribulin. 「Adv Ther 2017 Jul」 34(7) : P1556-1571、2017年5月25日

Nakai T, Imura Y, Tamiya H, Yamada S, Nakai S, Yasuda N, Kaneko K, Otani H, Takenaka S, Hamada K, Myoui A, Araki N, Ueda T, Itoh K, Yoshikawa H, Naka N : Trabectedin is a promising antitumor agent potentially inducing melanocyte differentiation for clear cell sarcoma. 「Cancer Med」 6(9) : P2121-2130、2017年9月16日

Otani H, Imura Y, Tanaka T, Takenaka S, Oshima K, Hamada K, Kakunaga S, Joyama S, Naka N, Kudawara I, Ueda T, Araki N, Yoshikawa H : Clinical outcomes of patients with epithelioid sarcomas: impact and management of nodal metastasis. 「Int J Clin Oncol」 23(1) : P181-188、2018年2月

Ogura K, Susa M, Morioka H, Matsumine A, Ishii T, Hamada K, Ueda T, Kawai A : Reconstruction using a constrained-type hip tumor prosthesis after resection of malignant periacetabular tumors: A study by the Japanese Musculoskeletal Oncology Group (JMOG). 「J Surg Oncol 2018 Feb 23」 (Epub ahead of print)、2018年2月23日

Yamamoto K, Nagatsuma Y, Fukuda Y, Hirao M, Nishikawa K, Miyamoto A, Ikeda M, Nakamori S, Sekimoto M, Fujitani K, Tsujinaka T : Effectiveness of a preoperative exercise and nutritional support program for elderly sarcopenic patients with gastric cancer. 「Gastric Cancer」 20(5) : P913-918、2017年9月

Hirao M, Yamada T, Michida T, Nishikawa K, Hamakawa T, Mita E, Mano M, Sekimoto M : Peritoneal Seeding after Gastric Perforation during Endoscopic Submucosal Dissection for Gastric Cancer.

「Digestive Surgery」 2017年11月8日 [Epub ahead of print]

Kobayashi Y, Maeda S, Hama N, Miyamoto A, Uemura M, Miyake M, Nishikawa K, Hirao M, Kato T, Sekimoto M, Mori K, Mano M, Nakamori S : Successful conversion surgery for unresectable pancreatic cancer with peritoneal metastases after neoadjuvant albumin-bound paclitaxel and gemcitabine chemotherapy: case report and literature review. 「International Cancer Conference Journal」 7(1) : P20-25、2018年1月

Asaoka T, Miyamoto A, Maeda S, Hama N, Tsujiie M, Ikeda M, Sekimoto M, Nakamori S : CA19-9 level determines therapeutic modality in pancreatic cancer patients with para-aortic lymph node metastasis. 「Hepatobiliary Pancreat Dis Int」 17(1)、P75-80、2018年2月

Pak J, Ikeda M, Uemura M, Miyake M, Nishikawa K, Miyamoto A, Miyazaki M, Hirao M, Nakamori S, Sekimoto M : Risk factors for bleeding in patients receiving fondaparinux after colorectal cancer surgery. 「Journal of the Anus Rectum and Colon」 1(4) : P131-135、2017年7月20日

Iwata H, Im S-A, Masuda N, Im Y-H, Inoue K, Rai Y, Nakamura Ri, Kim JH, Hoffman JT, Zhang K, Giorgetti C, Iyer S, Schnell PT, Bartlett CH, Ro J : PALOMA-3: Phase 3 Trial of Fulvestrant With or Without Palbociclib in Premenopausal and Postmenopausal Women With Hormone Receptor-Positive, HER2-Negative Metastatic Breast Cancer That Progressed on Prior Endocrine Therapy―Safety and Efficacy in Asian Patients. 「J Global Oncology」 3(4) : P289-303、2017年4月1日

Bell R, Brown J, Parmar M, Toi M, Suter T, Steger GG, Pivot X, Mackey J, Jackisch C, Dent R, Hall P, Xu N, Morales L, Provencher L, Hegg R, Vanlemmens L, Kirsch A, Schneeweiss A, Masuda N, Overkamp F, Cameron D : Final efficacy and updated safety results of the randomized phase III BEATRICE trial evaluating adjuvant bevacizumab-containing therapy in triple-negative early breast cancer. 「Ann Oncol」 28(4) : P754-760、2017年4月1日

Masuda N, Takahashi M, Nakagami K, Okumura Y, Nakayama T, Sato N, Kanatani K, Tajima K, Kashiwaba M : First-line bevacizumab plus paclitaxel in Japanese patients with HER2-negative metastatic breast cancer: subgroup results from the randomized Phase III MERiDiAN trial. 「Jpn J Clin Oncol」 47(5) : P.385-392、2017年5月1日

Yoden E, Nose T, Otani Y, Asahi S, Tsukiyama I, Dokiya T, Saeki T, Fukuda I, Sekine H, Shikama N, Kumazaki Y, Takahashi T, Yoshida K, Kotsuma T, Masuda N, Nakashima K, Matsumura T, Nakagawa S, Tachiiri S, Moriguchi Y, Itami J, Oguchi M : Uncertainty of cosmetic evaluation after accelerated partial breast irradiation: interim analysis of a Japanese prospective multi-institutional feasibility study. 「Jpn J Radiol」 35(7) : P.381-388、2017年5月4日

Tamura K, Inoue K, Masuda N, Takao S, Kashiwaba M, Tokuda Y, Iwata H, Yamamoto N, Aogi K, Saeki T, Nakayama T, Sato N, Toyama T, Ishida T, Arioka H, Saito M, Ohno S, Yamauchi H, Yamada K, Watanabe J, Ishiguro H, Fujiwara Y : Randomized phase II study of nab-paclitaxel as first-line chemotherapy in patients with HER2-negative metastatic breast cancer. 「Cancer Sci.」 108(5) : P.987-994、

2017年5月

Baselga J, Im SA, Iwata H, Cortés J, De Laurentiis M, Jiang Z, Arteaga CL, Jonat W, Clemons M, Ito Y, Awada A, Chia S, Jagiełło-Gruszczyńska A, Pistilli B, Tseng LM, Hurvitz S, Masuda N, Takahashi M, Vuylsteke P, Hachemi S, Dharan B, Di Tomaso E, Urban P, Massacesi C, Campone M : Buparlisib plus fulvestrant versus placebo plus fulvestrant in postmenopausal, hormone receptor-positive, HER2-negative, advanced breast cancer (BELLE-2): a randomised, double-blind, placebo-controlled, phase 3 trial. 「Lancet oncology」 18(7) : P.904-916、2017年5月30日

Mori K, Takeda M, Kodama Y, Kiyokawa H, Yasojima H, Mizutani M, Otani Y, Morikawa N, Masuda N, Mano M: Tumor thickness and histological features as predictors of invasive foci within preoperatively diagnosed ductal carcinoma in situ. 「Human Pathology」 64(6) : P145-155、2017年6月

Okita Y, Masuda N, Mizutani M, Kodama Y, Mori K, Mano M, Nakagawa T, Nakajima S, Fujinaka T : Widespread subdural metastasis from breast cancer progressing rapidly with cerebral herniation: A case report. 「Molecular and Clinical Oncology」 6(6) : P960-962、2017年6月

Kawaguchi H, Masuda N, Nakayama T, Aoki K, Anan K, Ito Y, Ohtani S, sato N, Saji S Tokunaga E, Nakamura S, Hasegawa Y, Hattori M, Fuzisawa T, Morita S, Yamaguchi M, Yamashita T, Yamamoto Y, Ohno S, Toi M : Outcomes of fulvestrant therapy among Japanese women with advanced breast cancer: a retrospective multicenter cohort study (JBCRG-C06:safari). 「Breast Cancer Res Treat」 163(3) : P.545-554、2017年6月

Robson M, Im SA, Senkus E, Xu B, Domchek SM, Masuda N, Delaloge S, Li W, Tung N, Armstrong A, Wu W, Goessl C, Runswick S, Conte P : Olaparib for Metastatic Breast Cancer in Patients with a Germline BRCA Mutation. 「n engl j med nejm.org」 377(6) : P.523-533、2017年6月

Masuda N, Lee SJ, Ohtani S, Im YH, Lee ES, Yokota I, Kuroi K, Im SA, Park BW, Kim SB, Yanagita Y, Ohno S, Takao S, Aogi K, Iwata H, Jeong J, Kim A, Park KH, Sasano H, Ohashi Y, Toi M : Adjuvant Capecitabine for Breast Cancer after Preoperative Chemotherapy. 「N Engl J Med.」 376(22) : P.2147-2159、2017年6月1日

Yamamura J, Masuda N, Yamamoto D, Tsuyuki S, Yamaguchi M, Tanaka S, Tsurutani J, Tokunaga S, Yoshidome K, Mizutani M, Aono T, Ooe A, Tanino H, Matsunami N, Yasojima H, Nakayama T, Nishida Y : Gemcitabine and Vinorelbine Combination Chemotherapy in Taxane-Pretreated Patients with Metastatic Breast Cancer: A Phase II Study of the Kinki Multidisciplinary Breast Oncology Group (KMBOG) 1015. 「Chemotherapy」 62(5) : P.307-313、2017年6月13日

Watanabe J, Ito Y, Saeki T, Masuda N, Takano T, Takao S, Nakagami K, Tsugawa K, Nakagawa S, Kanatani K, Nakayama T. : Safety Evaluation of Trastuzumab Emtansine in Japanese Patients with HER2-Positive Advanced Breast Cancer. 「in vivo」 31(3) : P.493-500、2017年6月

Toi M, Masuda N, Ohashi Y : Adjuvant Capecitabine for Breast Cancer. 「N Engl J Med」 377(8) : P.791-792、

2017年8月24日

Loibl S, Turner NC, Ro J, Cristofanilli M, Iwata H, Im S-A, Masuda N, Loi S, André F, Harbeck N, Verma S, Folklerd E, Theall KP, Hoffman J, Zhang K, Bartlett CH, Dowsett M : Palbociclib Combined With Fulvestrant in Premenopausal Women With Advanced Breast Cancer and Prior Progression on Endocrine Therapy: PALOMA-3 Results. 「The Oncologist」 22(9) : P.1028-1038、2017年9月

Sledge GW Jr, Toi M, Neven P, Sohn J, Inoue K, Pivot X, Burdaeva O, Okera M, Masuda N, Kaufman PA, Koh H, Grischke EM, Frenzel M, Lin Y, Barriga S, Smith IC, Bourayou N, Llombart-Cussac A : MONARCH 2: Abemaciclib in Combination With Fulvestrant in Women With HR+/HER2- Advanced Breast Cancer Who Had Progressed While Receiving Endocrine Therapy. 「J Clin Oncol」 35(25) : P.2875-2884、2017年9月1日

Ogiya R, Niihara N, Kumaki N, Yasojima H, Iwasa T, Kanbayashi C, Oshitanai R, Tsuneizumi M, Watanabe K, Matsui A, Fujisawa T, Saji S, Masuda N, Tokuda Y and Iwata H : Comparison of immune microenvironments between primary tumors and brain metastases in patients with breast cancer. 「Oncotarget」 8(61) : P.103671-103681、2017年10月27日

Toi M, Masuda N and Soo-Jung Lee : Capecitabine for primary breast cancer. 「Oncotarget」 8(67) : P.110739-110740、2017年11月6日

Sugie T, Suzuki E, Yamauchi A, Yamagami K, Masuda N, Gondo N, Sumi E, Ikeda T, Tada H, Uozumi R, Kanao S, Tanaka Y, Hamazaki Y, Minato N, Toi M : Combined effects of neoadjuvant letrozole and zoledronic acid on gdt cells in postmenopausal women with early-stage breast cancer. 「The Breast」 5(38) : P.114-119、2018年1月

Nakayama T, Sagara Y, Takashima T, Matsunami N, Masuda N, Miyoshi Y, Taguchi T, Aono T, Ito T, Kagimura T, Noguchi S : Randomized phase II study of anastrozole plus tegafur-uracil as neoadjuvant therapy for ER-positive breast cancer in postmenopausal Japanese women (Neo-ACET BC). 「Cancer Chemother Pharmacol」 81(4) : P.755-762、2018年2月21日

Masuda N, Nishimura R, Takahashi M, Inoue K, Ohno S, Iwata H, Mori Y, Hashigaki S, Muramatsu Y, Nagasawa T, Umeyama Y, Toi M. : Palbociclib in combination with letrozole as first-line treatment for advanced breast cancer: A Japanese phase II study. 「Cancer Sci.」 109(3) : P.803-813、2018年3月

A-1

増田慎三 : 乳がん発生が進む方「新 乳がんおはなし」P.1-21、シスメックス株式会社 学術本部、兵庫、2017年

増田慎三 : CDK4/6阻害薬【Palbociclib】+ホルモン療法ー骨髄抑制に留意しながら、長期使用を目標に上手に減量をー「乳がん薬物療法 副作用マネジメント」増田慎三、P.101-104、メジカルビュー社、東京、2017年9月13日

増田慎三：「乳がん薬物療法 副作用マネジメント」増田慎三、P.1-423、メジカルビュー社、東京、2017年9月13日

A-2

久田原郁夫：脊髄圧迫症状「乳がん薬物療法副作用マネジメント プロのコツ」増田慎三編集、P334-337、メジカルビュー社、2017年9月13日

A-3

藤本幸太、大島純平、片山欽三、鄭 則秀、原田泰規、西村健作、清川博貴、児玉良典、眞能正幸：脂肪肉腫との鑑別が困難であった後腹膜海綿状血管腫の1例「泌尿器科紀要」63(12)：P521-524、2017年12月31日

竹中 聡、中 紀文、濱田健一郎、中井 翔、高木啓至、王谷英達、伊村慶紀、名井 陽、上田孝文、荒木信人、吉川秀樹：大腿骨近位部転移性骨腫瘍に対する腫瘍用人工骨頭置換術後の機能的予後調査：術後患肢機能に関与する因子は何か？「臨床整形外科」52(6)：P513-518、2017年6月16日

宮本敦史、上平朝子、坪倉美由紀、廣田和之、上地隆史、中蔵伊知郎、関本貢嗣、中森正二：カルバペネム耐性腸内細菌科細菌によるアウトブレイクの経験「日本外科感染症学会雑誌」14(3)：P173-178、2017年6月

宮本敦史、濱 直樹、前田 栄、植村 守、浜川卓也、三宅正和、西川和宏、宮崎道彦、加藤健志、平尾素宏、関本貢嗣、中森正二：遠位胆管癌切除後の腹膜転移再発に対し再発巣切除により長期生存が得られた1例「癌と化学療法」44(12)：P1620-1622、2017年11月

村上弘大、濱 直樹、前田 栄、宮本敦史、浜川卓也、植村 守、三宅正和、西川和宏、大宮英泰、宮崎道彦、池田正孝、平尾素宏、高見康二、関本貢嗣、中森正二：減量手術を行うことができた十二指腸原発神経内分泌腫瘍多発肝転移の1例「癌と化学療法」44(12)：P1686-1688、2017年11月

山本 慧、山本和義、前田 栄、植村 守、三宅正和、濱 直樹、西川和宏、宮本敦史、大宮英泰、宮崎道彦、池田正孝、平尾素宏、高見康二、中森正二、関本貢嗣：消化器疾患術後創離開に対する局所陰圧閉鎖療法時の栄養管理の効果の検討。「外科と代謝・栄養」51(2)：P137-144、2017年4月

朴 正勝、山本和義、西川和宏、平尾素宏、三宅正和、濱 直樹、宮本敦史、池田正孝、中森正二、関本貢嗣：Imatinib mesylate 治療中に膿瘍形成を来し、感染コントロール目的に切除した腹膜播種を伴う巨大胃 gastrointestinal stromal tumor の1例「日本消化器外科学会雑誌」50(5)：P350-356、2017年5月24日

萩原清貴、西川和宏、三宅正和、清川博貴、濱 直樹、宮本敦史、宮崎道彦、池田正孝、平尾素宏、中森正二、関本貢嗣：胃癌術後に直腸転移を来した1例「日本消化器外科学会雑誌」50(10)：P788-795、2017年10月18日

浜川卓也、西川和宏、平尾素宏、山本 慧、藤原綾子、前田 栄、植村 守、三宅正和、濱直樹、宮本敦史、宮崎道彦、加藤健志、高見康二、中森正二、関本貢嗣：高度冠動脈狭窄を伴う根治切除不能出血性胃癌に対し IABP 挿入下に胃切除術を行った 1 例「癌と化学療法」44(12)：P2017-2019、2017 年 11 月

山口 歩、三宅正和、吉龍澄子、植村 守、池田正孝、加藤健志、浜川卓也、前田 栄、濱直樹、西川和宏、宮本敦史、宮崎道彦、平尾素宏、中森正二、関本貢嗣：皮膚浸潤を伴う肛門管癌に放射線化学療法後直腸切断術および会陰再建を施行した 1 例。「癌と化学療法」44(12)：P1988-1990、2017 年 11 月

増田慎三：乳癌の薬物療法と支持療法 乳癌の化学療法 早期乳癌「乳癌学—最新の診断と治療—早期乳癌」75(3)：P.358-366、日本臨牀、2017 年 4 月 20 日

増田慎三：新規薬剤 4. 新しい標的 6) CDK4/6 阻害剤「腫瘍内科」19(6)：P.704-710、科学評論社、2017 年 6 月 28 日

西村理恵子、増田慎三、山城勝重、村田有也、松井 哲、森 清、高橋蔭人、青儀健二郎、伊東正博、前田茂人、倉岡和矢、尾崎慎治、市原 周、佐藤康幸、田口健一、徳永えり子、鈴木博義、渡辺隆紀：乳癌転移巣細胞診検体受容体検査の日常運用に関する他施設共同研究：ホルマリン固定細胞検体のアルギン酸ナトリウム法セルブロックによる標本作製の提案「乳癌の臨床」P.249-257、(株)篠原出版新社、2017 年 7 月 7 日

笠井宏委、坂東裕子、青儀健二郎、大野真司、増田慎三：乳癌カレントトピックス アンケート調査からみる医師主導治験の課題と展望「CANCER BOARD of the BREAST」3(2)：P.52-54、メディカルビュー社、2017 年 8 月

増田慎三：Neo-Entrance 試験 JBCRG-22 ; UMIN000023162 「CANCER BOARD of the BREAST」3(2)：P.64-65、メディカルビュー社、2017 年 8 月

A-4

中森正二、福田泰也、前田 栄、濱 直樹、宮本敦史：IPMN と類似画像を示す自己免疫性膵炎。「肝胆膵」74(4)：P527-532、2017 年 4 月 28 日

坪山尚寛、富山憲幸：MRI による筋層浸潤診断のポイントは？「臨床婦人科産科」71(4) 増刊号、P285-288、医学書院、2017 年 4 月 20 日。

坪山尚寛、富山憲幸：充実性付属器腫瘍の鑑別診断「画像診断」37(11) 増刊号：s102-107、秀潤社、2017 年 9 月 10 日

濱 直樹、前田 栄、宮本敦史、中森正二：膵臓の術前術後「消化器外科ナーシング」22(7)：P625-633、2017 年 7 月

山本和義、永妻佑季子、福田泰也、西川和宏、平尾素宏、鳥山明子、中原千尋、宮本敦史、中森正二、関本貢嗣、藤谷和正、辻仲利政：サルコペニアを有する高齢胃癌患者に対する新しい取組み～「術前栄養+エクササイズプログラム」の概要。「外科と代謝・栄養」51(4)：P175-182、2017年8月

大谷陽子、増田慎三：特集 乳がん薬物治療-明日の臨床を見据えて 2.乳がん薬物治療-臨床現場での実践のために 6)術前・術後補助化学療法—適応をどう見極め、どう行うか「臨床腫瘍プラクティス」13(2)：P.125-130、ヴァンメディカル社、2017年5月10日

増田慎三：最新治療戦略 新しい局面を迎えた乳がん治療～これからの化学療法の役割「CLINICIAN」662(65)：P.46-57、エーザイ株式会社、東京、2018年1月

A-6

増田慎三：ホルモン受容体陽性進行乳癌患者を対象に Fulvestrant を Anastrozole と比較する無作為化第Ⅲ相試験「JBCS2017 第25回日本乳癌学会学術総会 記録集」エーザイ株式会社、2017年10月

増田慎三：国際共同二重盲検第Ⅲ相ランダム化比較試験 MERiDiAN 試験 日本人解析「AVASTIN DATA for Japanese Patients」P.1-5、中外製薬株式会社、2017年12月

B-1

Robson M E, Im S-A, Senkus E, Xu B, Domchek S M, Masuda N, Delaloge S, Li W, Tung N M, Armstrong A, Wu W, Goessl CD : OlympiAD: Phase III trial of olaparib monotherapy versus chemotherapy for patients(pts) with HER2-negative metastatic breast cancer (mBC) and a germline BRCA, American Society of Clinical Oncology(ASCO), Chicago, 2017年6月4日

Sledge GW Jr, Toi M, Neven P, Sohn J, Inoue K, Pivot X, Burdaeva O, Okera M, Masuda N, Kaufman PA, Koh H, Grischke EM, Frenzel M, Lin Y, Barriga S, Smith IC, Bourayou N, Llombart-Cussac A : MONARCH 2: Abemaciclib in Combination With Fulvestrant in Women With HR+/HER2- Advanced Breast Cancer Who Had Progressed While Receiving Endocrine Therapy. American Society of Clinical Oncology(ASCO), Chicago, 2017年6月4日

Nick C.Turner, R-S.Finn, A-A.Joy, S.Verma, N.Harbeck, S.Moulder, Masuda N, Y-H Im, K.Zhang, S.Kim, W.Sun, P.Schnell, C.H Bartlett, D.Slamon : Palbociclib in combination with endocrine therapy in treatment-naive and previously treated elderly women with HR+, HER2- advanced breast cancer: a pooled analysis from randomized phase 2 and 3 studies. 2017 Baylor College of Medicine Metastatic Breast Cancer Conference, Houston, 2017年10月12～10月13日

Hattori M, Tamura K, Mukai H, Miyoshi Y, Masuda N, Suzuki E, Ishiguro H, Ohtani S, Hara F, Shimamoto T, Yamamoto K, Ding Y, Aktan G, Karantza V, Iwata H : Phase 2 study of pembrolizumab for metastatic triple-negative breast cancer (mTNBC): Japanese subgroup results of KEYNOTE 086. ESMO Asia 2017 Congress, Singapore, 2017年11月17日

Im S-A, Masuda N, Im Y-H, Inoue K, Kim S-B, Redfern A, Lombard J, Lu D, Puyana K, Theall E G, Gauthier M H, Ro J : Efficacy and safety of palbociclib plus endocrine therapy in women with hormone receptor-positive (HR+)/human epidermal growth factor receptor 2-negative (HER2-) advanced breast cancer (ABC) in the Asia-Pacific region: Data from PALOMA-2 and -3. ESMO Asia 2017 Congress, Singapore, 2017年11月17日

Toi M, Huang C, ImY-H, Iwata H Sohn J H, Wang H-C, Masuda N, Lin Y, Sakaguchi S, Bourayou N, Llombart A, Sledge G : MONARCH 2: Abemaciclib in combination with fulvestrant in Asian women with HR+, HER2- advanced breast cancer who progressed on endocrine therapy. ESMO Asia 2017 Congress, Singapore, 2017年11月17日

B-2

Ueno M, Ioka T, Ueno H, Joon Oh Park, Heung-Moon Chang, Sasahira N, Kanai M, Ik-Joo Chung, Ikeda M, Nakamori S, Mizuno N, Omuro Y, Yamaguchi T, Hara H, Sugimori K, Furuse J, Takeuchi M, Okusaka T, Boku N, Hyodo I : TAS-118 (S-1 plus leucovorin) versus S-1 in gemcitabine-refractory advanced pancreatic cancer: A randomized, open-label, phase III trial (GRAPE trial). ASCO2017, Chicago, 2017年6月3日

Mizuno N, Fukutomi A, Mizusawa J, Katayama H, Nakamura S, Ito Y, Hiraoka N, Ioka T, Ueno M, Ikeda M, Sugimori K, Shimizu K, Okusaka T, Ozaka M, Yanagimoto H, Nakamori S, Azuma T, Hosokawa A, Ishii H, Furuse J, and Hepatobiliary and Pancreatic Oncology Group (HBPOG) of Japan Clinical Oncology Group (JCOG), Japan" : Effect of inflammatory and nutritional (IN) status on induction chemotherapy (CT) followed by chemoradiotherapy (CRT) for locally advanced pancreatic cancer (LAPC): An exploratory subgroup analysis of JCOG1106. ASCO2017, Chicago, 2017年6月3日

Takahashi S, Ohno I, Ikeda M, Konishi M, Kobayashi T, Akimoto T, Kojima M, Morinaga S, Ku Y, Shimizu Y, Nakamori S, Hishinuma S, Takakura N, Kainuma O, Hirano S, Otsubo T, Nagino M, Kimura W, Yamashita Y, Uesaka K : Phase II trial of neoadjuvant S-1 and concurrent radiotherapy for borderline resectable pancreatic cancer: Interim results of JASPAC05. ASCO2017, Chicago, 2017年6月3日

Morizane C, Okusaka T, Mizusawa J, Katayama H, Ueno M, Ikeda M, Ozaka M, Sugimori K, Fukutomi A, Hara H, Mizuno N, Yanagimoto H, Sano K, Tobimatsu K, Yane K, Nakamori S, Sata N, Yukisawa S, Ishii H, Furuse J, Japan Clinical Oncology Group (JCOG); National Cancer Center Hospital, Tokyo, Japan : Randomized phase III study of gemcitabine plus S-1 combination therapy versus gemcitabine plus cisplatin combination therapy in advanced biliary tract cancer: A Japan Clinical Oncology Group study (JCOG1113, FUGA-BT). ASCO GI 2018, San Francisco, 2018年1月19日

Kuriyama K, Yoshida Y, Inoue A, Sumikawa H, Mycobacterium kansasii pulmonary infection: CT findings in AIDS patients comparison with non-AIDS patients. 4th World Congress of Thotacic Imaging, Boston, 2017年6月18日

Higashi M, Onishi Y, Kono AK, Kanzaki S, Fukuda F, Minatoya K, Naito H : Computed tomographic angiography of the Adamkiewicz artery using a small focal spot. ASCI 2017 (The 11th Congress of Asian

Society of Cardiovascular Imaging), Kyoto, 2017年6月2日

Tsuboyama T : Differential diagnosis of benign, borderline, and malignant ovarian tumors with MRI and PET/CT. 6th Asian Congress of Abdominal Radiology (ACAR), Korea, 2017年4月

Yoshida Y, Kuriyama K, Inoue A, Sumikawa H: CT findings of pulmonary mycobacterium kansasii infection in AIDS patients comparison with immunocompetent. European Congress of Radiology, Vienna, 2018年2月28日

Iwata S, Kobayashi E, Yonemoto T, Araki N, Kunisada T, Hiraga H, Akiyama T, Kakunaga S, Shinoda Y, Ueda T : Risk factors of symptomatic venous thromboembolism in sarcoma patients: A Japanese prospective multicenter study. 19th International Society of Limb Salvage (ISOLS) 2017 General Meeting, Kanazawa, 2017年5月10日

Ogura K, Fujiwara T, Jeon DG, Cho WH, Hiraga H, Ishii T, Yonemoto T, Kamoda H, Ozaki T, Kozawa E, Nishida Y, Morioka H, Hiruma T, Kakunaga S, Ueda T, Araki N, Naka N, Tsuda Y, Kawano H, Kawai A : Nomograms predicting distant metastases and overall survival after neoadjuvant chemotherapy and surgery for patients with non-metastatic osteosarcoma: A multi-institutional study. 19th International Society of Limb Salvage (ISOLS) 2017 General Meeting, Kanazawa, 2017年5月10日

Kakunaga S, Matsuoka Y, Kudawara I, Ueda T : Denosumab combined with sunitinib in patient with metastasis of humerus from renal cell carcinoma. 19th International Society of Limb Salvage (ISOLS) 2017 General Meeting, Kanazawa, 2017年5月10日

Mori T, Nakayama R, Endo M, Kobayashi E, Kawai A, Ueda T, Morioka H: Forty-eight cases of leiomyosarcoma of bone in Japan : A multicenter study from the Japanese Musculoskeletal Oncology Group. 19th International Society of Limb Salvage (ISOLS) 2017 General Meeting, Kanazawa, 2017年5月10日

Ueda T, Kakunaga S, Matsuoka Y, Kudawara I : Denosumab combined with sunitinib in patient with bone metastasis of humerus from renal cell carcinoma. 38th SICOT Orthopaedic World Congress, Cape Town, 2017年11月30日

Shoji A, Hasegawa H, Fujii Y, Kato S, Kiyota R, Shinkai K, Tashiro T, Ishihara A, Iwasaki T, Tanaka T, Akasaka T, Sakakibara Y, Nakazuru S, Ishida H, Hirao M, Mita E : Efficacy and prognostic factor analysis in second-line chemotherapy for elderly patients with metastatic gastric cancer. American society of clinical oncology gastrointestinal symposium 2018, Safransico, 2018年1月18日

Hasegawa H, Mitani S, Wakatsuki T, Hara H, Takahari D, Chin K, Hirao M, Kadowaki S, Muro K : Systemic chemotherapy for gastric cancer with early recurrence after adjuvant S-1 monotherapy: a multicenter retrospective study. American society of clinical oncology gastrointestinal symposium 2018, Safransico, 2018年1月18日

Hamakawa T, Nishikawa K, Hirao M, Yamaguchi A, Maeda S, Uemura M, Miyake M, Hama N, Miyamoto A, Kato T, Nakamori S, Sekimoto M : A case of unclassified/undifferentiated round cell sarcoma in the stomach diagnosed by excisional biopsy of the regional lymph node metastasis. Asian Clinical Oncology Society 2018, Chiang Mai, Thailand, 2018年2月23日

Miyamoto A, Hama N, Maeda S, Hamakawa T, Uemura M, Miyake M, Nishikawa K, Ikeda M, Hirao M, Sekimoto M, Nakamori S : Impact of visceral obesity and sarcopenia on Pancreaticoduodenectomy. A-PHPBA2017/JSHBPS29, Yokohama, 2017年6月10日

Uemura M, Miyake M, Miyazaki M, Ikeda M, Hamakawa T, Maeda S, Hama N, Nishikawa K, Miyamoto A, Hirao M, Takahashi H, Haraguchi N, Nishimura J, Hata T, Mizuhima T, Yamamoto H, Mori M, Nakamori S, Sekimoto M : Laparoscopic surgery for locally recurrent rectal cancer with concomitant sacrectomy. EAES2017, Frankfurt, 2017年6月15日

Kobayashi N, Nishikawa K, Hamakawa T, Hirao M, Yamamoto K, Kobayashi Y, Kitakaze M, Maeda S, Uemura M, Miyake M, Hama N, Miyamoto A, Kato T, Nakamori S, Sekimoto M : Survival Results of Stage IV Gastric Cancer Patients Treated with Conversion Surgery. Asian Clinical Oncology Society 2018, Chiang Mai, Thailand, 2018年2月23日

Shien T, Nakamura K, Shibata T, Kinoshita T, Aogi K, Fujisawa T, Masuda N, Inoue K, Fukuda H, Iwata H : A randomized controlled trial comparing primary tumour resection plus systemic therapy with systemic therapy alone in metastatic breast cancer (PRIM-BC): Japan Clinical Oncology Group Study JCOG1017. American Society of Clinical Oncology(ASCO), Chicago, 2017年6月4日

Narui K, Yamashita T, Kitada M, Kawaguchi H, Hattori M, Yoshinami T, Matsunami N, Yanagihara K, Kawasoe T, Nagashima T, Bando H, Yano H, Hasegawa Y, Nakamura R, Kashiwaba M, Masuda N, Morita S, Ohno S, Toi M : Eribulin in combination with pertuzumab plus trastuzumab for HER2-positive advanced or recurrent breast cancer (JBCRG-M03). American Society of Clinical Oncology(ASCO), Chicago, 2017年6月4日

Cristofanilli M, DeMichele A, Giorgetti C, Slamon D J, Im S-A, Masuda N, Verma S, Loi S, Colleoni M, Theall K P, Huang X, Bartlett C H, Turner N C : Predictors of prolonged benefit from palbociclib (PAL) plus fulvestrant (F) in women with endocrine-resistant hormone receptor-positive/human epidermal growth factor receptor 2-negative (HR+/HER2-) advanced breast cancer (ABC) in PALOMA-3, American Society of Clinical Oncology(ASCO), Chicago, 2017年6月4日

Ogiya R, Niikura N, Kumaki N, Yasojima H, Iwasa T, Kanbayashi C, Oshitanai R, Tsuneizumi M, Watanabe K, Matsui Ak, Fujisawa T, Saji S, Tokuda Y, Masuda N, Iwata H : Immune microenvironment in brain metastases of breast cancer. American Society of Clinical Oncology(ASCO), Chicago, 2017年6月4日

Masuda N, Ohtani S, Takano T, Inoue K, Suzuki E, Nakamura R, Bando H, Ito Y, Ishida K, Yamanaka T, Kuroi K, Yasojima H, Kasai H, Takasuka T, Sakurai T, Kataoka T.R, Morita S, Ohno S, Toi M :

Neoadjuvant therapy with trastuzumab emtansine and pertuzumab in patients with HER2-positive primary breast cancer (A randomized, phase 2 study; JBCRG-20). European Society for Medical Oncology (ESMO), Spain, 2017年9月8日

Delaloge S, Conte P.F, Im S-A, Senkus-Konefka E, Xu B, Domchek S.M, Masuda N, Li W, Tung N, Armstrong A, Wu W, Goessl C, Runswick S, Robson M : OlympiAD: Further efficacy outcomes in patients with HER2-negative metastatic breast cancer and a germline BRCA mutation receiving olaparib monotherapy vs standard single-agent chemotherapy treatment of physician's choice, European Society for Medical Oncology (ESMO), Spain, 2017年9月8日

Aogi K, Yonemori K, Takahashi M, Masuda N, Naito Y, Shimizu S, Nakamura R, Yamamoto H, Hamada A, Michimae H, Tamura K, Sukigara T, Nagasaka R, Fujiwara Y : Efficacy and safety of olaparib combined with eribulin in patients with advanced or metastatic triple negative breast cancer (TNBC) previously treated with anthracyclines and taxanes: The final analysis of a Japanese phase I/II trial, European Society for Medical Oncology (ESMO), Spain, 2017年9月8日

Shimomura A, Yonemori K, Masuda N, Aogi K, Takahashi M, Naito Y, Shimizu S, Nakamura R, Hamada A, Michimae H, Hashimoto J, Yamamoto H, Shimizu C, Tamura K, Fujiwara Y : Gene : alteration in triple negative breast cancer patients in a phase I/II study of combination therapy with eribulin and olaparib, European Society for Medical Oncology (ESMO), Spain, 2017年9月8日

Robson M, Ruddy K.J, Im S-A, Senkus-Konefka E, Xu B, Domchek S.M, Masuda N, Delaloge S, Li W, Tung N, Armstrong A, Wu W, Goessl C, Degboe A, Conte P.F : OlympiAD: Health-related quality of life (HRQoL) in patients with HER2-negative metastatic breast cancer (mBC) and a germline BRCA mutation (gBRCAm) receiving olaparib monotherapy vs standard single-agent chemotherapy treatment of physician's choice (TPC), European Society for Medical Oncology (ESMO), Spain, 2017年9月8日

Kawaguchi H, Aogi K, Masuda N, Nakayama T, Ito Y, Ohtani S, Sato N, Takano T, Saji S, Tokunaga E, Hasegawa Y, Hattori M, Fujisawa T, Morita S, Yamashita H, Yamashita T, Yamamoto Y, Yotsumoto D, Toi M, Ohno S : Factors associated with prolonged time to treatment failure with fulvestrant 500 mg in patients with postmenopausal estrogen receptor-positive advanced/metastatic breast cancer (JBCRG-C06; Safari): A subgroup analysis. European Society for Medical Oncology (ESMO), Spain, 2017年9月8日

Shimomura A, Niikura N, Fukatsu Y, Sawaki M, Ogiya R, Yasojima H, Fujisawa T, Yamamoto M, Tsuneizumi M, Kitani A, Watanabe J, Matsui A, Takahashi Y, Takashima S, Shien T, Tamura K, Saji S, Masuda N, Tokuda Y, Iwata H : Durable complete response in HER2-positive breast cancer: A multicenter retrospective analysis. European Society for Medical Oncology (ESMO), Spain, 2017年9月8日

Iwata H, Masuda N, Kim S-B, Inoue K, Rai Y, Fujita T, Shen Z-Z, Chiu JW, Ohtani S, Takahashi M, Yamamoto N, Miyaki T, Sun Q, Yen-Shen L, Xu B, Yap YS, Bustam AZ, Lee JR, Zhang B, Bryce R, Chan A : Neratinib in the extended adjuvant treatment of patients from Asia with early-stage HER2+ breast cancer after trastuzumab-based therapy: Exploratory analyses from the phase III ExteNET trial. SABCS 会議, San Antonio, 2017年12月5日

Tada H, Miyashita M, Gonda K, Watanabe M, Suzuki A, Watanabe G, Harada N, Sato A, Hamanaka Y, Masuda N, Toi M, Ohno S, Bando H, Ishiguro H, Inoue K, Yamamoto N, Kuroi K, Ohuchi N, Ishida : TNew quantitative diagnostic method by fluorescence nanoparticle for HER2 positive breast cancer treated with neoadjuvant lapatinib and trastuzumab: The Neo LaTH study (JBCRG-16TR), SABCS 会議, SanAntonio, 2017年12月5日

Imoto S, Saito Oba M, Masuda N, Nagashima T, Wada N, Takashima T, Kitada M, Kawada M, Hayashida T, Taguchi T, Aihara T, Miura D, Toh U, Yoshida M, Sugae S, Yoneyama K, Matsumoto H, Jinno H, Sakamoto J : Observational study of axilla treatment for breast cancer patients with 1 to 3 positive micrometastases or macrometastases in sentinel lymph nodes. SABCS 会議, SanAntonio, 2017年12月5日

Yamaguchi M, Nakayama T, Yoshinami T, Ikeda M, Iwamoto M, Komoike Y, Takashima T, Tsurutani J, Yoshidome K, Yamada T, Morita S, Masuda N : A randomized phase II study of maintenance hormone therapy with or without capecitabine after induction therapy with bevacizumab plus paclitaxel in hormone receptor positive and HER2 negative metastatic breast cancer (KBCSG-TR1214). SABCS 会議, SanAntonio, 2017年12月5日

Shimomura A, Masuda N, Tamura K, Yasojima H, Sawaki M, Nishimura Y, Saji S, Iwata H : A phase 1 study of KHK2375 (entinostat) as monotherapy and in combination with exemestane in Japanese patients with hormone receptor-positive, HER2-negative, advanced or recurrent breast cancer. SABCS 会議, SanAntonio, 2017年12月5日

Iwata H, Masuda N, Fujisawa T, Toyama T, Ohtani S, Yamamoto Y, Kashiwaba M, Taira N, Sakai T, Hasegawa Y, Nakamura R, Akabane H, Shibahara Y, Sasano H, Yamaguchi T, Ohashi Y : NEOS: A randomized, open label, phase 3 trial of adjuvant chemotherapy for postmenopausal breast cancer patients who responded to neoadjuvant letrozole: First report of long-term outcome and prognostic value of response to neoadjuvant endocrine therapy, SABCS 会議, SanAntonio, 2017年12月5日

Masuda N, Sato N, Morimoto T, Ueno T, Kanbayashi C, Kaneko K, Yasojima H, Saji S, Sasano H, Morita S, Ohno S, Toi M : Tailored neoadjuvant endocrine and chemo-endocrine therapy for postmenopausal patients with estrogen receptor-positive human epidermal growth factor receptor 2-negative primary breast cancer. SABCS 会議, SanAntonio, 2017年12月5日

Yamamoto Y, Iwata H, Masuda N, Fujisawa T, Toyama T, Kashiwaba M, Ohtani S, Taira N, Sakai T, Hasegawa Y, Nakamura R, Akabane H, Shibahara Y, Sasano H, Yamaguchi T, Sakamaki K, Chao C, McCullough D, Sugiyama N, Ohashi Y : TransNEOS: Validation of the oncotype DX recurrence score (RS) testing core needle biopsy samples from NEOS as predictor of clinical response to neoadjuvant endocrine therapy for postmenopausal estrogen receptor positive (ER+), HER2 negative (HER2-) breast cancer patients. SABCS 会議. SanAntonio, 2017年12月5日

Campane M, Im S-A, Iwata H, Clemons M, Ito Y, Awada A, Chia S, Jagiełło-Gruszfeld A, Pistilli B,

Tseng L-M, Hurvitz S, Masuda N, Cortés J, De Laurentiis M, Arteaga CL, Jiang Z, Jonat W, Sellami D, El-Hashimy M, Le Mouhaër S, Sankaran B, Bourdeau L, Baselga J : Buparlisib (BUP) or placebo (PBO) plus fulvestrant (FUL) in postmenopausal patients (pts) with hormone receptor-positive (HR+), human epidermal growth factor receptor 2-negative (HER2-) advanced breast cancer (ABC): Overall survival (OS) results from BELLE-2, a randomized, phase III study. SABCS 会議, SanAntonio, 2017 年 12 月 5 日

Kawaguchi H, Yamashita T, Masuda N, Kitada M, Narui K, Hattori M, Yoshinami T, Matsunami N, Yanagihara K, Kawasoe T, Nagashima T, Bando H, Yano H, Hasegawa Y, Nakamura R, Kashiwaba M, Morita S, Ohno S, Toi M : Phase II study of eribulin in combination with pertuzumab plus trastuzumab for human epidermal growth factor receptor 2 (HER2)-positive advanced or metastatic breast cancer. SABCS 会議, SanAntonio, 2017 年 12 月 5 日

Domchek SM, Robson M, Im S-A, Senkus E, Xu B, Masuda N, Delaloge S, Li W, Armstrong A, Conte P, Bannister W, Goessl C, Runswick S, Goel S, Tung N : Tolerability of olaparib monotherapy versus chemotherapy in patients with HER2-negative metastatic breast cancer and a germline BRCA mutation: OlympiAD. SABCS 会議, SanAntonio, 2017 年 12 月 5 日

Im S-A, Xu B, Li W, Robson M, Ouyang Q, Yeh D-C, Iwata H, Park Y-H, Sohn JH, Tseng L-M, Goessl C, Wu W, Runswick S, Masuda N : Olaparib monotherapy versus chemotherapy for patients with HER2-negative metastatic breast cancer and a germline BRCA mutation: Asian subgroup analysis from the phase III OlympiAD trial. SABCS 会議, SanAntonio, 2017 年 12 月 5 日

Outani H, Nakai S, Nakai T, Takenaka S, Hamada K, Myoui A, Yoshikawa H, Imura Y, Tanaka T, Oshima K, Araki N, Kakunaga S, Kudawara I, Ueda T : Clinical outcome and management of nodal metastasis in the patients with epithelioid sarcoma. 22th Connective Tissue Oncology Society (CTOS) 2017 Annual Meeting, Maui, 2017 年 11 月 8 日

Imura Y, Outani H, Tanaka T, Oshima K, Araki N, Takenaka S, Hamada K, Naka N, Myoui A, Yoshikawa H, Kakunaga S, Kudawara I, Ueda T : Clinical outcome of osteosarcoma in patients older than 40 years of age. 22th Connective Tissue Oncology Society (CTOS) 2017 Annual Meeting, Maui, 2017 年 11 月 8 日

B-3

Tsuboyama T, Hori Y, Hori M, Onishi H, Tatsumi M, Sakane M, Ota T, Tomiyama N : Imaging findings of ovarian dysgerminoma with emphasis on multiplicity and vascular architecture: implication for pathogenesis. 第 31 回日本腹部放射線学会、北海道、2017 年 6 月 30 日

吉田悠里子、栗山啓子、永井啓介、岸本健太郎、井上敦夫、高村 学、東 将浩、崔 秀美 : AIDS 患者と非 HIV 患者に発症した Mycobacterium kansasii 症の CT 所見の比較。第 76 回日本放射線学会総会、横浜、2017 年 4 月 14 日

吉田悠里子、栗山啓子、木曾建吾、井上敦夫、東 将浩、上地隆史、森 清 : HIV/AIDS 患者に合併した播種型 Mycobacterium kansasii 症の 1 例。第 31 回胸部放射線研究会、松山、2017

年 9 月 8 日

萩 美里、大谷陽子、森 清、水谷麻紀子、八十島宏行、森川希美、井上敦夫、中森正二、関本貢嗣、眞能正幸、増田慎三：Triple negative 乳癌（TNBC）に対する術前化学療法の現状と課題。第 55 回日本癌治療学会学術集会、横浜、2017 年 10 月 20 日

安藤性實、小河原光正、木村 剛、宮本 智、高見康二、井上敦夫、栗山啓子、田中英一、眞能正幸：Nivolumab で縮小効果が得られた肺多型癌の一例。第 58 回日本肺癌学会学術集会、横浜、2017 年 10 月 15 日

八十島宏行、増田慎三、森川希美、大谷陽子、水谷麻紀子、井上敦夫、栗山啓子、森 清、眞能正幸、中森正二、関本貢嗣：HER2 陽性および Triple negative 乳癌における、術前化学療法後 MRI 画像評価にみる非切除手術への可能性。第 25 回日本乳癌学会学術総会、福岡、2017 年 7 月 14 日

川井 章、上田孝文、東 尚弘：骨・軟部腫瘍の集学的治療 all Japan での取り組み。第 90 回日本整形外科学会学術総会、仙台、2017 年 5 月 19 日

上田孝文：軟部肉腫の集学的治療：臨床の立場から、新規薬剤・トラベクテジン。第 15 回日本臨床腫瘍学会学術集会、神戸、2017 年 7 月 27 日

上田孝文：悪性軟部腫瘍に対する新規薬物療法の開発。第 129 回中部日本整形外科災害外科学会学術集会、富山、2017 年 10 月 6 日

長谷川裕子、平尾素宏、三田英治：Management of chemotherapy in elderly patients with metastatic gastric cancer. 第 25 回 JDDW 日本消化器関連学会週間、福岡、2017 年 10 月 12 日

宮本敦史、前田 栄、上平朝子、坪倉美由紀、廣田和之、上地隆史、中蔵伊知郎、関本貢嗣、中森正二：カルバペネム耐性腸内細菌科細菌の大規模アウトブレイクを経験して。第 30 回日本外科感染症学会総会学術集会、東京、2017 年 11 月 30 日

植村 守、三宅正和、加藤健志、池田正孝、宮崎道彦、浜川卓也、前田 栄、濱 直樹、西川和宏、宮本敦史、水島恒和、山本浩文、森 正樹、中森正二、関本貢嗣：腹腔鏡で攻める直腸癌局所再発手術。第 30 回日本内視鏡外科学会総会、京都、2017 年 12 月 7 日

三宅正和、植村 守、池田正孝、加藤健志、前田 栄、浜川卓也、西川和宏、濱 直樹、宮本敦史、平尾素宏、宮崎道彦、中森正二、関本貢嗣：大腸手術における縫合不全に対する腹腔鏡下手術。第 54 回日本腹部救急医学会総会、東京、2018 年 3 月 9 日

増田慎三：新時代を迎えた乳癌術前化学療法。第 25 回日本乳癌学会学術総会、福岡、2017 年 7 月 14 日

増田慎三：ホルモン受容体陽性進行乳癌患者を対象に Fulvestrant を Anastrozole と比較する無

作為化第 III 相試験。第 25 回日本乳癌学会学術総会、福岡、2017 年 7 月 14 日

大谷陽子、増田慎三、八十島宏行、水谷麻紀子、森川希実、森 清、眞能正幸、中森正二：
術前化学療法前センチネルリンパ節生検の成績。第 25 回日本乳癌学会学術総会、福岡、2017
年 7 月 14 日

西村令喜、増田慎三、高橋将人、井上賢一、大野真司、岩田広治、森 優子、橋垣 学、長
澤 崇、梅山佳子、戸井雅和：ER 陽性 HER2 陰性閉経後進行・再発乳癌患者における palbociclib
と letrozole 併用の国内第 II 相試験成績。第 25 回日本乳癌学会学術総会、福岡、2017 年 7 月
14 日

増田慎三、井本 滋、雷 哲明、三好康雄、神垣俊二、岩瀬弘敬、徳永えり子、高橋三奈、
吉田雅行、加々良尚文、John FR Robertson、Matthew J Ellis、Zhimin Shao、今井正彦、Lynda Grinsted、
Mehdi Fazal、野口眞三郎：ホルモン受容体陽性進行乳癌患者を対象に Fulvestrant を Anastrozole
と比較する無作為化第 III 相試験。第 25 回日本乳癌学会学術総会、福岡、2017 年 7 月 14 日

北條 隆、増田慎三、岩本高行、青儀健二郎、阿南敬生、飯島耕太郎、石田孝宣、河合賢朗、
坂谷貴司、新倉直樹、増岡秀次、宮田裕章、隈丸 拓、小島康幸、相良安昭、林 直輝、吉
田正行、徳田 裕、中村清吾、津田 均：ER 陽性 HER2 陰性原発乳癌に対するアンストラサイ
クリンにタキサンを追加した術後化学療法の有用性の検討。第 25 回日本乳癌学会学術総会、
福岡、2017 年 7 月 14 日

新倉直樹、扇屋りん、熊木伸枝、八十島宏行、岩朝 勤、神林智寿子、大下内理紗、常泉道
子、渡邊健一、松井 哲、藤澤知巳、佐治重衡、徳田 裕、増田慎三、岩田広治：乳癌にお
ける原発腫瘍と脳転移腫瘍の免疫微小環境の変化。第 25 回日本乳癌学会学術総会、福岡、2017
年 7 月 14 日

旭 修司、築山 巖、鹿間直人、佐伯俊昭、松村泰成、中川志乃、立入誠司、森口喜生、吉
田 謙、古妻理之、増田慎三、余田栄作、中島一毅、大谷侑輝、能勢隆之、小口正彦：組織
内照射による加速乳房部分照射（APBI）多施設共同試験の臨床結果（60 ヶ月）。第 25 回日
本乳癌学会学術総会、福岡、2017 年 7 月 14 日

津田 萌、石黒 洋、鳥口尚子、増田慎三、坂東裕子、大神正宏、本間真人、森田智視、戸
井雅和：ラパチニブ服用タイミングと皮膚毒性の関係：JBCRG-16/Neo-LaTH からのコホート
研究。第 15 回日本臨床腫瘍学会学術集会、神戸、2017 年 7 月 27 日

高野利実、増田慎三：HER2 陽性進行・再発乳癌治療の現在と未来。第 15 回日本臨床腫瘍学
会学術集会、神戸、2017 年 7 月 27 日

岩田広治、増田慎三、雷 哲明、藤田崇史、高橋将人、味八木寿子、佐藤信昭、Bo Zhang、
渡邊純一郎、井上賢一：HER2 陽性術後トラスツズマブ治療後のネラチニブの有効性－
ExterNET study 中間解析における日本人サブセット。第 15 回日本臨床腫瘍学会学術集会、神
戸、2017 年 7 月 29 日

青儀健二郎、渡邊健一、渡邊隆紀、松井 哲、佐藤康幸、増田慎三、山下芳典、大塚真哉、徳永えり子、阿南節子：NHO ネットワーク共同研究による多施設共同 Hazardous Drugs (HD) 曝露実態調査から見た本邦の現状。第 15 回日本臨床腫瘍学会学術集会、神戸、2017 年 7 月 29 日

増田慎三：閉経前 ER 陽性治療における Best Strategy を探る。第 14 回日本乳癌学会中国四国地方ランチョンセミナー、岡山、2017 年 9 月 16 日

森本 卓、佐藤信昭、増田慎三、上野貴之、神林智寿子、金子耕司、八十島宏行、佐藤友威、新宮聖士、田邊 匡、尾崎慎治、笹野公伸、森田智視、大野真司、戸井雅和：閉経後 HR 乳癌患者に対するレスポンスガイド下術前内分泌療法 (JBCRG-11CPA)。第 55 回日本癌治療学会学術集会、横浜、2017 年 10 月 20 日

増田慎三：Living longer, Living better を目指した転移乳癌治療のエビデンス創出 ～HER2 陽性乳癌～。第 55 回日本癌治療学会学術集会 学術セミナー、横浜、2017 年 10 月 21 日

向井博文、清水千佳子、増田慎三、大谷彰一郎、大野真司、高橋將人、山本 豊、西村令喜、佐藤信昭、大住省三、岩田広治、森 優子、橋垣 学、Dongrui R. Lu、戸井雅和：未治療 ER+ 進行乳癌患者における palbociclib 第 3 相試験 (PALOMA-2) -日本人 subgroup 解析-。第 55 回日本癌治療学会学術集会、横浜、2017 年 10 月 21 日

増田慎三、井上賢一、中村力也、雷 哲明、向井博文、大野真司、原 文堅、森 優子、橋垣 学、村松泰明、長澤 崇、梅山佳子、Huang Xin、岩田広治：既治療ホルモン陽性進行乳癌における palbociclib 第 3 相試験 (PALOMA-3) -日本人サブ解析-。第 55 回日本癌治療学会学術集会、横浜、2017 年 10 月 21 日

北田正博、山下年成、川口英俊、成井一隆、服部正也、吉波哲大、松並展輝、柳原一広、長谷川善枝、中村力也、増田慎三、森田智視、大野真司、戸井雅和：HER2 陽性転移性乳癌に対する trastuzumab, pertuzumab, eribulin 併用療法 (JBCRG-M03)。第 55 回日本癌治療学会学術集会、横浜、2017 年 10 月 21 日

藤澤知巳、川口英俊、増田慎三、中山貴寛、青儀健二郎、伊藤良則、大谷彰一郎、佐治重衛、長谷川善枝、服部正也、山下年成、山本 豊、森田智視、戸井雅和、大野真司：閉経後進行再発乳癌におけるフルベストラントの長期 TTF に関わる検討：Safari 試験。第 55 回日本癌治療学会学術集会、横浜、2017 年 10 月 21 日

永山愛子、松井 哲、村田有也、増田慎三、森 清、高橋將人、山城勝重、青儀健二郎、前田茂人、伊東正博、尾崎真治、佐藤康幸、徳永えり子、渡邊隆紀、西村理恵子：セルブロックを用いた乳癌転移巣細胞診検体の受容体検査の臨床的検討。第 55 回日本癌治療学会学術集会、横浜、2017 年 10 月 21 日

八十島宏行、青儀健二郎、渡邊健一、渡邊隆紀、松井 哲、佐藤康幸、増田慎三、山下芳典、

大塚眞哉、徳永えり子、阿南節子、山口聖恵：本邦の Hazardous Drugs (HD) 曝露の実態～多施設共同 HD 曝露実態調査の解析（第2報）。第55回日本癌治療学会学術集会、横浜、2017年10月22日

増田慎三：ER陽性進行再発乳癌の新たな治療戦略～イブランスの役割～。第15回日本乳癌学会近畿地方会、京都、2017年12月16日

長田陽子、大谷陽子、森川希実、八十島宏行、水谷麻紀子、眞能正幸、森清、増田慎三：同時性-両側原発性乳腺アポクリン癌の1例。第15回日本乳癌学会近畿地方会、京都、2017年12月16日

B-4

大宮英泰、高見康二、関本貢嗣、中森正二、平尾素宏、池田正孝、宮崎道彦、宮本敦史、増田慎三、西川和宏、濱直樹、三宅正和、植村守、水谷麻紀子、八十島宏行、前田栄、大谷陽子、浜川卓也、栗山啓子、眞能正幸：臨床病期I期右側非小細胞肺癌における縦隔リンパ節郭清に関する到達法別検討。第117回日本外科学会定期学術集会、2017年4月27日

上平朝子、坪倉美由紀、中蔵伊知郎、廣田和之、上地隆史、田栗貴博、眞能正幸、中森正二：大阪医療センターにおけるCREアウトブレイクの伝播要因の解析。第91回日本感染症学会総会・学術講演会、第65日本化学療法学会学術集会、東京、2017年4月7日

山口歩、濱直樹、前田栄、中森正二：完全内臓逆位症を伴う胆嚢炎に対し、腹腔鏡下胆嚢摘出術を施行した1例。第53回日本胆道学会学術集会、山形、2017年9月28日

関本貢嗣、加藤健志、三宅正和、植村守、中森正二、平尾素宏、宮本敦史、西川和宏、濱直樹、前田栄、浜川卓也、池田正孝：直腸癌局去再発の治療戦略。第55回日本癌治療学会学術集会、横浜、2017年10月22日

関本貢嗣、加藤健志、三宅正和、植村守、中森正二、平尾素宏、宮本敦史、西川和宏、濱直樹、前田栄、浜川卓也、宮崎道彦、池田正孝：骨盤多臓器合併切除時のトラベルシェーティング。第79回日本臨床外科学会総会、東京、2017年11月23日

植田萌、森清、高木景城、糸山光麿、笹倫郎、眞能正幸：乳腺 apocrine ductal carcinoma in situ (DCIS) の4例。第58回日本臨床細胞学会総会春期大会、大阪、2017年5月28日

森清、清川博貴、眞能正幸：腫瘍厚み径と種々の組織学的因子は、術前に非浸潤性乳管癌症例と診断された症例での浸潤巣存在予測に有用である。第25回日本乳癌学会学術総会、福岡、2017年7月14日

片山真穂、初山弘幸、藤澤悠貴、松山高明、眞能正幸、上田初江：未分化多型肉腫 (Undifferentiated pleomorphic sarcoma) と診断された心臓腫瘍の1例。第56回日本臨床細胞学会総会秋期大会、横浜、2017年11月19日

原田和弥、森 清、笹 倫郎、長友 萌、眞能正幸、竹中明美、津田絹江：細胞診の免疫染色が有用であった原発不明癌の3例。第56回日本臨床細胞学会総会秋期大会、横浜、2017年11月19日

岩本圭史、河本恵介、宮本隆司、上田孝文：片側の腸骨筋に嚢胞性病変が先行し診断に難渋したリウマチ性多発筋痛症の1例。第61回日本リウマチ学会総会・学術集会、福岡、2017年4月20日

竹中 聡、角永茂樹、伊村慶紀、濱田健一郎、中 紀文、中井 翔、大島和也、王谷英達、田中太晶、上田孝文、久田原郁夫、名井 陽、荒木信人、吉川秀樹：骨盤骨肉腫の予後を改善するために：四肢骨肉腫との比較。第50回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会、東京、2017年7月13日

荒木信人、大島和也、王谷英達、田中太晶、伊村慶紀、中 紀文、濱田健一郎、竹中 聡、上田孝文、久田原郁夫、角永茂樹、青木康彰、倉都滋之、吉川秀樹：悪性骨腫瘍の患肢温存術長期経過後合併症とその対策。第50回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会、東京、2017年7月14日

竹中 聡、濱田健一郎、中 紀文、荒木信人、上田孝文、玉井宣行、名井 陽、吉川秀樹：術中放射線照射処理骨の osteoarticular graft はどのようなときには使用すべきか。第50回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会、東京、2017年7月14日

中井隆彰、伊村慶紀、中井 翔、安田直弘、山田修太郎、金子恵子、王谷英達、竹中 聡、濱田健一郎、名井 陽、荒木信人、上田孝文、伊藤和幸、吉川秀樹、中 紀文：淡明細胞肉腫に対する trabectedin (Yondelis; Et-743) の抗腫瘍効果。第50回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会、東京、2017年7月14日

中井 翔、中井隆彰、安田直弘、山田修太郎、金子恵子、竹中 聡、濱田健一郎、名井 陽、荒木信人、上田孝文、伊藤和幸、吉川秀樹、中 紀文：淡明細胞肉腫に対する eribulin mesilate の抗腫瘍効果。第50回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会、東京、2017年7月14日

古家雅之、長本行隆、角永茂樹、青野博之、上田孝文：ゾレドロン酸静注療法が著効した症候性腰椎椎体血管腫の1例。第50回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会、東京、2017年7月14日

竹中 聡、角永茂樹、伊村慶紀、濱田健一郎、中 紀文、大島和也、王谷英達、田中太晶、上田孝文、久田原郁夫、名井 陽、荒木信人、吉川秀樹：骨盤骨肉腫の予後を改善するために四肢骨肉腫との比較。第50回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会、東京、2017年7月13日

荒木信人、大島和也、王谷英達、田中太晶、伊村慶紀、中 紀文、濱田健一郎、竹中 聡、上田孝文、久田原郁夫、角永茂樹、青木康彰、倉都滋之、吉川秀樹：悪性骨腫瘍の患肢温存術長期経過後合併症とその対策。第50回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会、東京、2017

年 7 月 14 日

島田俊樹、山田修太郎、平松久仁彦、立石耕介、上田孝文、三岡智規：小児の足趾溶骨性病変に対してランゲルハンス細胞組織球症を疑った 2 例。第 129 回中部日本整形外科災害外科学会学術集会、富山、2017 年 10 月 7 日

平尾素宏、西川和宏、浜川卓也、高見康二、池田正孝、宮本敦史、大宮英泰、増田慎三、濱直樹、八十島宏行、水谷麻紀子、三宅正和、植村 守、前田 栄、大谷陽子、中森正二、関本貢嗣：高齢者食道癌の外科治療成績。第 117 回日本外科学会定期学術集会、東京、2017 年 4 月 27 日

平尾素宏、西川和宏、浜川卓也、山田拓哉、眞能正幸、中森正二、関本貢嗣：高齢者食道癌にたいする外科治療の現状。第 71 回日本食道学会学術集会、軽井沢、2017 年 6 月 15 日

浜川卓也、平尾素宏、西川和宏、植村 守、三宅正和、濱 直樹、宮本敦史、池田正孝、中森正二、関本貢嗣：透析患者に発生した食道原発悪性黒色腫の 1 切除例。第 71 回日本食道学会学術集会、軽井沢、2017 年 6 月 15 日

小林 登、平尾素宏、浜川卓也、西川和宏、三宅正和、濱 直樹、宮本敦史、池田正孝、中森正二、関本貢嗣：当院における食道癌術後胃管潰瘍の後方視的検討。第 71 回日本食道学会学術集会、軽井沢、2017 年 6 月 15 日

山本 慧、平尾素宏、山田拓哉、浜川卓也、西川和宏、宮本敦史、池田正孝、中森正二、関本貢嗣：当院における胃癌に対する内視鏡的切除及び外科的切除症例の検討。第 71 回日本食道学会学術集会、軽井沢、2017 年 6 月 15 日

小林雄太、平尾素宏、浜川卓也、西川和宏、三宅正和、濱 直樹、宮本敦史、宮崎道彦、中森正二、関本貢嗣：Killian-Jamieson 憩室の 1 切除例。第 71 回日本食道学会学術集会、軽井沢、2017 年 6 月 16 日

浜川卓也、平尾素宏、西川和宏、山本 慧、前田 栄、植村 守、三宅正和、濱 直樹、宮本敦史、宮崎道彦、池田正孝、中森正二、関本貢嗣：高度冠動脈狭窄を伴う根治切除不能出血性胃癌に対し IABP 挿入下に胃切除術を行った 1 例。第 39 回日本がん局所療法研究会、京都、2017 年 6 月 23 日

浜川卓也、平尾素宏、西川和宏、前田 栄、植村 守、三宅正和、濱 直樹、宮本敦史、宮崎道彦、池田正孝、中森正二、関本貢嗣：腹腔鏡下に切除を行った食道癌根治的化学放射線療法後の腹部リンパ節転移の 1 例。第 26 回日本がん転移学会学術集会・総会、大阪、2017 年 7 月 27 日

平尾素宏、西川和宏、浜川卓也、池田正孝、宮本敦史、濱 直樹、植村 守、三宅正和、前田 栄、中森正二、関本貢嗣：胃癌原発巣の穿孔・出血にたいする oncologic emergency surgery の現状—当院過去 5 年間の外科手術症例から—。第 72 回日本消化器外科学会総会、金沢、2017

年 7 月 21 日

庄司絢香、長谷川裕子、加藤聖也、清田良介、新海数馬、田代 拓、中川健太郎、石原朗雄、岩崎哲也、西尾公美子、榊原祐子、山田拓哉、中水流正一、石田 永、平尾素宏、三田英治：当院における高齢者切除不能胃癌に対する化学療法 of 検討。第 25 回 JDDW 日本消化器関連学会週間、福岡、2017 年 10 月 14 日

Wakatsuki T, Mitani S, Hara H, Takahari D, Chin K, Hasegawa H, Hirao M, Kadowaki S, Muro K：Chemotherapy for gastric cancer with early recurrence after adjuvant S-1 monotherapy: a multicenter retrospective study. 第 15 回日本臨床腫瘍学会、神戸、2017 年 7 月 27 日

長谷川裕子、石原朗雄、岩崎哲也、西尾公美子、榊原祐子、山田拓哉、中水流正一、石田 永、平尾素宏、三田英治：転移を有する切除不能大腸癌の予後とその予後に影響を与える因子についての検討。第 15 回日本臨床腫瘍学会、神戸、2017 年 7 月 29 日

小林雄太、平尾素宏、赤坂智史、浜川卓也、西川和宏、植村 守、三宅正和、濱 直樹、宮本敦史、宮崎道彦、加藤健志、中森正二、加藤伸弥、三田英治、関本貢嗣：喉頭癌術後の吻合部狭窄により経口内視鏡が困難な胃癌術後の早期食道癌に対して、経残胃的に逆行性 ESD を施行した 1 例。第 79 回日本臨床外科学会総会、東京、2017 年 11 月 24 日

平尾素宏、西川和宏、浜川卓也、長谷川裕子、宮本敦史、加藤健志、濱 直樹、三宅正和、植村 守、前田 栄、中森正二、関本貢嗣：当院での胃癌腹膜播種による腹水に対する CART の現状。第 90 回日本胃癌学会総会、横浜、2018 年 3 月 8 日

宮本敦史、濱 直樹、前田 栄、浜川卓也、植村 守、三宅正和、西川和宏、宮崎道彦、池田正孝、平尾素宏、関本貢嗣、中森正二：サルコペニアが膵頭十二指腸切除の術後経過に及ぼす影響に関する検討。第 117 回日本外科学会定期学術集会、2017 年 4 月 29 日

前田 栄、濱 直樹、宮本敦史、浜川卓也、植村 守、三宅正和、西川和宏、平尾素宏、池田正孝、関本貢嗣、中森正二：化学療法の奏功により切除が行われた切除不能膵癌の検討。第 71 回手術手技研究会、名古屋、2017 年 5 月 26 日

Miyamoto A, Hama N, Maeda S, Hamakawa T, Uemura M, Miyake M, Nishikawa K, Ikeda M, Hirao M, Sekimoto M, Nakamori S：Impact of visceral obesity and sarcopenia on pancreaticoduodenectomy. 第 29 回日本肝胆膵外科学会学術集会、横浜、2017 年 6 月 10 日

宮本敦史、濱 直樹、前田 栄、浜川卓也、植村 守、三宅正和、西川和宏、宮崎道彦、池田正孝、平尾素宏、関本貢嗣、中森正二：遠位胆管癌切除後の腹膜転移再発に対し再発切除により長期生存が得られた 1 例。第 39 回日本がん局所療法研究会、京都、2017 年 6 月 23 日

村上弘大、濱 直樹、前田 栄、宮本敦史、浜川卓也、植村 守、三宅正和、西川和宏、大宮英泰、宮崎道彦、池田正孝、平尾素宏、高見康二、関本貢嗣、中森正二：減量手術を行うことできた十二指腸原発神経内分泌腫瘍多発肝転移の 1 例。第 39 回日本がん局所療法研究会、

京都、2017年6月23日

宮本敦史、濱 直樹、前田 栄、浜川卓也、植村 守、三宅正和、西川和宏、宮崎道彦、池田正孝、平尾素宏、関本貢嗣、中森正二：胆道再建後の挙上空腸閉塞に対する挙上空調消化管バイパスに関する検討。第42回日本外科系連合学会学術集会、徳島、2017年6月29日

宮本敦史、村上弘大、濱 直樹、前田 栄、浜川卓也、植村 守、三宅正和、西川和宏、宮崎道彦、池田正孝、平尾素宏、関本貢嗣、中森正二：術前治療が膵癌根治切除例の術後経過に及ぼす影響に関する検討。第48回日本膵臓学会大会、京都、2017年7月15日

小林雄太、前田 栄、濱 直樹、宮本敦史、浜川卓也、植村 守、三宅正和、西川和宏、宮崎道彦、平尾素宏、池田正孝、関本貢嗣、森 清、眞能正幸、中森正二：術前化学療法により切除が可能となった多発腹膜播種を伴う膵癌の1例。第48回日本膵臓学会大会、京都、2017年7月15日

池田正孝、山岡雄祐、村上弘大、植村 守、三宅正和、宮本敦史、宮崎道彦、平尾素宏、中森正二、関本貢嗣：術後短期抗凝固薬の大腸癌術後予算に与える影響の検討—傾向スコアを用いた解析—。第72回日本消化器外科学会総会、金沢、2017年7月20日

前田 栄、濱 直樹、宮本敦史、植村 守、三宅正和、西川和宏、平尾素宏、池田正孝、関本貢嗣、中森正二：膵癌術後における残膵切除例6例の検討。第72回日本消化器外科学会総会、金沢、2017年7月21日

村上弘大、宮本敦史、前田 栄、濱 直樹、三宅正和、西川和宏、池田正孝、平尾素宏、関本貢嗣、中森正二：膵癌に対する術前治療と切除後膵液瘻に関する検討。第72回日本消化器外科学会総会、金沢、2017年7月22日

前田 栄、濱 直樹、宮本敦史、浜川卓也、植村 守、三宅正和、西川和宏、平尾素宏、池田正孝、関本貢嗣、中森正二：化学療法の奏功により切除が行われた遠隔転移を認める切除不能膵癌の検討。第26回日本がん転移学会学術集会・総会、大阪、2017年7月28日

小林雄太、前田 栄、濱 直樹、宮本敦史、浜川卓也、植村 守、三宅正和、西川和宏、宮崎道彦、平尾素宏、池田正孝、関本貢嗣、森 清、眞能正幸、中森正二：Gemcitabine・nab-paclitaxel併用術前化学療法により切除が可能となった多発腹膜播種を伴う膵癌の1例。第26回日本がん転移学会学術集会・総会、大阪、2017年7月28日

宮本敦史、濱 直樹、前田 栄、浜川卓也、植村 守、三宅正和、西川和宏、宮崎道彦、池田正孝、平尾素宏、関本貢嗣、中森正二：遠位胆管癌の再発形式、予後からみた再発巣切除に関する検討。第53回日本胆道学会学術集会、山形、2017年9月28日

宮本敦史、村上弘大、濱 直樹、前田 栄、浜川卓也、植村 守、三宅正和、西川和宏、宮崎道彦、池田正孝、平尾素宏、関本貢嗣、中森正二：早期術後合併症からみた膵癌切除例における術前治療の影響。第15回日本消化器外科学会大会、福岡、2017年10月12日

宮本敦史、濱 直樹、前田 栄、浜川卓也、植村 守、三宅正和、西川和宏、宮崎道彦、加藤健志、平尾素宏、関本貢嗣、中森正二：術前化学（放射線）療法が膵癌切除例の術後経過に及ぼす影響。第 55 回日本癌治療学会学術集会、横浜、2017 年 10 月 20 日

前田 栄、濱 直樹、宮本敦史、浜川卓也、植村 守、三宅正和、西川和宏、平尾素宏、加藤健志、関本貢嗣、中森正二：術前治療後切除膵癌の治療成績の検討。第 12 回膵癌術前治療研究会、広島、2017 年 10 月 28 日

宮本敦史、濱 直樹、前田 栄、浜川卓也、植村 守、三宅正和、西川和宏、宮崎道彦、加藤健志、平尾素宏、関本貢嗣、中森正二：超高齢者に対する膵頭十二指腸切除の短期成績に関する検討。第 79 回日本臨床外科学会総会、東京、2017 年 11 月 25 日

山口 歩、前田 栄、濱 直樹、宮本敦史、植村 守、三宅正和、加藤健志、平尾素宏、関本貢嗣、中森正二：肝アニサキス症の 1 切除例。第 30 回日本外科感染症学会総会学術集会、東京、2017 年 11 月 29 日

宮本敦史、濱 直樹、前田 栄、浜川卓也、植村 守、三宅正和、西川和宏、宮崎道彦、加藤健志、平尾素宏、関本貢嗣、中森正二：膵頭十二指腸切除例におけるサルコペニアと術後感染性合併症との関連に関する検討。第 30 回日本外科感染症学会総会学術集会、東京、2017 年 11 月 30 日

前田 栄、宮本敦史、濱 直樹、小林雄太、北風雅敏、山口 歩、浜川卓也、植村 守、三宅正和、西川和宏、加藤健志、関本貢嗣、中森正二：HIV 患者に対する胆嚢摘出術。第 30 回日本外科感染症学会総会学術集会、東京、2017 年 11 月 30 日

北風雅敏、前田 栄、宮本敦史、三宅正和、濱 直樹、西川和宏、加藤健志、平尾素宏、中森正二、関本貢嗣：当院における HIV 感染症患者に対する鼠径ヘルニア手術の検討。第 30 回日本外科感染症学会総会学術集会、東京、2017 年 11 月 30 日

宮本敦史、濱 直樹、前田 栄、浜川卓也、植村 守、三宅正和、西川和宏、宮崎道彦、加藤健志、平尾素宏、関本貢嗣、中森正二：完全鏡視下に 3 回の肝切除を施行した肝細胞癌の 1 例。第 30 回日本内視鏡外科学会総会、京都、2017 年 12 月 8 日

前田 栄、宮本敦史、濱 直樹、山本 慧、山口 歩、小林雄太、小林 登、北風雅敏、浜川卓也、植村 守、三宅正和、西川和宏、加藤健志、関本貢嗣、中森正二：腹腔鏡下肝切除を施行した血友病の 2 例。第 30 回日本内視鏡外科学会総会、京都、2017 年 12 月 9 日

山口 歩、濱 直樹、前田 栄、宮本敦史、浜川卓也、植村 守、三宅正和、西川和宏、加藤健志、平尾素宏、関本貢嗣、中森正二：腹腔鏡下胆嚢摘出術を施行した、完全内臓逆位症を伴う胆嚢炎の 1 例。第 30 回日本内視鏡外科学会総会、京都、2017 年 12 月 9 日

宮本敦史、濱 直樹、前田 栄、浜川卓也、植村 守、三宅正和、西川和宏、宮崎道彦、加

藤健志、平尾素宏、関本貢嗣、中森正二：胆膵領域癌切除後の拳上空腸閉塞に対する外科的治療に関する検討。第 54 回日本腹部救急医学会総会、東京、2018 年 3 月 9 日

池田正孝、関本貢嗣、植村 守、三宅正和、前田 栄、濱 直樹、西川和宏、宮本敦史、宮崎道彦、平尾素宏、中森正二：直腸癌局所再発に対する低侵襲手術。第 117 回日本外科学会定期学術集会、2017 年 4 月 27 日

三宅正和、植村 守、池田正孝、宮崎道彦、前田 栄、浜川卓也、濱 直樹、西川和宏、宮本敦史、平尾素弘、中森正二、関本貢嗣：当院における予防的側方郭清の適応とその治療成績。第 117 回日本外科学会定期学術集会、2017 年 4 月 28 日

植村 守、三宅正和、池田正孝、浜川卓也、前田 栄、濱 直樹、西川和宏、宮本敦史、宮崎道彦、平尾素宏、水島恒和、山本浩文、森 正樹、中森正二、関本貢嗣：局所進行直腸癌/直腸癌局所再発に対する術前放射線化学療法。第 117 回日本外科学会定期学術集会、2017 年 4 月 28 日

高見康二、大宮英泰、浜川卓也、前田 栄、三宅正和、西川和宏、濱 直樹、宮本敦史、池田正孝、平尾素宏、中森正二、関本貢嗣：HIV 感染患者に発症した原発性肺癌に対して手術を行った 7 例の臨床的検討。第 117 回日本外科学会定期学術集会、2017 年 4 月 29 日

池田正孝、植村 守、三宅正和、浜川卓也、前田 栄、濱 直樹、西川和宏、宮本敦史、宮崎道彦、平尾素宏、中森正二、関本貢嗣：骨盤内臓器合併切除を必要とする初発直腸 S 状結腸癌症例の検討。第 71 回手術手技研究会、名古屋、2017 年 5 月 26 日

植村 守、三宅正和、宮崎道彦、池田正孝、浜川卓也、前田 栄、濱 直樹、西川和宏、宮本敦史、平尾素宏、中森正二、関本貢嗣：仙骨合併切除を要する直腸癌局所再発手術に対する腹腔鏡下手術。第 71 回手術手技研究会、名古屋、2017 年 5 月 26 日

山口 歩、三宅正和、浜川卓也、前田 栄、植村 守、濱 直樹、西川和宏、宮本敦史、宮崎道彦、平尾素宏、池田正孝、中森正二、関本貢嗣：皮膚浸潤を伴う肛門管癌に放射線化学療法後、直腸切除術および会陰再建を施行した一例。第 39 回日本がん局所療法研究会、京都、2017 年 6 月 23 日

山本 慧、山本和義、浜川卓也、前田 栄、植村 守、三宅正和、濱 直樹、西川和宏、宮本敦史、大宮英泰、宮崎道彦、池田正孝、平尾素宏、高見康二、中森正二、関本貢嗣：消化器疾患術後創離開に対する局所陰圧閉鎖療法時の栄養管理の効果の検討。日本外科代謝栄養学会第 54 回学術集会、新潟、2017 年 7 月 7 日

植村 守、三宅正和、池田正孝、濱 直樹、西川和宏、宮本敦史、宮崎道彦、平尾素宏、中森正二、関本貢嗣：進行下部直腸癌・直腸癌局所再発に対する側方リンパ節郭清術。第 72 回日本消化器外科学会総会、金沢、2017 年 7 月 20 日

小林雄太、三宅正和、植村 守、池田正孝、西川和宏、宮本敦史、宮崎道彦、平尾素宏、中

森正二、関本貢嗣：当院における閉塞性大腸癌に対する大腸ステントを用いた治療戦略。第72回日本消化器外科学会総会、金沢、2017年7月20日

市原もも子、池田正孝、植村 守、三宅正和、宮崎道彦、西川和宏、宮本敦史、平尾素宏、中森正二、関本貢嗣：側方郭清の適応と意識および術前化学放射線療法の効果についての検討。第72回日本消化器外科学会総会、金沢、2017年7月20日

浜川卓也、西川和宏、平尾素宏、植村 守、三宅正和、濱 直樹、宮本敦史、池田正孝、中森正二、関本貢嗣：腹腔鏡下胃切除術における硬膜外麻酔挿入高からみた術後疼痛評価。第72回日本消化器外科学会総会、金沢、2017年7月22日

山口 歩、植村 守、三宅正和、宮崎道彦、池田正孝、西川和宏、宮本敦史、平尾素宏、中森正二、関本貢嗣：当院における直腸脱手術に対する Reduced Port Surgery の取り組み。第72回日本消化器外科学会総会、金沢、2017年7月22日

下山 遼、植村 守、三宅正和、濱 直樹、西川和宏、宮本敦史、宮崎道彦、加藤健志、平尾素宏、中森正二、関本貢嗣：当院における腹腔鏡下直腸固定術～Multiple port から Reduced port へ～。第6回 Reduced Port Surgery Forum、大分、2017年8月4日

山口 歩、植村 守、三宅正和、宮崎道彦、加藤健志、濱 直樹、西川和宏、宮本敦史、平尾素宏、中森正二、関本貢嗣：当院における、直腸脱手術に対する Reduced Port Surgery の取り組み。第6回 Reduced Port Surgery Forum、大分、2017年8月4日

西川和宏、遠藤俊治、藤谷和正、川田純司、大森 健、高橋 剛、平尾素宏、浜川卓也、朴正勝、村上弘大、市原もも子、宮崎道彦、前田 栄、植村 守、三宅正和、濱 直樹、宮本敦史、池田正孝、中森正二、関本貢嗣：CY1 進行胃癌の治療成績：胃切除の意義はあるか？第15回日本消化器外科学会大会、福岡、2017年10月13日

植村 守、三宅正和、池田正孝、河合賢二、高橋秀和、原口直紹、西村潤一、畑 泰司、松田 宙、浜川卓也、前田 栄、濱 直樹、西川和宏、宮本敦史、平尾素宏、水島恒和、山本浩文、森 正樹、中森正二、関本貢嗣：直腸癌局所再発症例に対するギグリ線鋸を用いた腹腔鏡下仙骨合併切除術。第15回日本消化器外科学会大会、福岡、2017年10月13日

Ikeda M, Hamakawa T, Maeda S, Uemura M, Miyake M, Hama N, Nishikawa K, Miyamoto A, Miyazaki M, Hirao M, Nakamori S, Sekimoto M : Lateral pelvic lymph node dissection for the recurrence of lateral lymph nodes after resection of rectal cancer. 第15回日本消化器外科学会大会、福岡、2017年10月13日

植村 守、三宅正和、池田正孝、加藤健志、浜川卓也、前田 栄、濱 直樹、西川和宏、宮本敦史、宮崎道彦、平尾素宏、水島恒和、山本浩文、森 正樹、中森正二、関本貢嗣：直腸癌局所再発症例に対する腹腔鏡下手術の取り組み。第72回日本大腸肛門病学会学術集会、福岡、2017年11月10日

北風雅敏、植村 守、三宅正和、池田正孝、加藤健志、宮崎道彦、浜川卓也、前田 栄、濱直樹、西川和宏、宮本敦史、平尾素宏、中森正二、関本貢嗣：直腸癌局所再発に対して仙骨合併切除術を行った症例における術後疼痛管理の検討。第72回日本大腸肛門病学会学術集会、福岡、2017年11月11日

浜川卓也、西川和宏、平尾素宏、前田 栄、植村 守、三宅正和、濱直樹、宮本敦史、宮崎道彦、加藤健志、中森正二、関本貢嗣：早期胃癌に対する噴門側胃切除術・食道残胃吻合の治療成績の検討。第79回日本臨床外科学会総会、東京、2017年11月23日

植村 守、三宅正和、池田正孝、加藤健志、浜川卓也、前田 栄、濱直樹、西川和宏、宮本敦史、宮崎道彦、平尾素宏、水島恒和、森 正樹、中森正二、関本貢嗣：直腸癌局所再発手術における重症合併症との闘い。第79回日本臨床外科学会総会、東京、2017年11月24日

小林 登、植村 守、三宅正和、加藤健志、藤原綾子、浜川卓也、前田 栄、濱直樹、西川和宏、宮本敦史、宮崎道彦、平尾素宏、高見康二、中森正二、関本貢嗣：直腸癌術後局所再発に対する仙骨合併切除例の骨盤内感染の検討。第79回日本臨床外科学会総会、東京、2017年11月25日

三宅正和、植村 守、池田正孝、加藤健志、前田 栄、浜川卓也、西川和宏、濱直樹、宮本敦史、平尾素宏、宮崎道彦、中森正二、関本貢嗣：骨盤内臓全摘術後の骨盤内再発切除症例の検討。第79回日本臨床外科学会総会、東京、2017年11月25日

小林雄太、植村 守、三宅正和、加藤健志、浜川卓也、前田 栄、濱直樹、西川和宏、宮本敦史、宮崎道彦、平尾素宏、中森正二、関本貢嗣：局所陰圧閉鎖療法を用いて腹会陰式直腸切断術後の会陰創管理を行った1例。第30回日本外科感染症学会総会学術集会、東京、2017年11月30日

加藤健志、植村 守、三宅正和、浜川卓也、前田 栄、濱直樹、西川和宏、宮本敦史、宮崎道彦、池田正孝、平尾素宏、中森正二、関本貢嗣：横行結腸癌に対する Reduced port surgery(RPS)の標準化と教育。第30回日本内視鏡外科学会総会、京都、2017年12月7日

小林 登、浜川卓也、西川和宏、平尾素宏、前田 栄、植村 守、三宅正和、濱直樹、宮本敦史、宮崎道彦、加藤健志、高見康二、中森正二、関本貢嗣：イレウス管留置時に診断された胃癌に対して二期的に腹腔鏡下にイレウス解除術および胃切除を施行した一例。第30回日本内視鏡外科学会総会、京都、2017年12月7日

浜川卓也、西川和宏、平尾素宏、前田 栄、植村 守、三宅正和、濱直樹、宮本敦史、宮崎道彦、加藤健志、中森正二、関本貢嗣：腹腔鏡下胃切除術予防的D2郭清の治療成績。第30回日本内視鏡外科学会総会、京都、2017年12月8日

山本 慧、三宅正和、浜川卓也、前田 栄、植村 守、濱直樹、西川和宏、宮本敦史、宮崎道彦、加藤健志、平尾素宏、高見康二、中森正二、関本貢嗣：瘤への流入血管のクリッピングのみで治療し得た脾動脈瘤の一例。第30回日本内視鏡外科学会総会、京都、2017年12

月 9 日

Nishikawa K, Fujitani K, Endo S, Kawada J, Hirao M, Hamakawa T, Hasegawa H, Maeda S, Uemura M, Miyake M, Hama N, Miyamoto A, Kato T, Nakamori S, Sekimoto M : Is gastrectomy for CY1 gastric cancer truly essential? 第 90 回日本胃癌学会総会、横浜、2018 年 3 月 9 日

浜川卓也、西川和宏、平尾素宏、山口 歩、前田 栄、植村 守、三宅正和、濱 直樹、宮本敦史、宮崎道彦、加藤健志、中森正二、関本貢嗣 : 所属リンパ節生検で診断した胃未分化円形細胞肉腫の 1 例。第 90 回日本胃癌学会総会、横浜、2018 年 3 月 9 日

小林 登、西川和宏、浜川卓也、平尾素宏、前田 栄、植村 守、三宅正和、濱 直樹、宮本敦史、宮崎道彦、加藤健志、中森正二、関本貢嗣 : HIV 陽性血友病患者の発症した胃癌に対し胃切除を施行した一例。第 90 回日本胃癌学会総会、横浜、2018 年 3 月 8 日

山口 歩、三宅正和、植村 守、加藤健志、濱 直樹、西川和宏、宮本敦史、平尾素宏、中森正二、関本貢嗣 : 狭窄型虚血性腸炎にて、イレウスを発症し 2 度の手術を要した 1 例。第 54 回日本腹部救急医学会総会、東京、2018 年 3 月 9 日

加藤伸弥、三宅正和、植村 守、加藤健志、藤原綾子、浜川卓也、前田 栄、濱 直樹、西川和宏、宮本敦史、宮崎道彦、平尾素宏、高見康二、中森正二、関本貢嗣 : 腸重積を併発した進行直腸癌を腹腔鏡下に切除した一例。第 54 回日本腹部救急医学会総会、東京、2018 年 3 月 9 日

北風雅敏、植村 守、三宅正和、加藤健志、浜川卓也、前田 栄、濱 直樹、西川和宏、宮本敦史、宮崎道彦、平尾素宏、中森正二、関本貢嗣 : 直腸癌によるフルニエ壊疽の 1 例。第 54 回日本腹部救急医学会総会、東京、2018 年 3 月 8 日

萩 美里、三宅正和、北風雅敏、植村 守、加藤健志、浜川卓也、前田 栄、濱 直樹、西川和宏、宮本敦史、宮崎道彦、平尾素宏、中森正二、関本貢嗣 : 急性虫垂炎を契機に判明した虫垂癌の一例。第 54 回日本腹部救急医学会総会、東京、2018 年 3 月 8 日

角永茂樹、伊村慶紀、王谷英達、田中太晶、竹中 聡、大島和也、濱田健一郎、中 紀文、名井 陽、久田原郁夫、荒木信人、上田孝文、青木康彰、吉川秀樹 : 延長型腫瘍用人工関節の治療成績。第 50 回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会、東京、2017 年 7 月 13 日

濱田健一郎、中 紀文、伊村慶紀、王谷英達、田中太晶、竹中 聡、大島和也、角永茂樹、城山 晋、荒木信人、久田原郁夫、上田孝文、吉川秀樹 : 神経線維腫症 1 型に発症した悪性末梢神経鞘腫瘍に対する治療成績。第 50 回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会、東京、2017 年 7 月 14 日

王谷英達、立岩大輔、岩佐沙弥、伊村慶紀、田中太晶、大島和也、荒木信人、濱田健一郎、竹中 聡、中 紀文、名井 陽、吉川秀樹、角永茂樹、久田原郁夫、上田孝文 : 骨巨細胞腫の治療成績。第 50 回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会、東京、2017 年 7 月 14 日

角永茂樹、久田原郁夫、上田孝文：下腿後面の悪性軟部腫瘍に対して術前化学療法・放射線治療を施行した治療経験。第1回日本サルコーマ治療研究学会学術集会、東京、2018年2月23日

森川希実、増田慎三、水谷麻紀子、八十島宏行、大谷陽子、田中希世、眞能正幸、森清、関本貢嗣、中森正二：ホルモン陽性HER2陰性進行再発乳癌患者における血清HER2蛋白測定と抗HER2治療の可能性。第25回日本乳癌学会学術総会、福岡、2017年7月14日

水谷麻紀子、増田慎三、八十島宏行、大谷陽子、森川希実、苅田真子：HER2陽性転移・再発乳癌に対する一次治療薬としてカドサイラの可能性。第25回日本乳癌学会学術総会、福岡、2017年7月14日

四方文子、鈴木久美、増田慎三、木村光誠、藤岡大也、寺沢理沙、水谷麻紀子、八十島宏行、大谷陽子、岩本充彦：内分泌療法を受けている若年乳がん患者の体験する困難と医療者へのニーズ。第25回日本乳癌学会学術総会、福岡、2017年7月14日

垣内万依、庄野裕志、森川希実、大谷陽子、八十島宏行、水谷麻紀子、増田慎三：エリブリンメシル酸塩の治療継続に及ぼす腎機能の影響。第25回日本乳癌学会学術総会、福岡、2017年7月14日

B-5

宮崎道彦、山田真美、田中玲子、加藤健志、三宅正和、植村守、中森正二、関本貢嗣：臀部慢性膿皮症の検討。第60回東海肛門疾患懇談会、名古屋、2017年7月29日

中森正二：conversion surgeryの最近の話題－化学療法を中心に－。第17回阪神膀胱外科研究会、大阪、2018年2月23日

吉田悠里子：神経原性肺水腫をきたした10歳代女性の1例。第64回なにわ臨床研究会、大阪、2017年5月24日

木村剛、小河原光正、宮本智、安藤性實、高見康二、安村かおり、井上敦夫、栗山啓子、森清、眞能正幸：アフアチニブとリバーロキサバンが奏効した肺血栓塞栓症合併肺腺癌の1例。第106回日本肺癌学会関西支部会、大阪、2017年6月24日

上田孝文：国立病院機構大阪医療センターにおける病診連携の現状とリハビリテーションを含む骨軟部腫瘍分野の診療内容の紹介。第4回整形外科診療FACE TO FACEの会(特別講演)、大阪、2017年10月18日

上田孝文：骨・軟部腫瘍診療の要点と最近のトピックス。第39回奈良県骨・関節研究会(特別講演)、奈良、2017年10月21日

庄司絢香、長谷川裕子、石田永、三田英治：高齢者切除不能胃癌に対するシスプラチン併

用療法と予後について。第 107 回例会近畿支部日本消化器病学会地方会、大阪、2017 年 9 月 6 日

増田慎三：閉経後 ER 陽性進行再発乳癌治療の新展開。SEM 大阪、大阪、2017 年 4 月 22 日

増田慎三：乳癌領域における若手医師の教育プログラム。第二回乳癌 Educational セミナー、東京、2017 年 5 月 21 日

増田慎三：進行再発 HER2 陽性乳癌に対する ベストストラテジーを考える。中讃地区乳癌 Expert Meeting、香川、2017 年 5 月 23 日

増田慎三：ファイザーが主催する会議に出席し、専門的知見に基づいて乳癌薬物療法に対する専門的知識の供与を行い乳癌治療の均てん化を図る。Advisory Board Meeting for Breast Cancer、東京、2017 年 5 月 26 日

増田慎三：進行再発 HER2 陽性乳癌 ~1st ライン治療を考える~。The Apex ACADEMY OF HALAVEN @Chicago, Chicago, 2017 年 6 月 4 日

増田慎三：米国腫瘍学会で発表された乳がん治療の最新情報についての意見・討議。Breast Cancer Treatment Strategy Advisory Board Meeting、大阪、2017 年 6 月 26 日

増田慎三：ホルモン受容体陽性乳がん治療について助言。Lilly Breast Cancer Medical Advisory Board Meeting、大阪、2017 年 7 月 7 日

増田慎三：St. Gallen BCC2017 からみた、今後の閉経前内分泌療法の見通し。第 25 回日本乳癌学会学術総会、福岡、2017 年 7 月 13 日

増田慎三：HER2 陰性進行再発乳癌に対する ベストストラテジーを考える。South Osaka Breast Cancer symposium、大阪、2017 年 7 月 20 日

増田慎三：HER2 陽性進行・再発乳癌治療に関する情報提供。第 15 回日本臨床腫瘍学会学術集会、神戸、2017 年 7 月 27 日

増田慎三：HER2 陰性乳癌に関する治療戦略と最新の情報 HER2 陰性進行・再発乳癌における アバスチン+パクリタキセル療法。Chugai Onco-Line on Best Cancer、東京、2017 年 8 月 3 日

増田慎三：HER2 陰性進行再発乳癌に対する ベストストラテジーを考える。第 18 回乳癌最新情報カンファレンス スポンサーセミナー、京都、2017 年 8 月 4 日

増田慎三：閉経前 ER 陽性乳癌治療における Best Strategy を探る。第 18 回乳癌最新情報カンファレンス、京都、2017 年 8 月 4 日

増田慎三：乳癌診療 ~今、そしてこれから~。CIMIC 社内研修会、東京、2017 年 8 月 31 日

増田慎三：十分な局所性治療及び術前補助化学療法又は術後補助化学療法を終了した高リスク生殖細胞系 BRCA1/2 変異陽性 HER2 陰性原発乳癌患者に対する術後補助療法としてのオラパリブの有効性と安全性を評価する無作為二重盲検並行群間比較プラセボ対照多施設共同第 III 相試験。2nd OlympiA Local Investigators' Meeting、東京、2017 年 9 月 2 日

増田慎三：最新の乳がん周術期化学療法。Breast Cancer Round Table Meeting in Kobe、神戸、2017 年 9 月 15 日

増田慎三：医薬品費用対効果評価の施行的導入の対象品目に係る科学的観点と倫理的・社会的観点の議論。カドサイラに係る費用対効果評価専門組織における役割派遣、東京、2017 年 9 月 20 日

増田慎三：進行再発 HER2 陽性乳癌に対する ベストストラテジーを考える。第 4 回乳癌勉強会、名古屋、2017 年 9 月 23 日

増田慎三：進行再発 HER2 陽性乳癌に対する ベストストラテジーを考える。Chugai Breast Cancer Seminar in Sendai、仙台、2017 年 10 月 6 日

増田慎三：ER 陽性進行再発乳癌の新たな治療戦略～イブランスの役割～。乳がん分子標的治療セミナー、東京、2017 年 10 月 14 日

増田慎三：HER2 乳癌に関する治療戦略と最新の情報提供。石川県乳癌 Expert Meeting、石川、2017 年 10 月 27 日

増田慎三：HER2 陽性進行再発乳癌治療の現状と展望。東葛乳がん Expert Meeting、千葉、2017 年 11 月 10 日

増田慎三：第 3 部パネルディスカッション：ER 陽性 HER2 陰性の ABC 患者における治療アルゴリズムを考える。Pfizer Oncology Symposium Breast Cancer 2017、東京、2017 年 11 月 11 日

増田慎三：乳癌領域の臨床試験 実施状況レビュー。大阪地区 治験 Boost-up Meeting、大阪、2017 年 11 月 30 日

増田慎三：BRCA 検査、PARP 阻害剤を中心とした TNBC unmet needs に関する討論。SABCS2017 アストラゼネカ Advisory Board Meeting、サンアントニオ、2017 年 12 月 8 日

増田慎三：新局面を迎える HER2 陰性進行再発乳癌治療、Breast Cancer Treatment Forum、大阪、2017 年 12 月 21 日

増田慎三：原発性 HER2 陽性乳癌の ベストストラテジー。New Year Conference Breast Cancer、埼玉、2018 年 1 月 11 日

増田慎三：ホルモン受容体陽性乳癌の治療について助言。Lilly Medical Breast Cancer Consultant Meeting、東京、2018年1月19日

増田慎三：HER2陽性進行再発乳癌治療の現状と展望。乳癌 Expert Meeting in 千葉、千葉、2018年1月25日

増田慎三：我が国におけるHER2陰性乳がんの周術期化学療法～享受と独創～。乳癌学術講演会2018、東京、2018年2月24日

増田慎三：ER陽性進行再発乳癌の治療戦略。第28回鳥取県乳腺疾患研究会、鳥取、2018年3月3日

増田慎三：HER2陽性進行再発乳癌の治療戦略～ベストストラテジーを考える～。Chugai Breast Cancer Symposium in Shizuoka 2018、静岡、2018年3月10日

B-6

山田真美、宮崎道彦、田中玲子、加藤健志、三宅正和、植村 守、中森正二、関本貢嗣：急性壊死性筋膜炎の検討第109回近畿肛門疾患懇談会、大阪、2017年6月17日

前田 栄、濱 直樹、宮本敦史、中森正二：conversion surgeryの功罪。第66回近畿痔疾患談話会、大阪、2017年10月7日

宮崎道彦、山田真美、田中玲子、加藤健志、三宅正和、植村 守、中森正二、関本貢嗣：器質的/機能的狭窄に対するSSG法。第61回東海肛門疾患懇談会、名古屋、2017年11月4日

下山 遼、植村 守、浜川卓也、前田 栄、三宅正和、濱 直樹、西川和宏、宮本敦史、宮崎道彦、池田正孝、平尾素宏、中森正二、関本貢嗣：鼠径リンパ節郭清後の難治性リンパ瘻に対してVAC療法が奏功した1例。第617回大阪外科集談会、2017年5月20日

青野奈々：診断時から終末期までの緩和ケア。第15回兵庫臨床管理栄養士研究会定例会、神戸、2017年4月22日

青野奈々：呼吸困難。大阪府立急性期総合医療センター緩和ケア研修会、大阪、2017年7月7日

青野奈々：オピオイドを開始するとき。多根総合病院緩和ケア研修会、大阪、2018年2月17日

B-7

増田慎三：標準療法および最新の乳がん治療に関する説明、アベマシクリブ臨床試験成績の紹介。IY3-MC-JPCF試験 Investigators Meeting、東京、2017年9月30日

増田慎三：イブランスの上手な使い方。Pfizer Breast Cancer Summit 2017 in Osaka、大阪、2017

年 11 月 24 日

増田慎三：ER 陽性進行再発乳癌の新たな治療戦略～イブランスの役割～。イブランス発売記念講演、沖縄、2017 年 12 月 1 日

増田慎三：ER 陽性進行再発乳癌の新たな治療戦略～イブランスの役割～。第 33 回兵庫県病院薬剤師のためのオンコロジーセミナー、神戸、2017 年 12 月 14 日

増田慎三：ER 陽性進行再発乳癌の新たな治療戦略～イブランスの役割～。イブランス発売記念講演 in Aichi、名古屋、2018 年 1 月 26 日

増田慎三：ER 陽性進行再発乳癌の新たな治療戦略～イブランスの役割～。イブランス発売記念講演会 神奈川県央県西部、神奈川、2018 年 2 月 15 日

B-8

中森正二：睥癌診療 Up to Date。生野区医師会学術講演会、大阪、2017 年 11 月 15 日

栗山啓子：胸部 X 線写真の診かた～肺野型肺癌早期発見のために～。第 31 回日本臨床内科医学会、大阪、2017 年 10 月 9 日

東 将浩：大動脈瘤と大動脈解離の緊急 CT～誰にも相談できない時に備えて～。第 24 回大阪画像診断 IVR セミナー、大阪、2017 年 5 月 31 日

東 将浩：～コレステロール以外の脂肪もたまる～ 中性脂肪蓄積心筋血管症 (Triglyceride deposit cardiomyovascularopathy, TGCV)。第 29 回火の国 RI カンファレンス、熊本、2018 年 3 月 9 日

B-9

増田慎三：PALOMA-2 試験結果レビュー。進行再発乳癌における治療ストラテジーに関する講演、東京、2017 年 7 月 22 日

局所進行膵癌を対象とした modified FOLFIRINOX 療法と ゲムシタビン+ナブパクリタキセル併用療法のランダム化第 II 相試験

がん療法研究開発室長 中森正二

厚生労働省科学研究費補助金 がん臨床事業 研究班「切除不能膵がんに対する標準治療の確立に関する研究」（主任研究者 古瀬純司）の分担研究として行われた。

【目的】

難治癌の代表である進行膵癌、特に局所進行切除不能膵癌を対象として、より安全な標準的治療法を確立することを目的として、以下の多施設共同研究が前向き試験として計画された。

「局所進行膵癌を対象とした modified FOLFIRINOX 療法とゲムシタビン+ナブパクリタキセル併用療法のランダム化第 II 相試験」

【方法・結果】

主要評価項目は全生存期間（1年生存割合）、副次評価項目は、奏功割合、CA19-9 奏功割合、無遠隔転移生存期間、無増悪生存期間、有害事象発生割合として、局所進行切除不能膵癌に対して、FOLFIRINOX（フォルフィリノックス）療法と GEM（ゲムシタビン）+nab-PTX（ナブパクリタキセル）療法の比較を第 II 相試験として、片群 62 名で行うことが計画され、現在症例集積中であり、平成 30 年 2 月末において全体で 60 例の登録がされている。当施設からは未だ対象症例がなく、登録できていない。

【意義】

2つの治療法のどちらが標準治療の候補となるかを見極めることができる可能性がある。

Borderline resectable 膵癌の治療法確立に関する多施設共同研究

がん療法研究開発室長 中森正二

日本医療研究開発機構研究費革新的次世代がん医療実用研究事業「Borderline resectable 膵癌の集学的治療法確立に関する多施設共同研究」（主任研究者 高橋進一郎）の分担研究として行われた。

【目的】

切除は可能であると考えられるものの、がんの一部が大事な血管に接しているため、複雑で難しい手術が必要となり、がんを全て除去できず、切除後再発してしまう可能性が比較的高い膵がんをボーダーライン膵がんと定義し、このようなボーダーライン膵がんに対して、術前治療としての S-1 併用放射線療法の有効性と安全性の評価を目的としている。

【方法・結果】

ボーダーライン膵がん 50 例を対象として、S-1 併用放射線療法を行い、Primary endpoint を根治切除率、Secondary endpoints を生存期間、無増悪生存期間、奏功割合、組織学的奏功割合、2 年生存率、有害事象、手術合併症などを評価する多施設、非盲検第 II 相試験を行う。途中で目標症例数を 57 例と増やし検出力の向上を行なった。すでに、目標症例数の登録を行い、現在、結果の解析中である。当病院からは 4 例登録を行った。付随研究として、1) 病理学的癌遺残度判定法の標準化を目指した付随研究。2) 化学放射線療法後切除可能性診断法の標準化を目指した付随研究が進められ、それぞれ臨床研究として IRB の承認の元、画像データなどの臨床データを研究責任施設に送付した。

【意義】

科学的根拠に基づいたボーダーライン膵がんに対する有効な術前治療の有効性が実証される事によって、膵癌に対する治療成績向上を図ることが可能となる。

なお、今後の研究として、Borderline resectable 膵癌を対象とした術前ゲムシタビン＋ナブパクリタキセル療法と術前 S-1 併用放射線療法のランダム化比較試験が新たな年度の研究として行われることが決まった。

根治切除後胆道癌に対する術後補助療法としての S-1 療法の第 III 相試験

がん療法研究開発室長 中森正二

日本医療研究開発機構研究費「胆道がんに対する治療法の確立に関する研究」（主任研究者 奥坂拓志）の分担研究として行われた。

【目的】

胆道癌（肝外胆管癌、胆嚢癌、Vater 膨大部癌、肝内胆管癌）根治切除患者を対象として、より安全な標準的な術後補助化学療法を確立することを目的として、以下の多施設共同研究が前向き試験として計画された。

「根治切除後胆道癌に対する術後補助療法としての S-1 療法の第 III 相試験」

【方法・結果】

主要評価項目は全生存期間、副次的評価項目は無再発生存期間、有害事象発生割合、治療完遂割合、重篤な有害事象（有害反応）発生割合とし、JCOG 肝胆膵グループの多施設共同研究として、当初目標症例数は 350 症例で開始されたが、より結果の確実性をあげるためにプロトコール改訂が行われ、目標症例数が 420 例に改訂され、平成 30 年 2 月末現在全体で 409 例の症例集積があり、当施設は 16 症例登録を行なった。

【意義】

標準的治療が手術単独である胆道癌術後において、術後の化学療法が標準的治療となり得るか否かを検証できる。

分子標的治療薬開発における候補分子およびバイオマーカー探索

がん療法研究開発室長 中森正二

【目的】

新規技術の利用により、様々な癌特異的分子変化が見いだされてきているが、それらは、実験室レベルでの特殊な状況において見いだされているものであり、それらの分子が臨床的に有意義なものであるか否かは、正確な臨床情報のある臨床材料を用いた実証を行って始めて確かなものとなる。そこで、本研究では、治療計画や治療経過の確かな多数の症例を集積し、その臨床材料を用いて、新規技術によって見いだされた分子標的の妥当性を検証することを目的とした。具体的には、標準的治療方法が行われた臨床材料を用いて、発現解析を行い、分子標的薬の治療効果が予測可能かを検証する。同時に、副作用など発現に関しても予測可能かを検証する。本研究は、エーザイ株式会社との共同研究で、エーザイ株式会社を持つ網羅的発現解析やバイオアッセイ技術を積極的に利用し、臨床材料での検討を積極的に行っている。

【結果】

過去に国立病院機構 大阪医療センターを受診したがん患者で腫瘍切除を行い、包括的同意の取得できているか患者を対象として、その腫瘍のホルマリン包埋切片を用いて、共同研究者によって見いだされたがん細胞の様々な形質発現に関する分子 10 種（分子名は契約により公表不可）の免疫染色を約 600 検体で行い、癌及び周囲組織における標的分子の局在を検討した。また、化学療法を行った症例に関して、化学療法前後の組織が得られているものに関しては前後の組織での免疫染色を行い、化学療法の効果予測の可能性を検討中である。

【意義】

現在の癌特異的に発現あるいは機能する分子を狙った分子標的薬（低分子化合物・抗体医薬）の開発が進められており、分子標的薬を使用するにあたり、それらが効果的か与える症例を的確に選出・判定していくためのマーカーを開発することの意義は大きい。

早期がん診断のための血液バイオマーカーの探索と臨床性能の検証

がん療法研究開発室長 中森正二

日本医療研究開発機構研究費革新的医療実用研究事業「膵がん検診の効率化を目指した血液バイオマーカーの実用化研究」（主任研究者 本田一文）の分担研究として行われた。

【目的】

血液を使った患者・被験者に負担にならない検査（非侵襲的検査）を用いて早期がんやがんになりやすい疾患を見つける検査法を開発することを目的としている。

【方法・結果】

バイオマーカーの信頼性の検証を行い、診断法の確立、体外診断薬として承認申請を行うために必要な血液検体や臨床情報を収集する。頭頸がん（口腔がん、唾液腺がん等）、消化器がん（食道がん、胃がん、十二指腸がん、肝がん、胆道・胆嚢がん、膵がん、大腸がん、肛門がん等）、呼吸器がん（肺がん、悪性胸膜中皮腫等）等や、唾液腺炎、唾石症、がま腫等、シェーグレン症候群、食道アカラシア、食道炎、胃炎、慢性膵炎、急性膵炎、膵管内乳頭粘液性腫瘍（IPMN）、粘液性嚢胞腫瘍（MCN）、膵神経内分泌腫瘍、Solid pseudopapillary neoplasm、膵のう胞、漿液性嚢胞性腫瘍、大腸炎、肺炎、歯周炎等の患者さん、健診センターや歯科の外来に受診された健康人を対象として、当施設からは消化器癌及びヘルニアや胆石などの良性疾患患者の血液を採取し、匿名化した臨床データとともにがん研究センターに送付、送付先で解析を行う。平成30年2月末での登録症例数は、膵疾患関連症例が10例、良性疾患が15例登録されている。

【意義】

血液を使った新しいがんの検査方を確立できる可能性がある。

国立病院機構共同臨床研究 平成 29 年度 NHO ネットワーク共同研究（寺本班研究）
研究課題名「病理診断支援システムの機能と病理部門インシデントの関係を調査する前
向き登録研究」

研究責任者： 眞能 正幸

【目的】一連の病理業務は IT 化された病理診断支援システムを用いて行われる。病理診断支援システムは病理オーダーや検体の受付から、適正な標本作製手順の管理、病理診断の援助、報告、病事情報の管理、さらには外部システムとの情報交換まで担当する。受付から報告まで step が多い病理業務を適切に管理し、インシデントを起こさないようにすることはそのもっともな役割の一つである。重要なシステムである一方、病理診断支援システムの機能は標準化されていないので、施設間に大きな差がある可能性がある。しかし、現在まで多施設で機能の差を診療の現場で調べられたことはない。

この研究では、日本の病院群の代表である NHO を利用し、病理部門で起こるインシデントを前向きに登録し、解析することによって、病理部門の業務の大半に関わる病理診断支援システムの現状とそれに求められる標準的な機能を明らかにする。

【方法】平成 28 年 10 月までに参加施設を募集し、各施設の病理診断支援システムの現状を登録する。その後、前向き観察研究として、平成 29 年 1 月から平成 29 年 6 月の期間に病理部門で発生したインシデントを登録する。

【結果】平成 28 年度に、インシデント登録に向け細部を調整し、予定通り平成 29 年 1 月から登録を開始した。参加施設数は 28 施設で、インシデント登録数は、期間終了時で 1697 事例であった。現在、四国がんセンターにて解析中である。

【意義】病理診断支援システムの標準機能に関するガイドラインや、多施設横断的な病理診断支援システムの機能調査研究はない。基本的な能力の診断援助・検体管理能力・真正性・保存性に関してすら、実際の病院において病理診断支援システムがどのような機能を持ち、どのような使われ方をしているかの一般像は不明である。具体的な多施設横断的なデータがないため病理診断支援システムが備えるべき具体的な標準機能についても、共通の認識は病理医間にもそれ以外にも存在しない。

国立病院機構の施設の多様性と共同研究を行う基盤があるという強みを生かし、自施設で病理標本作製など病理業務を行っている中規模以上の施設を対象にインシデントを可能な限り網羅的に登録し、分類することによって、病理診断支援システムの実際の業務支援機能を明らかにできる。また、病理診断支援システムが特定の機能を装備しているかどうかで施設を群分けし、特定のインシデントの発生率を比較することによって、病理診断支援システムに要求される機能を明らかにできる

これらの結果から、標準的な病理診断支援システムのあり方に関する初めての基礎資料が得られ、今後のシステム構築に貢献できる。

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究 C）

中間群および低悪性度に分類される原発性骨腫瘍の臨床病理学的解析

研究責任者： 眞能 正幸

【目的】発生頻度の少ない原発性骨腫瘍は、希少癌の一つと認識されることが多い、我が国独自の臨床病理学的解析データがほとんどない腫瘍である。中でも原発性骨腫瘍の WHO 分類で intermediate(中間性)と、malignant(悪性)の中で低悪性度とされている肉腫について、まとまった症例数による我が国独自の臨床病理学的解析データはほとんどない。本研究では、それらの日本独自の臨床病理学的な特徴を明らかにするとともに、特に転移・再発に関与する形態学因子について統計学的手法を用いた客観的な方法で見出す。これらによって、WHO 分類で現在中間群と悪性群に属する低悪性度腫瘍に分けられている分類の妥当性を検討するとともに、我が国の中間群、低悪性度群の治療に新たな指標を提唱することを目的とする。

【方法】対象となる過去の骨腫瘍について、発症年齢、性別、発生部位、初発症状、治療方法、転帰などの臨床的なデータの収集を各施設で行う。その際、その後各施設の病理部門に保存してあるそれぞれの病理組織標本を持ち寄り、研究代表者と分担者がともに検鏡し、それぞれの病理診断を行うとともに細胞組織所見を評価する。病理組織所見については診断基準の標準化を念頭に、所見のスコア化を行い、客観的なデータ解析を行う。また、同様に各施設で保存してあるそれぞれの放射線画像についても基本的な画像所見についてスコア化を試みる。画像が保存されていない場合、カルテ記載から出来る限りの情報を得る。得られた臨床病理学的所見について、診断治療と関連する有意な因子を検討し、再発・転移との関連をみる。また、それぞれの再発・転移例の頻度を含め、その臨床病理学的特徴を抽出し、中間群と低悪性度悪性群の 2 つに分類を分ける是非について検討する。

【結果】平成 29 年度は、原発性骨腫瘍で、中間群に分類されている骨巨細胞腫について症例の集積中である。症例の収集が終わった段階で、分担者とともに病理診断を行い、臨床病理学的データの統計学的検討を次年度にかけて行なう予定である。

【意義】本研究が遂行出来れば、中間群と低悪性度悪性群を分ける是非が明らかになり、統計学的手法より転移・再発に関するリスク因子が判れば、それぞれの疾患に対する over or under treatment を防ぎ、治療の個別化（オーダーメイド化）も可能で、患者の予後のみならず QOL の向上に大きく寄与するものと考ええる。また、中間群、低悪性度群に分ける現 WHO 分類の妥当性についても評価可能となるものと考ええる。

国立病院機構共同臨床研究 平成 26 年度 NHO ネットワーク共同研究（西村班研究）
研究課題名「細胞診検体を用いた乳癌薬物療法適応決定のための基礎研究」
研究責任者： 森 清

目的：複数の施設で、乳癌患者の転移巣細胞診検体受容体検査を行うことにより、その標準的で汎用的な方法の確立と、臨床試験を計画する際の患者選択条件設定のための基礎データを収集する。

方法：研究計画 2 年目（2015.4～2016.3）に本研究参加施設を受診した、組織学的に乳癌と診断された転移巣（リンパ節および遠隔転移）のある患者のうち、乳腺診療担当医が転移巣に対する細胞診検査を必要と判断し、その検体を用いた受容体検査も必要と判断した場合を適格基準とし、患者選択を行う。探索的研究のため、目標登録症例数は定めない。研究期間は、1 年目（平成 26 年度）は準備期間に等充し、2 年目（27 年度）を被験者登録期間とし、総研究期間は 2014 年 10 月から 2017 年 3 月までとする。

2 年目には、参加各施設で、日常診療として乳癌細胞診を用いた受容体検査を行う。各施設担当外科医は、細胞診標本で受容体検査を行った症例を随時研究事務局に登録し、患者背景情報調査と採取検体情報調査を研究事務局に登録する。

3 年目には、各施設担当病理医は、実施に当たっての問題点や臨床の評価等についてアンケートに回答する。

4 年目には、収集した患者背景の検討により、今後の薬物療法適応決定標準化臨床試験のための患者選択条件設定のためには、追加で患者背景情報の収集が必要と判断した場合は、再度情報を収集する。各施設プレパラートの比較検討により、検査標準化のためには、研究代表者所属施設での再検査あるいは追加検査が必要と判断した場合はそれを行う。

研究代表者は、アンケート調査の内容を検討し、受容体検査を日常業務で行う上での問題点をまとめるとともに、各施設のプレパラートを収集し、施設別の細胞量と染色性を比較して、検査標準化の方向を探る。研究協力者の内、希望する研究者は、検査が必要な患者背景の検討を行い、今後の薬物療法適応決定標準化臨床試験のための患者選択条件設定の基礎データとする。解析結果は、統計学の専門家である研究協力者に相談して進める。本年度は、4 年目に相当する。

結果：本年度は、本研究への登録症例につき、より詳細な追加症例報告書の提出を行なった。また、ホルモン受容体発現、HER2 発現の再現性の問題が明らかとなった。

意義：原発巣のみならず、転移巣での受容体発現などの biology 検索が治療戦略を立てる上で重要視されてきており、その際、細胞診検体から作成されたセルブロック標本は有用であることが確認されたが、ホルモン受容体発現、HER2 発現の定量化の方法、基準の設定などの基礎的データが得られた。

国立病院機構共同臨床研究 平成 26 年度 NHO ネットワーク共同研究（市原班研究）
研究課題名「国立病院機構における乳腺遠隔病理診断ネットワーク構築」
研究責任者： 森 清

緒言：近年 whole slide imaging (WSI)が、遠隔診断やコンサルテーションに有用であることが示されてきた。しかし、データベース化された WSI が針生検診断の品質向上に有用であることを示した研究は乏しい。

方法：前年度までに、遠隔病理診断ネットワークは株式会社医知悟が提供するプラットフォームを用い、名古屋医療センターと四国がんセンターで連続して診断（中央診断）された超音波ガイド下乳腺針生検それぞれ 211 例、404 例（合計 615 例）の HE 染色標本を Aperio XT を用いて WSI に変換した。それらを国立病院機構の 10 施設の病理専門医 10 名が当初の診断結果を知らずに 5 段階評価した。平成 29 年度は 170 例の針生検症例の診断実験を、e-learning の前後で行ない、各種前駆病変に関する特異度・感度の ROC 曲線下面積の変化を測定し、e-learning 教材の客観的で定量的な評価を行なう。e-learning 教材は、Aperio による名古屋医療センター、四国がんセンターの登録症例 615 例から作成する。e-learning 前後に行なう問題としては、各施設で登録された 814 例の中から選ぶ。

結果：委託先の社内事情（新会社設立）により e-learning 開発が遅延しており、今年度中の研究は停滞している。

本研究は、平成 30 年度の 1 年間、研究期間延長の申請を行い、e-learning 構築、完成を目指す。

高度医療技術開発室

室長 是恒之宏

室員 安部晴彦

近年における医療を取り巻く情報処理や画像処理の技術革新により、診断、治療における医用画像診断装置の利用範囲は拡大しており、著しいイノベーションを引き起こしている。医用画像診断装置の技術開発により低侵襲化、従来視覚化困難であった部位や現象の画像化が可能になりつつあり、そこから新たな治療が生まれる可能性がある。これらの技術開発には医工連携すなわち病院、大学、企業との連携体制の構築が必要であるが、米国における産学連携の仕組みや組織と比較すると本邦ではまだまだ発展の余地が多いと言える。病院における医療現場のニーズを企業が保有している技術開発力や大学の基礎医学研究能力に結び付けながら、常に新しい高度医療技術の開発に取り組んでゆくことが、病院に付属する本研究室の最も重要な役割である。

平成 24 年度より循環器系研究室員を配置し、医用画像診断装置の技術開発を大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻機能診断科学講座とともに推進した。

平成 27 年度より、院内臨床症例（特に心房細動症例、大動脈弁狭窄症症例）の心臓超音波画像解析も並行して推進した。

平成 29 年度は、院内臨床症例で僧帽弁輪石灰化、大動脈弁石灰化を CT 画像から解析し、心臓超音波画像と組み合わせることで解析することによって、冠動脈石灰化のリスク層別化が可能であること。また心エコー検査と生体インピーダンス分析を併用することによって心不全患者の再入院リスク層別化が可能であることを報告した。(AHA2017、ACC2018)

さらに、近年はビッグデータの分析など統計解析手法の進歩も著しく、医療分野においてはクラスター分析などによって疾患の新たな表現型 (Phenotype) に関する研究も進んでいる。

平成 30 年度は、心不全特に収縮の保たれた心不全症例における表現型分析を新たに進める予定である。

【2017 年度 研究業績発表】

A-0

Sakaguchi T, Watanabe M, Kawasaki C, Kuroda I, Abe H, Date M, Ueda Y, Yasumura Y, Koretsune Y: A novel scoring system to predict delirium and its relationship with the clinical course in patients with acute decompensated heart failure. 「J Cardiol」 pii: S0914-5087(17)30341-6. doi: 10.1016/j.jcc.2017.11.011.
2017 年 12 月 26 日

A-2

安部晴彦、是恒之宏 : DOAC の適応と今後の可能性「循環器疾患最新の治療 2018-2019」永井良三 監修、伊藤浩、山下武志 編集、南江堂、2018 年 1 月 12 日

A-3

西田博毅、安部晴彦、飯田吉則、鳥山智恵子、安村かおり、依藤弘紀、井手本明子、加藤大

志、篠内和也、三嶋 剛、横井研介、伊達基郎、上田恭敬、是恒之宏：短腸症候群・人工透析に合併したセレン・アルギニン低下により左室機能低下を認めた一例「日本内科学会雑誌」106 巻 4 号、828-833、日本内科学会、2017 年 4 月 10

B-1

安部晴彦：Interactive Echo Case Studies with the Experts (II): Diagnose It If You Can. 11th Echo Hong Kong, Hong Kong, 2017 年 11 月 26 日

B-2

Shinouchi K, Iida Y, Toriyama C, Nishida H, Yasumura K, Yorifuji H, Kato T, Idemoto A, Mishima T, Yokoi K, Abe H, Date M, Ueda Y, Uematsu M, Koretsune Y: Impact of preexisting chronic total occlusions of the coronary artery on the outcome of out-of-hospital sudden cardiac arrest patients with acute coronary syndrome. ESC Congress 2017 European Society of Cardiology, Barcelona, Spain, 2017 年 8 月 27 日

Nishida H, Abe H, Yokoi K, Idemoto A, Nakamura M, Iida Y, Toriyama C, Ozaki T, Yasumura K, kato T, Shinouchi K, Mishima T, Date M, Uematsu M, Koretsune Y: Mitral Annular Calcification Detected by Transthoracic Echocardiography is a More Robust Marker of Coronary artery Calcification than That Detected by Multidetector Computed Tomography. American Heart Association, California, USA, 2017 年 11 月 14 日

Idemoto A, Abe H, Nakamura M, Iida Y, Toriyama C, Ozaki T, Yasumura K, Nishida H, Kato T, Shinouchi K, Mishima T, Awata M, Date M, Ueda Y, Uematsu M, Koretsune Y: Incremental Value of Systemic Extracellular Water Volume Assessment by Bioelectrical Impedance Analysis and Echocardiography in Patients with Acute Decompensated Heart Failure. ACC2018, Orlando, USA, 2018 年 3 月 10 日

B-4

篠内和也、飯田吉則、鳥山智恵子、尾崎立尚、西田博毅、安村かおり、加藤大志、井手本明子、三嶋 剛、横井研介、安部晴彦、伊達基郎、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏：慢性完全閉塞病変が急性冠症候群による心停止患者の予後に与える影響。第 65 回日本心臓病学会、大阪、2017 年 9 月 29 日

加藤大志、三嶋 剛、飯田吉則、鳥山智恵子、依藤弘紀、西田博毅、安村かおり、井手本明子、篠内和也、横井研介、安部晴彦、伊達基郎、上松正朗、是恒之宏、上田恭敬：生体弁による三尖弁置換術後患者に経静脈的に右室リード挿入し両心室ペーシングを行った一例。第 65 回日本心臓病学会、大阪、2017 年 9 月 29 日

西田博毅、安部晴彦、横井研介、飯田吉則、鳥山智恵子、尾崎立尚、安村かおり、加藤大志、井手本明子、篠内和也、三嶋 剛、伊達基郎、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏：冠動脈石灰化の予測における僧帽弁輪および大動脈弁石灰化評価の有用性。第 65 回日本心臓病学会、大阪、2017 年 9 月 30 日

Yasumura K, Abe H, Nakamura M, Nishida H, Kato T, Idemoto A, Shinouchi K, Awata M, Date M, Ueda Y, Uematsu M, Koretsune Y : Prognostic Impact of Mitral Annular Plane Systolic Excursion and Systolic Blood Pressure Ratio in Heart Failure with Preserved Ejection Fraction. 第 82 回日本循環器学会学術集会、大阪、2018 年 3 月 24 日

Abe H, Idemoto A, Nishida H, Yasumura K, Kato T, Nakamura M, Toriyama C, Iida Y, Ozaki T, Shinouchi K, Mishima T, Awata M, Date M, Ueda Y, Uematsu M, Koretsune Y : Caveat of Echocardiographic Assessment of Moderate to Severe Aortic Stenosis: Comparison with Cardiac Catheterization. 第 82 回日本循環器学会学術集会、大阪、2018 年 3 月 24 日

鳥山智恵子、安部晴彦、北林克清、西田博毅、加藤大志、井手本明子、伊達基郎、上田恭敬、榊 雅之、是恒之宏 : 左房に発生した原発性内膜肉腫の一例 A case of primary Intimal sarcoma of the left atrium. 第 90 回日本超音波医学会、栃木、2017 年 5 月 26 日

西田博毅、安部晴彦、横井研介、井手本明子、飯田吉則、鳥山智恵子、安村かおり、依藤弘紀、加藤大志、篠内和也、三嶋 剛、伊達基郎、上田恭敬、是恒之宏 : 経胸壁心エコーと心臓 CT による僧帽弁輪石灰化の不一致と冠動脈石灰化の重症度との関係。日本心エコー図学会第 28 回学術集会、名古屋、2017 年 4 月 22 日

井手本明子、安部晴彦、飯田吉則、鳥山智恵子、依藤弘紀、安村かおり、西田博毅、加藤大志、篠内和也、三嶋 剛、横井研介、伊達基郎、上田恭敬、是恒之宏 : 下大静脈の長軸断面および短軸断面での測定指標と右房圧予測に関する検討。日本心エコー図学会第 28 回学術集会、名古屋、2017 年 4 月 23 日

井手本明子、安部晴彦、篠内和也、伊達基郎、西田博毅、加藤大志、三嶋 剛、横井研介、上田恭敬、是恒之宏 : 静脈血栓塞栓症へのリバーロキサバン単独療法の下肢エコーと D ダイマーによる効果予測。JSUM 2017 日本超音波医学会第 90 回学術集会、宇都宮、2017 年 5 月 26 日

Kato T, Mishima T, Iida Y, Toriyama C, Nishida H, Yorifuji H, Yasumura K, Idemoto A, Shinouchi K, Yokoi K, Abe H, Date M, Uematsu M, Koretsune H, Ueda Y : Right Ventricular Endocardial Lead Implantation through Bioprosthetic Tricuspid Valve for Cardiac Resynchronization Therapy. 第 64 回日本不整脈心電学会、横浜、2017 年 9 月 16 日

飯田吉則、安部晴彦、鳥山智恵子、尾崎立尚、西田博毅、安村かおり、加藤大志、井手本明子、篠内和也、三嶋 剛、横井研介、伊達基郎、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏 : 繰り返す心嚢液貯留にアスピリンが著効した 1 例。第 65 回日本心臓病学会、大阪、2017 年 10 月 1 日

Idemoto A, Abe H, Yasumura K, Nishida H, Kato T, Shinouchi K, Date M, Ueda Y, Uematsu M, Koretsune Y : Good Predictor of Right Atrial Pressure in the Inferior Vena Cava Parameters by 2-Dimensional Echocardiography. 第 21 回日本心不全学会学術集会、秋田、2017 年 10 月 13 日

Iida Y, Abe H, Yasumura K, Shinouchi K, Mishima T, Yokoi K, Date M, Ueda Y, Uematsu M, Koretsune Y : Improvement of diuretic resistance by correction of anemia by blood transfusion in a patient with

congestive heart failure. 第 21 回日本心不全学会学術集会、秋田、2017 年 10 月 13 日

Yasumura K, Abe H, Kato T, Iida Y, Mishima T, Yokoi K, Date M, Ueda Y, Uematsu M, Koretsune Y:
Nutritional Assessment Indices in Heart Failure with and without Reduced Exercise Tolerance 第 21 回
日本心不全学会学術集会、秋田、2017 年 10 月 13 日

Kato T, Abe H, Yasumura K, Iida Y, Mishima T, Yokoi K, Date M, Ueda Y, Uematsu M, Koretsune Y:
Addition of a Thiazide Diuretic May Have Beneficial Effects on Exercise Capacity in a Case of
Hypertension. 第 21 回日本心不全学会学術集会、秋田、2017 年 10 月 14 日

彦惣俊吾、砂真一郎、小島貴行、中谷大作、土肥智晴、世良英子、中本 敬、山田貴久、安
村良男、上松正朗、樋口義治、藤 久和、坂田泰史：A Large Scale Multicenter Prospective
Observational Study to Clarify Complexity of Heart Failure with Preserved Ejection Fraction (HFpEF)
-PURSUIT-HFpEF Study-. 第 82 回日本循環器学会学術集会、大阪、2018 年 3 月 24 日

石原隆行、飯田 修、藤田雅史、増田正晴、岡本 慎、南都清範、神田貴史、辻村卓也、須
永晃弘、奥野翔太、松田祥宏、谷仲厚治、大橋拓也、河合弘幸、辻 朱紀、畑 陽介、上松
正朗、真野敏昭：急性心筋梗塞に対するプラチナクロムエベロリムス溶出性ステント留置後
亜急性期の血栓性の検討。第 37 回心筋梗塞研究会、東京、2017 年 7 月 1 日

B-6

安村かおり、安部晴彦、飯田吉則、鳥山智恵子、依藤弘紀、西田博毅、加藤大志、井手本明
子、篠内和也、三嶋 剛、横井研介、伊達基朗、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏：腹部大動
脈壁在血栓から下肢動脈塞栓をきたした担癌患者の一例。第 123 回日本循環器学会近畿地方
会、大阪、2017 年 6 月 24 日

西田博毅、安部晴彦、飯田吉則、鳥山智恵子、依藤弘樹、安村かおり、加藤大志、井手本明
子、篠内和也、三嶋 剛、横井研介、伊達基朗、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏：比較的速
い狭窄の進行を認めた重症大動脈弁狭窄症の一例。第 123 回日本循環器学会近畿地方会、大
阪、2017 年 6 月 24 日

安部晴彦、安村かおり、加藤大志、井手本明子、西田博毅、飯田吉則、鳥山智恵子、依藤弘
紀、篠内和也、三嶋 剛、横井研介、伊達基朗、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏：大動脈弁
狭窄症における心肺運動負荷試験の有用性。第 123 回日本循環器学会近畿地方会、大阪、2017
年 6 月 24 日

横井研介、鳥山智恵子、飯田吉則、依藤弘紀、西田博毅、安村かおり、加藤大志、井手本明
子、篠内和也、三嶋 剛、安部晴彦、伊達基朗、上田恭敬：冠動脈 2 枝閉塞病変を有する下
壁誘導の ST 上昇型急性心筋梗塞症例で責任病変同定に心臓 MRI が役に立った症例。第 123
回日本循環器学会近畿地方会、大阪、2017 年 6 月 24 日

篠内和也、飯田吉則、鳥山智恵子、西田博毅、安村かおり、依藤弘紀、加藤大志、井手本明
子、三嶋 剛、横井研介、安部晴彦、伊達基朗、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏：急性冠症

候群による心停止患者の動脈血 pH と予後との関連。第 123 回日本循環器学会近畿地方会、大阪、2017 年 6 月 24 日

三嶋 剛、鳥山智恵子、飯田吉則、依藤弘紀、西田博毅、安村かおり、加藤大志、井手本明子、篠内和也、横井研介、安部晴彦、伊達基郎、上松正朗、是恒之宏、上田恭敬：心房細動アブレーション中に左房天蓋静脈損傷による縦隔血腫を生じた一例。第 123 回日本循環器学会近畿地方会、大阪、2017 年 6 月 24 日

加藤大志、三嶋 剛、鳥山智恵子、飯田吉則、西田博毅、安村かおり、依藤弘紀、井手本明子、篠内和也、横井研介、安部晴彦、伊達基郎、上松正朗、是恒之宏、上田恭敬：生体弁による三尖弁置換術後患者に経静脈的に右室リード挿入し両心室ペーシングを行った一例。第 123 回日本循環器学会近畿地方会、大阪、2017 年 6 月 24 日

飯田吉則、三嶋 剛、鳥山智恵子、西田博毅、安村かおり、依藤弘紀、加藤大志、井手本明子、篠内和也、横井研介、安部晴彦、伊達基郎、上松正朗、是恒之宏、上田恭敬：心室性期外収縮 2 段脈による失神を認める β 遮断薬が著効した一例。第 123 回日本循環器学会近畿地方会、大阪、2017 年 6 月 24 日

井手本明子、安部晴彦、飯田吉則、鳥山智恵子、依藤弘紀、安村かおり、西田博毅、加藤大志、篠内和也、三嶋 剛、横井研介、伊達基郎、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏：救急外来受診時に D ダイマー上昇を認めなかった急性大動脈解離の一例。第 123 回日本循環器学会近畿地方会、大阪、2017 年 6 月 24 日

尾崎立尚、安部晴彦、中村雅之、飯田吉則、鳥山智恵子、西田博毅、安村かおり、加藤大志、井手本明子、篠内和也、三嶋 剛、伊達基郎、上田恭敬：大血管内ステントグラフト内挿術後にうっ血性心不全をきたした 1 例。第 123 回日本循環器学会近畿地方会、大阪、2017 年 6 月 24 日

尾崎立尚、三嶋 剛、中村雅之、飯田吉則、鳥山智恵子、安村かおり、西田博毅、加藤大志、井手本明子、篠内和也、横井研介、安部晴彦、伊達基郎、上松正朗、是恒之宏、上田恭敬：長期の心不全管理にてポリファーマシーに陥った一例。第 217 回日本内科学会近畿地方会、大阪、2017 年 9 月 16 日

井手本明子、安部晴彦、西田博毅、篠内和也、三嶋 剛、横井研介、伊達基郎、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏：D ダイマー上昇の原因精査に下肢血管エコーが有用であった一例。第 44 回日本超音波医学会関西地方会、大阪、2017 年 9 月 23 日

横井研介、中村雅之、飯田吉則、鳥山智恵子、尾崎立尚、安村かおり、西田博毅、加藤大志、井出本明子、篠内和也、三嶋 剛、安部晴彦、伊達基郎、上田恭敬：6Fr システムでの Dio サポート下 Rotablator の経験。第 29 回日本心血管インターベンション治療学会近畿地方会 (CVIT)、京都、2017 年 10 月 14 日

横井研介、中村雅之、飯田吉則、鳥山千恵子、尾崎立尚、安村かおり、西田博毅、加藤大志、

井手本明子、篠内和也、三嶋 剛、安部晴彦、伊達基郎、上田恭敬：右冠動脈近位部にできた血腫が、遠位部に留置されたステントを超えて遠位部に進展した症例。第 29 回日本心血管インターベンション治療学会近畿地方会（CVIT）、京都、2017 年 10 月 14 日

鳥山智恵子、安部晴彦、中村雅之、飯田吉則、尾崎立尚、西田博毅、安村かおり、井手本明子、加藤大志、篠内和也、三嶋 剛、伊達基郎、上田恭敬、是恒之宏：末期担癌患者の静脈血栓塞栓症に対してリバーロキサバン強化療法が有効であった一症例。第 124 回日本循環器学会近畿地方会、大阪、2017 年 11 月 25 日

西田博毅、安部晴彦、井手本明子、安村かおり、中村雅之、飯田吉則、鳥山智恵子、尾崎立尚、加藤大志、篠内和也、三嶋 剛、栗田政樹、伊達基郎、上田恭敬、上松正明、是恒之宏：経胸壁心エコーは心臓 CT より鋭敏に僧帽弁石灰化を検出し冠動脈石灰化の重症度を予測する。関西心エコーリサーチクラブ、神戸、2017 年 12 月 16 日

篠内和也、中村雅之、飯田吉則、鳥山智恵子、尾崎立尚、西田博毅、安村かおり、加藤大志、井出本明子、三嶋 剛、安部晴彦、栗田政樹、伊達基郎、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏：慢性完全閉塞病変が急性冠症候群による心停止患者の予後に与える影響。第 30 回日本心血管インターベンション治療学会 近畿地方会、豊中、2018 年 2 月 10 日

B-8

安部晴彦：心不全。第 59 回おおさか健康セミナー、大阪、2017 年 6 月 3 日

安部晴彦：担癌患者 VTE に対する DOAC 使用症例の検討。OSAKA VTE Expert Meeting 2017、大阪、2017 年 7 月 21 日

安部晴彦：心不全の病態と治療のエビデンス。第 15 回 中央区開業医病診連携の会、大阪、2017 年 9 月 14 日

安部晴彦、井手本明子、加藤大志、飯田吉則、伊達基郎、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏：低強度臥位エルゴ負荷により機能性僧帽弁逆流が経度から重度へ増悪した心不全の一例。第 122 回 UGG 談話会、大阪、2018 年 2 月 10 日

医療情報研究室

室長 岡垣篤彦

医療情報研究室では、医療への IT 応用に関するソフト、ハードの両側面の研究を行っている。病院において実稼働している病続情報統合システムを用いた研究、病院情報システム本体の機能拡張に関する独自の研究を実施する一方、治験・臨床研究や医療安全に関するシステムの検討、シミュレーションや統計などの情報科学の医療応用に関する研究を行っている。また、ネットワーク技術や画像処理技術の応用・改良など、情報処理の基盤技術に関連した研究も行っている。早急に実用化することを求められている災害時の国内標準電子カルテについて、あるいは SS-MIX、SS-MIX2、MML、openEHR といった標準規格を通して異なる電子カルテシステム間のスムーズな連携についても研究を行なっている。国内で行なわれている医療機関間のデータ共有に関する主要な研究プロジェクトのうち代表的な 3 つのプロジェクト、すなわち、国立病院機構の「電子カルテデータ標準化等のための IT 基盤構築事業」、京都大学が主導する「次世代医療 ICT ワーキンググループ事業-千年カルテプロジェクト」、および大阪大学が主導する「病院情報システムデータを利用した横断的研究基盤構築に関する研究」に参加している。平成 23 年年末に更新した電子カルテシステムは、システムの応用範囲が広くなり、データ利用についても多彩な可能性が考えられる。このシステムを用いて岡垣室長を中心に開発してきたカード型カルテシステムの発展をめざすと同時に経営分析的な視点を新たに研究対象に加えている。平成 26 年 1 月より実用化された救命救急外来経過表は、救命救急外来の診療速度について国内で最も進んだ電子カルテとして大きな注目を集め、東京大学、京都大学、沖縄中部病院など、国内の一流研究・医療機関より見学を受け入れた。平成 25 年度は災害医療研究室と共同で厚労省指定研究「南海トラフ巨大地震の被害想定に対する DMAT による急性期医療対応に関する研究」において GIS の技術を用いた DMAT 被災地派遣支援ソフトウェアの開発を行い平成 26 年度に報告書を上梓したが、国会での来るべき甚大災害に対する医療支援に関する議論に対しデータの供給を行なうなど国内の甚大災害対策に貢献した。引き続き災害関連の研究として平成 27 年度より厚労省指定研究「首都直下地震に対応した DMAT の戦略的医療活動に必要な医療支援の定量的評価に関する研究」を 2 年間行なった。南海トラフ地震への医療支援に関してはその後も継続的に研究に参加しており、平成 28 年度厚生労働科学研究費補助金（地域医療基盤開発推進研究事業）分担研究「南海トラフ地震に関する研究」に共同研究者として参加し、平成 29 年度も引き続き共同研究者として参加した。その他に、国立病院機構の「電子カルテによる「災害診療記録」電子フォーマット自動出力実証事業」に参加した。医療情報学会において 2017 年に「災害・救急医療へのユーザーメード IT の貢献」、2018 年には「医療の質向上に貢献する診療支援システムとその効果分析」というテーマでワークショップを主催した。

【2017 年度 研究業績発表】

A-2

岡垣篤彦、富田宏昭：「実例から学ぶ電子カルテ活用—FileMaker で電カルを使いこなす」ライフサイエンス社：P.11-107、2017 年 5 月 11 日

A-3

岡垣篤彦、定光大海：首都直下地震における DMAT 派遣支援アプリケーションの作成および医療機関の被災予測「医療情報学」37(2)：P.55-67、2017年6月16日

岡垣篤彦、定光大海：電子災害掲示板および電子災害診療録の使用経験の分析 3-F-1 ワークショップ「医療情報学」21st：P.122-123、2017年6月1日

岡垣篤彦：心臓カテ経過記録、アンギオ記録、救命救急外来の電子カルテ記載内容と請求情報の比較分析「医療情報学」37(Suppl)：P.217、2017年11月1日

岡垣篤彦：診察室で必要とされる薬剤および関連情報「医療情報学」37(Suppl)：P.240、2017年11月1日

定光大海、岡垣篤彦、若井聡智：首都直下地震における医療機関被害想定と災害拠点病院の役割「Japanese Journal of Disaster Medicine」21(3)：P.454、2017年2月1日

真鍋史朗、服部 睦、武田理宏、中川彰人、岡垣篤彦：多施設臨床研究データ収集システムにおける ODM の活用事例報告「医療情報学」37(Suppl) P.359、2017年11月1日

B-4

岡垣篤彦、上尾光弘、定光大海：電子災害掲示板および電子災害診療録の使用経験の分析。第21回医療情報学会春季学術大会、福井、2017年6月2日

岡垣篤彦：災害・ER 外来、アンギオ、心臓カテーテル経過記録システムの記録内容と請求情報の比較分析。第37回医療情報学連合大会 ワークショップ 07 医療の質向上に貢献する診療支援システムとその効果分析、大阪、2017年11月22日

岡垣篤彦：診察室で必要とされる薬剤および関連情報。第37回医療情報学連合大会 ワークショップ 12 患者を守る薬剤情報の伝達、共有、大阪、2017年11月22日

B-5

岡垣篤彦：災害対策としての医療情報処理。フィルメーカーカンファレンス、横浜、2017年10月24日

岡垣篤彦：災害対策としての医療情報処理。第7回兵庫県医用画像情報システム研究会、兵庫、2017年8月5日

災害医療研究室

室長 定光大海

救命救急センター・救急科（総合救急部）は主に大阪府下の三次救急を担っており、外因による重症患者の受入れを特徴とした救命救急センターとなっている。時間外に二次救急医療機関で受け入れが困難な事例へ対応する大阪府コーディネート事業にも参加している。コーディネートを求められる事例には、高齢者、薬物大量服用、飲酒、精神疾患で身体損傷を伴う事例などが多く、社会の根の深い問題に直面している。その他にも救急救命士を含む救急隊員の病院前医療活動の質を保証するメディカルコントロール（MC）や政策医療の一つである災害医療にも対応している。

災害医療では、DMAT（Disaster Medical Assistance Team）としての対応や放射線災害に対する緊急被ばく医療を主要な業務として、厚生科学研究や各種災害研修・訓練にかかわってきた。平成 25 年 10 月に DMAT 事務局が本院で開設され、東京にある事務局の代替機能を果たすことが求められた。その役割は次第に大きくなり、平成 27 年度には DMAT 技能維持研修を全国で 12 回担当し、さらに DMAT 隊員養成研修を 2 回主催するに至った。今後もさらに役割が拡大すると思われる。南海トラフ巨大地震、首都直下型地震をはじめ、自然災害や人為的災害にも対応できる機能と機動性の充実を図る必要がある。

研究テーマも三次救急の代表的な病態である多発外傷、院外心停止、中毒、熱傷、多臓器不全が中心になる。厚生科学研究費補助金による「災害時効果的初動期医療の確保及び改善に関する研究」では共同研究者として災害時の標準的診療記録票を作成した。さらに主任研究者として厚生労働省指定研究「南海トラフ巨大地震の被害想定に対する DMAT による急性期医療対応に関する研究」を報告し、厚生労働省の進めている災害急性期医療対応の判断根拠となるデータを作成した。2年間にわたる首都直下型地震を想定した指定研究も行った（平成27年度終了）、今後の発生が想定されている大災害時のDMATの戦略的対応に関する研究を行ってきた。南海トラフ巨大地震へのDMATの戦略的対応については、厚生科研の小井土研究班の分担研究で継続している。救急医学関連では、学会主導型で行われる、外傷、敗血症、ARDS、市中劇症型感染症（以上、日本救急医学会多施設共同研究；JAAM FORECAST）に参画した。

これから新たな専門医制度が始まるが、救急を担う医師の確保はさらに難しくなることが予測される。災害医療を担う人材としても欠かせない救急科専門医をいかに確保するかが大きな課題になる。そのためにも次世代の救急医を育てる新たな人材を確保することで救急診療・研究機能の新たな展開を期待したい。

【2017年度 研究業績発表】

A-3

岡垣篤彦、定光大海：首都直下地震における DMAT 派遣支援アプリケーションの作成および医療機関の被災予測「医療情報学」37：p55-67、2017年5月

A-5

定光大海、小井土雄一：災害時における初動医療班の活動のあり方を考える（総合医学会報告）「IRYO」72：p13-15、2018年1月

B-3

定光大海：救急科領域講習5. 南海トラフ大地震災害に備える。第45回日本救急医学会（指定講演）、大阪、2017年10月25日

上尾光弘、定光大海、家城洋平：災害時標準診療録に準拠した電子災害診療録の作成と熊本地震での使用経験。第45回日本救急医学会、大阪、2017年10月25日

B-8

定光大海：四国防災・危機管理特別プログラム「災害医療マネジメント」診療録管理、2017年6月23日

定光大海：H29原子力規制庁委託「講師養成講座」基礎研修、大阪、2017年11月7日

定光大海：H29原子力規制庁委託「講師養成講座」実践研修、原子力安全研究協会、2017年12月16日～17日

上尾光弘：大阪府医師会災害・外傷初期診療研修会（大阪府医師会館）2017年9月

上尾光弘：大阪府医師会災害・外傷初期診療研修会（大阪府医師会館）2018年1月

上尾光弘：大阪府医師会災害・外傷初期診療研修会（大阪府医師会館）2018年2月

上尾光弘：救急医療・災害医療の現状と問題点。東淀川区医師会学術講演、大阪、2017年9月

上尾光弘：災害電子カルテの作成。第4回国際救急災害シンポジウム、東大阪、2017年11月23日

上尾光弘、岡垣篤彦、定光大海：災害電子カルテの作成とその意義。第71回国立病院総合医学会、高松、2017年11月11日

臨床研究推進室

臨床研究センター長・臨床研究推進部長 上松正朗

臨床研究推進室長 森下典子

臨床研究事業は、従来から国立病院機構が果たすべき先駆的な政策医療の一分野である。当院では治験・臨床研究の円滑な運営・管理、支援を行うことを目的に、臨床研究センター4部12室の中に「臨床研究推進部」、「臨床研究推進室」を配置している。臨床研究推進室は“治験管理部門”と“臨床試験支援部門”の2つの部門から成るが、治験管理部門が、治験以外の臨床研究支援も含め専ら活動の中心となっている。

臨床研究推進室の構成員は、部長1名、室長1名、副室長1名、臨床研究コーディネーター(CRC)7名(看護師)、治験・臨床研究事務局2名(薬剤師)、データマネージャー1名、事務補助5名である(平成30年3月末現在)。

臨床研究推進室は、CRCおよび治験事務局として治験の全体的なコーディネーションを担うことにより、契約前から終了まで迅速かつ質の高い治験実施を支援している他、受託研究審査委員会(IRB)事務局機能も併せ持っている。受託研究と各種臨床研究関連指針が適応される自主研究は、それぞれ独立した2つのIRB(第1委員会・第2委員会)により審議を行っている。この2つのIRBは、厚生労働省より「質の高い倫理審査が行える委員会(認定倫理審査委員会)」として認定を受けている。昨年度より第1委員会、第2委員会の審査においてiPadを導入し、ペーパーレス化を図っている。

治験実績では、国立病院機構内施設で全国3位の成績であった。請求金額総額は2億円を超える見通しであり、昨年度より大きく上回る事ができた。

自主研究の支援に関しても、「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」に基づいた質の高い臨床研究の実施をより進めるために、研究機関の長が行う点検(自己点検)を実施し、その結果を研究者にもフィードバックしている。また確実な同意書管理のための支援も継続的に取り組んでいる。

その他、地域治験ネットワークの活動としては大阪府内の15医療機関で形成する「治験ネットおおさか」の活動にも精力的に参加した。

学術的活動および教育については、各種学会・研究会においては発表や座長を務め、国立病院機構本部主催の初級者CRC養成研修では講師依頼や実習受け入れ施設にも指定されている。

院内教育および啓発活動としては「臨床研究推進室ニュース」(年4回)の発行、「治験セミナー」(年3回)、「臨床研究セミナー」(年3回)を実施した。IRB委員への倫理教育としては、CITI JAPAN倫理研修以外にも、毎月IRB開催前に倫理指針や審査のポイント等のビデオ教育を企画し、研究倫理教育の一層の充実化を図った。

今年度は、臨床研究法公布にともない厚生労働大臣が認定する臨床研究審査委員会取得をめざし、事務局が中心となってその準備を行い、3月中旬、厚生労働省に申請した。来年度早々には結果が明らかになる予定である。

【2017年度 研究業績発表】

A-0

Kohara I, Nosaki A, Morishita N, Ushirozawa N, Endo K, Yamada H, Taniguchi T, Kusuoka H : Core Competencies of Clinical Research Coodhinators. 「International Journal of Bio-Science and Bio-Technology」 vol.9, no.2: pp.1-10, April 2017.

A-1

森下典子 : Research Integrity を実現するために—CRC の立場で考えること 「薬理と治療」 45 (9)、ライフサイエンス出版、pp.1413-1415、2017年

森下典子 : CRC のキャリアパスと大阪医療センターの取り組み 「薬理と治療」 45 (suppl-1 号)、ライフサイエンス出版、pp.5007-5008、2017年

B-3

森下典子 : 臨床データから成果物に至るまでのプロセスを振り返るとともに、我々CRC の存在意義を考える。第 17 回 CRC と臨床試験のあり方を考える会議 2017 in 名古屋、愛知、2017 年 9 月 3 日

森下典子 : 早期臨床試験の IRB で臨床薬理の専門家は何をなすべきか (座長)。第 38 回日本臨床薬理学会学術総会、横浜、2017 年 12 月 7 日

森下典子 : CRC による CRC のための臨床薬理学講座～CRC 業務と臨床薬理を結び付けよう～ (座長)。第 38 回日本臨床薬理学会学術総会、横浜、2017 年 12 月 9 日

B-4

小林恭子、奥田直之、柚本育世、松尾友香、森下典子、笹山洋子、宮本敦史、上松正朗、是恒之宏 : IRB 委員の継続教育のあり方を考える。CRC と臨床試験のあり方を考える会議 2017 in 名古屋、名古屋、2017 年 9 月 2 日

綱本郷子、辻本有希恵、柚本育世、田所知美、名畑優保、松尾友香、馬場奈央、安原加奈、阿島美奈、森下典子、上松正朗 : 抗がん剤を用いた治験における臨床研究コーディネーターとがん化学療法看護認定看護師の連携。第 71 回国立病院総合医学会、香川、2017 年 11 月 10 日

田所知美、松尾友香、瀬野千亜紀、金順姫、小林恭子、辻本有希恵、綱本郷子、柚本育世、森下典子、宮本敦史、上松正朗、是恒之宏 : 臨床研究におけるプライバシーポリシーの遵守状況調査。第 38 回日本臨床薬理学会学術総会、横浜、2017 年 12 月 8 日

B-7

綱本郷子 : VOLTAGE 試験、TRIUMPH 試験 Kick-off meeting 参加 (主催 : 国立がん研究センター東病院)、東京、2017 年 8 月 6 日

柚本育世 : COMMANDER 試験 Web 会議 (主催 : バイエル(株))、大阪、2017 年 8 月 17 日

金 順姫：PATHWAY 試験 Kick-Off ミーティング参加（主催：国立がん研究センター中央病院）、2017年10月13日

網本郷子：VOLTAGE 試験 WEB 会議（主催：国立がん研究センター東病院）、大阪、2017年11月7日

辻本有希恵：JBCRG-24 (PALLAS) 試験 Kick-Off ミーティング（主催：ABCSG）、東京、2017年11月12日

名畑優保：BAY85-3934 (Molidustat) CRC ミーティング（主催：バイエル(株)）、大阪、2017年11月18日

網本郷子：VOLTAGE 試験 WEB 会議（主催：国立がん研究センター東病院）、大阪、2018年1月23日

柚本育世：13Y-MC-JPBM Investigator Meeting（主催：イーライリリー(株)）、兵庫、2018年2月17日

田所知美：TANGO Investigators' Meeting（主催：(株)PPD）、イギリス、2018年2月19～20日

網本郷子：Lilly Breast Cancer Consultation Meeting（主催：イーライリリー(株)）、大阪、2018年3月29日

B-8

森下典子：CRC のキャリアパスと私が目指す CRC 像。国立病院機構主催初級者 CRC 養成研修、東京、2017年5月17日

森下典子：CRC の奮闘と疲労と楽しさについて考える。ワッカの会（主催：北海道大学病院）、札幌、2017年7月21日

森下典子：CRC 管理者の立場から研究公正について考える。第10回CRC研修会（主催：札幌市医師会）、札幌、2017年7月22日

辻本有希恵：CRC の業務。CRC 養成研修（初級者向け研修～CRCに必要な知識をわかりやすく解説～）（主催：治験ネットおおさか）、大阪、2017年11月19日

森下典子：臨床研究チームのコーディネーション。平成29年度上級者臨床研究コーディネーター養成研修（主催：大阪大学医学部附属病院）、大阪、2017年10月22日

柚本育世：「乳がん最前線 新しい治療ができるまで～治験・臨床試験とは～」総合討論「新しい治療ができるまで、臨床試験について」。市民公開講座（主催：大阪国際がんセンター）、大阪、2017年10月15日

森下典子：質が高く効率的な倫理審査の実現のために②事務局の立場から。倫理審査委員会・治験審査委員会委員養成研修（主催：名古屋大学医学部附属病院）、愛知、2017年12月3日

瀬野千亜妃：CRC1年目の学び。第3回CRCの明日を考える in 大阪（主催：国立がん研究センター東病院）、大阪、2018年2月3日

森下典子：パネルディスカッション。第3回CRCの明日を考える in 大阪（主催：国立がん研究センター東病院）、大阪、2018年2月3日

森下典子：臨床研究への患者・市民参画を考える～研究者と患者・市民の新たなパートナーシップ～（座長）。第3回研究倫理を語る会（主催：国立がん研究センター中央病院）、東京、2018年2月10日

森下典子：臨床研究におけるCRCの役割を考える。JASMO第36回継続研修会（主催：SMO協会）、東京、2018年2月23日

森下典子：臨床研究コーディネーターと看護－研究倫理と看護倫理について考える－。国立病院機構大阪医療センター附属看護学校、大阪、2018年2月23日

森下典子：選ばれる治験医療機関とは～国際競争力向上をめざして～。第6回DIAクリニカルオペレーション・モニタリングワークショップ（主催：DIA）、東京、2018年3月9日

レギュラトリーサイエンス研究室

室長 是恒之宏

レギュラトリーサイエンスは、科学技術の成果を人と社会に役立てることを目的に、根拠に基づいた確かな予測、評価、判断を行い、科学技術の成果を人と社会との調和の上で最も望ましい姿に調整するための科学とされている。また、レギュラトリーサイエンスは、的確な予測、評価、判断によって①限りなく進歩する科学技術を正しく生かして有効に利用する最善の道を見出すことと、②人間の願望から出発した科学技術が、社会や人間を無視して発達することによってもたらされる深刻な影響を未然に防ぐこと、の二つの大きな目的/役割を担っている。

当研究室は、レギュラトリーサイエンスの考えに基づき、臨床現場での薬剤・医療機器や技術等の使用を評価するための手法の構築を目的として平成 23 年 4 月に設立され、7 年が経過した。

平成 29 年度においては、直接経口抗凝固薬が実際に患者の QOL 改善に関与しているかをワルファリンからの切り替え例において検討した。また、心房細動患者治療の国際共同レジストリーが進行中であり、日本の National Coordinator として参加。2018 年 8 月には研究が終了しその後解析が進む予定である。

【2017 年度 研究業績発表】

A-0

Nagai A, Hirata M, Kamatani Y, Muto K, Matsuda K, Kiyohara Y, Ninomiya T, Tamakoshi A, Yamagata Z, Mushiroda T, Murakami Y, Yuji K, Furukawa Y, Zembutsu H, Tanaka T, Ohnishi Y, Nakamura Y, BioBank Japan Cooperative Hospital Group(Appendix A 中に Koretsune Y あり), Kubo M : Overview of the BioBank Japan Project: Study design and profile. Journal of Epidemiology 27, s2-s8pp, 2017

Hirata M, Kamatani Y, Nagai A, Kiyohara Y, Ninomiya T, Tamakoshi A, Yamagata Z, Kubo M, Muto K, Mushiroda T, Murakami Y, Yuji K, Furukawa Y, Zembutsu H, Tanaka T, Ohnishi Y, Nakamura Y, BioBank Japan Cooperative Hospital Group(Appendix A 中に Koretsune Y あり), Mastuda K: Cross-sectional analysis of BioBank Japan clinical data: A large cohort of 200,000 patients with 47 common diseases. Journal of Epidemiology 27, s9-s21, 2017

Hirata M, Nagai A, Kamatani Y, Ninomiya T, Tamakoshi A, Yamagata Z, Kubo M, Muto K, Kiyohara Y, Mushiroda T, Murakami Y, Yuji K, Furukawa Y, Zembutsu H, Tanaka T, Ohnishi Y, Nakamura Y, BioBank Japan Cooperative Hospital Group(Appendix A 中に Koretsune Y あり), Mastuda K: Overview of BioBank Japan follow-up data in 32 diseases. Journal of Epidemiology 27, s22-s28, 2017

Okada E, Ukawa S, Nakamura K, Hirata M, Nagai A, Matsuda K, Ninomiya T, Kiyohara Y, Muto K, Kamatani Y, Yamagata Z, Kubo M, Nakamura Y, BioBank Japan Cooperative Hospital Group(Appendix A 中に Koretsune Y あり), Tamakoshi A: Demographic and lifestyle factors and survival among patients with esophageal and gastric cancer: The BioBank Japan Project. Journal of Epidemiology 27, s29-s35,

2017

Tamakoshi A, Nakamura K, Ukawa S, Okada E, Hirata M, Nagai A, Matsuda K, Kamatani Y, Muto K, Kiyohara Y, Yamagata Z, Ninomiya T, Kubo M, Nakamura Y, BioBank Japan Cooperative Hospital Group(Appendix A 中に Koretsune Y あり): Characteristics and prognosis of Japanese colorectal cancer patients: The Biobank Japan Project, *Journal of Epidemiology* 27, s36-s42, 2017

Ukawa S, Okada E, Nakamura K, Hirata M, Nagai A, Matsuda K, Yamagata Z, Kamatani Y, Ninomiya T, Kiyohara Y, Muto K, Kubo M, Nakamura Y, BioBank Japan Cooperative Hospital Group(Appendix A 中に Koretsune Y あり), Tamakoshi A: Characteristics of patients with liver cancer in the BioBank Japan project, *Journal of Epidemiology* 27, s43-s48, 2017

Nakamura K, Ukawa S, Okada E, Hirata M, Nagai A, Yamagata Z, Ninomiya T, Muto K, Kiyohara Y, Matsuda K, Kamatani Y, Kubo M, Nakamura Y, BioBank Japan Cooperative Hospital Group(Appendix A 中に Koretsune Y あり), Tamakoshi A: Characteristics and prognosis of Japanese male and female lung cancer patients: The BioBank Japan Project, *Journal of Epidemiology* 27, s49-s57, 2017

Nakamura K, Okada E, Ukawa S, Hirata M, Nagai A, Yamagata Z, Kiyohara Y, Muto K, Kamatani Y, Ninomiya T, Matsuda K, Kubo M, Nakamura Y, BioBank Japan Cooperative Hospital Group(Appendix A 中に Koretsune Y あり), Tamakoshi A: Characteristics and prognosis of Japanese female breast cancer patients: The Biobank Japan Project, *Journal of Epidemiology* 27, s58-s64, 2017

Ukawa S, Nakamura K, Okada E, Hirata M, Nagai A, Yamagata Z, Muto K, Matsuda K, Ninomiya T, Kiyohara Y, Kamatani Y, Kubo M, Nakamura Y, BioBank Japan Cooperative Hospital Group(Appendix A 中に Koretsune Y あり), Tamakoshi A: Clinical and histopathological characteristics of patients with prostate cancer in the BioBank Japan Project, *Journal of Epidemiology* 27, s65-s70, 2017

Hata J, Nagai A, Hirata M, Kamatani Y, Tamakoshi A, Yamagata Z, Muto K, Matsuda K, Kubo M, Nakamura Y, BioBank Japan Cooperative Hospital Group(Appendix A 中に Koretsune Y あり), Kiyohara Y, Ninomiya T, Collaborator: Risk prediction models for mortality in patients with cardiovascular disease: The BioBank Japan Project, *Journal of Epidemiology* 27, s71-s76, 2017

Yokomichi H, Noda H, Nagai A, Hirata M, Tamakoshi A, Kamatani Y, Kiyohara Y, Matsuda K, Muto K, Ninomiya T, Kubo M, Nakamura Y, BioBank Japan Cooperative Hospital Group(Appendix A 中に Koretsune Y あり), Yamagata Z: Cholesterol levels of Japanese dyslipidaemic patients with various comorbidities: BioBank Japan, *Journal of Epidemiology* 27, s77-s83, 2017

Yokomichi H, Nagai A, Hirata M, Tamakoshi A, Kiyohara Y, Kamatani Y, Muto K, Ninomiya T, Matsuda K, Kubo M, Nakamura Y, BioBank Japan Cooperative Hospital Group(Appendix A 中に Koretsune Y あり), Yamagata Z: Stain use and all-cause and cancer mortality: BioBank Japan cohort, *Journal of Epidemiology* 27, s84-s91, 2017

Yokomichi H, Nagai A, Hirata M, Kiyohara Y, Muto K, Ninomiya T, Matsuda K, Kamatani Y, Tamakoshi

A, Kubo M, Nakamura Y, BioBank Japan Cooperative Hospital Group(Appendix A 中に Koretsune Yあり), Yamagata Z: Serum glucose, cholesterol and blood pressure levels in Japanese type 1 and 2 diabetic patients: BioBank Japan, Journal of Epidemiology 27, s92-s97, 2017

Yokomichi H, Nagai A, Hirata M, Kiyohara Y, Muto K, Ninomiya T, Matsuda K, Kamatani Y, Tamakoshi A, Kubo M, Nakamura Y, BioBank Japan Cooperative Hospital Group(Appendix A 中に Koretsune Yあり), Yamagata Z: Survival of macrovascular disease, chronic kidney disease, chronic respiratory disease, cancer and smoking in patients with type 2 diabetes: BioBank Japan cohort, Journal of Epidemiology 27, s98-s106, 2017

Koretsune Y, Yamashita T, Yasaka M, Oda E, Matsubayashi D, Ota K, Kobayashi M, Matsushita Y, Kaburagi J, Ibusuki K, Takita A, Iwashita M, Yamaguchi T: Usefulness of a healthcare database for epidemiological research in atrial fibrillation, Journal of Cardiology 70, 169-179, 2017

Yamamoto K, Koretsune Y, Akasaka T, Kisanuki A, Ohte N, Takenaka T, Takeuchi M, Yoshida K, Iwade K, Okuyama Y, Hirano Y, Takeda Y, Tsukamoto Y, Kinugasa Y, Nakatani S, Sakamoto T, Iwakura K, Sozu T, Masuyama T: Effects of vitamin K antagonist on aortic valve degeneration in non-valvular atrial fibrillation patients: Prospective 4-year observational study, ELSEVIER, Thrombosis Research, 69-75pp, 31 Oct. 2017

A-3

是恒之宏：ワルファリンからリバーロキサバンへ切り替えた NVAf 患者における治療満足度－SPAF-QOL。JCS 2017 レポート、第 81 回日本循環器学会学術集会記録集、2017 年 6 月 13 日

是恒之宏：国際的レジストリー研究 GARFIELD-AF：日本人集団からの知見。JCS 2017 レポート、第 81 回日本循環器学会学術集会記録集、Life Science Publishing、2017 年 6 月 13 日

A-4

是恒之宏：専門医に訊く 診療のキーポイント。脳梗塞と心房細動、第 4 巻第 2 号、2017 年 5 月 1 日発行

是恒之宏：論説 高齢者診療と EBM。大阪府病院協会ニュース No.561、10-11、2017 年 7 月 1 日発行

安部晴彦、是恒之宏：TODAY'S THERAPY 2018 今日の治療指針 私はこう治療している 循環器疾患 同種薬の特徴と使い分け。抗血栓薬、医学書院、335-336、2018 年 1 月 1 日

安部晴彦、是恒之宏：循環器疾患最新の治療 2018-2019、南江堂、26-30、2018 年 1 月 15 日

是恒之宏：ワルファリン療法における出血リスクマネジメントとケイセントラの位置づけ、日経メディカル、74-76、2018 年 3 月 10 日

A-6

是恒之宏, P.A.Noseworthy, 赤塚昌治 : (座談会) AF 治療の「実臨床」を専門家 3 氏が解説～日本 vs.世界の抗凝固療法～。学会レポート、(株)メディカルトリビューン、2017年4月6日

是恒之宏、室原豊明、相庭武司 : (座談会) リアルワールドデータで検証するアピキサバンの有用性、(株)メディカルトリビューン、2017年4月20日

是恒之宏 : 「正しく、品よく、心をこめて」の理念の下によりよい医療サービス、医療人の育成、臨床研究を。ドクターズアテンション、2017年7月

是恒之宏 : 健康寿命を延ばすコツ 外出をするきっかけを。毎日新聞朝刊 ご近所のお医者さん 425、2017年8月22日

是恒之宏 : 脳梗塞の予防ー心臓と脳は繋がっているー。日医ニュース No.490、2017年10月5日

B-1

Koretsune Y: Japan date showcase. The Thrombosis Research Institute at ESC Congress 2017, Barcelona, Spain, 2017年8月27日

Koretsune Y, Jitendra PS Sawhney: Stroke prevention in patients with atral fibrillation and comorbidities. Tea-Time Seminar 1, APHRS 2017, Yokohama, 2017年9月14日

Koretsune Y: DOCA in Asian AF Patients, Etshnic Difference in Efficacy and Safety of DOAC. Invited Symposium 82(Pharmacological Therapy 8), APHRS 2017, Yokohama, 2017年9月17日

B-2

Shinouchi K, Iida Y, Toriyama C, Nishida H, Yasumura K, Yorifuji H, Kato T, Idemoto A, Mishima T, Yokoi K, Abe H, Date M, Ueda Y, Uematsu M, Koretsune Y: Impact of preexisting chronic total occlusions of the coronary artery on the outcome of out-of-hospital sudden cardiac arrest patients with acute coronary syndrome, ESC Congress 2017 - European Society of Cardiology, Barcelona, Spain, 2017年8月27日

B-3

是恒之宏 : 抗凝固療法 up date ～循環器内科医の立場から～、抗凝固療法の表と裏～臨床における抗凝固療法の意義と問題点について。第31回日本臨床内科医学会、大阪、2017年10月9日

是恒之宏 : GARFIELD-AFー国際レジストリーからみたアジア、日本の特徴ー。日本循環器病学会学術集会ランチョンセミナー36、大阪、2018年3月24日

B-4

飯田吉則、三嶋 剛、鳥山智恵子、西田博毅、安村かおり、依藤弘紀、加藤大志、井手本明子、篠内和也、横井研介、安部晴彦、伊達基郎、上松正朗、是恒之宏、上田恭敬：心室性期外収縮2段脈による失神を認めるβ遮断薬が著効した一例。第123回日本循環器学会近畿地方会、大阪、2017年6月24日

加藤大志、三嶋 剛、鳥山智恵子、飯田吉則、西田博毅、安村かおり、依藤弘紀、井手本明子、篠内和也、横井研介、安部晴彦、伊達基郎、上松正朗、是恒之宏、上田恭敬：生体弁による三尖弁置換術後患者に経静脈的に右室リード挿入し両心室ペーシングを行った一例。第123回日本循環器学会近畿地方会、大阪、2017年6月24日

三嶋 剛、鳥山智恵子、飯田吉則、依藤弘紀、西田博毅、安村かおり、加藤大志、井手本明子、篠内和也、横井研介、安部晴彦、伊達基郎、上松正朗、是恒之宏、上田恭敬：心房細動アブレーション中に左房天蓋静脈損傷による縦隔血腫を生じた一例。第123回日本循環器学会近畿地方会、大阪、2017年6月24日

井手本明子、安部晴彦、飯田吉則、鳥山智恵子、依藤弘紀、安村かおり、西田博毅、加藤大志、篠内和也、三嶋 剛、横井研介、伊達基郎、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏：救急外来受診時にDダイマー上昇を認めなかった急性大動脈解離の一例。第123回日本循環器学会近畿地方会、大阪、2017年6月24日

篠内和也、飯田吉則、鳥山智恵子、西田博毅、安村かおり、依藤弘紀、加藤大志、井手本明子、三嶋 剛、横井研介、安部晴彦、伊達基郎、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏：急性冠症候群による心停止患者の動脈血pHと予後との関連。第123回日本循環器学会近畿地方会、大阪、2017年6月24日

西田博毅、安部晴彦、飯田吉則、鳥山智恵子、依藤弘樹、安村かおり、加藤大志、井出本明子、篠内和也、三嶋 剛、横井研介、伊達基郎、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏：比較的速い狭窄の進行を認めた重症大動脈弁狭窄症の一例。第123回日本循環器学会近畿地方会、大阪、2017年6月24日

安村かおり、安部晴彦、飯田吉則、鳥山智恵子、依藤弘紀、西田博毅、加藤大志、井手本明子、篠内和也、三嶋 剛、横井研介、伊達基郎、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏：腹部大動脈壁在血栓から下肢動脈塞栓をきたした担癌患者の一例。第123回日本循環器学会近畿地方会、大阪、2017年6月24日

是恒之宏、池田隆徳、上妻 謙、平野照之、来田信人、茶珍元彦：日本人非弁膜症心房細動患者におけるワルファリンからアピキサバンへの切り替え後の患者満足度の改善について。第65回日本心臓病学会学術集会、大阪、2017年10月1日、

B-5

是恒之宏：高齢者心房細動のトータルケア。高齢者の抗血栓療法を考える会、鹿児島、2017年4月20日

是恒之宏：高齢者心房細動のトータルケア。第8回星の心北河内不整脈セミナー、守口、2017年5月11日

是恒之宏：高齢者心房細動のトータルケア。Edoxaban Expert Meeting、大阪、2017年6月3日

是恒之宏：高齢者心房細動のトータルケア。Stroke Prevention in Atrial Fibrillation Forum in OSAKA、大阪、2017年7月1日

是恒之宏：高齢者心房細動のトータルケア。第3回大阪東血栓治療研究会、大阪、2017年7月22日

是恒之宏：NVAF患者におけるDOACの重要性。Master Class 埼玉エリア、埼玉、2017年8月4日

是恒之宏：高齢者心房細動のトータルケア。超高齢社会における抗凝固療法～総合診療医における1次予防・2次予防～、吉祥寺、2017年9月8日

是恒之宏：NVAF患者におけるDOACの重要性。MASTER CLASS in TOCHIGI、宇都宮、2017年9月23日

是恒之宏：心房細動抗凝固療法の最前線。奈良地区 Core Member Meeting、奈良、2017年10月3日

是恒之宏：NVAF患者におけるDOACの重要性。Master Class in Osaka、大阪、2017年10月20日

是恒之宏：NVAF患者におけるDOACの重要性。Master Class in Hiroshima、広島、2017年10月21日

是恒之宏：DOACの知識/情報を整理する。不整脈エキスパートラウンドテーブル、大阪、2017年10月26日

是恒之宏：心房細動治療における最新の知見とアドヒアランス ENGAGE AF-TIMI 48 Update。Thrombosis Expert Meeting for Pharmacists、東京、2017年10月29日

是恒之宏：臨床現場に活かすためのRWDの読み方。Expert Seminar in Sapporo～超高齢化社会における抗凝固療法を考える～、札幌、2017年11月4日

是恒之宏：なるほどザリアルワールドデータ-GARFIELD-AF Registry-～補完されていくRWDから何が見えるのか?～。エリキュースインターネット講演会、大阪、2017年11月13日

是恒之宏：高齢者心房細動のトータルケア。脳と神経を考える会 2017、大阪、2017年 11月 17日

是恒之宏：高齢者心房細動のトータルケア。脳卒中リハビリカンファレンス、京都、2017年 11月 18日

是恒之宏：「被験者保護のあり方を今改めて考える」研究と治療：研究者、医療者、二つの想い。第 38 回日本臨床薬理学会学術集会、横浜、2017年 12月 8日

是恒之宏：高齢者心房細動のトータルケア。Osaka Kita Primary Care Meeting、大阪、2018年 1月 24日

是恒之宏：心房細動抗凝固療法における最新の知見とアドヒアランス。近畿薬剤師合同学術大会 2018、京都、2018年 2月 4日

是恒之宏：高齢者心房細動のトータルケア。Cardiology ON-SITE ～エキスパートの治療現場から～、神戸、2018年 3月 1日

B-8

是恒之宏：NOAC 導入後の国内外における抗凝固治療の変遷（GARFIELD registry から）、実臨床から考える NOAC の適した患者像。日経メディカルオンライン座談会、大阪、2017年 9月 29日

是恒之宏：世界における NOAC 使用状況の変遷（GARFIELD registry から）。Medical Tribune エリキュース座談会、東京、2018年 2月 25日

—研究助成一覽—

平成29年度 研究助成一覧

	研究課題名 (採択番号があれば採択番号も記載)	研究者名	研究事業名 (依頼業者名)	主任 又は 分担	新規 又は 継続	研究種別	研究費獲得額(単位:万円)			
							主任研究者 直接経費金額	分担研究者 直接経費金額	間接経費金額	合計
①文部科学省 科学研究費	成人低悪性度グリオーマ関連ドライバー遺伝子変異と グリオーマ幹細胞発生の関連性検証 15K15534	金村 米博	挑戦的萌芽研究	主任	継続	補助金(研究費)	70万円	万円	24万円	94万円
①文部科学省 科学研究費	プロテアソームとオートファジーのクロストークによる癌 幹細胞維持機構と治療抵抗性 15K10140	植村 守	基盤研究(C)	主任	継続	補助金(研究費)	90万円	万円	27万円	117万円
①文部科学省 科学研究費	複数画像の統合的統計解析による神経膠腫の生物学 的特徴の画像化技術の開発 16K20033	沖田 典子	若手研究(B)	主任	新規	補助金(研究費)	150万円	万円	45万円	195万円
①文部科学省 科学研究費	成人低悪性度グリオーマ関連ドライバー遺伝子変異と グリオーマ幹細胞発生の関連性検証 15K15535	正礼 智子	挑戦的萌芽研究	分担	継続	補助金(研究費)	万円	10万円	万円	10万円
①文部科学省 科学研究費	ヒトiPS細胞由来ドーパミン神経細胞がパーキンソン病 に耐性であるメカニズムの解明 17K16136	福角 勇人	若手研究(B)	主任	新規	補助金(研究費)	100万円	万円	30万円	130万円
①文部科学省 科学研究費	臨床研究コーディネーターの熟達化を促進する現任教 育 16K11999	森下 典子	基盤研究(C)	分担	新規	補助金(研究費)	万円	10万円	3万円	13万円
①文部科学省 科学研究費	正確な小線源治療を担保するリアルタイムin vivo dosimetryの開発 17K10496	田中 英一	基盤研究(C)	分担	新規	補助金(研究費)	万円	5万円	2万円	7万円
①文部科学省 科学研究費	正確な小線源治療を担保するリアルタイムin vivo dosimetryの開発 17K10496	古妻 理之	基盤研究(C)	分担	新規	補助金(研究費)	万円	5万円	2万円	7万円
①文部科学省 科学研究費	正確な小線源治療を担保するリアルタイムin vivo dosimetryの開発 17K10496	辻本 豊	基盤研究(C)	分担	新規	補助金(研究費)	万円	5万円	2万円	7万円
①文部科学省 科学研究費	脳動脈瘤 壁動態と瘤内血流の統合解析による脳動 脈瘤壁脆弱性予測に関する研究 15K09889	藤中 俊之	基盤研究(C)	分担	継続	補助金(研究費)	万円	5万円	2万円	7万円
①文部科学省 科学研究費	中間群および低悪性度に分類される原発性骨腫瘍の 臨床病理学的解析 17K08747	眞能 正幸	基盤研究(C)	分担	新規	補助金(研究費)	万円	10万円	3万円	13万円
①文部科学省 科学研究費	子宮頸部癌画像誘導小線源治療における最適な組織 内照射併用方法の開発 17K10488	古妻 理之	基盤研究(C)	分担	継続	補助金(研究費)	万円	5万円	2万円	7万円
①文部科学省 科学研究費	レジリエンス・エンジニアリング理論の医療の質・安全 における実用化に関する研究 26293157	中島 伸	基盤研究(B)	分担	継続	補助金(研究費)	万円	5万円	2万円	7万円
①文部科学省 科学研究費	遺伝子/画像統合解析(radiogenomics)による神経膠腫 の画像分子診断 16K10779	金村 米博	基盤研究(C)	分担	新規	補助金(研究費)	万円	10万円	3万円	13万円
⑤厚生労働科 学研究費	効果的な献血推進および献血教育方策に関する研究 H27-医薬A-一般-006	白阪 琢磨	厚生労働省医薬品・医療 機器等レギュラトリーサイ エンス総合研究事業	主任	継続	補助金(研究費)	160万円	万円	10万円	170万円
⑤厚生労働科 学研究費	HIV感染症及びその合併症の課題を克服する研究 H27-エイズ-指定-004	白阪 琢磨	厚生労働省エイズ対策 政策研究事業	主任	継続	補助金(研究費)	3735万円	万円	490万円	4225万円
⑤厚生労働科 学研究費	HIV検査受検動向に関する研究 H28-エイズ-一般-001	白阪 琢磨	厚生労働省エイズ対策 政策研究事業	分担	継続	補助金(研究費)	万円	425万円	60万円	485万円
⑤厚生労働科 学研究費	非加熱血液凝固因子製剤によるHIV感染被害者の長 期療養体制の整備に関する患者参加型研究 H27-エイズ-指定-002	三田 英治	厚生労働省エイズ対策 政策研究事業	分担	新規	補助金(研究費)	万円	100万円	万円	100万円
⑤厚生労働科 学研究費	HIV検査受検動向に関する研究 H28-エイズ-一般-001	上平 朝子	厚生労働省エイズ対策 政策研究事業	分担	新規	補助金(研究費)	万円	90万円	万円	90万円
⑤厚生労働科 学研究費	特発性大腿骨頭壊死症の医療水準及び患者のQOL向 上に関する大規模多施設研究 H29-難治等(難)-一般-053	三木 秀宣	厚生労働省難治性疾患 政策研究事業	分担	継続	補助金(研究費)	万円	10万円	万円	10万円
⑤厚生労働科 学研究費	HIV感染症及びその合併症の課題を克服する研究 H27-エイズ-指定-004	安尾 利彦	厚生労働省エイズ対策 政策研究事業	分担	継続	補助金(研究費)	万円	80万円	万円	80万円
⑤厚生労働科 学研究費	HIV感染症及びその合併症の課題を克服する研究 H27-エイズ-指定-004	下司 有加	厚生労働省エイズ対策 政策研究事業	分担	継続	補助金(研究費)	万円	100万円	万円	100万円
⑤厚生労働科 学研究費	HIV感染症の医療体制の整備に関する研究 H29-エイズ-指定-001	渡邊 大	厚生労働省エイズ対策 政策研究事業	分担	継続	補助金(研究費)	万円	600万円	万円	600万円

	研究課題名 (採択番号があれば採択番号も記載)	研究者名	研究事業名 (依頼業者名)	主任 又は 分担	新規 又は 継続	研究種別	研究費獲得額(単位:万円)			
							主任研究者 直接経費金額	分担研究者 直接経費金額	間接経費金額	合計
⑤厚生労働科学 研究費	血液製剤によるHIV/HCV重複感染患者の肝移植適応に関する研究 H27-エイズ-指定-003	上平 朝子	厚生労働省エイズ対策政策研究事業	分担	継続	補助金(研究費)	万円	50万円	万円	50万円
⑤厚生労働科学 研究費	職域での健診機会を利用した検査機会拡大のための新たなHIV検査手法開発研究 H29-エイズ-一般-007	渡邊 大	厚生労働省エイズ対策政策研究事業	分担	継続	補助金(研究費)	万円	50万円	万円	50万円
⑥国立高度専門医療センター等 研究費	乳がんに対する標準治療確立のための多施設共同研究 26-A-3	増田 慎三	国立がん研究センター	分担	継続	共同研究費	万円	30万円	万円	30万円
⑧日本医療研究開発機構 研究費	服薬アドヒアランス向上に関する研究 17rk0410307h0003	白阪 琢磨	AMED感染症実用化研究事業エイズ対策研究事業	分担	継続	委託研究費	250万円	万円	75万円	325万円
⑧日本医療研究開発機構 研究費	カボ肉腫関連疾患の発症機構の解明と予防および治療法に関する研究 17rk0410207h0402	渡邊 大	AMED感染症実用化研究事業エイズ対策研究事業	分担	新規	委託研究費	万円	97万円	28万円	125万円
⑧日本医療研究開発機構 研究費	国内で流行するHIVとその薬剤耐性株の動向把握に関する研究 17rk0410205h1302	渡邊 大	AMED感染症実用化研究事業エイズ対策研究事業	分担	継続	委託研究費	万円	439万円	131万円	570万円
⑧日本医療研究開発機構 研究費	iPS細胞由来神経前駆細胞を用いた脊髄損傷・脳梗塞の再生医療 17bm0204001h0105	金村 米博	AMED再生医療実現拠点ネットワークプログラム	分担	継続	委託研究費	万円	7000万円	2100万円	9100万円
⑧日本医療研究開発機構 研究費	ヒトiPS分化細胞技術を活用した医薬品の次世代毒性・安全性評価試験系の開発と国際標準化に関する研究 17mk0104027h0803	金村 米博	AMED医薬品等規制緩和評価研究事業	分担	継続	委託研究費	万円	200万円	60万円	260万円
⑧日本医療研究開発機構 研究費	病理学的Stage II/IIIで"vulnerable"な80歳以上の高齢者胃癌に対する開始量を減量したS-1術後補助化学療法に関するランダム化比較第III相試験 17ck0106242h0002	平尾 素宏	AMED革新的がん医療実用化研究事業	分担	継続	委託研究費	万円	15万円	5万円	20万円
⑧日本医療研究開発機構 研究費	中性脂肪蓄積心筋血管症に対する中鎖脂肪酸を含有する医薬品の開発 17ek0109092s1203	東 将浩	AMED難治性疾患実用化研究事業	分担	継続	委託研究費	万円	8万円	2万円	10万円
⑧日本医療研究開発機構 研究費	亜急性期脊髄損傷に対するiPS細胞由来神経前駆細胞を用いた再生医療 17bk0104050h00002	金村 米博	AMED再生医療実現化研究事業	分担	新規	委託研究費	万円	1538万円	462万円	2000万円
⑧日本医療研究開発機構 研究費	肝硬変患者の予後を含めた実態を把握するための研究 17rk0210103h0001	三田 英治	AMED感染症実用化研究事業肝炎等克服実用化研究事業	分担	新規	委託研究費	万円	45万円	9万円	54万円
⑧日本医療研究開発機構 研究費	小児脳腫瘍に対する多施設共同研究による治療開発 17ck0106330h0003	金村 米博	AMED革新的がん医療実用化研究事業	分担	継続	委託研究費	万円	231万円	69万円	300万円
⑧日本医療研究開発機構 研究費	がん領域Clinical Innovation Network事業による超希少がんの臨床開発と基盤整備を行う総合研究 17rk0201044h0002	上田 孝文	AMED臨床研究治験推進事業	分担	継続	委託研究費	万円	77万円	23万円	100万円
⑧日本医療研究開発機構 研究費	タンパク質・ペプチド修飾解析による早期がん・リスク疾患診断のための血液バイオマーカー 17cm0106403h0002	中森 正二	AMED次世代がん医療創生研究事業	分担	継続	委託研究費	万円	150万円	45万円	195万円
⑧日本医療研究開発機構 研究費	切除不能または再発食道癌に対するCF(シスプラチン+S-FU)療法とbDCF(biweeklyドセタキセル+CF)療法のランダム化第III相比較試験 17ck0106309h0002	平尾 素宏	AMED革新的がん医療実用化研究事業	分担	継続	委託研究費	万円	77万円	23万円	100万円
⑧日本医療研究開発機構 研究費	産学連携全国がんゲノムスクリーニング事業SCRUM-Japanで組織した遺伝子スクリーニング基盤を利用した、多施設多職種専門家から構成されたExpert Panelによる全国共通遺伝子解析・診断システムの構築および研修プログラムの開発 17ck0106154h0003	加藤 健志	AMED革新的がん医療実用化研究事業	分担	継続	委託研究費	万円	69万円	21万円	90万円
⑧日本医療研究開発機構 研究費	Borderline resectable肺癌の集学的治療法確立に関する多施設共同研究 17ck0106154h0003	中森 正二	AMED革新的がん医療創生研究事業	分担	継続	委託研究費	万円	19万円	6万円	25万円
⑧日本医療研究開発機構 研究費	治験の実施に関する研究「SALA」 CCT-O-2936	西川 和宏	AMED臨床研究治験推進事業	分担	継続	委託研究費	万円	54万円	16万円	70万円
⑧日本医療研究開発機構 研究費	創薬のためのインヒトリ脳機能評価法の確立と標準化ヒト神経細胞の開発 17bk0104077s0201	金村 米博	AMED再生医療実現化研究事業	分担	継続	委託研究費	万円	150万円	45万円	195万円
⑧日本医療研究開発機構 研究費	「バイオバンクの構築と臨床情報のデータベース化」(DNAサンプル及び臨床情報の収集) 17km0305001h0005	是恒 之宏	AMEDオーダーメイド医療の実現プログラム	分担	継続	委託研究費	万円	1445万円	145万円	1590万円
⑧日本医療研究開発機構 研究費	大腸癌肝転移切除例に適した新規抗がん剤を用いた術後補助化学療法の研究 17ck0106308h0001	関本 貢嗣	AMED革新的がん医療実用化研究事業	分担	新規	委託研究費	万円	15万円	5万円	20万円
⑧日本医療研究開発機構 研究費	臨床研究中核病院を活用した国際標準の臨床研究の推進と新規医薬品・医療機器の開発に関する研究 16lk0103013h0004	上松 正朗	AMED早期探索的国際水準臨床研究事業	分担	継続	委託研究費	万円	100万円	30万円	130万円

	研究課題名 (採択番号があれば採択番号も記載)	研究者名	研究事業名 (依頼業者名)	主任 又は 分担	新規 又は 継続	研究種別	研究費獲得額(単位:万円)			
							主任研究者 直接経費金額	分担研究者 直接経費金額	間接経費金額	合計
⑧日本医療研究開発機構研究費	産学連携全国がんゲノムスクリーニング(SCRUM-Japan)患者レジストリを活用したHER2陽性の切除不能・再発大腸がんを対象にした医師主導治験 17lk0201054h0002	加藤 健志	AMED臨床研究治験推進事業	分担	継続	委託研究費	万円	100 万円	30 万円	130 万円
⑧日本医療研究開発機構研究費	細胞-基質間のカを基盤とした細胞移動と神経回路形成機構の解明およびその破綻による病態の解析 17gm0810011s0101	金村 米博	AMED革新的先端研究開発支援事業	分担	新規	委託研究費	万円	77 万円	23 万円	100 万円
⑧日本医療研究開発機構研究費	認定臨床研究審査委員会に関する整備事業 17lk1803024j0001	上松 正朗	AMED中央治験審査委員会中央倫理審査委員会整備事業	主任	新規	委託研究費	385 万円	万円	115 万円	500 万円
⑨その他財団等からの研究費	JBCRG-SOLE SOLE「ホルモン受容体陽性リンパ節転移陽性初期乳がんの閉経後女性における4～6年のアジュバンド内分泌療法後のレトロゾールの継続投与と間欠投与の役割を比較評価する第Ⅲ相試験」	増田 慎三	JBCRG-SOLE	分担	継続	補助金(研究費)	万円	107 万円	万円	107 万円
⑨その他財団等からの研究費	JBCRG-14TR「ホルモン感受性の進行乳癌(65歳以上)におけるLetrozole,CyclophosphamideおよびCapecitabine併用療法(LCX)の第Ⅱ相試験」バイオマーカー解析	増田 慎三	JBCRG-14TR	分担	継続	補助金(研究費)	万円	2 万円	万円	2 万円
⑨その他財団等からの研究費	JBCRG-11-TC TR「閉経後・ホルモン感受性乳癌における術前Exemestane(EXE)療法とEXE療法効果不十分例に対するEXE+TC療法併用療法有効性確認試験 附随研究」	増田 慎三	JBCRG-11TC	分担	継続	補助金(研究費)	万円	14 万円	万円	14 万円
⑨その他財団等からの研究費	JBCRG-07TR「閉経後・ホルモン感受性乳癌における術前Letrozoと低用量Metronmic Cyclophosphamide併用療法の第Ⅱ相試験トランスレーショナルリサーチ	増田 慎三	JBCRG-07TR	分担	継続	補助金(研究費)	万円	7 万円	万円	7 万円
⑨その他財団等からの研究費	JBCRG-11-CPA TR「閉経後・ホルモン感受性乳癌における術前Exemestane(EXE)療法とEXE療法効果不十分例に対するEXE+低用量CPA併用療法 有用性確認試験 附随研究」	増田 慎三	JBCRG-11CPA	分担	継続	補助金(研究費)	万円	9 万円	万円	9 万円
⑨その他財団等からの研究費	エイズ発症予防に資するための血液製剤によるHIV感染者の調査研究	白阪 琢磨	友愛福祉財団委託事業研究	主任	継続	補助金(研究費)	1030 万円	万円	万円	1030 万円
⑩民間セクターからの寄附金	再弁置換手術成績の検討	榊 雅之	エドワーズライフサイエンス㈱	主任	新規	補助金(研究費)	40 万円	万円	万円	40 万円
⑩民間セクターからの寄附金	電解水透析がもたらす影響の検討	岩谷 博次	大塚製薬㈱	主任	新規	補助金(研究費)	30 万円	万円	万円	30 万円
⑩民間セクターからの寄附金	NBI拡大内視鏡観察を用いた炎症性腸疾患におけるバイオプレートの形態学的変化と機能解析	三田 英治	エーザイ㈱	主任	新規	補助金(研究費)	50 万円	万円	万円	50 万円
⑩民間セクターからの寄附金	DES(Xience)留置後のDES Failure予防のために強化スタチン療法が有効か検討する単施設無作為化試験研究	上田 恭敬	アボットバスキュラージャパン㈱	主任	新規	補助金(研究費)	300 万円	万円	万円	300 万円

—臨床研究センターの研究業績の
区分分類と業績件数の総括表—

臨床研究センターの研究業績

研究室名	総数	A-0	A-1	A-2	A-3	A-4	A-5	A-6	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	B-6	B-7	B-8	B-9
臨床研究センター	51	21								2		13	1	12		2	
幹細胞医療研究室	23	5								5	4	9					
再生医療研究室	68	16		1		2				7	10	25		5		2	
分子医療研究室	0																
エイズ先端医療開発室	235	8		2	3	7	15	10		1	8	33	2	2	2	135	7
HIV感染制御研究室	34	4			1		2			1	2	13		2	1	8	
臨床疫学研究室	45	5		1						4	4	10	8	4		9	
がん療法研究開発室	326	52	3	1	15	7		2	6	44	36	103	39	7	6	4	1
高度医療技術開発室	45	1		1	1				1	3		17		17		4	
医療情報研究室	12			1	6							3	2				
災害医療研究室	13				1		1				2					9	
臨床研究推進室	32	1	2								3	3			10	13	
レギュラトリーサイエンス研究室	65	16			2	5		5	3	1	2	8	21			2	
小計	949	129	5	7	29	21	18	17	10	68	71	237	73	49	19	188	8

研究業績の分類基準と記号

著述発表業績区分		口演発表業績区分													
A-0	A-1	A-2	A-3	A-4	A-5	A-6	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	B-6	B-7	B-8	B-9
単独執筆 編集者 監修者	共同執筆 (含連名)	原著	総説				シンポジウム 特別講演等	一般演題 (ポスター)	シンポジウム 特別講演等	一般演題 (ポスター)	シンポジウム 特別講演等	一般演題 (ポスター)			
英文 著述	単行書	邦文著述 (学会誌・学術専門誌)			学術医学研究班報告書 講演発表論文	その他		国際学会	国内学会の全国年次学会		国内学会の地方会 及び分科会研究会		乗効調査 研究会発表	文化講演 教育講演等	TV出演 ラジオ 放送出演

独立行政法人国立病院機構 大阪医療センター
臨床研究センター
研究業績年報 2017年

発行者 独立行政法人国立病院機構
大阪医療センター 院長 是恒之宏

編集 臨床研究センター
〒540-0006 大阪府中央区法円坂2丁目1番14号
電話 (06) 6942-1331

印刷所 株式会社 中島弘文堂印刷所
〒537-0002 大阪府東成区深江南2丁目6番8号
電話 (06) 6976-8761

